

上海無邊

吉田東祐



中央公論社梓

裝幀  
題簽  
三雲祥之助  
新泉瑞堂

# 上海無邊

—— 一つの中國現代史 ——

# 目次

序にかへて……………七

——上海人となる

一 一九三六年……………一五

二 上海の底にうごめくもの……………二三

三 救國運動を傍觀する……………二九

四 救亡文學と浮浪兒の世界……………四一

五 救國會の人々……………六四

六 西安事變……………七六

七 中國の社會……………九〇

八 舊い生活……………一〇一

九 舊い社會……………一一四



一〇	國共合作	三三
一一	蘆溝橋事件	四七
一二	戦争は上海へ	六八
一三	巷の戦争	八六
一四	人われをスパイと呼ぶ	九八
一五	上海に止まる	二六
一六	中國の失ふもの	三九
一七	孤島上海	四五
	和平の轡	六七

	あとがき	三〇九
--	------	-----

## 序にかへて

— 上海人になる

上海に渡つたのは一九三六年の七月、丁度今度の事變の始まる一年前だつた。日本を出るやうになつたわけは——理由を挙げればAからZまでであるが、ほんたうの理由はいつもMだといふ西洋のしやれのやうに、やはり内地でMONEYに行きづまつてしまつたからである。私は或る思想關係の月刊雜誌の出版をやつてゐたのだが、その頃のならばはしでよく發賣禁止を食つた。終には一年十二冊のうち七冊も發賣禁止處分を受けるやうになつた。警察の方でよく經濟的に續けられると呆れてゐた。とてもこんな手段では止めさせられないと思つたのか、私の雜誌に寄稿してゐた或る筆者の思想事件にひつかけて私を引つぱつてしまつた。こちらはそんな事もいつかはあらうとすつかり手順を考へてゐたのだが、もともと警察では私が事件に少しも關係してないことを承知の上でかかつた仕事なので、始末が悪い。たうとう雜誌を廢刊すると約束してやつと身柄だけは出して貰つた。こんなことで商賣はなくなり生活には困つて來る。何か別の仕事を計畫し

ても、一度思想事件にかかはつたやうなものに金を借す人はゐない。その上、時勢はだんだん悪くなるばかりで、これから先き嫌なことがいくらでも續きさうな様子だ。このまま手をつかねてゐたのでは家族四人が人の厄介にならなきやならないから、何とか生きる算段をしなければならぬ。ともかく私はもう少し自由に呼吸のつける土地に行きたい、少くとも一週間に一度づつきまつてやつてくるもの下品な顔を見ないですむやうなところに行つて働きたいと思つた。色々な考へも入つてはゐたが、結局私の上海行きはかういふ個人的な動機が決定的なものではなかつたかと思つてゐる。

今私の手許に鹿地亘氏の「重慶より歸りて」といふ講演の筆記がある。同君もやはりこの頃上海の土を踏んだのだが、その中にこんなことが書いてある。

「監獄から出た時は既に私の周りは正装をもつて顔を上げて物を言ふことが出来るやうな状況ではなかつた。多くの友達も膝をひそめてゐるし、同志達はどこに行つたかわからない。私自身も日本が眞暗な戦争に進んで行くこの状況の中でも後には警官に尾行され言論は抑壓されると言ふ状況の中で手足をつかねてその中に引きずり込まれて行く、そして國民の不幸を爲すこともなく見なければならぬと言ふ状況に耐へきれず、何とかして少しでもこれを阻害する力になり國民に反省の機を與へる、さういつた私達の義務の一端でも果すことが出来ればと思ひ脱出を企てたわけである。それから上海に渡り約一年間ばかりの間、中國の多數の同志達に護られて隠れてゐた。そして戦争が遂に始まり、直ちに上海に火蓋が切られた八月十三日に向ふに移つた。何故、私が中國へ特に渡つたかと言ふことは、この戦

争の性質をみ、どういふ風に發展して行くかといふことを見るとよくわかる。」

同君が「上海に渡り同志達に護られて隠れてゐた」といふのは少し大げさな表現だと思ふが、ここに述べられてあるやうな情勢は確かにあつた。その情勢を身に受けて意識的に行動された同君の心構へはさすがである。私もこのやうな心構へが全くなかつたわけでもないのだから、もう少し勇ましい動機で上海行きを決定したやうに書きたいのはやまやまだ。だが人間はときどき自分が純粹の動機からやつてゐると信じた行動が案外不純なものに支配されてゐることを知つてびっくりすることがある。私は子供の時父親に死なれて泣いたが、初めの涙は確かにほんものだつた、が、だんだん會葬者に見せる涙に變つてゐることに氣がついた。今から考へると、私の上海行きも色々な動機を結びつけることが出来るが、結局經濟的に行きづまつたといふのが一番噓が少いやうだ。

序にかへて

途中下關の關門で二度、長崎で乗船の時一度尋問されたが、ともかく無事に上海に着くことができた。日本から打合せてすつと一緒に來てくれた中國の學生は私を直ちにフランス租界に案内してくれた。その人の世話で私はフランス租界呂班路リュバンヤをすつと入つた震旦大學に近いユダヤ人の家に下宿するやうになつた。部屋代十元（當時の一元は一圓）アチックといへば聞えはいいが、屋

根裏だから天蓋から陽が入るだけである。金がないので中國の貧乏學生と同じ生活だ。朝飯は大餅と油條、時には「握り飯」そつくりのもち米で造つた「ツハン」を食べる。これが十錢とかからない。晝飯は馬浪路の學生食堂に行く。ここは飯票一元で七枚、一回の食事に一枚渡せばよい。だから一食が十四錢三厘にしか當らない。しかし食事はとても豊富で、一汁一菜、飯は食べはうだい。大てい一緒に日本から来てくれた學生の友人四、五人と集まつて食べるから、銘々違つたお菜を注文すれば、十四錢三厘で四、五皿の料理が食べられるわけである。私は大分幸福になつた。

近所にフランス公園がある。朝食をすませるとよくそこに行つた。激しい緊張の後によくある心の空虚状態からまだ抜けきれなかつたので、公園の池の端にあるベンチに腰かけて、ただ漠然と空を見つめてゐる時間が多かつた。朝が早いせゐか、草の上にはしつとり露がおりてゐて、亞熱帯の太陽にきらきら輝いてゐる。草地がごくゆるやかな勾配で低くなつてきて、いつの間にか池になつてしまふ、さういふ柔かな感じの池である。そこでは金魚が少しも人間を恐れず、水の表面に落ちたパン屑などを争つて食べてゐる。かはせみがよく池のふちにとまつて「私は金魚は食べません」といふやうにきよとんとこつちを見てゐる。池の向ふの樹立から若い男女の學生が、戀人同士でもあらうか、手を組みながら出て来る。かういふ楽しさうな人々を見ると、ふと今ま

で忘れてゐた何ともいへない淋しさが迫つてくる。郷愁だらうか、友達のない淋しさだらうか。上海は世界五十三ヶ國の人間の海、恐らくその海水の中に解けきれずにある異質物の一分子が今の自分であるかのやうに感じて淋しかつたのであらう。早く上海に同化したいと思はぬ日はなかつた。友達のない悲哀、言葉の通じない悲哀をしみじみ味はつた。

上海に同化するには中國語だけは早く何とかしなければならぬと思つた。しかしその言葉のむづかしさ、忘れもしない四馬路スエールの古本屋でアルドリッチといふ人の書いた「華語須知」といふ英語の獨習書を探し出し、發音記號をたどりたどり獨習を始めた。一字習ふとすぐそれを使つて見たくなる。しかし上海の人に私の獨習した北京語などがわかるはずはない。そのためにどんな腹立たしい思ひをしただらうか。黄包車フンポウシャの車夫は私が上海に來たばかりの日本人だと見て中國人のお客の二倍もの賃銀を吹つかける。風呂屋に行けば「擦背さんぱい」が法外な心付けを要求する。そんなことで上海の生活がつくづくいやになつて來る。しかしよく考へて見ると、三百萬の人々がこの人の海に恐れず平氣で生活してゐるのに、私だけがここに落付けないといふのは上海が悪いのではない、私が悪いのだ、ここに落付くためにはどうしても自分が日本人であつてはいけない、中國人になりきらなければいけないと思つた。

それから私の中國人になりきらうとする生活が始つた。まづ言葉を覚えるために中國語の本に

よる獨習をやめてしまひ、毎晩のやうに愛多亞路と虞洽卿路の交叉點にある、「大世界」に通つて北京語や上海語の話劇（しゃげ）を聞いて耳をならさうとした。初めは何が何だかさつぱりわからなかつた中國語が、二ヶ月程通つてゐるうちにどうやら言葉の感じだけはわかるやうになつて來た。中國の友人と一緒に街を歩くときなどは、看板に書いてある字の發音を一つ一つ聽いた。歩きながら電信柱にぶつかれば電信柱は中國語で何と言ふかとたづねた。乞食がしつこく金をせびりに來ると、これはよい教師とばかり、何を話すか耳をすませて聽いてゐた。かうした勉強が私の上海生活を緊張させ、郷愁を追ひ拂つてくれた。言葉もどんどん上達し友人も殖えて來た。

それからは上海の生活が日増しに面白くなり、この街を改めて見直すやうになつた。しかしどう見てもきたない街である。この貧乏はいかにもひどい。日本では乞食にもそれなりに體裁があるが、ここでは普通の貧乏にも體裁がなく、むきだし（むきだし）の貧乏だ。日本では乞食と普通の貧乏人とは一と二のやうにはつきり區別出来るが、ここではその間にさへ一と二をつらねる無限級數のやうな、色々な段階の貧乏がつながつてゐて、乞食と普通の貧乏人のけじめがつかない。その反面に金持と貧乏人とはけたはづれに違つてゐる。こんな社會の矛盾が表面に露出してゐる都會はあるまい。この街に動いてゐる複雑な諸關係をはつきりさせ、ヴェールを取り上げた上海を自分の目の前に立たせるのはいつのことだらうかなどと考へながら、私はよく街を歩き廻つた。

のだ。ともかくこんな風にして私は上海に住みつくことになつたのである。

それからの十年間私は中國現代史の最も華々しい頁がこの國の人々によつて書かれるのを、ずうつとこの土地で見まもつてきた。私の知る限りこの華々しい歴史をつくつた人々は決して特別製の人間ではない、私とその間に一緒に住んで、よく知つてゐる、時としては馬鹿なまねもするが、時としてはえらいこともする中國の張三<sup>くわんさん</sup>李四<sup>りし</sup>だつた。私はこの人々の生活を通じて中國現代史の潮流をつかみたいと思ふのだ。



# 一九三六年

一九三六年といふ年は色々な意味で中國の「その前夜」だつた。中國を侵略する力と、さうさせまいとする力が必死によつかり合つてゐたこの年の十一月、綏遠の東部には徳王の指導する内蒙古軍が侵入した。この徳王を後から指導するものがどういふ怪物であるか、中國人は一人として知らぬものはなかつた。中國人はその結集の前に何も内蒙古などをおそれる理由はないが、下手に内蒙古軍と戦つてその背後のものと戦ふやうになると思ふと、この戦争には非常な決断が必要であつた。しかし綏遠を守る傅作義は内蒙古軍を百靈廟で一舉に殲滅して背後の力に干渉の時間さへ與へなかつた。これは中國が日本の企圖した侵略を武力で阻止した初めての成功である。中國人は、よるとさはると興奮してこの勝利について語つた。上海の商店のシ・ウウインドには「民族英雄傅作義將軍」の寫眞が飾られ、街角では爆竹が鳴らされた。しかし上海の人々はこの失敗で日本が中國侵略をあきらめるとは誰も考へてゐなかつた。

中國を侵略する力は單に武力だけではない。その頃日本の賤い商品が關稅壁のない中國に洪水のやうに侵入し市場に氾濫してゐた。これが中國を内から崩潰させる力であることは誰一人として知らぬものはなかつた。何も中國に關稅壁がないわけではないのだが、日本は既に冀察政權といふ大きな穴をあけてゐた。一九三五年の六月、中國海關は次のやうな報告書を出してゐる。

商業の秩序は毎日この區域（華北）に流れ込む不法の商品 illicit cargo の爲くべき數量によつて全く混亂させられてゐる。これらの商品は鐵道によつて中國のいたるところに侵入し、商業を破壊し、中國の對外借款の基礎たる國家收入を減少させつつある。

このいはゆる「不法の商品」は大連に陸上げされ、鐵道で滿洲を通つて華北に入る。そして華北の海關を素通りするのだ。だが、密輸ルートはそれだけではない。中國海關の武装した警備艇は非武装地帯の沿岸を巡航することは許されない。だから海岸からも自由に入つてこられるのだ。三五年十一月冀東政權が出來てからは、密輸はもつと大つぴらになつた。この政府は入つて來る品物にごく賤い稅をかける。冀東政權は地圖の上では中國であり、人民も政府要人も中國人といふことになつてゐるから、ここで一度稅をかけられた商品は、中國のどこに行かうとも二度と稅をかけられぬ。それで不法の商品は大手をふつて中國の公道を闊歩することになる。それをとがめる者は、少くとも華北では生命がないはずである。

密輸入は中國語で「走私ツォン」といはれる。走私のもう一つのルートは臺灣—福建である。この間

の海峡は呼べば應へる距離であり、しかもそれは日本の軍艦に守られてゐた。福建は上海にも廣東にも遠くない。當時ここを中心として華中華南に流れ込む商品の量は莫大なものであつた。

かやうに日本の賤い商品は、沈没して行く船のヘッチャ窓口から海水が流れ込むやうに、中國の關稅壁にあげられた大穴からどんどん侵入して中國を沈没させようとする。それは到る處で中國の「國貨」を驅逐し、民族工業を破壊し、民族商業を沈黙させる、國民の愛國心に訴へる「國貨愛用」のスローガンぐらゐでは、到底この商品の洪水をせきとめるわけにはゆかない。このやうな情勢が續くものとすれば、そしてまた政府にそれを阻止する力が無いとすれば、中國人はもはや國家の破産を待つばかりなのだ。中國の當面するこのやうな運命を手をこまねいて座視してゐられようか、——これが中國の愛國者を捉へた切迫した感情だつた。そしてこの感情は遂に一九三五年十二月の全國學生の愛國行進に爆發した。この時上海では復旦大學の學生が政府に抗日の請願を行ふために北停車場を占領した。この學生の投じた一石によつて愛國運動の波紋はそれからそれへと社會の各階層に傳はつた。

一九三六年

そして翌年の一月には上海に各界救國聯合會が成立するまでになつた。これがやがて中國を「侵略させまいとする力」の中心となつたのである。

もし中國以上に述べた二つの力の闘争だけしか見られなければ事態は頗る簡明である。だが

實際にはこの闘争にもう一つ「侵略させまいとする力」を弱めようとする力が加はつて来る。この力は中國にとつて明かに敵であり、日本にとつては正に「敵の敵は友」といふ諺通りになる。しかし、問題はさう簡單ではない。この力は初め中國政府の内部に強大な根を張つてゐた。もともと南京政府は、抗日戦争を考へないわけではなかつたのだが、それを決行するには次の三つの問題にポジテヴな解答が必要だつた。第一、列強、特に米國と英國が中國を助けてくれるかどうか。第二、日本の軍隊を少くとも或る時期まで持ちこたへる軍備が整つたかどうか。第三、戦争が始まつてから中共の進出を押へることが出来るかどうか。この中で、一番重大なのは最後の問題だ。政府の中でも非常に重要な地位を占めてゐる人々がこの問題について悲觀的な意見をもつてゐた。中には抗日運動そのものの本質まで見落して、それは政權を奪はうとする中共の陰謀ではないかと考へる人さへあつた。最初政府はこれらの人々の影響下にあつたので、抗日救國運動に好意を持たず、日本の要求を容れてそれを抑壓しようとして考へてゐた。政府のこのやうな態度は、一九三五年二月の排日取締令に端的に表現されてゐる。従つて抗日運動を周つて中國は日本と對立する前に、まづ國民と政府が眞正面から對立してゐたのである。

その頃上海の空氣はここに述べたやうな情勢を反映して、重苦しく呼吸苦しかつた。國民は持つて行きどころのない忿懣をかかへてゴム風船のやうに突つけばすぐにも爆發しさうだつた。政

府もそれを知つてゐたので、それに刺戟を興へまいと、雑誌や新聞紙上の極端な抗日言論を禁止した。その法令は前年五月に發表され、「敦陸邦交令」といふ名で呼ばれた。しかしその結果は抗日言論を禁壓したのではなく、ただ日本といふ字を××で表現させるやうになつたに過ぎない。これについて友人の誰かが私に「××は最近日本から傳來した文化だ、日本はろくなものゝ發明しない」と怒つてゐた。だが實をいふとこの日本文化は、中國ではそれほど愛用されなかつた。長い間の抑壓の經驗から中國人は感情を直接には表現せずとも比喩や諷刺でいくらでも表現できる技術を心得てゐた。當時中國の文化人が檢閲をくぐり〇〇を使はずに如何に巧みに抗日感情を表現したかを知つて貰ふために、また一つには當時の「敦陸邦交令」がどんな廣汎な影響をもつたかを知つて貰ふために、私は今ここに茅盾の隨筆の一節を紹介してみよう。これは天津で起つた少女が日傘をさしてゐる商標が、これは「日」を防ぐ、つまり抗日だと警察から調べられたと言ふ馬鹿馬鹿しい事件を皮肉つたものである。

讀者諸君、諸君は私の神經過敏をとがめ給ふな、實際近頃の新聞雑誌のやうに××が多くては頭が痛くなる。靜安寺路の「花まつり」を見に行つた前日、私は新聞で天津の一商店が「日傘をさした少女」を商標としてシャツを賣り出して「抗日」嫌疑で（願はくばここだけは×を用ひないことを許させ給へ）引つぱられたといふ天津電報を見た。私もそれをよく記憶してゐたので、道ばたで「防雨麥稈帽」とい

ふ立て看板を見るや否や、この帽子屋さんはなかなかのユーモリストかでなければ頗る時勢を知つてゐる。「教陸邦交」論者に違ひないと思ひ込んだ。そこで私は人を押し別けその店の前に行き、その男を見上げた。その時私のかぶつてゐたのはまだどうやら「防雨」の役には立ちさうなソフト帽だつた。「日」を防ぐ役に立つかどうかかわからないことを敢てここに説明して置く。帽子屋は私が人を押しつけてやつて来たのを見ると買つてくれるものと思つたらしく、頗るていねいに應對した。そこでこの機曾にその男を「見上る」ことが出来た。あわてず騒がず冷静に客觀的に人物を觀察するのが私の常である。だがこの時私はこの男に對して頗る大きな先入觀念をもつてゐた。私はただこの帽子屋がすぐれたユーモリストであることを證明するだけでよいのだ。これが私と彼との間に取交された問答である。

「この防雨カンカン帽つていふのはほんとに水がもれないかい。」

「旦那、ごじようだんでせう、これは値段が賤いんですよ。」

「そんなら『日』の方は確かに防ぐかね。」

かう一言彼をからかつて彼がどんなユーモアで報いるかを期待した。ところが彼の肥つた顔はみるみる目に角が立つて来た。ほんとに買ふ氣がないと見て不機嫌になつたのか、私の話の意味がわからなかつたか、どちらからしかつた。買ふ氣はない、残念ながらほんとにさうだつた。私はゆつくりその麥稈帽を手にとつて見まはした。やはりそれは「友邦」の「寶貨」(註・中國人は日本品を普通「劣貨」といつてゐる。それを寶貨と皮肉つてゐる)らしく、日を防ぐことさへ出来さうもない。だからもちろん雨など防げる代物ではなかつた。

うやうやしく帽子をもとの場所に置いてすぐそこを立ち去つた。私は確かに自分が神經過敏であつたことを是認する。この敬すべき帽子屋はすぐれた「ユーモリスト」でもなく、またもちろん時勢を解した「教陸邦交」論者でもない。彼はやや、誇大な廣告を出したがる一商人に過ぎないのだ。だが讀者諸

君、新聞紙上に××亂れ飛ぶこの頃は明かに「日」を防ぐ品物でも「防雨」と書かなければならぬこと  
がお判りであらう。けだしこれで諸君が善經過敏にならなければ不思議な位だ……。

これは決して作り話ではない。矛盾が靜安寺の廟會まつわいで實際に出會つたことなのである。まことにこのやうな空気の途中で人間が神經過敏になつて行くのをとがめるわけにいかない。私を上海に案内してくれた四川省の學生はぐんぐんこの空気に引きずられて行つた。いつの間にかそのグループは私の部屋に集まつて夜晩くまで時局について談論するやうになつた。「口角あわを飛ばす」この言葉は中國語の場合ほんたうに實感が出る。いやほんたうに實物が出るといつた方が正しい。ともかく議論が高潮してくると頭をぐらぐら左右にふつて調子をとりながら、しきりに手を活動させる。口からは機關銃のやうにツベとばし——といへば一寸大げさだが、今にもつかみ合ひになりさうな形勢になる。或時あまりひどいので一體何を話してゐるのかと友人に聞いたら、學生は英語で「あの男は抗日の爲めには先づ反動政府を倒せといふのだが、われわれは抗日の爲めには反動政府さへ味方にしなければいけないと主張してゐるのだ」と教へてくれた。私は初めのうちは中國語を覚えるためと思つて無理して聞いてゐたが、何一つ判らないのでだんだんつまらなくなり、議論が始まるとよく戸外に逃げ出し深夜の環龍路カワレンロウをうるついた。環龍路は私の下宿か

上 無 邊  
らあまり遠くない、フランス公園の北側を東から西にはしる並木の美しい街である。ヴロンといふフランスの或る飛行將校の名をとつたのだが、それを環龍カウロンと音譯する文字の美しさ。この街から一寸入つたところに孫文の家があり、この邊一帶は革命運動の中心地なので「龍」を環カウまくといふ文字には一層面白い意味があるやうに思へた。空一面に銀沙をまいたやうな星を見上げながらこの道を行つたり來たりすると、どこか道ばたの暗闇から粥賣りの聲が細く長く聞える。そんな晩はいつのまにか今頃内地の妻がどんなかつかうで寝てゐるだらうかなどと考へてゐた。



## 二 上海の底にうごめくもの

私の部屋によく集つた連中は大抵日本留學生で、一度は早稻田や神田の下宿でまづい飯をたべた経験があつた。そしてそのせゐか皆な原則として日本人が嫌ひだつた（もつとも、日本の婦人に對しては「敦睦邦交」論者が相當ゐたやうだ）が、私の面倒だけはよくみてくれた。とくに張さんとといふ日本語のうまい廣東の學生は私の書く雑文を中國語に譯し中國人名前にして二、三の雑誌に出してくれた。それが月二、三十元、多い時は四、五十元の小遣ひになつた。ところで當時のこの金額が中國の下層階級の人々にどの位の値うちがあつたかを私は間もなく知るやうになつた。

工部局の調査によると、一九三六年、つまり私が上海に來た年の勞働者の平均賃銀は一時間あたり五分五厘だ。十分が一角、十角が一元で、一元が大體日本の一圓にあたるから、一分は一銭になる。だから一時間働いても五錢五厘にしかならない。一ヶ月當りについて見ると全工人平均

賃銀は十四元三角五分三厘（女工の多い紡績工は十元五分四厘、製絲工は八元二角五分三厘）になつてゐる。やはりその調べによると、租界では家屋一軒に平均一五・〇七人が住み、五人家族を持つ労働者の平均家庭収入は一ヶ月二十五圓、そのうち家賃五圓支拂つてゐる。どうしてこんなに賃銀が安いのか、これも張さんにはせると日本のためださうである。日本は近代的技術を持つてゐる上、封建的な安い賃銀で人を使ふ、だから安い品物が出来る。その安い品物と競争するためには、日本よりもつと技術の後れてゐる中國はもつと安い賃銀で人を使はなければならぬ。だから中國の賃銀が安いのだといふ。その理窟で行けば日本の賃銀の安いのは外國の技術が進んでゐるためだといふことになるね——と聞いたら、張さんは、だから中國の労働者は世界資本主義の全壓力を肩に荷つてゐるわけだと、ぐつと口を結んだ。肩に荷つても、頭に荷つてもよいが、それで一體どうして暮して行けるのか、私は中國人のさういふ生活の奇術を知りたかつた。

やはり私の部屋に集つた友人の中に鍾ナユンといふ男がゐた。大學は出てゐなかつたが、無口で謙遜で人が好かつた。上級中學を中途で飛び出し、前の上海戦争の時に十九路軍に飛び込み、熱河戦にも出たし、福建人民革命にも参加したといふ。彼は仲間の間で丘九チウキウと呼ばれてゐた。中國で兵隊のことを丘八チウパといふ。「兵」の字を上下二つに分けたのだ。だがこの男を人がなぜ丘九チウキウと呼ぶのか私にはわからなかつた。張さんに尋ねたら丘八チウパに毛が生えたくらゐだから丘九チウキウさ、と致へてく

れた。仲間にはあまり重んぜられてないやうだったが、私はこの「丘九」の朴とつさを尊敬してゐた。當時彼は楊樹浦の労働者街にある補習學校の教師をやつてゐた。ぜひ一度遊びに來いといふので行つて見ると、普通の長屋を二軒つよして中に幅のせまい木を渡して机代りにした凡そ日本の學校の概念とはかけ離れたものだつた。この學校の校長は任崇高といつて救國運動では名のある人だつた。生徒は年はとつてゐたが皆な熱心に鐘さんの話を聞いてゐた。鐘さんは授業が終つてから私を附近の労働者街に案内しながら道々その生活について話してくれた。鐘さんの話によると、かりに一日八十錢の收入のある労働者なら、豚肉十錢、鹽一錢、油四錢、大餅十錢、野菜五錢、後少々米を買へば、これで親子三人ぐらゐ食べて行けないことはない。月に一度ぐらゐは「大世界」の寄席や芝居をのぞくことも出来るさうだ。しかしこの一ヶ月二十五圓の仕事さへ上海では血まなこで奪ひ合ひなのだ。この街の西西北に擴がる陸地のどこかで毎年のやうに繰返へされる内亂・洪水・旱災・饑饉、その度に土地を追はれた農民の群れが屠所の門をくぐる羊群のやうにこの街に流れ込む。その中で若く力のあるものはどんな賤い賃銀にでも飛びつかうとねらつてゐる。だから上海にはいつも膨大な産業豫備軍が常駐してゐるのだ。資本家は何も労働者を大事にする必要はない。上海の労働者がどんな労働條件に甘んじなければならなかつたか、一九三八年の工部局年報にはかういふ實例をあげてゐる。

……毎年上海から女が来て紡績女工を募集した。彼女の両親は田舎では生活が出来ないので一九三七年三月彼女を上海にやつた。契約の内容は四十五元を家に與へ、その内十元は前拂ひである。二年間の少女の稼ぎはすべて請負人のものとなり、その報酬として彼女に對し食事および部屋だけが與へられる。従つて被服その他の身廻品は郷里から供給しなければならぬ。……

この女の請負人は二十人の少女をもつてゐる。彼女等はすべて一室に眠り、寢臺はない。床の上に一緒に一枚の蒲團に二人づつ寝る。冬は非常に寒く、顔を洗つたり洗濯に使ふ湯もなく、湯釜一分を拂つて行水を使はなければならぬ。一日の食事は三度、朝と夕は粥、昼は野菜二種類と米である。肉のある日は元日に限られてゐる……

軽い病氣の訴へは普通假病と見做される、頭痛や鼠邪で部屋で休まうとして屢々打たれる。晝香は早朝四時半に起き、六時に始業、午後六時まで働く。疲労がひどいために八時に眠る。日曜日は休みだが洗濯をしなければならぬ……

まあかう言つた實例はざらである。それでもこの頃はまだよくなつた方で一寸前までは工場は監督に鞭をもたせ、疲れて居ねむりをする女工をなくつたものだ。そのために死ぬことがあつても大きな問題にはならなかつた。「居睡りをすればどうせ機械に挟まれて死ぬのだから殴ることは一人の危機を救ふばかりでなく全體を覺醒させるために必要な手段だ」といふ工場側のいひ分が法廷で認められたことさへあつたといふ。上海の近くの有名な紙の産地では、よく疲れきつて居睡りをする女工が製紙原料の細竹を攜く機械にはまり込み、そのまま骨も肉もくたくたにつきこまれて紙にすかれてしまふことがあるといふ話だ。このやうな労働者の悲惨な話はここではあ

あまりに多すぎてもう「女工哀史」の資料にもならない。

鐘さんに案内して貰つたついでに鐘さんの生徒の一人である労働者の家を訪れ、中を見せて貰つた。割合に大きな家で、きたないけれどもかく煉瓦造りだ。中に入ると壁に木の棚をつくつて四段にしてある。これは皆なベッドになる。この家はその労働者の家族の他に三家族住んでゐて、その労働者は唯ベットだけを借りてゐるのだと聞かされた。でも一人で一つのベッドを使へるのはよい方で中には一つのベッドを晝番と夜番に分けて使つてゐるものもあるさうだ。

これらの労働者を相手にその近所にはそれ相應の小商人が群つてゐる。小さな箱を首にかけて箱の片隅に僅かばかりの商品がかたまつてゐる。そこでは煙草は箱で賣られるよりも一本いくらで賣られる方が多い。落花生は一粒づつ大きいのからよりどられる。そして一粒多いと少いとよく大きな喧嘩が始まる。大餅オウゴを一枚買ふにしても先づ形、厚さ、目方が比べられた上で取引される。附近を歩いてゐる子供は大體丸裸だ。それでも道に流れる水道の水の中で嬉々として遊んでゐた。その水は道端の消火栓を何かでこじ明けて流したもので、大勢の男女が手に手にバケツや桶を持つてその水をくみ込まうと騒いでゐた。青い顔をして素肌きたない長衫オウゴをつけ、とこるところの穴から肉體のすいて見える女が通る。鐘さんがあれは「無褲子」と言つて労働者相手の淫賣ですよ、相場は大抵十錢か五錢で、夕闇をまれば道ばたで直ぐ取引が出来るのだと教へて

くれた。無褲子とはパンツをはかない女の意味だといふから、日本の田舎ぢやない無褲子だといつたら、鐘さんは目を丸くしてゐた。私は鐘さんに「金あるものは金を出し、力あるものは力を出せ」といふが一體これらの人々に國家は何を出せといふのですかと聞いて見た。鐘さんは始末に困つたやうな顔をしてゐたが、やがて昂然と「血肉をささげればいいでせう」といつたまままたこら先きに行つてしまつた。

その當時中國は日本と戦ふために國內で資本家と労働者の間に階級平和がなければいけない。階級闘争をやめて日本に全國民が協力してあたらなければならぬといふ意見があつた。同時にまた、いや、それなら資本家は抗日を口實に搾れるだけ搾るから、労働者が抗戦にささげる餘力がなくなる。だから抗戦だといつて階級闘争をやめてはいけないといふ意見があつた。いよいよ戦争が始まると國民黨は「抗戦は一切より高し」といふスローガンでこの問題をおさへつけたが、その當時から救國運動にたづさはる青年達の間でこの問題をめぐつて相當激しい議論があつたやうだ。私は何の氣もなしにこんな質問を出したのだが、どうも鐘さんの意見を皮肉つたやうに聞えたらしかつた。

## 三 救國運動を傍観する

階級戦線か民族戦線かの問題は中共内部でもずるぶん問題になつてゐたらしい。この問題の線に沿つて後から後から色々な事件が起つてゐたやうである。だから中共でははれものにさはるやうにこの問題の取扱ひに注意してゐた。それは一寸取扱ひをあやまるとすぐ中共は國民黨と合作すべきや否やの根本問題をゆるがせるからである。この根本問題に關する限り、中共の態度は一九三五年八月一日のいはゆる「八・一宣言」ではつきり決まつてゐた。この聲明で中共は抗日のために國民黨と合作して國防政府をつくらうと提議してゐる。結局抗日のために國內の階級闘争を中止しようといふのだ。この「八・一宣言」を中共の人々がどういふ感情をもつて迎へたかはぜひ知つて置く必要がある。一九三四年中共は六回にわたる蔣介石の討伐にたまりかね、たうとう住みなれた江西省を棄てなければならなくなつた。この年の十一月毛澤東・朱徳は首都瑞金から西北に向つていはゆる「二萬八千里」の旅にのぼつたのである。この旅を「长征」と名づけて

はゐるが、實はその通路にあたる各地方に確固たる地盤をもつ中央軍や雜軍と戦ひながら、山又山の險阻なコースを逃亡する惨めな轉進だつた。いやこれは單なる軍隊の行軍ではない。「國家」そのものの行軍なのである。江西のあらゆる國家機關がその設備と共に西北に行進したのだ。そればかりではない、中共に屈するものの家族が國民黨軍の手にわたればひどい運命が待つてゐたので、軍隊はこれらの弱小を中に守つて行進しなければならなかつた。晝間はいつも國民黨の飛行機が空から監視してゐる。だから行進は主として夜間に行はれた。その後ろから、左右から近代的裝備を持つた國民黨の軍隊が晝夜をわかつた襲つて來た。もちろんその損害の悲惨なことは、江西を出た時六萬人あつた朱・毛の主力軍が四川省に辿り着いた時は僅か一萬人餘になつてゐたといふ事實からも判る。この際親兄弟を殺されたもの、女房子供を敵の手に渡したもの、これらの國民黨に對する憎惡の深さ、いやこの生々しい記憶がなくても、これらの階級的憎惡の深さは既にわかつてゐる。長沙暴動の時長衫チヤンセンを着たものはブルジョア的であるから殘らず殺せといつた彼らである。江西省では夫は資本家の番犬で國民黨的だから盡く撲殺せよと命令した彼らである。いやこれらの行動は彼らのうちの氣狂ひじみたものだけがやつた行き過ぎだつたといふかも知れない。だがさういふことが一部に行はれたといふことは彼らの階級的憎惡の激しさを裏書するものだ。その彼らが今進んで國民黨と合作したいと自分から提議してゐるのである。それを



決定するまでに彼らの間にどんな激しい理論闘争が起つたかは想像できるであらう。それでも尙彼らはそれを敢へてしたのだ。そのわけは——彼らの側からは色々説明されてゐるが、結局彼らの階級の感情が民族的感情の示す方向に従つたといふことが、この場合一番ほんたうらしく聞える。中國が直面した民族的危機から本能的に燃え上つた民族的感情の激しい潮流は、あらゆるものを捲き込まなければやまない。それに逆ふものは盡く打ち倒される。中共が若しその階級的感情にこだはつて抗戦を否定したならば中國人は中共を否定してしまつたであらう。また國民黨が階級的恐怖から抗戦を避けようとすれば國民はそれをふみ越えて進んだであらう。(そのよい例が西安事件だ。) 私はこの現實を見て何か今までの「民族」の階級的解釋では説明しきれないものがあるやうに感ぜられた。そして階級的感情よりも民族的感情の示す路線に従つたやうに見える毛澤東の政治的先見を恐ろしいものに思つた。

八・一宣言は國內の各層、特に學生のインテリゲンチヤに行動の方針を與へた。當時上海北京等の大都會の學生の間では左翼が壓倒的に勢力を持つてゐた。しかし李立三當時と異なり、毛澤東の運動は農村を中心としてゐたので、都會における黨活動は以前よりもずつと下火だつた。左翼學生が非常に多い割合に黨生活に入つてゐるものはごく少い、大部分は未組織のまま放り出されてゐた。彼らのあるものは延安に走つたが、まだ、都會の魅力を棄てきれず、行動にはえきら

す、前進の方向を見失つてゐるものが多かつた。八・一宣言は彼らに都會を棄てることなく、中共に入る生命がけの危険もなく、尙黨の方針に沿うて活動する場面を與へた。これが救國運動を急速にふとらせた内側の原因だつた。

中共の八・一宣言がなくつても、中國の學生は愛國運動に立ち上つたらうか。これはよく聞かれる質問である。私は思ふ、むしろ立ち上つたらう、だがあんなに早く全國的運動にはならなかつたであらう。一九三五年の十二月北京の學生が冀東政權樹立に反對して起ち上ると、上海ではすぐ學生が政府に抗戦を請願しようとして北停車場に押しかける。それに呼應して南京・天津・漢口・廣東と同じやうな騒ぎが起つて、忽ち運動は全國的になる。それから半月もたたないうちに上海に全國學生救國聯合會が生まれる。それが社會の各方面と結びついて全國各界救國聯合會にまで發展した。その手際よさ——誰が見ても單なる自然發生的な運動とは考へられない。

國民黨の方ではこれはあぶないと見て三六年の二月「國民に告ぐるの書」を發表して、救國運動は共產黨に利用されてゐると國民に警告した。何かの形で救國運動に關係してゐた「善良なる市民」たちは自分の周圍にはさういふおそろしいものがうろついてゐるのかと今更ながら警戒し出した。この時も中共が「イデオロギー」に服を着せたやうな黨員を送り込み、例によつて例のやうなフラクシオン活動をさせたものとすれば、救國運動から「善良な市民」たちが立ち退く

か、市民が彼らをつまみ出すか、どちらかであつたらう。だが中共はかういふ馬鹿なこととはしなかつた。救國運動の中では中共の人々はもちろん左翼思想の人々も特にそのイデオロギーのために目立つといふことはなかつた。ここで重んぜられてゐるものは救國運動に對する熱情と活動だけであつて、イデオロギーの如何は問題ではない。孔孟の學說の中で教育され、新しいイデオロギーを頭から嫌惡する老人たちも、新しいイデオロギーから孔孟の學說を頭から反動と見做してゐる若い學生と一緒に、救國會の事務を仲よく擔當し合つてゐる。そこには、中共のフラクシオンがヘゲモニーをとるとかたらぬとかいつて問題を起すやうな不ざまなことはなかつた。救國運動のどこにも中共の姿は見られなかつた。私はこれがほんたうの人民戦線だと思つた。そしてこの姿のない中共の姿こそ中共の新しい運動形式ではないかと思つた。

救國運動が上海の市民を總動員して章乃器や沈鈞儒の指導する上海各界救國會が時局の表面に大きく浮び上つた頃、私は自分の周圍を通じて識らず知らずこれと多少の關係をもつやうになつた。私が周圍の人々の話を聞きながら時々答へたり質問したりしたことから、彼らは私が少しは何かの役に立つかと思つたらしく、ぜひ「救亡日報」に何か書いてくれといつた。私は別にどうといふ事もなく思ひついたまゝを書いておいた。たしか中國の救國運動だけでは日本の侵略を食ひとめられるものではない、それを世界の人民運動、特に日本のそれと結びつけなければいけな

いといふ極く定りきつたことであつたやうに記憶してゐる。この論文は私の周囲では意外に評判がよく、私はいかにも中國救亡運動の同情者であるかのやうに思はれた。私はもちろん救國運動に同情はしてゐたが、それはごくお座なりの感情で、少しも實踐慾の伴つてゐないことを自分でもよく知つてゐた。中國の事物に興味をもつた位の外國人がこみ入つた中國の政治運動に飛びこむなどといふ考へは、所詮自分のものではない、下手な冒險小説からの借物に過ぎないと考へてゐた。私がかういふ殊勝な考へを持つたのは決して私の謙遜からではない、實はその裏にもう一つ別の感情があつたからだ。

當時私は上海で目にふれ耳にふれるものすべてが嬉しかつた。私の氣持ちは何一つするにも人らか監視されてゐるやうな内地の生活から解放されて絲の切れた紙寫のやうにふはふは浮いてゐた。私は米國人のよく使ふ *Carefree* といふ言葉の味がよく判つた。このやうな空氣の中にひたつてゐることはプチブル的だとか何とかいふ奴が傍に居ないことが嬉しかつた。妙に眉に皺を寄せてわざと深刻さうな顔をしながら腹の中では如何にして名譽を擧げようかなどと考へてゐる俗物に會はなくてすむことが嬉しかつた。もちろん上海にも俗物は多かつたが、この俗物は如何にも俗物らしい俗物である。すべてほんものは良い。私は自分が俗物精神をふんだんに持つてゐたので、俗物のほんものは嫌ひではなかつた。私はこの自由の空氣を楽しみながら、もつとも

つと上海の街々をうろついて見たかつたのだ。ジャック・ロンドンが「ホワイト・ファンク」で兇狼が自分の生れた洞窟から出て初めて外部の「未知の世界」に直面したときの感激について語つてゐるが、私もそれに似た感激で私の「未知の世界」に直面した。恐怖心と好奇心の交錯、といふといささか大げさに聞えるが、あの抗日の空氣の濃厚な時、日本から初めて來た男がフランス租界をうろつくのは確かに多少のスリルがないでもなかつた。

私の上海社會學の第一課は前にもいつたやうに「大世界」で致へられた。何がここを選ばせたか、第一月謝が廉いからだ。入場料二十錢、しかも「買一送一」といつて入場券一枚買へば別に一枚「送」つてくれる。つまり一枚が十錢になる。それなら初めから入場料十錢とすればよささうなものだが、さうしないところに中國人の計算がある。つまり入場料二十錢とすれば格が高い。その上もう一枚の切符は家に持つて歸つても次に來るまでにはなくしてしまふ。だから名實共に劇場の得になるといふのだ。いや大世界を一口に劇場といつてしまつてはその概念がつかみにくい。この大きさは日本劇場を廣さに於て四つ合せ、高さに於て二つ重ねたくらゐの建物である。そこに中國のありとあらゆる種類の寄席と芝居をつめこんだもの。中國に色々な皿の食ひ残しを集めてこしらへるといはれる萬家福とか全家寶とかいふ料理があるが、これは正に寄席藝人の全家寶だ。「崑曲」もあれば「中曲」もある。「京戲」があるかと思へば「話劇」がある。

單に芝居だけがこんなに種類があるのではない。手品、萬歳、活動寫眞——映畫といふよりもこの方が氣分が出る——はだか踊り・輕業・見せ物・あれは何といふのか女が長衫チヤンセンを着て客の前に出て挨拶する、そのままちつと立つてゐるとだんだん周圍が暗くなりやがて着てゐる着物が薄くなつて結局丸はだかになつてしまふ活動寫眞用のトリック、そんなものを端から端まで見て行くと十錢で一日は樂に遊べる。

ここはいはば上海の淺草公園だ。私も下谷の生れだから淺草公園のよさはよく知つてゐる。公園のよさはそこに集まる人のよさだ。高いビルディングをさまつて上品な顔をしながらかつそり儲ける手合ひではない。さういふ手合に摔りつくされた人の良い人達、しかも饑餓線上に彷徨しながら尙人生の幸福のかけらを求めようとするたくましい生活慾をもつた人達である。中には勿論げすばつた人の悪い奴がゐないわけではない。だがここに集まるさういふ奴は見るからするさうな顔をしてゐるくせにほんの僅かしか儲けられない憐れな手合だ。「京戲シヤキ」のいきれから逃れてぼやつとこの廻廊を歩いてゐるときつとさういふ手合ひの一人がにやにや笑ひながら近づいて來て私に呼びかける。「Won chie boy?」これはケンブリッジ大學を出た男でも一寸頭をかしげる英語である。子供が要るかといつてゐるらしい。私は曾てさういふ「子供」の一人がこの廻廊をうろついてゐるのを見た。年は十五、六。顔に薄化粧をした綺麗な男の子だ。北京語

では相公レキヤンゴンといひ、上海語では屁精ピジン（屁ヘの精エツクスとはこれ如何）といふ。「京戲」の女形は昔大抵素姓ソセウを洗ふとさういふ経験があると或る「中國通」がいつてゐた。すつと後の事だが、上海で「秋海棠シュイハイ」といふ「話劇シヤブ」が大當りをとつたことがある。華北の軍閥が秋海棠という女形を愛したところが、秋海棠がその軍閥の愛妾と密通する、怒つた軍閥が秋海棠の目をくりぬいて追ひ出す、十數年後にめくらになつた秋海棠が別れた愛妾と相會ふといふ筋だつた。だからこの知つたか振りのいふことも萬更嘘でもあるまい。上海に上陸するバイタリティの強い外國の水兵などはいふが、いふギリシヤ趣味——が變だと思ふ人はプラトンの「饗宴」を見給へ。アルキビヤデスはソクラテスを如何に誘惑しようとしたか——の愛好者が多いといふ話だ。私はどうかといふと同じコップで水をのむにしても泥水は飲みたくない性分だつたので、折角のおすすめではあつたが何時も辭退してゐた。

この廻廊の兩側には又ズラツと「街の觀音」が居並んでゐた。「天使エンゼリヤ」といふものはいつもにこやかな表情をしてゐるものだ。この女達は厚化粧で顔がこはばつてゐるせぬか一向に表情がなく寧ろ木彫の觀音に似てゐる。義理にも「街の天使ストリートエンゼル」などと呼ばたものではない。上海語では彼女等を野雞ヤチと呼んでゐるが、野雞は「雉チ」のことで雉は中國では自分のねぐらを持たない鳥とされてゐるのだ。多分そのためだらう。私はその頃長い間人倫の道を遠ざかつてゐたので、彼女

等の一人に戀をしようとした。尤も私がここで「戀をする」といふ意味はフランス語の faire amour 英語の make love である。その妓は内地に残した女房にやや似たところがあつたと、先づ自分にかういひきかせ良心をねむらせておき、徐ろに手順を考へてゐた。私は元來心の中では相當悪い趣味を養つてゐるのだが、弱氣のせむか實行の面はからきし駄目だつた。そのせむで内地ではまあまあ道徳堅固の方に屬してゐた。人からさう思はれると自分もまたその氣になり、つひ心ならずもその方面に足を踏み入れたことはなかつた。(かういひきるといささかうしろめいた事もあるが)だからいさとなると氣後れがする。元來好奇心と恐怖心は背中合せのものである。その妓のそばに行くとか好奇心が後にひつこみ恐怖心が前に出てくる。そばを離れると恐怖心が後にひつこみ好奇心が前に出てくる。こんなことを繰り返してゐるうちにつひに決心がついた。いざ決心して見ると先づ戦闘準備をしなければならぬ。上海のその方面の病氣の恐ろしさについては随分きかされてゐる。一晚で眼がつぶれてしまつたとか首がおつこちてしまつたとか。そればかりぢやない、街角でよくその實例らしいものにも出會つてゐる。どうしても豫防策を講じなければいけない。それには化學的方法と物理的方法がある。私は上海の化學を信じないから或日藥屋に行つて物理的方法を求めた。外套の套の字と孔子の子の字を合せると中國語でさういふ物品の名になると聞いてゐた。つまり外套をかぶつた孔子様。私はその外套を買はうと思



つて盛んにあせつたが私の發音ではどうしてもこの言葉が先方に通じない。藥屋の子僧も困つてしまつて、しまひには英語で「それは一體何の藥ですか」と問うた。この質問に氣取り屋の私はしどろもどろになり「やはりアスピリンのやうな熱さでした」といつて逃げ歸つてしまつた。

そんなことで私の Spring Fever は名醫にもかかることが出來ずそのまま内攻してしまつた。

外によい方法もないので私は唯出來るだけ肉體を使ひ精神を疲らせてその方面を考へる餘地のない生活をしようと思ひ、晝間は好奇心の動くままに街から街を歩きまはり、夜は晩くまで夢中になつて中國語の勉強をした。その結果上海に來た時は何も知らなかつた中國語も四、五ヶ月のうちにもう大概の會話が出來るやうになつた。一度などは簡單な卓上演説をやつて拍手されたことがある。もつともこれは後で聴衆の一人に聞いたなら「何をいつてゐるか少しはわかるところもあつたよ」といふ返事だつたからあまり自慢にはならない。しかし文章の方は進歩が早かつた。こ

れは私の中學校が漢文のひどくやかましい學校だつたせゐるか。二、三ヶ月で毎日の新聞紙が讀めるやうになり、四、五ヶ月すると字引を引引き新聞の文藝副刊まで讀むやうになつた。本文の方はきまりきつてゐて面白くなかつたが文藝副刊の方は抗日文學華やかな時代だつたので、興味津々たるものがあつた。當時は新生活運動の形響で普通の中國人の家ではお茶の代りに開水（おひらき）に入れた白湯を飲んでゐたが、朝飯後湯氣のほのかに立ち上る白湯のコップを前にして讀書や看報（かんぱう）

は確かに乏しい生活の中の喜びだつた。啄木の「なつかしき冬の朝かな湯をのめば湯氣やわらかに顔にかかれり」といふ落着いた氣持をしみじみ味はつた。私がこの白湯の味と一緒に魯迅や茅盾の文章の味をやや理解するやうになつたのはやはりこの頃だつた。

## 四 救亡文學と浮浪兒の世界

魯迅<sup>レイジン</sup>が亡くなつたのはその年の十月十九日である。告別式の日私は友人に連れられて膠州路<sup>キョウヂウロ</sup>の萬國殯儀館に行つた。もつともかう書くと大變殊勝に聞えるが、やはりこの時も好奇心が動機モチの半分以上は占めてゐたに違ひない。大變な人出だつた。だが皆な靜かにしてゐる。上海でそんなに人が集まつて靜かにしてゐると何か不思議な感じで、それだけでも妙に莊嚴な空氣だつた。入口で署名して兩側に並んでゐる人々の間を通つて進んで行くと、直ぐ左側に澤山の花輪にかこまれて地味な藍色の長衫を着た魯迅が行儀よく仰臥してゐた。讀書に疲れて今しがた睡入つたのもいふやうな安らかな死顔だつた。私は先づその顔容の端正さに打たれた。中國にかういふ美男子がゐたことが不思議にさへ思はれ、ちつとその莊嚴な顔を見つめてゐると色々な想ひが去來した。あの眼が開いてゐたときはきつと世の中の愛憎の果てを見つくした者だけが持つあの優しさで睨いたであらう。あの口が開いてゐた時はきつと世の中の道理を知りつくした者だけがもつ氣

安さで語つたであらう。さう考へると生きてゐる時になぜ一目お會ひしなかつたのだらうと今更くやしまれた。

魯迅の傑作は何と言つても「阿Q正傳」である。阿Qといふ人物は東洋の革命家によく見受け「型」、口だけは革命を唱へてゐるが、さてどうしてよいかわけが判らず、唯むやみに騒ぐだけで何の實行力も持たない。魯迅は「阿Q正傳」でこの男の性格を描寫しつつ中國革命の現實、その悲喜劇的要素、革命の幻滅感を呈示した。革命の景氣のいいことばかり書くことが好きな左翼文學者はこの批判的な魯迅の作風にあきたらなかつたやうだ。だから左翼の魯迅に對する風當りは一時相當強かつた。尤もこれには魯迅を中心とする文學研究會系と左翼文學者の創造社系との歴史的對立がからみ合つてゐる。「反動分子」「プロチブル文學」「感傷文學」、かういふレッテルは何時でも魯迅の爲に用意されてゐた。だが魯迅は黙々として自分の信じた道を行き、何文學でもない「魯迅の文學」を確立したのである。魯迅にかう言ふ言葉がある。「もし孔子・釋迦・キリストがまだ生きてゐれば、これら教徒は恐慌を免れまい。彼等の行動に對し教主先生は大いに慨歎したに違ひない。従つて生きてゐれば迫害あるのみだ。偉大な人物が化石になり、人々が彼を偉人と呼ぶ時が來れば、彼は既に傀儡に變じてゐるのだ。」この言葉はそつくりそのまま魯迅の死に當てはまるやうな氣がする。生きてゐた時魯迅は各方面から迫害の受けつづけだつた。だが

死んでから魯迅は生前魯迅を攻撃してゐた人達の間で傀儡にされてしまった。魯迅は今では左翼からも「中國のゴリキー」と仰がれてゐる。だが私はもしこの言葉を魯迅が聞いたなら「私は中國の魯迅です」と答へられたことだらうと思つてゐる。

所謂「國防文學」はこの前の年の五月頃から救國會の運動と歩調を合せて左翼文學の周揚、艾思奇などが盛んに提唱したものだ。魯迅の亡くなる五ヶ月前にはそれをスローガンとして今迄何となく對立してゐた文壇の二系統が合流し新たに「文藝家協會」が生まれた。しかし魯迅はこれに参加しなかつた。そして別に少數派の「文藝工作者」を率ゐて立つた。これは何も魯迅が「國防文學」に反對したためではなく、唯そのスローガンの下に願ひでゐるだけの阿Q共の手から文學の政治的偏向を救はうとしたためだと思はれる。だが魯迅の死が國防文學への統一戦線を一層促進した事實は見逃し難い。

私達は間もなく魯迅の告別式を終へ、今日の人出を目あてに乞食や浮浪兒の群がつてゐる萬國殯儀館の前をフランス租界の方向へ歩いてゐた。やはり魯迅の告別式に来てゐた一人の老人も黃包車に乗つて私達のそばを通り抜けた。續いて私の後から浮浪兒が一人私の脇を駆けぬけて行つたと思ふ間もなく、彼は黃包車の後ろから手をのばして乗つてゐる老人の冠りものをひつつかんだ。そして私達があつけにとられてゐる間にそばをすりぬけて逃げ出した。老人は「搶帽子」と

言ひながら車を止めたがもう追ひつかない。周りの人は誰一人捉へようとしな。私が追ひかけようとしたら、友人が「とてもつかまるものぢやないし、それに君他人の瓦の上の霜まで氣にかける必要はないよ」と、いつた。こんな小さな犯罪を一々氣にかけてゐたら上海では暮せないさうだ。私はその後もよくこんな状景におつかつた。彼等は市場で食料を仕入れて歸る娘夷（おさんどん）から食へものをおつかつた。娘夷が地團太を踏んでわめき出す、周りの人は又かといつた様子で笑ひながら見てゐるだけで、今日は自分の買物がとられなかつたことに至極満足する。川向ふのダンスに疲れた人々が黄包車にゆられながら十二時過ぎに南京路を通る頃、彼等は「看板」過ぎた料理店の前に列をなしてゐる。彼等は客の食べ残しを分けて貰つてゐるのだ。一度私はこの浮浪兒の一人が人殺しを犯した記事を讀んだことがある。被害者はこの料理屋の板前で、彼は加害者にいつも與へてゐた殘菜を意地悪く與へなくなつたのが原因だと報ぜられてゐた。

戦争が始つて燃料が高くなつた時などは、愚園路や河南路の交通ひんばんな所に、浮浪兒の一群が陣取つてゐて、石炭や薪を積んだトラックが來るとすばやく忍びより彼等の「通行税」を抜き取つて行つた。私は彼等が銘々の略奪物をもつて裏通りに集まり、年長の子供から略奪物を等分に分配して貰つてゐるのを見てその巧智に驚かされた。彼等はクロボトキンを讀んだわけでもないのだが、生存の必要から自然にかういふ相互扶助の制度を學びとつたに違ひない。收入の不

定な彼等は「餘力あれば以て相勞し、餘財あれば以て相分つ」といふ墨子の共產主義こそ生活を保證する最良の方法だといふことを、その經驗から知つたに違ひない。収入の多い時に友人を助けて置かなければ、収入がない時に友人が自分を救つてくれない。だから餓死を免れるためにふだん共產主義を實行してゐるのだ。私は原始共產體なども案外こんなものぢやないかと思つた。

上海には浮浪兒がどの位ゐるか判らない。上海で行倒れ屍體を取りかたづける「普善山莊」が一年間に取扱ふ屍體數は、大抵二萬から三萬の間だが、その半數以上は浮浪兒の屍體だ。そして行倒れの原因は先づ餓死と凍死にきまつてゐる。一九四二年度は屍體總數三萬一千七十人のうち子供のが一萬八千八百五人あつた。この街で「萬人パンを得ざれば我れ菓子を食べず」などといつてゐたら、まあ一生滙菓子に口に入るまい。私も來たばかりの頃浮浪兒のあまりの可憐さに少しづつ施しをしたら、連れの學生から「下らない人道主義はやめ給へ」と笑はれ、その學生の神經の太さを憎んだことがある。だが浮浪兒の數があまり多いので、そんなことをしてゐたら自分の方が先に「普善山莊」の御厄介になりさうなのでやめてしまつた。それでも彼等がそばによつて來ると中國人のやうに「去キョウ！ 去キョウ！」といつて追ひ拂ふのが可哀さうな氣がしてしかたなかつた。もう少し月日がたつてくると、彼等が餘りうるさいので彼等に對する人間的な氣持がだんだんなくなり、彼等のさういふあり方はむしろ彼等の本然の姿のやうな氣持になつて來た。私

は自分の良心の磨滅してゆくのを見つめつつ、環境が人間の氣持ちを變へてゆくことのおそろしさに愕然とした。そして封建時代の武士が百姓の苦惱に少しも人間的同情を感じない理由がやや判つたやうな氣がした。寒い西北風の吹きまくつた翌朝など五馬路や六馬路を歩くと小さい魂が今しがた天國に飛び去つたばかりのぬげがらによくぶつかる。どれもこれも手足をかじかめておとなしく行儀よく死んでゐる。通行人は馴れてゐるので立止まりもしない。ものの十歩も離れないところに屋臺を下した粥屋を圍んで、黄包車夫などがふうふう湯氣をふきながら朝食を樂しんでゐる。私はかういふ風景を見て中國の友人に「君、どう感じるか」と聞いたら、「最初のうちは可哀さうに思つたが、今ではああいふ子供は死んだ方がすべての爲めだ、死んでゆくものは生きて行く苦痛を免れるし、一人死ねばそれだけ社會のごみが片付くやうに思へて來た」と正直に白狀した。

強い人道主義的立場から浮浪兒の問題を取扱つた「迷途的羔羊」といふ映畫を見たのはその頃である。この映畫は中國映畫始つて以來の成功であるといはれてゐた。筋は上海に住む浮浪兒の誰もが持つ「履歷書」の忠實な複版だ。戦災・饑餓・流亡、そして両親を失つた孤兒達は、生きる爲めに都會に上り、掃溜から食を漁り、機會があれば人のものをおかつ拂ひ、警官に蹴られながら勇敢に生活を克ちとつてゆく。唯少し變つてゐるところは、主人公の浮浪兒がやがて金持



の家を養はれることだが、それでもアメリカ映畫のやうにそこで目出度し目出度しとせず、彼が再びその家を逃げ出し浮浪兒の仲間に加はるところにこの映畫のリアリズムが救はれてゐる。この映畫は畫面も暗く、撮影技術も巧くないが、浮浪兒をめぐる社會的環境が克明に追及されてゐて、全篇を貫く人道主義的精神は、ひとと觀客の胸にせまるものがある。當時ナンセンスものやチャンバラものしかなかつた日本映畫や、浮世の外の話しか取扱はないアメリカ映畫——私はまだアメリカ映畫に「怒りの葡萄」<sup>グレイブス・オブ・ラズ</sup>のやうなりアリズムのあることを知らなかつた。——ばかり見てゐた私は、この映畫を見た時、中國にどうしてこんな味をもつた映畫がうまれたのかすつかり考へさせられてしまつた。中國は目の前に迫つてゐる國難——これは日本のと違ひほんとの國難だつた——を何とか切り開かなければならないといふので、若い人達の間には何ともいへない眞剣な氣分が動いてゐたが、あの映畫の持つ眞面目な雰囲気は確かにその氣分を反映してゐるものに違ひない。だからさういふものを持たない日本がどうあがいても「迷途的羔羊」<sup>ミストラル・カウ</sup>のやうな名畫を造り出すことは出来ないと思つた。

上海の浮浪兒に對する社會の關心はその頃この映畫や何かで非常に高められてゐた。それを利用したといつては正しくないかも知れないが、茅盾がやはり浮浪兒を主人公として書き上げた抗日文學「大鼻子的故事」<sup>グレイブス・オブ・ラズ</sup>もやはり大きな成功だつた。茅盾は魯迅と共に會ては「文學研究會」の

指導者であつたが、「文藝家協會」設立のとき魯迅とは行動をとものにせず、文藝家協會に進んで参加し、その指導者となつた人である。この作家も一時左翼から盛んに「ブチブル作家」とか「反動作家」とかいはれてゐたが、皮肉にも左翼文學者の提唱した抗日文學で一番實質的な活動をしたのはこの人だつた。彼の「大鼻子の故事」は數ある抗日文學の中で何といつても一番光つてゐる。「大鼻子」と呼ばれる浮浪兒の生活と心理を畫きながら、結局最後に一見何の關係もないやうな「打倒日本帝國主義」に持つて行くその筋道の自然さ、小説のうまさには頭が下つた。文學と政治の結合の問題について凡百の文學理論を讀むよりもこの作品一つの方がすつとうなづける解答を與へてゐる。私は浮浪兒達がどういふ氣持ちでその日その日を暮してゐるかを何とかして知りたく思つてゐたので、この小説は何よりも有難かつた。今茅盾について浮浪兒の世界に少し足をふみ入れて見よう。

私は、この小説の主人公が何々「坊」とか何々「村」とかいふ三階建の高級住宅街の鐵門の中にこつそり入り込んでセメントの芥箱にあがり、野良犬と一緒にかびの生えた御馳走を漁つてゐるのによく出會つた。彼は野良犬と肉のついた骨を争ひそれを手にとつて見て、ごみだらけの骨に何一つ身になりさうなものがないと見ると犬に投げてやる。若し偶然にも腐れ切つた林檎とか

大根の切れはしなどを見付けようものなら、彼はもう有頂天になつてその瘦せて眞黒くなつた指先が少しふるへてくる。彼はそれを食べながら更に勇敢に野良犬の間に割り込んでセメントの箱を引つかまはす。そして犬達と同じやうに地面に腹ばひになつてその瘦せた顔をセメントの箱の下にある取り口に突つこむ。若しその中に何か光るもの——古い酒瓶だとか坊ちゃんやお嬢ちゃんや壊した玩具など——が見付からうものなら、饑しさもしばらく忘れてしまひ、腕を延ばしてそれを取らうとする。そんな時にはなぜ身體ごと箱の中に入らないものかと恨めしくさへ感じる。彼のそののびきつた腰を荒々しい牛革の靴がどしんと蹴飛ばす。彼は経験によつてこの脚がこの「坊」又は「村」の門番か巡捕の彼に與へる御褒美だといふことを知つてゐる。そこで彼は尻つ尾を後足の間にはさんでこそそこを逃げ出す野良犬と一緒に、例の鐵門から逃げ出し、再び別のところに行つて彼の「冒險」事業を續けて行く。

時には彼に運の向いて來ることがある。門を守る巡捕の眼をかすめて三階建の洋館の裏門のところにとつそり忍びよることが出来る。もう一つ運がよければ、丁度裏門が開いてゐて、飯たきのおさんどんが、昨夜の残飯や残りの汁を「滑脚桶」の中に空けようとしてゐるところにおつかる。その時彼は何とか言葉をかける。彼の聲は低く弱々しくてききとれないが、それでもかまはない。おさんどんは彼が何を要求してゐるのかよく知つてゐる。そして彼は或はもう駭つばくな

つた半碗の粥を得たり、或は唯白い眼をむかれたり、或は同情のある、しかし彼にとつては何の役にもたたぬ言葉をかけられたりする。

「あつちへお行きー うちでは月定めで残飯を取りにくる人があるからお前にはあげられないよ」

こんな事が毎朝早くまだ坊ちやんやお嬢ちやん方が香りの高いかけ蒲團にくるまつて睡つてゐる時に起るのである。

それから後私達はこの話の主人公を人通りの多い街でよく見かける。彼は腹の出張つた紳士と長い旗袍チカホにハイヒールの蛇のやうな細い腰をした奥さんの歩いてゐる後について「旦那さん、奥さん、恵んで下さい」と聲をふるはせてゐる。

蘇州河に跨つてゐる鉄筋コンクリートの橋のたもとでも彼を見受ける。彼はひよつこり鼠のやうに人ごみの中からくぐり抜けて、丁度橋を上りかけてゐる黄包車のそばに來て車夫を助けて車を引く。そして車に乗つてゐる客に向つて「旦那さん——或は奥さん——恵んで下さいよ」と哀音をしぼる。これは彼が努力で食糧をかちとる方法だが、彼が獲得するものは多くて銅貨どんげ一枚か又は何も貰へないかである。

彼のこのやうな労働もやはり一種の「冒險」事業なのだ。巡捕に見つけられると棍棒が彼に致

罰を垂れることもあり、又時には巡捕も彼に憐憫の情を起して見て見ぬ振りをすることもある。しかし橋の兩端にひかへてゐる彼と同じ境遇の、年は彼よりも多く顔は彼よりも利いてゐるといふ手合ひは、どうにも始末がつかない。彼等は彼をどなりつけたり殴つたりして、このやうな勞働の自由を彼に認めようとする。かやうな「冒險」事業も他人がもうすつかり地盤を分けとつて了つてゐる。しかし彼等といへども又その背後に親分がゐる勝手な自由營業が出来ないのだ。

しかし我が主人公にも頗る得意な時期がないでもない。繁華な馬路本ほどに赤や緑の常夜燈が耀き、

場末の裏町にも街路燈が一つ淋しげに光を投げる頃、我が主人公にとつてよほど遠がよければ、五、六人か十人ぐらゐる年恰好も似よりの同志達を糾合して、この裏町の入口で何かを待ち受けることが出来る。待つて待つて待ちぬくうちに、やがてこの入口に仕出し屋の小僧が現はれる。十二、三歳の子供でどこかの商店で飯をすましたあとのものをかついで歸るところだ。まへの方の竹籠の中には恐らく食べ残しの油汁が少しづつ残つた碗や皿があり、後の方の飯桶の中には一人前が十分とは言へない程の冷飯が残つてゐる。だが運がよければ碗や皿の中にはまだ相當分量の油汁や骨や野菜が残つてをり、飯桶の中の冷飯も一匹の壯健な犬を養ふ程の分量が残つてゐることがある。この場合、我が主人公とその同志達は優勢であるから飯かつぎの小僧は慣例に従つて無抵抗である。我が主人公は即ちその分け前に與り、油汁の皿を舐めると、口笛を吹きながら

その場を去つて行く。だが我が主人公の「家常便飯」（たづつぱん）はやはり毆られたり、どなられたり、靴で蹴られたりするのが付きものなので、彼の生活は野良犬よりも少しづらかつたのである。

彼は生まれつき「家」が無かつたわけではない。彼の「家」がどんな家だつたか、彼は今全く記憶がない。ただ彼の記憶に漠然と残つてゐる家は——或る年忽然と上海に戦争が起り「大きな鐵の鳥」が小半日敷知れずの爆弾を撒き散らした。その或るものは大きな家にも落ちたが、もつと多くのものは彼の「家」のあつた貧民窟に落ちたのである。その結果彼は家なしになつて了つた。同時に彼は親爺とお袋を失つて了つた。どんな風に亡くなつたか彼も知らない。親爺やお袋がどんな顔をしてゐたか、今彼もよく憶えてゐない。その時分彼は七、八歳ぐらゐだつたらうか事實ちよつと小さ過ぎた。その上親爺やお袋がゐた時でさへ彼は兩親の顔をはつきり見るわけにはいかなかつた。兩親は朝まだ暗いうち二人共出て行つて了ひ、夕方晩くなつてからでなければ歸らないからだ。しかし彼に親爺とお袋があつたこと、又どのやうにして親爺とお袋が亡くなつて了つたか、そして誰が彼から親爺とお袋を奪つたか、彼は永久に忘れなかつた。——

矛盾はこのやうに一浮浪兒の生活断片を紹介しながら、やがて彼が仲間から「大鼻子」と呼ばれるやうになつたいきさつを述べる。天下孤獨の「大鼻子」が世界都市上海の眞唯中で人々に追ひだてられながら勇敢に生活と戦つて行く姿は、シートンの「動物記」にある四足の英雄達を想

はせるものがある。彼の生活は政治とは何の関係もないやうだが、彼の生活をそんな悲惨なものにした背後の力について讀者を深く考へさせないではゐられなくする。最後の場面に到つて今まで讀者の胸の中にわだかまつてゐた忿懣は矛盾によつて明瞭な對象を與へられ、讀者のおさへられた感情はその背後の力に向つて一時に爆發させられる。この最後の場面に於ける政治と文學の結合の自然さ、私がくくだ説明するよりも一度「大鼻子」の世界にもどつて見よう。

氣候が暖かな時は「大鼻子」は到るところを我が家とすることが出来た。彼のやうな人間には不思議なことがある。晝間は馬路で何時でも彼を見るのだが、晩にどこかで睡てゐるのを見ることは大變むづかしい。しかし彼が晩にもやはり「大上海」のどこかにゐることは間違ひない。天上に飛び去らないことだけは斷言出来る。或は鼠のやうに地下に家があるのだらうか、私はまだそれは調査してゐないから懸案にして置かう。しかし、私は「大鼻子」の數多くの住所不定の「家」の一つが天上にもなく地下にもないことは、責任をもつてここに聲明することが出来る。

恐らく讀者も皆な知つてゐるだらう。「大上海」の北區に中國と外國との境界の地帯がある。ここは會て「一・二八」の砲火の洗禮を受けて、一片の瓦礫に化したところである。この數年間依然として滿目これ雜草で、なかなか記念とするに足るものがある。この敬すべき「大上海」の創痕の上には殘壁だけが危なげに高く聳えてゐて、永久に人の住居にはなりさうもない。その

殘壁の近くに以前の「繁華」時代の名残りのセメントの芥箱が残つてゐる。現在崩れた煉瓦や泥で埋もれ、遠くから見ると唯一つの山のやうに見える。どうしたわけか、又何年何月からか知らないが、我が「大鼻子」君はこの珍しい穴蔵を発見した。そしてそれがすつかり氣に入つて了つた。恐らく少し努力を費したであらう、それを綺麗に掃除して今では彼の「冬宮」にしてゐる。これは恐らく根も葉もない話ではあるまい。なぜならば或る人は確かに彼がこの天上でもなく地下でもない「家」からゆつくりお出ましになるのを見たからである。

その日は暑くはなかつた。暦で見ると丁度一年の最初の月が正に盡きなんとする日である。だがこの日はそんなに寒くもなかつた。もう一つこの日は太陽がなかつた。その通りだ、太陽がない。空も朝から葬式を哀しむかのやうな顔をしてゐた。この日「大上海」のどんな街角でも少し體裁をもつた人は必ず穩やかに起立し「三分間の默禱」をして、それから役所に行くものは役所に、會社に行くものは會社に行つた。……

しかしこの日「大上海」を南北に貫いた馬路には色々雑多な人々の怒りの潮が奔流し、大地を震動する雄たけびが四年前の砲火に答へた。我が「大鼻子」君は丁度この時彼の家から出て朝飯にありつかうと南の方に歩いて行くところだつた。彼は先づこの雄壯な人々の流れに追ひついた。

これは一體何様のお葬式かと思つた。



「あん畜生、小五子の奴、こんな大きな葬式があるのに俺に聲もかけてくんねえ！」

「大鼻子」はかう考へると、これは小金の入る機会を逸して了つたと思つた。彼は道の端に立つて「友達げえのねえ」小五子が花環か葬式の「輓聯」をかついでゐないか見ようとした。その行列には葬式の時に用ひる「開路神」もなければ「項馬」もない。前に行くのは長衫を着た人や洋服の人、旗袍と外套を着たお嬢さん、外套を着ないで旗袍だけのお嬢さん、シャツだけの學生風、職工風のや、商店の小僧、工場の徒弟のやうなの……かういふ一群の人々が手に手に小旗をもつて行く。

これと同じやうな行列が後からも後からも續いて来て、その終りを知らない。否な列の終りは時々刻々に長くなつて行く。街頭の人々、長衫の人、シャツの人、男女老若を後から後から吸収して行くからだ。

或る人々（その中には自轉車に乗つてゐるものもある）は行列のわきを歩きながら手に持つたピラを道ばたの見物人に配つて行く。時によると見物人に何か話しかける。突然天地を震動するやうな叫びが起つた。

「中華民族解放萬歳」

これは十萬の咽喉から絞り出された聲だ。これは幾千幾萬の咽喉があはさつた一つの巨大な咽

喉から叫ばれた聲だ。「大鼻子」はこの叫びが何のことだかわからなかつた。しかしこの行列がお葬式でないことだけははつきりわかつた。彼はやや失望はした。が又面白くもあつた。この時一人がピラを一枚彼の手に渡しながらいつた。

「おい、一緒に行かないかい、小朋友、愛國示威運動に参加しないかい」

「大鼻子」には一緒に行けといふ意味がよくわからなかつた。ここにはかつぐべき「鞆駮」もなければ花環もないではないか。しかし「大鼻子」は人の大勢ある場所では非常に勇敢でてきばきしてゐたからすぐその後について行つた。行列は前に進んで行く。「大鼻子」の前には三人の若い男女がゐた。彼等はみちみち「大鼻子」が聴いてもわからない話をしてゐた。「大鼻子」は元來洋語が嫌ひだつた。「大鼻子」はまるつきり洋語ばかり話す鼻高から殴られたことがあるし、少し洋語をまぜて話す鼻低からさへ殴られたことがある——しかも鼻高よりひどく——からだ。この時一陣の寒風が錐のやうにつんと彼の鼻を刺した。「大鼻子」は實際はそれ程大きくもない鼻から何か出さうになるのを感じた。彼は手でそれをこすりとりとると、その洋語を話す青年の身體にこつそりなすりつけてやつた。誰にも見つけられない。「大鼻子」はひそかに得意だつた。

鼻汁も靈感を持つてゐるらしい。最初に茅廬を出た兄貴が成功したのを見ると、後から後から出ようとす「大鼻子」は掌を鼻の孔の下に置いて少し蓄へて置かうと思つた。この時行列の先

頭が何か障害に突き當つたらしい。騒がしい聲が前方から傳つて来る。人々は皆な立ちどまつた。どうもおだやかではない。「大鼻子」の前後左右は盡く憤怒の叫びである。「大鼻子」には何だかさつぱりわけが判らなかつた。又手で鼻汁を搦ひとつてゆがめず傾けずそのままを一人の女のパーマネットをかけた頭髮にかけてやつた。その女は何かのつかつたとても思つたのか、一寸頭をちぢめただけで又咽喉も張りさけるばかりに前方に向つて叫んだ。

「前進— 前進— 打倒日本帝國主義—」

「大鼻子」はこれは喧嘩になるわいと思つた。しかし彼は眼をそばめて例の鼻汁がその女の頭髮の上でぶらぶらしてゐるのを得意氣にながめながら一人で悦に入つてゐた。

行列は又動き出した。前方から傳つてくる雄壯な喊聲は晴天の霹靂のやうに後方の人々の頭上を飛んだ。

「あらゆる賣國奴打倒—」

民族精神萬歳

……打倒……—

聲がとだえた、前方で又騒ぎが始まつた。しかし後方ではこのとだえた文句をついで、再び雄壯な雄叫びがあがる。

「打倒日本帝國主義！」

「大鼻子」はこの一句を覺えた。しかし同時に彼は氣がついた。わきにゐた一人の學生が外套のボタンをかけてゐない爲めにそのすそがふはふはしてゐて、そのポケットには弗入れの把手がむき出しになつてゐるのだ。最近彼が新たに習得した知識に従へば、この學生の弗入れは明かに彼を招いてゐるのである。彼は口の中では「打倒——こん畜生！」と叫びながら、身體はその學生に近づいて行つた。しかし正に「大鼻子」が大顯成就と思つた刹那、おえんま様のやうな巡捕が幾人かかたはらから衝いて出て、理由もいはずに行列の人々から小旗を奪はうとした。そしてどなつた。「スローガンを叫んぢやいかん、こら叫んぢやいかんといつたら！」「大鼻子」は驚いて脊の高い學生の股をすり抜けて前に出た。例の外套を着た學生と頭髮に鼻汁をつけられた女が巡捕とつ組合ひをやつてゐる。彼等は旗を棄てようとしなかつたのだ。多くの人々が學生と女を助けた。自轉車に乗つた人が後方の人々に急いで前の方に馳けつけるやうに命令して行つた。前方の人々も戻つて來て學生と女に應援した。そこには忽ち鬪争が渦まいた。

「殴れ！」と叫ぶ聲が人垣の中から起る。大鼻子もそれについて叫んだ。眼の前の出來事に對して「大鼻子」ははつきりした認識をもつた。彼の頭の中には忽ち一つの公式が出來上つた。

「彼自身屢々巡捕に殴られる。現在學生と女が殴られてゐる。彼自身はよい人間だ。それ故この

二人もよい人間に違ひない。よい人間はよい人間を助けなければならない」

誰の知らないが旗が一本地面に落ちてゐた。「大鼻子」は直ぐにそれを拾つて一生懸命振つた。この時騒動はやつと治まり行列は前のやうに行進した。例の學生と女はたうとう旗を棄てて了つた。彼等は「大鼻子」と一緒に歩いた。「大鼻子」は自分の持つた旗をその學生にやりながらかういつた。

「大丈夫だい、もう一本あるぜ、あげよう」

學生は人がよささうに笑つた。傍らのもう一人の學生風の男に何やら一言いつたが、「大鼻子」にはききとれなかつた。だが彼は急に思ひ出したやうにかう聞いた。

「貴方方どこに行くんだい」

「廟行鎮だ」

「行つてどうするの。この旗なんだよ」

「ああ、お前」例の頭髮に鼻汁をつけられた女がいつた。

「お前憶えてゐるだらう。四年前の戦争や、大砲や、飛行機の事を。日本の飛行機が爆弾で家を澤山焼いちやつたのを」

「憶えてゐるとも」と「大鼻子」は答へた。そしてこつそりその女の頭髮の上についた鼻汁を見た。

無 上

「憶えておればそれでいいんだよ。お前、仇討ちがしたくないかい」

これは「大鼻子」にもよくわかつた。彼はこはい顔をして「仇討をしたい」といふ意志表示をした。だが彼の眼は再びその女の頭髮の上にある鼻汁に注がれた。彼はどうにもすまない氣持ちになつて來たので急に顔をそむけた。

「中華民族解放萬歳！」

この喊聲がこの時再び天地を震動した。「大鼻子」はその意味ははつきりしなかつたが急いでそれについて叫んだ。目は又女の頭髮に注がれた。心の中では早く一陣の大風が吹いてあの鼻汁を吹きとばしてくればよいと思つた。

「打倒日本帝國主義！」

「民族精神萬歳！」

怒りの潮流のやうに「大鼻子」の前後左右からこの二つのスローガンが湧き上つた。一番先きにある四字は「大鼻子」にもその意味が判つた。彼は聲をはりあげてこの四字を絶叫した。彼のわきにゐた例の外姿を着た學生も叫びながら兩腕を振り上げた。その時例の弗入れはポケットの中からとび出してしまつた。これを「大鼻子」だけが見てとつた。彼は敏捷にそれを拾ひ上げると手の中で重さを量つた。この時――

「あらゆる漢奸どもを打倒せよ！

廟行鎮におしかける！」

「大鼻子」の熱練した手と指先きは軽く一轉してその弗入れをそつともとのポケットに返してやつた。すると彼は急に勇氣が出て來た。そして兩腕を差上げて叫んだ。

「打倒日本、こん畜生！ 廟行鎮におしかける！」彼は廟行鎮がどこにあるのか、又どんなものだか全然知らない。しかし彼はその學生と女が彼を騙さなまいといふことを知つてゐた。だから彼は行かなければいけない！ 彼はそこに行けば必ず良いことがあるに違ひないとぼんやり考へてゐた。

「中華民族解放萬歳！」

この時行列は丁度「大鼻子」の「家」のある瓦礫の山のところを通過しながら全體が一人の人間の聲のやうになつて叫んだのである。

中華民族解放萬歳——

私が矛盾の「大鼻子的故事」をこんなに詳しく紹介したことには二つの理由がある。先づ第一に、これは私達が何百枚原稿紙を使つても説明しきれない浮浪兒の世界を最も簡潔に生き生きと讀者の目の前に展開してくれる。その意味でこの小説は中國でも稀有の兒童文學といへる。餘談

にわたるが、郭沫若がソ聯に行つたとき、兒童詩人マルサックから「中國に兒童詩人がゐるか」と問はれた。彼はこの質問に對して「蘇聯紀行」の中でかう答へてゐる。

「中國にも兒童詩人が居りますか。」私自身これに何と答へてよいか判らない。心苦しいが「居りません」と答へる外はない。私達中國の詩人文學者は科擧時代の文人氣質からまだ十分解放されてゐない。詩をつくり文を書くのは自分の功名のためであり、自分に功名と利祿を興へてくれる讀者を對象としてもを書く。誰が中國の一般民衆にかかづらほうか。ましてや誰が中國の子供達にかかづらほうか。中國の子供達は鶏や家鴨よりもつと金にならないものだ。到るところで生きながらに棄てられてゐる。誰がこの子供達のために詩や文學を書くものがあらうか。だが私も結局一箇の愛國主義者であるからこんな家の中の醜事を外に擴めるやうなことは言はなかつた。」

もちろん矛盾の「大鼻子的故事」は特に中國の子供達のために書かれたものではない。だがこの作品が「鶏や家鴨」どころか虫けらのやうに思はれてゐる浮浪兒のために彼等に代つて世に訴へてゐることに間違ひない。私は浮浪兒の世界にこれ程深い同情と人間的理解を示した作品を滅多に知らない。これこそ中國が世界に誇り得る立派な兒童文學ではないかと思つてゐる。

次に、當時上海のあらゆる階級の人々をするする引きこんで行つた抗日の「怒潮」をこれ程り



アルに描いてゐる作品は決して多くはない。その頃上海には浮浪兒のやうな政治に無關心な存在さへ「中華民族解放萬歳」と叫ばないではゐられないやうな空氣が渦まいてゐた。人々はこの「怒潮」の果てが中日兩國間の戦争につながることをよく知つてゐた。そして一度日本との戦争となれば近代的武装のない中國が「肉體を以て鋼鐵に當る犠牲何ぞ少なかる可きや——陳誠、南京陥落の辭」といふ結果になることは初めから判つてゐた。にも拘らず日頃個人の利害關係にあれ程計算の細い中國人があらゆる計算を度外視した戦争に吸ひこまれて行く、このやうな不思議な力が渦まいてゐる時代、この時代の力がこんなに簡潔に生き生きと捉へられてゐる作品は滅多にあるまい。

最初文字通り傍觀者にすぎなかつた「大鼻子」が抗日デモンストレーションの活潑な一分子に變つて行つたやうに、彼よりもつと始末の悪い傍觀者だつた私も知らず知らずのうちにこの「怒潮」に引きずられて行つた。そして私と救國會の人々との關係はだんだん深くなつて行つた。「人がみな同じ方角に向いて行く、それを横より見てゐる心」（豚木）。私はそのやうな心を失ふまいと考へてゐたのだが、それがどうやら怪しくなつて來た。私は中國の友達と中國の當面する問題を語る時など、いつか自分が日本人であることを忘れ「我們<sup>われら</sup>」といふ言葉を使つてゐるのに氣がついた。

## 五 救國會の人々

「大鼻子的故事」の最後の場面は一九三六年一月二十八日に行はれた「一・二八」記念デモを描いたものだが、確かこの年の九月十八日にも大きなデモがあつたやうである。この日は國民政府も何事かあるだらうと思つて九月十七日から二十日まで上海市區に臨時戒嚴令を布き、一切の集會・行進・ストライキ・休校・傳單撤布を禁止することを二日前に發表した。政府がこんな用心深くこの日を迎へたのはまんざら理由のないことではない。この頃中國の各地で日本人に對する暴行殺害事件がしきりに報告されてゐた。先づ七月十日には萱生といふ日本人が殺害された。八月二十四日には成都で日本の新聞記者が殺傷された。それにつづいて北海で日本の商人が殺され、漢口で日本警官が射殺された。又九月に入つてからは上海ではゆる對日テロ事件が頻發してゐる。日本側では中國政府に排日取締りの誠意がないと言ふので干涉の機會をねらつてゐた。だから政府は萬一この日日本人に對する暴行事件でも起ればそれは日本に干涉の口實を與へるば

かりだと思つてゐた。ともかくこの日のデモは中國の主權の下にある上海市では禁止された。つまり上海の租界を一步離れてもいけなかつたのだ。そこでデモは租界當局から辛うじて許された南市に近い法大馬路<sup>フアタクマロ</sup>だけを行進したやうに記憶してゐる。どうも曖昧な記憶で申し譯ないが、實をいふと私はこの日頃一文なしで外に出られなかつたのだ。しかしそのデモの先頭に救國會の婦人指導者史良女史<sup>スライジン</sup>の騎馬姿があつたことと、丁錠「大鼻子的故事」にあるやうにこの史良女史が警官とつ組み合ひの喧嘩をして怪我をしたことだけは確かである。そのわけは――

或る日私が部屋にくすぶつてゐると、友人の一人が入つて来て救國會の史良女史がデモで怪我をされたから直ぐお見舞に行かうといひだした。彼はそれに附け加へて、史良女史はいはば日本のために怪我をされたやうなものだから、日本人たるお前は贖罪の意味に於てもお見舞に行く義務がある、それにお前が見舞に行けば女史はきつと自分の行動が日本人にも影響があつたことを知つて喜ばれるに違ひないといつた。私はこの友人のいひ分を頭からは認めたわけではなかつたが、噂に高い史良女史が一體どんな女性だか見るだけでも見とくだと思つたのでこの友人の後について見舞に行つた。しかし残念ながらその日は女史が安靜を要したのでお會ひ出来ずにつた。それから四、五日もたつて、私自身こんな訪問をしたことを全く忘れ去つてゐた或る日のひる、下宿のボーイがにやにや笑ひながら階下に二人の中國婦人が訪ねて來ましたと知らせてく

れた。私は上海に來てから日も浅く部屋を訪ねてくれるやうな女性と知り合ひになつた筈はないので、何かの間違ひだらうと思ひ直ぐ部屋着をひつかけて見に行かうとした。もうその時はドアが強くノックされ、こつちからろくに返事もしないうちに二人の婦人がつかつかと入つて來た。つかつかといふと如何にも部屋が廣さうに聞えるが、實際はつかつと一步入ると直ぐベットに打つかりさうな部屋、そこに私が儼然孤獨の氣安さから半裸體でごろつとしてゐたのである。先方もすつかりあわててしまつたらしい。その一人が史良女史だと判つたのは、私が間もなく部屋着をひつかけてともかく座が改まつてからである。もう一人の女性は廣東人で東京に永く留學してゐた人、女史が通譯にたのんだのだと謂ふ。史良女史は救國會の七領袖中の紅一點である。紅一點といふと如何にもやさしい感じだが、實物は肩幅が廣く背は高く、顔は平べつたく、といふ形容も月並だが、如何にも巴御前に洋服を着せたらかういふ恰好になりはしないかと思はれるやうな女傑である。彼女が警官と取つ組み合ひをしてゐる現場を見たら私は恐らく警官の方に同情して了つただらうと思ふ。でも段々話してゐるうちに眼が優しくきらめき、意志の強さうな顔の表情がこはれて中から人の良い世話すきのをばさん氣質がのぞいてゐる。女史は私にこんなことをいつた。「日本の人々は中國人が日本人全體をうらんでゐるやうに思はれるか知れないが、私達は決して日本の人民に敵意をもつてゐない。いや、私達は日本の人民が軍閥のためにあらゆる自

由を奪はれてゐること、特に中國問題について自分の自由意志を發表する自由をさへ奪はれてゐることをよく知つてゐる。だから日本の中國侵略は日本人民の意志ではないと思つてゐる。でも日本人民がどうしてもつと強くならないか、どうして軍部にああいふ横暴をさせて置くのか、それは中國人がいつもはがゆく思つてゐるところだ」辯護士だけあつてさすがいふことにすぢが通つてゐる。私はかう答へて置いた。中國侵略は確かに日本人民の意志ではない。日本の人民は自分達が中國を侵略してゐるなどとは夢にも考へてゐない。政府の言ふ通りに日本は中國と友好條約を結ぼうとしてゐるのに、中國側はいつも理不盡にそれを拒否してゐるのだと思つてゐる。だから中國人や外國人から日本の中國侵略などと言はれると、日本人は自分が侮辱されたやうに感じてゐる。況んや中國人が日本人を殺害したりなどすれば（私には中國人のここに至る氣持ちはよくわかるが）、日本人のこのやうな無知は益々強固となり、政府の宣傳を益々信するやうになる。従つて政府の中國に對する侵略計畫を一層やりやすくする。だから救國會の仕事が中國人の個人的暴行を刺戟するやうな方向に向ふことは避けなければいけない。だが實際問題として中國人を抗日に向はせる運動は日本人に對する個人的暴行を刺戟する要素をも含んでゐる。かういふ矛盾を貴女方はどう考へてゐるか。私がかういふと、史良女史は日本人の無知を啓蒙する役割は日本の先覺者のする仕事ぢやないか、といひ切つた。全くごもつともなお説であるが、いはゆる

「日本の先覺者」が一人も満足に口の聞けないやうになつてゐる状態では、先づそんな見込みはない。軍部の中國侵略をうちから止められるやうな力が日本の中にあるならば、一九三一年に、日本は滿洲に向はずに革命に向つてゐただらう。中國が日本の侵略をとめようとするならば、日本の人民の無知を啓かなければならないのだが、現在の日本の先覺者だけでは到底それをやりとげる力はない。貴女方からは非力を借りなければならぬ。それにこの仕事は少くとも精神の上に於て日本の先覺者の仕事、中國の先覺者の仕事と區別をつけるべきものではない、中日共同の仕事ぢやないかと私はいつた。

私のこの答へはどうも史良女史のお氣に入らなかつたらしいが、どうやら多少の印象は與へたらしい。それから間もなく救國會の人々が私のためにささやかな歓迎會を開いてくれたのは、恐らく史良女史のお口添へがあつたためだらう。その席には救國會の領袖沈鈞儒・章乃器・沙千里その他文化界の知名の士が多く參加した。

沈鈞儒氏は清朝最後の翰林である。現在上海の辯護士會の會長で、史良さんも沙千里さんも皆なこの人のお弟子だ。頭のつるつるとはげた工合が、如何にも清朝の翰林らしい高雅な様子である。中國の舊い讀書階級 Literati のもつ教養がその人柄によく現はれてゐる。興に乗つて來ると話しながらしきりに頭を左右に振り立てるくせがある。中國人にかういふ癖はさらにあるが、

この人の振り方はその禿頭と相待つて頗る特徴があり、如何にも情熱の身うちにあふれた老愛國者の感じがある。この人は北伐の時上海自治政府の主席だつた。彼は年はとつてゐるがいつもその時代の若い世代と共に働く珍らしい人だ。

章乃器氏は身長五尺七八寸、見るから理智的な顔をした四十男である。浙江財閥の本據浙江實業銀行で子飼からたき上げた副經理、銀行實務に明るかつたばかりでなく、自ら經濟研究所を開き多くの進歩的青年學徒をその周圍に集めてゐる親分肌の學者である。毛澤東と彼との關係はこの青年學徒を通じて結ばれてをり、彼自身はマルクス主義を是認してゐないが、事中國の國難に關する限り、國民黨の聲明よりは中共の方が信用出來ると考へてゐるのだと誰かが教へてくれた。世間ではこの人を「左傾資本家」と呼んでゐる。だがかういふ言葉は當つてゐないと思ふ。

浙江實業銀行は確かに浙江財閥の本據ではあるが、その本據の實權を握つてゐるものは日本の山口高商を出た金持の李銘<sup>メイ</sup>氏で、章乃器氏はただ高級な銀行員に過ぎないのだ。しかし當時中國で最も有名な人を國民に選舉させたら——そしてこの選舉に政府の干渉がなかつたとしたら——章乃器氏は恐らく屈げられた五指のうち小指位にはなつてゐたであらう。國民が愛國熱の過剰に苦しむときよく英雄をつくり出すものであるが、章乃器氏は正にかういふ英雄の一人になりかかつてゐた。今日の前に立つてゐる章乃器氏から受ける印象は、どう見ても民族的英雄といふよりも

堅實な銀行員である。やはり世間でははれてゐるやうに、眼から鼻に抜ける伶俐さが目立ち過ぎる。沈鈞儒氏は見ると策のない人で、人にもたまされさうだが、如何にも愛國運動の精神的指導者の感じを受ける。だが、章乃器氏は愛國熱を冷靜に測定し、それを情勢に應じて利用しつつ、政治目的を一步一步實現して行く實際的指導者だ。誰かが「中國の救亡運動は成功しさうもないが、章乃器の救亡運動はどうやら成功した」と悪口を言つたが、彼には如何にもかういふ悪口をいはれさうな俗つ氣も見えた。沙千里氏とはよく話さなかつたので印象は薄い。上海では少壯辯護士としてよくはやつてゐる。二枚目の扮した温厚な銀行員といつた感じである。

この席には見えなかつたが、救國會の領袖はこの外大學教授王造時、生活書店主李公棧、著名な大雜誌「星期週聞」の編輯者鄒韜奮の三人と史良を加へて七人、これを救國の七君子といつてゐる。私は遂にお會ひすることが出来なかつたが、この中で鄒韜奮はなかなかの人物だつたらしい。今でも多くの青年が彼を慕つてゐる。抗戦中各地を流浪して席の温まるひまがなかつた。戦争の末期には江北の中共地區で働いてゐた。病氣になつて秘かに上海に潜入し、秘密に療養したが遂にたてなかつた。終戦の前年七月二十四日のことである。今でも中共地區には彼を記念して彼の名を冠した書店が設けられてゐる。

救國會は當時この七人ではつちり固められてゐた。今でも抗日救國運動が中國共産黨の指導下



にあつたやうに考へてゐる向もあるが、私の目で見えた救國會は實際ここにあげた七君子の指導下にあつたのだ。この指導者の誰をとつて見ても一人としてプロレタリア出身の人はゐない。皆なが可成り有福な小資産階級だといふことは可成り意味があると思ふ。日本商品の密輸入で一番困つたのは中國の民族資本わけてその本據たる上海の中小資産階級であるから、彼等が一番眞剣になつて抗日運動を支持するのは當然の話である。中共の地盤たる農民層はこの問題にそれ程大きな興味はもたなかつた。抗日運動のこのやうな階級關係がこの指導者の預ぶれに現はれてゐるのではあるまいか。

この當時救國會をとりまく國內情勢は非常に複雑で七領袖の中國政界に於ける立場は微妙なものがあつた。先づ中國の大金融資本はこの中小資産階級の抗日運動を喜ばなかつた。それには理由がある。大金融資本は中國を強力な中央政府の下に統一しようとしてゐた。國家の統一といふことが大金融資本にとつて如何に必要であるかはいふまでもあるまい。當時中國の統一は英米の援助で着々實現されつつあつた。江西省の「剿共」も一と先づ成功して中共は遠く陝西の山の中に追ひ込まれた。若し日本がよけいな妨害さへしなかつたら蒋介石はもう一息で中共を剿滅し國の統一を完成したかも知れない。この二つの内容を含む「かも知れない」のうち中共を剿滅

は簡單だ。「統一した中國」は「滿洲國」を認めるはずはないからである。だから——中國の統一を妨害するために——日本は中國に「反共」を迫つてゐた。既に「討共」を實行してゐる國民政府に向つて「反共」を迫るのは羊羹を食べてゐる人に砂糖をかけると勸める「おせつかい」だ。この「おせつかい」には勿論何かの「うら」がなければならぬ。國民政府はその「うら」をよく知つてゐた。そして日本の「おせつかい」を退けるためには先づ出来るだけ日本に口實を與へないこと、そして出来るだけ時間をかせいでその間に國家を統一し、日本の要求をはねかへすまでの實力を養ふことが絶対に必要だと考へられてゐた。少くとも一九三七年七月廬山會議の有名な演説に現はれた蔣介石の肚はこのやうに讀まれた。そして中國の大金融資本は確かに西安事變の起るまでは蔣介石のこの決意を尊重してゐたやうに見られる。だから彼等は救國會の抗日の趣旨には反對の理由は見出せないにしても、救國會が下手に動いて蔣介石のプランを滅茶滅茶にするやうな活動には十分反對する理由をもつてゐたのだ。

一方救國會の實際の動きはどうであつたかといふと、抗日運動もさることながらそれと大きく周囲の事情から蔣介石のプランと對立する空氣がだんだん濃厚になつてきた。そこにはかういふ事情がある。

蔣介石の國家統一は中共を當面の敵とするがそれと同時に今まで各地方に割據してゐた軍閥や

蔣介石の直系以外の各黨各派の勢力を消滅させてゆく。この事なくしては國家統一は意味をなさない。だから蔣介石の統一運動が進展するにつれて彼等の不安は増してくるばかりだ。しかし彼等は正面から蔣介石の統一運動に反対するだけの大義名分がない。又環境と舉國一致への空氣がそれを許さない。彼等のこのやうな境遇を打開するために民衆の輿望を擔つてゐる救國會の抗日運動を支持することは彼等にとつて賢明な政策のやうに見えた。抗日運動が進展し、若し中共の主張するやうな「抗日國民國防政府」が實現すれば、彼等も、もちろんその中に參加することが出来る。さうなれば他の各黨各派と聯合することによつて蔣介石の勢力を掣肘することも出来る。こんな考へもまんざらはないとはいへなかつた。少くとも當時救國會を積極的に支持してゐた

張學良(東北軍閥) 閻錫山(山西軍閥) 白崇禧、李宗仁(西南軍閥) 馮玉祥(西北軍閥) 李濟深・陳

銘樞(十九路軍) 宋慶齡(反中央) についていへばこれもうなづける話である。こんなわけで救國

會は何時の間にか反蔣乃至反中央的諸要素の結び目と見られてゐたのだ。だから「七君子」の身邊もやうやく危険になつてきたのである。

私はいかういふ空氣を多少知つてゐたので、この歡迎會の席上救國運動は國內鬭争もさることながらこの際もつと日本の人民に對する呼びかけに力を入れた方がよくはあるまいかといふ話をした。この話に章乃器氏が一番乗り氣になつてくれた。そしてさういふ活動はぜひ必要だから別に

機會をつくつてもつと具體的に話さうといつた。そこで私達はこの問題について引續き四五回個人的な會見をもつことになつた。いつの間にか章乃器氏の友人で中國語の巧みな朝鮮人金鑫氏もこの會合に加はつて來た。金鑫といふ名はもちろん偽名だらうが、朝鮮の或る革命團體の代表で長いこと上海に亡命してゐる人だと聞かされた。話の様子では朝鮮獨立政府の金九氏とは反對の立場に立つてゐる人らしかつた。この會合の結果日本の人民及び他のアジア被壓迫民族への呼びかけを救國會自身がやるのは面白くない情勢だから別に團體をつくらうといふことになつた。團體の名前をアジア被壓迫民族同盟としようといふ議論が強かつたが、日本の人民は被壓迫民族とは言へないし、それに周圍の情勢もあるからあまり目立つ名前はよくないといふので東亞和平同盟といふことに決つた。そして私が機關誌の發行をひき受けることになつた。

前に白狀した通り私は眞剣に政治運動をやる熱はなかつたのだが、事がかり運んでしまふと頼まれたことだけはやらなければならぬ氣象だ。私は私流の方法でどうにか資金を工面し、機關誌「東亞和平」の第一號を出した。これは確か十一月一日頃のことだつたやうに思ふ。その日、章乃器氏は私の部屋に訪ねて來て、いつにないしんみりした口調で中國の現状を話してくれた。「綏遠事件以來張學良の兵士達はもうすっかり内戦を嫌がつて居ります。剿共戦線から武器を放棄して逃亡する兵士が續出してゐると聞いてゐます。中國では誰が出てゐても中國人同志お互ひ

に戦はせることが不可能だといふことがやがて判るでせう」私は今でも彼のこの言葉がはつきりと記憶に残つてゐる。これは私が或は後から續いて起つた事件と、彼の話を思ひあはせて頭の中で幾度も反芻した結果特に強く印象に残つたものかも知れない。

章乃器氏からこの話を聞いて間もなく、この月の二十三日章乃器氏御當人を初めとして救國會の七君子全部が逮捕されて了つた。そしてこの翌月の十二日、章乃器氏がいつたやうに「中國人同志を戦はせることは誰が出ても駄目だ」といふことが事實上にはつきり證明された。この日即ち一九三七年十二月十二日張學良の兵士を驅つて中共軍と戦はせようとした蔣介石主席は却つて彼等の爲めに西安に監禁されて了つたのだ。この事件がやがて世界的な重要性をもつやうになるとは當時誰が豫想したらうか。この日上海の街は何も知らずにクリスマスの準備などいつものやうに賑つてゐたのである。

## 六 西 安 事 變

上海はいつの間にか冬になつてゐた。私が来た頃は夏の眞盛りで日中などは街路のアスファルトが解けて流れる暑さだつた。天井の低いアティックは天蓋からまともに陽を受けた。風の入るよすがのない部屋は空気が朝から煮えくりかへり、身體は汗で何時もじつとりしてゐた。戸外では蟬がその暑さをかきたてるやうにチーッ、チーッと一本調子に鳴いてゐる。内地の蟬の聲とは異なつた變な異國的な音調だ。それをちつと聞いてゐるとあまり暑苦しいのに腹が立つて來て手にした本を床にたたきつけたくなる。そんな暑さも私の身邊のあわただしさにいつの間にか過ぎ去つてゐた。

秋——一體その年の上海に實感の上で秋があつたらうか。十月でもあの日中の太陽の色、あの暑さ、夜などかなり涼しいなどと思ふともう十一月の聲を聞いた。そしてそれからどつと寒くなつた。その時はもう街々はクリスマススの装ひをこらして部屋には赤々と煖爐が燃えてゐたのだ。

上海に来て初めて迎へたこの冬は私にとつて楽しい思ひ出の一つである。夏の間あれ程暑かつた私の部屋は小さいなりに僅かの石炭で暖い居心地のよい部屋に變つた。あの頃は佛印からホンゲイ炭が澤山入つてゐたので石炭が廉かつた。一圓も買へば五日間位の燃料は十分だつた。私は煖爐の上でコーヒーをわかしパンを焼く贅澤を知つた。ものぐさく床の上にねそべつて、好きな本を讀みながら、時々手を延して煖爐の上の焼けたパンをひつくり返す。やがてコーヒー・ポットがコトコト音がして来る。その頃には部屋の中の空氣はすっかり暖まつてゐる。のこのこ床上に半身起き上り、パンにイクラを塗つて簡単な、しかし味のある朝食をすませる。そのうちに友人の誰かがやつて来て床のへりに坐り一緒にコーヒーを飲みながら話し込む。どんな友人が來ても中國に關する限り彼は私にとつての新知識だ。私の中國に關する好奇心は丁度海綿が水をすひこむやうに、部屋に來るすべての人々から知識を吸ひとつて行つた。

私達が上海でこんな暖かな冬を迎へてゐるとき中國の西北隅では吹きすさぶ寒風の中で中國人同士殺し合つてゐるのだと考へると嘘のやうな氣がする。だがそれは冷酷な現實だつた。

蔣介石は日本の壓力が中國に加はれば加はる程中國の國內統一を急がなければならぬと考へてゐた。だから中共が長い苦しい「長征」を終へて陝西に安住の地を見出さうとしても休養の時間には與へられない。新しい討伐計畫に基づいた剿共作戰がまた始つてゐた。その計畫の正面の擔當

者が張學良の東北軍と揚虎城の西北軍になつたことはやはり蔣介石の「國內統一」の線に基づいた高等政策からだといはれてゐた。しかし東北軍や西北軍の兵士が西安事件を起したのは決して蔣介石の高等政策を知つてゐたからではない。東北軍の兵士の大半は「滿洲」出身で一九三一年以來郷里を追はれてゐる。だから「還我山河」といふ抗日歌は彼等に直接訴へるものをもつてゐた。彼等は國民黨の軍隊の中で一番抗日感情の強い軍隊だつた。彼等はいつかは抗日軍の先頭となつて日本と戦へるだらうとその日の来るのを待つてゐた。だが現實に彼等が先頭となつて戦つてゐる相手は日本軍ではなく、同じ中國人なのだ。しかもこの内戦は何時果てるとも知らず日本と戦ふ希望は益々薄くなつて行く。この現状が彼等の不満だつた。西北軍も程度の差こそあれ同じやうな不満の感情をもつてゐた。エドガー・スノーはこの西北の情況をかう述べてゐる。

中國の西の都西安には或る危険な情勢が張學良將軍の下にある非常に反日的な軍隊の中に發展してゐる。この軍隊は則共のために駐屯してゐたが、彼等は既に一九三一年の二十五萬より現在十三萬人まで淘汰されてゐる。彼等は郷土を失つた人々で、家郷を思ふ心が深く内戦を嫌ひ、南京政府の對日不抵抗政策を非常に憎んでゐる。だから彼等は下から上まで叛亂を起しやすい感情が傳染してゐた。……

このやうな状態の下に於て則共作戦が進捗するはずはない。蔣介石は急速にこの情況を改善しなければならぬと考へ、十二月七日それに對する具體案を持つて西安に飛んだ。彼は東北軍・西北軍に新たな攻撃命令を傳へ、若し聽かなければ中央軍によつて武装解除をしてしまふつもりだつ



た。

張學良も蔣介石が何を考へてゐるかをよく知つてゐた。張學良個人としては蔣介石に「兵諫」する意志はもたなかつたかも知れない。だが彼をとりかこむ西安の情勢の中には彼個人の方ではどうにもならないものがあつた。若し彼が蔣に従つて「内戦」に部下を驅りたてようとすれば彼自身が部下から棄てられただらうし、又彼の命令では東北軍は到底動かなかつたであらう。又蔣介石が西安に入ると間もなく西安の學生は内戦反對デモを起し蔣介石の憲兵隊と衝突して二名の犠牲者を出してゐる。この事件も彼に大きな心理的影響を與へてゐた。彼のモルヒネ中毒を救治したのはイタリーの醫者であり、彼が私淑してゐたのはイタリーのムッソリニとチアノ伯であつたが、當時そのイタリーが日獨防共協定に對する支持を發表したことも彼に大きな心理的影響を與へてゐた。彼としては蔣に對する個人的情誼には忍び難いものがあつたが、やはり蔣の命令に従ふわけにはいかなかつた。だから彼は蔣介石に東北軍武装解除の意圖のあることを知つた時、彼には最早「兵諫」以外の道は考へられなかつた。十二月十一日、即ち蔣介石が東北軍の武装解除を協議した翌日彼は秘密裡に東北軍・西北軍の將領會議を開いた。そこでその翌日に遂行すべき「西安事件」のプロットが出来上つたのである。

この運命の日蔣介石は西安から十里離れた臨潼に僅かの親衛隊と共に宿泊してゐた。夜あけ方

そこをどりこんだ約二百名の東北軍は忽ち蔣の親衛隊を武装解除して了つた。かうして蔣介石の運命は一瞬にして張學良とその兵士達の手握られてしまつたのだ。

無 張學良は直ぐに中共の代表周恩來・葉劍英・秦邦憲（イェンエン、イェンエン、チンパン）を呼んだ。十二月十四日には彼等をまじへて東北軍・西北軍・中共の代表者會議が開催された。その結果蔣介石に次のやうな八ヶ條の要求が手交された。

- 一 國民政府を改組して各黨各派による民主的政府をつくること。
- 二 内戦を直ちに停止して抗日戦争に向ふこと。
- 三 上海で捕へられた救國會の指導者を釋放すること。
- 四 一切の政治犯を釋放すること。
- 五 人民の集會結社の自由を保證すること。
- 六 人民の愛國團體組織の權利と政治の自由を保證すること。
- 七 總理の遺教を實行すること。
- 八 直ちに救國會議を招集すること。

この要求のうち七項までは今まで中共が國民黨に要求し続けてきたものである。蔣介石がこれ認めることはとりも直さず中共に屈服することになるから蔣介石はあくまで要求を拒否しよう

としてゐた。

これが私の聞いた西安事件のあらすぢだ。だがその後それがどう推移して行つたか、上海では色々な流言が入り亂れ真相はさつぱり判らない。殊に南京の情勢は全く暗黒の霧に包まれて了つてゐる。その中からだんだんはつきりして來たことは南京政府自身が西安事件の處理方法について二つの黨派に分れて了つたといふことである。

一つは武力討伐説を主張する主流である。西安事件が南京に傳はつたとき南京政府では蔣介石が二度と南京に歸ることはないであらうと斷定した。當時南京政府はこの事件を張學良が中共と結託して起した單なる叛亂だと規定した。政府の發表にも「叛變」といふ言葉を用ひてゐる。従つて大義名分を明らかにするため武力討伐のみが至當であると考へられた。かういふ主張の下に南京政府部内の反共派・何應欽・張群・陳立夫・汪精衛・即ち彼等によつてそれぞれ代表されるところの黄埔系・政學系・CC團・改組派といはれる右翼グループが結集してゐた。エドガー・スノーはもう一步突込んで、この反共派ブロックは單に張學良、中共の武力討伐を考へてゐただけではなくこの際南京政府から英米派・親ソ派といはれるグループを一掃し、中國の運命を握る國、特に日本と結びつけようとしたものであるから、それは西安の「赤色クーデター」に對する白色クーデターだつたといつてゐる。その眞疑はともかくも若し南京政府がこの際武力討伐を決

行したならば結局スノ一のいふやうな事態になる可能性も十分豫想された。

この一派に對して宋子文・宋美齡・孫科・宋慶齡その他南京政府部内のやや自由主義的傾向をもつたものは盡く西安事件の武力解決に反對した。このブロックの主流は英米派である。英米派は反共派と共に元來蔣介石政權の安定力だ。しかし英米派は抗日運動と中共について、反共派とやや異なつた見解をもつてゐた。抗日運動の背後には中共の活動がある。だがそれを警戒するの餘り抗日運動の本質を見失つてはならない。抗日運動は日本の中國侵略に對して起つたものであるから抗日運動を取締りすぎて日本の中國侵略を助長するやうなことがあつてはならない。ましてその結果が内亂となり引いては當面の敵たる日本と妥協しなければならぬやうなことになることは大變だ、——これが英米派の根本的態度ではないかと思ふ。その上にもう一つ考へられることは英米派と反共派との地位上の對立である。反共派の中には何應欽や張群などその外交政策に於て「知日派」として知られてゐる人々が多い。蔣介石が英米と樞軸（特に日本）の間に介在してゐる中國の困難な國際環境を乗り切るために外交政策に於て「英米派」と「知日派」を使い分けたことは周知知られてゐる。兩者は共に蔣介石のあやつる二頭立ての轡馬だが、國際情勢の變化に應じて、或る場合には前者がさきに立ち、或る場合には後者が先に立つ。このやうな關係から互同士の間には地位の上で或る對立があると一般には考へられてゐた。「知日派」が張學良と中

共を武力討伐し中國に大規模な内亂が起れば、國民政府はいやが應でも日本側に接近せざるを得ない。その結果は當然「知日派」が政治の前面に立ち「英米派」がその後につくことになる。否それも蔣介石が上に居ての話で、若し蔣の生還が期し難いとすれば、「英米派」は「反共派」のために全く處理されて了ふやうな結果になるかも知れない。だから西安事變の武力解決には彼等は極力反對した。

當時英米も少くとも對外政策に關する輿論の動向から察せられる限り中國の英米派と見解を同じくしてゐたやうに見えた。中國の赤化を希望してゐない。だが「共同防共」を中國に迫りながら、實質的に中國市場を獨占しようとする日本の野心には賛成出来ない。若しこの二つの「惡」のうちいづれか一つを選ばなければならぬとすれば、その一つはどちらの危險がより直接的であるかによつて決定される。英米が後者の危險をより直接的と見たのは當時の情勢から見て全く當然だと思はれる。

英米はもともとそれぞれの立場から中國の抗日運動に同情を寄せる理由を十分もつてゐた。日本の中國市場獨占を妨げる爲め中國の抗日運動に聲援するのは確かに一つの方法である。だから現地の英米系刊行物は初めから抗日運動に聲援を送つた。しかしそこには若干限界があつた。抗日運動が單に「抗日」に止らず、あらゆる外國の利益を排除する運動に變つては困る。抗日運動

が中共の活動によつてさうならないとは誰が保證出來ようか。英米の上層にはかういふ懸念をもつて情勢を傍觀してゐる人々がかなりあつたやうである。中共がこの懸念を解かうと努力したことは英米を抗日運動の積極的支持に傾かせた大きな要因の一つだつた。毛澤東がエドガー・スノーに語つた中共の外交政策などはそのよい例だと思ふ。彼はかういつてゐる。

「中國に友好的な列強に對しては中國は平和裡に相互利益を談判したいと願つてゐる。そして、今よりも一層廣範圍の合作を準備してゐる。……日本に對しては中國は解放戦争によつて一切の不平等條約を廢止し、日本のあらゆる財産を沒收し、日本の我が國に於ける特權と租界と勢力範圍を取消さなければならぬ。その他の列強との關係に於ては我々共產黨員は決して外國を國際的不利の地位に置くやうな主張はしない。中國が眞に獨立したとき合法的外國商業利益は今までもりもすつと大きくなるであらう。四億五千萬の人民がたび解放されるならば、その偉大なる潜在力が解放されて各方面の創造的活動に従事するから、それは全世界の經濟を改善し全世界の文化水準を高めるであらう」

この宣言の中で毛澤東は租界の一般的取消しについて一言も述べてゐない。

かやうに現政策を非とする國內外の諸要因がだんだん積み重なつて行くうちに國民政府部内にも中共及び抗日運動に對する政府の態度を根本的に再検討すべきではないかといふ意見がだんだ

ん強くなつて来た。その先頭に立つてゐたのが英米派だつた。勿論蔣介石が抗日運動に對する態度をかへない限り彼等は表面からその意見を發表することは出来なかつたが、蔣介石が居なくなつた今は違ふ。彼等は西安事變處理問題をめぐつて反共派とするとく對立した。それに失敗すれば自分等の地位もあぶないので。この共同の必要から彼等の間に強固な反「反共派」ブロックが出来上つた。宋子文・宋美齡・宋慶齡(孫文夫人、彼女個人としての蔣介石嫌ひは有名である)孔祥麟夫妻・王寵惠・孫科がこのブロックの主な人物といはれてゐた。南京で國民政府内に於ける左右の論争が續き容赦なく日にちが経つて行くうちに西安には新たに非常に危険な情勢が發展して来た。東北軍の青年將校の間には南京のこのやうな状態の中に蔣介石を釋放することは危険だと言ふ意見が強まつてきた。そして彼等は蔣介石を民衆大會の審判に付することを要求した。この要求は頗る強硬で、張學良さへどうすることも出来なかつた。

この時、激昂する青年將校を説得して蔣の生命を救ふ男が現はれた。それが蔣の十年來の政、中共の指導者周恩来であつたことは歴史の皮肉といふよりも寧ろ中國人の高い理性の表現であつた。中共代表周恩来はかう主張した。

「若し蔣介石を殺せば南京の國民政府は完全に反共派の手に歸して了ふ。その結果中國にはもつと大規模な内戦が再開する。それは日本帝國主義に侵略の好機を與へるだけではないか。だから

諸君が蔣介石を殺すことは諸君が甘んじて日本帝國主義の走狗ウォウコウとなることなのだ！」

この道理のある言葉の前に青年將校の感情はだんだん靜まつて行つた。しかし中共の内部に於てさへ蔣介石を生還させるなどいふ聲が強かつたくらゐだから、周恩來がその主張の下に西安の全情勢を握めるまでには如何に困難であつたかが想像されよう。

ここに西安事件の平和的解決のために活動したもう一人の人物がある。それは蔣介石にも張學良にも親任されてゐた英國人顧問ドナルドだ。彼は十二月十四日西安に現はれ、翌十五日洛陽から南京に電話で蔣介石の無事を報告した。この電話は南京の空氣を緩和するうへに非常に役立つた。十二月二十日には南京政府は一應交渉の腹を決め宋子文と顧祝同を正式代表として西安に送ることになつた。蔣夫人宋美齡もそれにもちろん同行した。

西安に於けるその後の交渉經過も決して安易なものではない。幾度か談判は決裂しさうだつた。その決裂を辛うじて救つたものは個人的感情から離れた高い理智と中國人の困難に對する共通の責任感だつた。這般の事情はジョン・ガンサーの「アジアの内幕」の中に面白く書かれてゐる。

「交渉がすつかりデッドロックに乗り上げて了つた時ドナルドが蔣夫人の處に来ていつた。「たつた一つ解決の道がある。それは難しい事だが實は貴方と領袖に或る共產主義者に會つて貰ひた



「いのだ。」これは驚くべき要求で領袖も夫人もこの十年來共產主義者と話をしたことがなかつた。否、この間彼等は中國全土に涉つて共產主義者を追ひ廻してゐたのである。彼等とは相容れざる敵である。しかし夫人はもともと鋭い政治的感覚をもつてゐた。彼女はよくこの衝動に耐へた。彼女は容を取り直して周恩來に面會を許した。彼等は新らしい協定を取り結び、蔣介石はクリスマスの日に釋放された。この最後の一瞬程怖しい瞬間はなかつた。蔣の一切が楊虎城と周恩來の手に握られてゐた。蔣夫人は共產主義者の援助を受けたが依然として事件に對し心平かならぬものがあつたらしく、この最後の鬭争と妥協に就いて彼女の誓書には一寸しかふれてゐなかつた。しかも夫人は決して周恩來の事にふれなかつたのである。

國民政府が共產黨を嫌ひつつも尙これと合作せざるを得なかつた事情は宋美齡のこの最後の態度の中に表現されてゐる。彼等は、國共合作を心から希望してゐたのではない。彼等は中共を嫌ひ、それを警戒してゐたのである。だが、これと妥協しなければ彼等の最高領袖の地位があぶない、否、事を大にすれば中國の統一が脅かされるといふのでやむを得ず合作したものである。このやうな國共合作の性格は一言でいへば「反共」を内包する「容共」といへる。だから西安クーデター以後にも「英米派」と「反共派」との間に大きな決裂は起らなかつた。外交の面に於ては「英米派」、國內政治の面に於ては「反共派」、かういふ二頭立ての馬車が折たこ蔣介石を牽つてこ

めに準備されるやうになつた。

しかし外交政策の面に於ては誰の眼にも西安事件以後南京政府が重大な決意を持つやうになつたことが判つた。蔣介石が釋放されて四日とたたぬうちに南京政府が決定したことは叛軍討伐の停止令と討逆大本營の解散だつた。間もなく知日派の外交部長張群が罷免され、英米派の王寵惠がその後を襲つた。國民もやうやく蔣介石の決意の輪奐が判るやうな氣がした。

蔣介石は十二月二十五日クリスマスの日に釋放された。否、中國風に言ふならば張學良を改悟させて南京につれて來た、といふべきであらう。この日サンタクロースが中國に與へた贈物は全く歴史的なものだつた。しかし中國人がこの贈物の價値をほんとに知つたのはそれから九年の後だつた。

このクリスマス前の夜私は中國の友人達に誘はれて、洋服のよごれを氣にしながら初めて上海のダンスホールに行つた。踊ることが出来ない私はホールの片隅にお茶をすすりながら人々の踊りを見てゐるだけだ。ここの陽気な光とリズムの中で踊つてゐる人々も家に歸れば皆なそれぞれ悩みを持つてゐることだらうが、かういふ場所に居るエチケットとしてほんとに人生を樂しみきつてゐる顔をしてゐる。ホールは私達が一杯のお茶でねばつてゐてもあたりを氣を使ふ必要のない程、かういふ人々で雑沓してゐた。私達の隣のテーブルには身なりのいい中國の紳士達が

お互同士盛んに何か外國語で話し合つてゐる。蔣が生きて還るかどうか、彼等はそれを種にして金をかけ合つてゐるらしい。私の友人もそれと氣付いて私にいつた。

「あいつら外國語でしゃべれることが御自慢らしい。中國人同士外國語をしゃべるのは自分が植民地奴隷つてことを廣告してゐるやうなものさ」

私の友人は彼等が外國語で話し合つてゐることよりも、その内容の方が彼の愛國心にふれたらしかつた。しかしこのホールに踊り狂つてゐた人々の大部分は誰一人、この翌日蔣介石が悲壯な決意をもつて南京に歸つてくるなどは想像もしなかつただらう。否、彼等は政治向きのことはまるつきり考へたこともないといふ様子だつた。

## 七 中 國 の 社 會

どこの國民にも政治について全く無關心な人達がある。だが、中國で特にそれが目立つて見えるのはこの國の特徴ではあるまいか。例へば全ヨーロッパを捕へた十九世紀前半の民族主義の運動がそれだ。それはどこでも全民族の運動として展開された。だがこの國の民族主義運動は曾て全民族的運動として展開されたことがあつたらうか。中國民族運動の父といはれる孫文はかう嘆いてゐた。

中國人が最も尊重するのは家族及び宗族主義だ。今日の中國には唯家族主義及び宗族主義あるのみで國族主義はない。外人は中國人を散砂の如しと批評する。その原因はどこにあるか。一般人民は唯家族、宗族あるを知つて國家のあることを知らないからだ。中國では家族及び宗族の團結力が非常に強大で、自分の屬する宗族を保護するために家や生命を犠牲にするものさへ少くない。……これは宗族觀念が深過ぎるためで、そのためには命を的にし一争ふが、國家の問題となると一度もかやうな旺盛な犧牲的精神を發揮したことがない。誠に中國人の團結力は宗族の範圍に限局されて國家にまで擴張すること

が出来ないのだ。

孫文は彼の革命運動を通じて中國人にこのやうな感慨をもつたものであらうが、上海で抗日運動——それはやはり中國の民族運動の一環である——が盛んになり全國民がその潮流に引ずられるやうに見えた時も、丁度湖にさらはれまいとする鮑が岩盤にしがみつくやうに、あらゆる政治問題に對する頑強な無氣力と無關心にしがみつかうとする社會層があつたことは誰にも氣付かれてゐた。或る人々はこれを階級闘争激化の際によく現はれる知識階級の政治的逃避であると考へてゐる。勿論それもあらう。だが、中國人一般のあの政治問題に對する頑強な無關心にはもつと歴史的な、もつと民族的な理由があるのであるまいか。今この問題を若干掘り下げて見よう。

話は悠久の昔に溯る。西安變の起つた西安地方を發祥の地とする中華民族は黃河に沿うていはゆる「中原」の地に發展して行つた。中原とは今の華北平原である。この地方は黃土層といふ肥沃な土層に蔽はれてをり、氣候も農業に適してゐる。だから中華民族はここに定着して殷の頃から既に農業を主として牧畜を従とする經濟段階に入つたといはれてゐる。華北の雨量は一年の總量に於てヨーロッパのそれと略々同じだが、ヨーロッパでは各月の雨量が平均してゐるのに華北の雨量の半ばは夏季に降る。その水量を調節するために人工灌溉が必要である。黃河の治水は黃土層農民の死活問題であつた。又中原に續いて開かれた揚子江沿岸の水田農業にも人工灌溉は

缺くべからざるものだ。又南方に於ては珠江の流域が同じやうな条件をもつてゐる。従つて中國の「人口は黃河・揚子江・珠江及びそれ等の支流の沿岸に密集してゐた。蓋し自然的諸條件及び土地耕作の技術様式によつて彼等は灌溉の可能なところに於てのみ生活し得たからである。(ラデック)」

かうして中國農業社會と人工灌溉は最初から不可分の關係をもつてゐた。先づ人工灌溉は非常な努力を必要とするので、それを施設した土地から人は容易に離れなくなる。人工灌溉を造るためには多くの人が集まり共同労働をしなければならないので、自然に人間相互の關係が密接になる。人工灌溉は又土地の生産性を高め、従つて農業人口を増加させ、人口密度を高めて行く。特に滋味に富んだ米を常食とする中國人は僅かの耕作面積で比較的多くの人口が養へる。パックは中國では耕地一平方哩當り一五〇〇人の農業人口密度が保持されてゐるといつてゐる。このやうにして農業社會が發展して行つた。

その社會の内部では人々は相寄つて生活し、お互に同族關係が少くとも顔見知りかの間柄である。生活様式も同じであるから考へ方も同じやうになつてくる。同じやうな考へ方、同じやうな風俗習慣から人々の間には自分達が或る特定の社會の成員であるといふ共通の成員感をもつてくる。さうなると同じ農業社會、平たく言へば同じ村の人々は他の村の人々に對して差別觀念をも

つやうになり、他村の人々が自由に自分等の村に入つてくることを拒むやうにさへなる。さうして中國農村社會はだんだん割據的になつてきた。そこでは農民は各々自分の生まれた村から一歩も離れず樂しみも苦しみも唯同村の人々とのみ分ち合ひ、いはば自分の村を自分の「宇宙」として死んで行つた。丁度それは小さな水滴の中にあるバクテリアの「小宇宙」にも似た社會である。中國には北の果てから南の果てまでこのやうな村落このやうな「小宇宙」が續いてゐた。

しかしそこには一つ困つた問題があつた。人口灌溉は中國農業社會の割據性を形成する要素であるが、同時にその割據性を打破しようとする要素でもある。水は本來流動的であり、開放的であり且全水域にあまねく連絡してゐる。だから人工灌溉は或る村落だけが獨占することは出来ない。人工灌溉を起さうとすれば必ず全國的な水域にわたつて水の統制を行はなければならない。そのことは農村の割據性を自然に打破することになる。中國のやうな廣大な全水域にわたる灌溉事業を起すには一箇の村落又數箇の村落の結合ではあまりに小さく且無力である。従つて中國にはこの村落とは別箇に全國的な人工灌溉の統制主體が發達する要請があつた。發展の初めは各農村社會から人工灌溉を統制するために有力な人達が分出した。この人達はこの生産條件を長らく管理してゐるうちにやがて財産的に他の農民と異なつた優位の地位を發得して行つた。彼等はやがて農村の主人となり、その他のものは僕奴となる運命をもつてゐる。彼等が灌溉事業を全國的

に遂行するに及んで全國的人工灌溉の統制主體が發達した。それが、中國の中央集權的政府である。その時までにはその有力な人達は國家の支配階級となり、各農村社會を國家のなかに包攝した。かくして中國の國家組織が生まれたのである。だからカウツキーはかういつてゐる。

「河川に對する共同闘争は東洋に於ては特別の影響をもつた。そして最古代の文化國家發生の最も重要な基礎の一つはここにあつたのだ。これは又傳説にさへ反映してゐる。正にエジプトに於けると等しく中國に於ては國家の創造は傳説上河川調節によつて説明されてゐる」

確かに中國の國家創造の傳説の中には治水工事に関係するものが多い。禹の父鯀は堯帝の下に治水工事に當つたが失敗の責めによつて誅殺され、その子禹はその成功によつて帝位を受けてゐる。當時の皇帝が人民を治める徳よりも水を治める徳によつて帝位に登つたといふことは極めて示唆的である。當時の政府の主たる任務は政治ではなく全國的な治水工事にあつたのだ。政府がこの專業を有力に且能率的に遂行するためには專制政治が一番有効な形態である。全國的な治水工事を行ふためには封建的割據形態よりも寧ろ全國的統一的專制政治でなければならぬ。專制主義が一たび生誕すれば、たとへ治水工事がどんな社會的要請のうへに生まれたものであるにせよ、今度は自らの利益のために、その專業を獨占し、それを搾取手段として使用し、それによつて自らの經濟的社會的優位性を益々高めて行く。ここに中國の絶對專制主義が生まれた。中國の



絕對專制主義の生誕は農村社會から治水工事の全國的統制の任務を免除することになつた。それはやがて農村社會から全國的任務を盡く免除し、農村社會を益々その割據性に沈潜せしめることになつた。

かうして中國には一方には孤立的な割據的な農村社會が廣大な地域に散在してをり、他方には全國的灌溉組織を獨占してゐる絕對專制主義が存在する時代が続いた。この兩者は各自の存在がそれぞれその相手方の存在を強めることになり、又各自がお互に相手方の存在の基礎となつてゐる。農村社會に住む農民達はどんな形に於ても政府に参加することなどは考へたことがない。それは恰も「小宇宙」の生物達が「大宇宙」について考へられないやうなものである。絕對專制主義は又「治安の維持と租税の徴收のみを事とし、服従を要求する以外に民衆との協力を求めることがなかつた。」（パッジェス）それは恰も「大宇宙」が「小宇宙」を考へられないやうなものである。農村社會は定められた租税を納め、定められた勞力を以て政府に奉仕する以外、自分達のことについて廣汎な自治を委せられてゐた。それよりも寧ろ勝手にしろと放つて置かれたといふ方が事實に近い。

長谷川如是閑氏はこの國家と農村社會の關係についてかういつてゐる。

「この里の社會（老子のいはゆる小國寡民の村落共同體）は支那の歴史の興亡と没交渉に、堅固

無比の社會形態として數千年を通じて社會生活の單位を形作つてゐた。……支那の國家は人民の生活や産業に對して保護誘掖の途をとつたことなかつた。それから收奪してゐただけであつて村落自治體は全く自治的に生存する外はなかつたのである。」

又稻葉君山博士はかういつてゐる。

「支那人のこの長い歴史の推移によりて得た經驗は何ものであるかといふにそれは外でない、國家と社會との分離作用であると考へられる。國家は國家、社會は社會であつて、社會は國家に何等期待を持たない。これが支那人の一般的諒解であると思ふ。封建政治が失はれない上古に於ては國家と社會とは密接な關係の下に置かれてあつた。即ち社會といへば國家が全體で國家の政治を除いて別に社會問題といふものはなかつた。論語などを見ても明白であるが、家庭道德と政治とは一致すべきものとの諒解が凡てを通じてゐる。従つて生活でも文化でも國家から割り出されてゐたのであるが、それが漸次に分化作用を起し、國家は國家、社會は社會といふ風に平行して發達し、遂に永久に相違はざる二線を劃することとなつた。吾人はかつてこの平行的發達を名付けてそれは幾何學的平行線であるといつたことがある。這般の傾向の判然として來た時代は今よりやがて一千年位にさかのぼることが出来ると思ふ。即ち唐の末、宋の初め頃かと考へられるのである。」

稻葉博士が「社會」と言ふ場合、必ずしも「農村社會」長谷川氏のいはゆる「里の社會」を指してゐないことは一封建政治が失はれない上古に於ては國家と社會とは密接な關係にあつた……といふ表現から窺ふことが出来る。しかし同時に博士が中國の「國家と社會の分離」を認められたのは中國の農村社會の割據性とその政治への無關心の壓倒的事實に押されたからだといふことが出来る。

現在中國の農村社會は崩壊しつつあり、それにつれて民族革命が行はれてゐるのは事實だが、その崩壊が未だほんの一部分で、そのために民族革命が中途半端に終つて了つたことも亦事實だ。従つて國家と社會との分離状態はまだ廣汎に残つて居て、人民の間には強い政治的無關心が強靱に根を張つてゐる。アーサー・スミスは、一八六〇年の英佛軍侵入の時、山東省の中國人が進んで驛馬を供給し、香港では侵入軍の苦力に應募するものが多かつた事實と、又同じ事變で天津及び通州が進んで降伏し兩市が攪亂されない限り英佛軍に必要物は何でも提供すると申出た事實をあげてゐるが、これを他の國家の場合のやうに祖國意識の缺如として直ちに道德的非難を浴せることはどうかと思ふ。

今まで述べたことから判るやうに中國では中華民族は五千年も前からあつたが、一度も全國を通じて一箇の民族であるといふ自覺に到達したことはなかつたのだ。國民の一人一人がお互に

同胞感を持つためには彼等が先づ各自の屬する小さな社會から解放されて一個の人間としての自己に目覺めなければならぬ。それが近世の「個の發見」だ。それからばらばらにされた個人が再び血と文化を等しくする民族の線にそつて再組織される。それが近世の民族主義國家であり、その運動が民族運動なのである。中華民族は昔からあつたが、それは民族の自己意識に到達しない民族、ドイツ人のいはゆる Volk an sich ぢ、また自覺的民族 Volk für sich になつてゐなかつたのだ。孫文はこのやうな中國人のありかたを「散砂の如し」と見た。だから彼の民族革命の目的はこの散砂を集めてコンクリートにすることだつた。即ち中國人を Volk an sich から Volk für sich に高めることだつた。そして今私の周圍に渦巻いてゐる抗日運動は孫文のしをしたこの仕事を完成しようとする一聯の民族運動なのである。

私はその頃こんなことを漠然と考へてゐたのだが、私の友人達の前ではそれをおくびにも出さなかつた。若し友人達の前で中國がまだ全體として自覺した民族ではない、Volk für sich ではないなどといつたらこの「愛國者達」は私と絶交するかも知れない。だが私は心の中で中國の現在の指導者達は必ずこの事實を重要視してゐるに違ひないと確信してゐた。若し抗日が始まつて、中國側が少し旗色でも悪くなつたら中國社會のこの弱點は日本軍にうまく利用され、民族的に無自覺な衰切りものが續出するだらうといふ考へは恐らく蔣介石を最後まで自重させた要素で

はなかつたらうか。抗日運動が全國民を捉へてゐるやうに見えた時、蔣介石が尙國民に最後の竿頭までこらへよと冷聲に訓へた言葉は、私には中國社會の弱點をよく知つた人だけがいへる言葉だと思へた。

上海で初めてのクリスマス・イーヴをダンスホールで送つた私はその夜深夜の靜安寺路を急路の方へ向つて歩いてゐた。夜はふけてゐたがあちらこちらに酔ばらつた外國人がわけのわからぬ歌をどなりながら街を歩いてゐる。その後から黄包車がいつかは外人が歌ひ疲れて自分の車に乗るだらうと中國人の根氣よさでつけて行く。人通りは少いが何となく賑やかな晩だつた。私はふと一緒に歩いてゐる友人にこんな質問を試みた。「君達の抗日運動からほんとに戦争になつてしまつたらさつきホールで見たあの男達は一體どうするだらう」友人は私の質問の意味を直ぐ理解したらしい。「君は中國人が戦争になつたら團結しないかも知れないと考へてゐるんだらう」そして私に、中國人の性質をこんな風に表現するものがあると教へてくれた。一人の中國人は悲觀論者でよく煩悶する、二人の中國人が集まれば商賣の相談がすぐまとまる。三人よれば抗日論を始めて直ぐにいひ合ひをするが、四人集まると忽ちマーシヤンの相談が出来上るといふのだ。成る程中國人にはさういつた半面もある。だから戦争が始まれば随分漢奸も出るのだらう。「だが」とその友人は終りにつけ加へた。

「だがしかし、どんな人間でも自分の住居が壊されたり、妻子が殺されようとすればきつと自衛のために立ち上るんだ。だから抗日戦争はどうでもかうでも中国人を團結させる民族戦争になるのだ」

上海 私はこの友人の自信とその言葉のもつてゐる眞理にすつかり押されてしまった。抗日戦争はどうしても起るのだといふことがはつきりと判つた。かうして一九三六年はいきづまる緊張のうちに靜かに暮れて行つた。

## 八 舊い生活

一九三七年の私の正月は餅もなくお飾りもない。ただ漠然とした旅愁と感傷だけがあつた。周圍の中國人が靜まりかへつてゐるだけに餘計淋しかつた。上海の本當のお正月気分はそれから一ヶ月近くも後の舊正である。この日、中國の商店街は皆な大戸を閉ざし門口には春聯を掛ける。

全市の商賈は「罷市」でもあつたやうにびたりと止まる。家の中では士君子も加はつて「さいころばくち」をやる。これは三つのさいころを投げてさいの目が四五六と出るのが一番勝ちになるところからかう呼ばれてゐる。日本の「すごろく」はこの「四五六」から出てゐる。お恥しい次第だが、私はそれまで「すごろく」が中國から來たものとは夢にも考へてゐなかつた。

人々はこの日城内廟にお参りし紙錢を焼いて一年の「發財」を祈る。紙錢は銀紙で出來た金で之を焼けば煙となつて人間界から神界に届く定めになつてゐる。いはば神界への電報爲替みたいなものだ。城内廟は南市の眞中にある。南市の城壁は一九一四年に取壊されていまは幅の廣

い大通りが出来、その上を電車が走つてゐる。この電車通りを一またぎすれば直ぐ租界だ。だが今でもこの二つの町は截然と區別されてゐる。比喩的にいふならば、租界には二十世紀が住んでゐるが、南市には十八世紀が居据はつてゐるといはうか。人々が城壁の跡形もなくなつた南市を今も城内ナシヤンと呼ぶのは確かに回顧趣味以上のものがある。先づこの町に足を踏み入れると商店の取扱ふ品物が租界とはがらりと變つて来る。多くは中國の舊い手工業の土產品で、竹細工・銀細工・吊洋燈・麻雀牌・象牙細工・紫檀細工・印材・石細工、といった類が多い。城内廟に通ずる狭い道路に入るとそれが一層目立つてくる。この邊まで来ると道路の幅は狭く、中國のどこの田舎町にも見る不手際な石壘み式だ。小さな石が尖つた角を上向きに雑然と並べられてある。随分靴のへりさうな道だ。この道は南市見物の日本人がよく通る。大正十四年四月の某日には芥川龍之介氏が上海の俳人島田四十起氏と共にここを通つた記録がある。だからこれから先きは芥川氏に道案内を頼みたい。

……その狭い路の兩側には麻雀の道具を賣る店だの紫檀の道具を賣る店だのがぎつしり軒を並べてゐる。その又せせこましい軒先には無暗に招牌がぶら下つてゐるから空の色を見るのも困難である。そこへ人通りが非常に多い。うっかり店先に並べ立てた安物の印材でも覗いてゐると忽ち誰かによつかつてしまふ。



しかもその目まぐるしい通行人は大抵支那の平民である。私は四十起氏の跡につきながら、滅多に側眼もふらない程恐る恐る敷石を踏んで行つた。

その路地を向ふへつき當ると噂に聞き及んだ湖心亭が見えた。湖心亭といへば立派らしいが實は今にも壊れ兼ねない、荒廢を極めた茶館である。その上亭外の池を見てもまつ蒼な水どろが浮かんでゐるから水の色などは殆ど見えな。池のまはりには石を疊んだ、これも怪しげな欄干がある。我々が丁度其處へ來た時淺葱木綿の服を着た辯子の長い支那人が一人——その一人の支那人は悠悠と池へ小便をしてゐた。陳樹藩が叛旗を翻さうが、白話詩の流行が下火にならうが、日英續盟が持ち上らうが、そんな事は全然この男には問題にならないのに相違ない。少くともこの男の態度や顔にはさうとしか思はれない長閑さがあつた。曇天にそば立つた支那風の亭と病的な綠色を擴げた池とその池へ斜めに注がれた、隆隆たる一條の小便と——これは憂鬱愛すべき風景畫たるばかりぢやない。同時に又わが老大國の辛辣恐るべき象徴である。私はこの支那人の姿にしみじみと少時眺め入つた。が生憎四十起氏には、これも感慨に價する程、珍しい景色ぢやなかつたと見える。

「御覽なさい。この敷石に流れてゐるのは、こいつみんな小便ですぜ」

四十起氏は苦笑を洩した儘さつと池の縁を曲つて行つた。さういへば成程空氣の中にも

重苦しい、尿臭が漂つてゐる。この尿臭を感じるが早いか、魔術は忽ち破れてしまつた。湖心亭は畢に湖心亭であり小便は畢に小便である。私は靴を爪立てながら匆匆四十起氏の跡を追つた。

ここに少し私から臭い詳解を加へて置きたい。南市には租界と違つて全く水掃便所のシステムがない。各家では馬桶マキョウといふ蓋のある朱塗りの桶をよく使ふ。夜が明けると糞車ががらがらやつて来る。それを待ちかねたやうに女共が馬桶の内容をざあつとその中にあける、それからさらでがらがら馬桶マキョウを洗ふ音があちこちに聞え出す。それから又ざあつと音がする。今度のざあつは糞車の中へのざあつとは違つて路地の溝へそのまま洗つた水を流す音である。その溝が我が湖心亭の池にも通するのであるから異臭の漂ふのも無理はあるまい。話に聞く中世紀のヨーロッパの都市もざつとこんな状態だつたらしい。家々の汚物は街を流れる。若しくは流れない下水の中に堂々ともちこまれた。だから旅人が都市に近くなるとその臭氣で判つたさうである。この點から見ると南市は十八世紀よりもつと中世紀に近さうだ。

それから少し先ぎに行くと言目の老乞食が坐つてゐた。——一體乞食と云ふものはロマンチックなものである。ロマンティシズムとは何ぞやとは、議論の干ない問題だが、少くともその一特色は中世紀とか幽霊とかアフリカとか夢とか女の理窟とか何時も不可知な何物か

に憶れる所が身上らしい。して見れば乞食が會社員より、ロマンティックなのは當然である。處が支那の乞食となると一通りや二通りの不可知ぢやない。雨の降る往來に寝ころんで居たり、新聞紙の反古しか着てゐなかつたり、石榴のやうに肉の腐つた膝頭をべるべる舐めてゐたり——要するに少々恐縮する程ロマンティックに出來上つてゐる。支那の小説を読んで見ると如何なる道樂か神仙が乞食に化けてゐる話が多い。あれは支那の乞食から自然に發達したロマンティシズムである。——この盲目の老乞食も赤脚仙人か鐵拐仙人が化けてでもゐさうな恰好だつた。殊に前の敷石を見ると悲惨な彼の一生が綺麗に白墨で書き立てゝある。字も私に比べるとどうやら多少うまいらしい。私はこんな乞食の代書は誰がするのだらうと考へた。

又少し註釋を加へさせて貰ふ。乞食の代書するのは大抵「墨色判斷」とか「文字判斷」をやつてゐる算命先生だ。たとへばあの池のふちに「文字判斷」の斷をだしてゐる算命先生は乞食の代書もやれば野鷄がなじみ客に出す無心状などもかく。金次第によつては、強盜一味の脅迫状も書く、字もなかなか達者だが、それよりも彼の縦横無盡な出鱈目を聞いてゐると下手な講釋よりも面白い。彼は勿體らしく紙の上に「洪秀全」と筆をふるひながら講釋してゆく、『洪秀全』の全といふ字を見たまへ、これを上下二つに分ければ人王といふ字ぢやないか。つまり洪秀全とは

「秀でたる人王を大水で押し出す」といふこと。名前からして太平天國の亂を起すやうになつてゐる。この洪秀全が失敗したのはなぜだらうか。曾國藩が出たからだ。國藩といふは國の藩屏、洪が人王を押しながさうとしたが曾が國の藩屏となつたから失敗したのだ。文字の威徳とはかうしたもの「ちや」とかなんとか結んでちつとお客を見つめる。

こんなうそつばちにうっかり感心してゐるといつの間にか懷中物がなくなつて了ふ。中國ではすりを弄と書く。すりは日本では手が少し長いくらゐるだが中國では手が三本ある怪物だ。中國人はどうもこの「文字の威徳」を亂用しすぎる。乞食といひ算命先生といひ、怪物的文字といひ中國はやはり中世紀に縁がある。こんな話をしてゐてはきりが無い。再び芥川氏の案内記に戻らう。

骨董屋の間を通り抜けたら大きな廟のあるところへ出た。これは繪端書でも御馴染の名高い城内の城隍廟である。廟の中には參詣人が入り交り、立ち交り、叩頭に来る。勿論線香を獻じたり、紙錢を焚いたりするものも想像以上に大勢ある。その煙に焦ぶるせむか、專に上ると煤けてゐないものは天井から幾つも吊下げた金銀二色の紙錢だの螺旋狀の線香だのばかりかも知れない。これだけでも既に私はさつきの乞食と同じやうに昔讀んだ支那の小説を想起させるのに十分である。まして左右に居流れた判官らしい儼になると、——或ひは正面に

端坐した城隍らしい像になると殆ど駭齊志異だとか新齊諧だとかといふ書物の挿畫を見るのと變りはない。——私は又四十起氏と一緒に廟の前に店を出したいろいろな露店を見物した。靴足袋、玩具、甘蔗の莖、貝卸、手巾、南京豆——その外まだ薄穢い食物店が澤山ある。勿論此處の人は日本の縁日と變りない。向ふには派手な縮の背廣に紫水晶のネクタイピンをした支那のハイカラが歩いてゐる。と思ふと又こちらには手首に銀の環を嵌めた纏足の靴が二三寸しかない舊式なお上さんも歩いてゐる。金瓶梅の陳敬濟、品花寶鑑の露十一、——これだけ人の多い中にはさういふ豪傑もゐさうである。しかし杜甫だとか、岳飛だとか王陽明だとか、諸葛亮だとか、藥にしたくもゐさうぢやない。

言ひ換へれば現代の支那なるものは詩文にあるやうな支那ぢやない。猥褻な残酷な食意地の張つた小説にあるやうな支那である。瀬戸物の亭だの睡蓮だの刺繍の鳥だのを有難がつた安物のモック・オリエンタリズムは西洋でも追ひ追ひ流行らなくなつた。文章軌範や唐詩選の外に支那あるを知らない漢學趣味は日本でもいい加減に消滅するが好い——。

この旅行記は大正十年に書かれたものだが私が一九三七年以來十餘年見續けて來た城隍廟や南

市もここに書かれてある通り何一つ變つてゐない。恐らくこれから先何十年か経つてもやはり大した變りはないであらう。今この荷のどこの酒店にもある四角な眞黒によこれた卓子オカズは九紋龍史

進が魯達と一緒に飲んだ潘家酒店の卓子おせんと同じであらう。やはりその時分にも今ここにつるしてある朱泥を塗りたくつたやうな髹しゅう判はんをたべながらちびちびやつたものだらう。今この街のどこの煙紙店たばこにもある香は劉玄德、關雲長、張翼徳の三人が桃園血盟のときにたいた香と大して違つてもゐまい。ポンペイの廢墟からはローマの生活がそのまま掘り出されるがここでは一、二千年前の生活様式かそのまま動いてゐるのだ。

中國人の中にはかういふ生活様式を無上のものとしてそのまま是認してゐる人々は決して少くない。水掃便所を使はうが馬桶まづつを使はうが、それは唯生活の便利の問題に過ぎないぢやないか、一國の文化はそんなものできまるものではなく、そこに生活してゐる人間がどんな立派な考へを持つてゐるかによつてきまるのだとうそふいてゐる辜鴻銘クワンミンのやうな人がそれだ。彼の思想はどんなに精巧なラヂオが出来ても放送する思想ががらくたでは意味がない。どんな立派な新聞印刷機が發明されても出来た新聞が悪徳な記事ばかりでは無い方がましだと言つたガンチーと一脈相通するものがある。彼は或るヨーロッパ婦人から中國人の一夫多妻主義をなじられた時、そばにおつた茶碗と急須を指し、「見たまへ茶碗は澤山あるが急須は何時も一つぢやないか」といつて擊退した。「中國の精神」の中でも彼は中國の妾制度を辯護しながら一夫一婦制をとつてゐるクリスト教徒の間にも賢笑婦の居ない國はあるまい。そこでは一晚中自分が妻とした女をその翌朝僅

かの金で冷たい街頭に放り出し彼女が生きようと死なうとかまはない残酷な制度が公然と行はれてゐるではないか。それと中國の一夫多妻とどちらが人道的であるか、ときめつけてゐる。一九一二年に出版された「中國に於けるオックスフォード運動の話 The story of a Chinese-Oxford movement」の中でも彼は極力舊い中國を辯護し、新しい中國をかうくさしてゐる。上海の外國人は新しい中國が袁世凱の下にその辮髮を切り落し遂にヨーロッパ文化を採用したといつて喜んでゐる。これ等の誤つた人々は新しい中國が採用した文化が決してヨーロッパ文明ではなく唯上海のヨーロッパ文明であることを少しも氣づいてゐない——それはゲーテの所謂『アングロサクソンのたいはく文化 Anglo-Saxon-Contagion』であり、眞のヨーロッパ文明の疾病のみが現在の中國に發展しつつあるのだ。」

いはゆる新しい中國について彼の最後の言葉は必ずしも的がはづれてはいない。中國で生活の末梢だけを外國にならぶ現象は近代化の表現ではなく寧ろ植民地化の表現だつたやうである。

生活  
だが新しい中國が採用した西洋文化がほんものでなかつたといつてもそれは必ずしも舊い中國の生活様式が絶對によいといふ論據にはなるまい。私の觀察した限り中國の若い世代は誰一人中國の今までのやうなあり方に満足してゐないやうだ。私の居た當時にも中國は一體世界文化に何を寄與したかといふことが若い愛國者の間に痛烈に論ぜられてゐた。誰も中國の古典文化を盾に

とるものはなかつた。それならば一體中國文化として何か残るか、何も残らないぢやないか。かういふ自己批判はうぬぼれ屋の多い中國人にとつて相當痛いものがある。だが新しい中國人はそれを勇敢に是認してゐるやうである。郭沫若氏の「蘇聯紀行」を見ても判る。彼はイランで中國文化が何もないことを深く恥ぢ入つてゐる。

「イラン人のボーイが時々來て床を掃く。ほんの十五、六で非常に可愛い。しかしもう煙草を吸ふことを知つてゐる。——古代四大文明の一つの發祥地たるイランが今日なぜこんな有様になつて了つたのだらうか。——いつも心にわだかまつてゐた質問がつい口から出て了つた。ここはメソポタミヤ平原、古代ペロロン文明燦爛たる地方ではないか、なぜこんな沙漠になつて了つたのだらうと。——一體さういふ貴方の國、中國にはどんな發明があつたのですか。——意外にもこの小羊のやうに柔順なボーイが私の言葉にかう反駁した。私は飲んだ冷水が熱湯に變つて了つたかのやうに感じた。」

郭沫若氏はこの少年の反問を素直に受け入れてゐる。だがよほど心にこたへたと見えて詩の中にさへかう歌つてゐる。

我悲悼安息的文化已渺無遺蹤、

招來了一個回音、中國有甚不同、



知道羞恥の人、試問有何地自容？

拙いながらこれを譯して見よう。だが郭さんの詩の味は是非原文で味はつて戴きたい。

私がベルシャ文化は何も殘つてゐないと悲しんだら

早速一つの反問を受けた、中國が一體どう違ふと言ふのか

恥を知る人よ、敬へてくれ、私が頭をかくす場所を。

これはあくまで郭さんの詩である。實際に見る中國ではない。實在の中國はあの不潔と臭氣の中に泰然と腰を下して煙草をふかしてゐる中國なのだ。少くとも表面に現はれた中國はこのやうな現狀をあまり苦にならず、それを急速に革新しようとする意欲は見出されない。いや寧ろこのやうな現狀の中に中國人の守舊的精神を見出して喜んでゐるものの方が多いではないか——といふ人もあらう。さういふ見方を一應は認するとしても、又實際現狀の革新が如何に遅々として進まないとしても、現在中國で行はれてゐる政治闘争がみな中國の現狀を如何に革新すべきかといふ問題、換言すれば中國近代化の問題をめぐつて展開してゐることは誰しも否認出来ないであらう。

中國革命も抗日運動もつまるところ中國近代化の運動なのである。

抗日運動は中國近代化の鍵である、と同時に、この鍵を誰が握るか、誰がその任務を擔當するかといふ政治の主體が問題になつてくる。西安事變が一應落着すると、抗戰の指導主體は國民黨か、共產黨か、それとも國共合作の聯合政府か、若い人々はこの問題の成り行きを見てそれぞれ自分の行動を決定しようと考へてゐた。或る人は國共聯合戦線が出来れば國民黨員として戦つても中共に入つて戦つても結局同じではないかと主張した。或る人は抗日戦争ともなれば中共は解散して國民黨に合體し、全國民は國民黨の強力な統一した指揮の下に動くべきである。だから國民黨に参加しなければならぬと主張した。だが或る人は抗日戦争は中國の社會革命の一環であるから中國共產黨に参加しなければならぬと主張した。このやうな論争は國共合作の談判の進行とともに私の周圍でもだんだんはげしくなつて來た。

國共關係は南京側の西安進懲體制が事實上なかなか解除されなかつたので一時險惡になつた。

二月二日には西安で終始國共合作による抗日を主張してゐた王以哲が激昂する民衆に殺された。だが情勢は國民の要望を反映して次第によくなり、その月に行はれた國民黨の三中全會では國共合作を暗示する二つの重要決議が通過した。それは失地の回復とこの年の十一月十二日國民大會を招集するといふ決定である。前者は國內政策の解消、後者は政府民主化の第一歩である。この頃から中共地區に對する經濟封鎖も解除され、内地の交通が回復した。人々は自分の好むところ

に従つてどこにでも行かれることになつた。

二月に入ると間もなく私のところに張さんが突然暇乞ひに來た。これから北に行くのだといふ。私は北がどこだとも聞かながつたが張さんの日頃の言動からどこに落ち着くかは見當がついた。張さんは日本語のよく出来る廣東人で私が上海に來て以來すつと私の世話をしてくれた。この人が急に居なくなると思ふと自分が廣い世界に一人放り出されたやうに感じた。張さんは手に持つて來た羊の裏皮つきの長衫を三十元で買つてくれといつた。私にはこの羊の裏皮つきの長衫が北方では彼になくはならぬものだと思つてゐたから、私には小さくて着られないし、又そんなことをせずはいいから金だけ持つて行つてくれといつた。だが張さんはどうしても金は受取らなかつた。しかたなく私はその小さな長衫を貰つた。私達は改まつて何もいはなかつたが、お互にもう二度と會へない事を知つてゐた。張さんは出發までにまだ二、三日餘裕があるといつてゐたが私はその翌日張さんが二人の友人と共に天津行きの船に乗つたことを知らされた。

## 九 舊い社會

上海の若い愛國者達は國共合作が徐々<sup>じゆ</sup>に進行し、抗日戰爭が目前に迫つてゐるのを感じる、もう居ても立つても居られない焦躁感にとらはれたらしい。何か工作しごとがしたい、この大時代に廻り合せて上海にのんびんだらりとしてはすまない。こんな考へが青年を驅つて郷村へ郷村へと走らせた。もつとも救國會の七領袖が捕はれて以來上海の救國運動はよい指導者を失つてなるとなくふるはなくなつたことも事實だ。だが一體田舎にはどんな工作が彼等を待ちうけてゐたのだらうか。青年達の考へはかうである。上海とか北京とか大都會の市民は自分の經驗を通じてともかく抗日の意味をよく知つてゐる。だが田舎はその點まだ甚だしく立運れてゐる。民衆は抗日運動の名は知つてゐるが、實を知らない、たとへ知つてゐても民衆は國家の大事といふやうな問題にはなるべく自分は關係したくないと思つてゐる。

又田舎の官僚も、それは中央の仕事で自分等に關係がないと思つてゐる。かういふ人々を啓蒙

し動員する工作こそ知識階級といはれるものの任務でなければならぬ。これが彼等の到達した結論だつた。

恐らくかういふ動機に動かされたのであらう。私の周囲から張君が居なくなつたと思ふ間もなく、今度は鐘君が居なくなつた。鐘君は例の丘九チウキウである。彼は張君とは傾向を異にしてゐるので、北の方には行かず上海にあまり遠くない或る縣の小學校に奉職した。補習學校よりは収入もやや多いが、彼の目的はもちろんそんなことにはなかつた。赴任の數日前私のところに来て「田舎ではどんな刊行物でも貴重ですから」といつて積んであつた古雜誌を持つて歸つた。彼がこれから田舎でやらうといふ抗日教育は上からの指導者もなく、當分は仲間もなく獨りでこつこつやつて行かなければならないのだといふ。恐らく彼がどんなことをやつたか、誰の目にもふれない地味な仕事だつたに違ひない。しかしこのやうな人々のがげの努力がなかつたら政治に恐しく無關心な田舎の人々が抗戦期間を通じて一つの民族としてあれ程結合することは難かつたのではなからうか。しかも、この人々の運動も考へられるやうに決して容易なものではなかつた。中國の田舎の人は政治を本能的に嫌つてゐるから、土地の人々からは白眼視される。その上土地の有力者は彼等が入つてきて民衆を彼等の側にとらうと考へて警戒する。田舎の保守的な勢力は悉く彼等に背を向けたに違ひない。

彼等の仕事がどんなに困難だつたかを知るためには、田舎にはどういふ保守的勢力が根を張つてゐるか、田舎の民衆がどんな封建的な支配におさへられてゐるかを知る必要がある。

先づ一つの縣城を例にとつて見よう。縣といふのは中國の最下級の行政區域で大體日本の郡を二つ三つ合はせたくらゐの大きさである。縣廳の所在地を縣城と呼んでゐる。全中國には一千九百五十八の縣があるといふ。上海の近くにある松江や嘉善のやうに、今でも周圍に略々完全な城郭の残つてゐるものが多い。縣城の支配者は縣長である。縣長は官から任命され、異動が多いから租税の取立て、寄附の募集——これが重要な仕事になつてゐる——などはみな土地の有力者に相談しなければうまくやれない。土地の有力者は大きな商工業者とか大地主とかである。商工業者の中には地券を買つて地主となつてゐるものもあるし、又地主の中には「不在地主」として町に住み、商工業を兼業してゐるものもある。附近の農村の貧乏を利用して高利貸がよく行はれてゐるので、地主の中にも商工業者の間にも高利貸を兼ねるものもある。だから、彼等は單純な地主ではなく、二重三重の性格をもつてゐるものが多い。

中國社會に於ける地方有力者の潜勢力は確かに大きなものである。彼等は官僚と結託して悪いこともやるから、中共から「土豪劣紳」と呼ばれてゐるものもある。又土地の慈善事業など率先してやるから、社會の信望を集めて「長老」と尊ばれてゐるものもある。縣長でも或る縣城に就

任すると自分の方から挨拶に行かなければならないやうな有力者もある。官僚は仕事をスムーズに進めるためにはいつもこの土地の有力者と緊密な連絡をとらなければならぬ。この關係は決して一朝一夕に出来上つたものではない。根岸浩博士などは、中國では水田耕作が高度の技術を要するから、自然その技術を習得した長老を尊重するやうになり、そこから長老政治の傳統が生まれたのだと説明してゐる。

清朝時代には、特殊な制度によつてこの傳統が守られてきた。清朝の地方官制では、縣長にあたるものを「知縣」といふ。知縣は地方官としての最下級官だが、他の上級地方官と異なり、中央政府のやつてゐる吏・戸・禮・兵・刑・工、六部の仕事を全部總轄してゐた。要するにその縣内に於ける「小皇帝」である。北京の皇帝が獨りでは政務がとれず百官がそれを代行するやうに縣の「小皇帝」も自分ひとりでは縣政がとれない。吏があつてそれを代行する。知縣は一つの縣城を總轄してゐるだけに勢力が集まりやすい。清朝はそれに對する對策として自分の生まれた地方の知縣になることを禁止し、又其の任期を一つの縣に長くても二、三年に制限した。これに反し「吏」の方は代々縣の衙門に奉職し縣政の實際事務に熟達してゐる、だから縣の實際の政務は寧ろ知縣ではなく「吏」によつて行はれる場合が多かつた。「吏」は一生涯「吏」で「官」にはなれない。しかし俸給が馬鹿馬鹿しく安く、その上自分の地位を維持するために上役に付けと

どけをしなければならぬので、勢ひ人民の懐から色々な名目で搾取した。知縣の方は土地の事情にも暗く、下でどんなことが行はれてゐるかよくわからない。そこでどうしても官僚と人民との間には激しい對立が起りやすい。この對立を緩和するために人民と官との間を調停するものとして土地の長老が活動した。そこから知縣がその土地の主だつた長老を集めてその意見を聞き、その忠言に基づいて政治をとるといふ不文律が生まれたのである。

この關係は國民革命後にも續き、今度は長老達は人民の代表として官僚と接觸するやうになつた。今でも縣長や警察署長が新任すると先づ縣の商會長が歡迎の宴を催し、任地を去るときは商會長が縣民を代表して頌徳表を贈つたりする習慣が全國的になつてゐる。任期中にも縣の有力者と官僚とは色々な機會を利用して宴會を催し「官民一體」の有機的な關係を保つて行く。このグループがあらゆる縣城を支配し、よいにつけ悪いにつけその地方の民衆をありきたりの正義の原則によつて指導してゐるのだ。

縣城に蟠居するこの支配層は全體としてその城壁の外に擴がる農村からの収入に依存してゐる。農村からの租税、農村からの地代、農村への商品賣買、農村への高利貸、これらが主なものだ。この収入がどういふ風に入ってくるかを知らなければ縣城の紳士達の宴會の費用の出どころもわからないし、彼等相互の關係が歴史的に何故かくも緊密であるかも判らない。この關係をた



どつて行くと必然的に中國の農村問題にふれざるを得ない。

私は今縣城の中に地主が住んでゐるといひ、又商人や高利貸が同時に地主であるといつた。彼等は勿論ただ小作料をとるだけの不在地主である。中國では土地は「地上」と「地下」の二つの権利の對象となつてゐる。唯この権利の關係から觀念的に分類すると、農民のうち「地上」を耕作する権利をもつてゐて、「地下」の所有権をもつてゐないものが小作人、「地上」と「地下」兩方の権利をもつて耕作してゐるのが自作農、「地下」だけを持つてゐて、「地上」を耕やす小作人から小作料をとり自分は農業をしないものが地主である。「地下」の所有権は地券といふ證書になつてゐて今では大體自由に賣買出来る。だから小作人は誰が地主だか判らぬ場合もあり、唯地券の所有者に小作料を拂ふことになる。それ故、都會に居て地券を買集めてもやはり地主になることが出来るのだ。

社會 舊い

中國の農村に入ると實際に土地を持つてゐる農家が非常に少數なのは驚くばかりである。土地を持たない小作農は壓倒的に多い。太湖の南岸の一村落で五年間にわたつて、農村の實地研究をやつてゐた費孝通博士は、この村の人口九十パーセントは十畝以下の土地乃至は土地が全くないものばかりだといつてゐる。もつともここで畝といふのは日本の約六畝六歩（即ち畝を六・六倍すれば日本の畝に直る）であるが、それにしても少ないものである。だから村では大部分が小作農

である。今、その村の役所から出た村全體の割合をここにあげて見よう。

土地の面積

村落全戸口に對する割合

五〇畝——七〇畝以上	〇・六%
三〇畝——四九畝	〇・七%
一五畝——二九畝	〇・九%
一〇畝——一四畝	四・〇%
五畝——九畝	一八・〇%
〇畝——四畝	七五・八%

この表を見れば判るやうに全く土地のない又は土地はあつても四畝（我が國の二段六畝）に達しない農家が全村落の七十六パーセントを占めてゐるのである。だから全村落の農家の大部分は小作農である。小作農は土地收穫の四、五十パーセントを小作料として地主に納める。四川省のやうな封建色濃厚な省になると小作料は土地收穫の六、七十パーセントに達するところがあると  
 54。

大地主は地主組合をつくつて地代を集める役所をもつてゐる。小地主もそれに参加させて貰ふ。小作人は地主が誰であつてもかまはない、自分がどこの役所（小作料徴收所）に屬するかを知つてゐるだけである。その役所には小作人名簿とその借用地の記録が備へてあり、十月の終りにそ

の年の小作料の額を小作人に通知する。この役所に働いてゐる小作料徴收人は縣から警察力を與へられてゐるからこれは半官的な制度である。

地主組合では小作料を決定する前に集會をもつ。そこでその年の出來工合、洪水や旱魃のため小作料を免除する率、小作料が金納の場合、米で拂ふ換算率などを討議してからその年の小作料を決定する。小作料は米で計算される。だが小作料は金で納めなければならぬ。しかし換算率は市價ではなく地主組合で勝手にきめるのである。小作人は地代を納めるために米を賣らなければならぬが、その時期はたいい米の收穫が終つて米が一番安いときに定つてゐる。だから小作料を米で計算して金で納めるといふ制度は、地主に二重の利益を、小作人に二重の苦痛を保證するものだ。地代はその土地のよしあしによつて九つの種類に分れてゐるが、この太湖の南岸地方では平均一畝につき約五斗である。これはこの地方の一畝の土地收穫の約四十パーセントにあたる。だが金納の關係から實際にはずつと多額になつてゐる。小作料徴收人は又村の人の文盲を利用して實際よりも多くとるのが常である。小作人が若し小作料を支拂はなければ小作料徴收人は彼をとらへて縣の牢屋に入れる權力を持つてゐる。しかし小作人が實際支拂ひが出來なければその年の終りに牢から出される。地主の方でも小作人を働かせなければならぬからである。

これでもまだ随分よくなつた方で、以前にはずつとひどいことが行はれたらしい。劉大鈞博士

は、民國以前には小作人が小作料を滞納したときは、官署に突き出して處罰させたり、地主が自ら笞刑にしたが、今日ではこんなことは稀にしか見られない。笞刑は地主が請求しても地方官が許さなくなつたといつてゐる。

地主が小作人を拘禁する牢屋は「押佃所」といつて、地主の住宅の中に設ける場合もあるが、多くは官設のもので縣城内にある。喬啓明氏は民國十五年に書いた小作制度改良案に崑山縣の「押佃所」についてかう書いてゐる。

「押佃所は期間を過ぎて小作料を納付しない小作農のために設けたもので、崑山の城市、郷鎮に多くこれを見る。自分は縣公署の許可を得て署内の押佃所を參觀したが、その時所内に拘禁されてゐるものは合計男十人女五人で、滞納した小作料は多くとも三十元外にすぎない。女が拘禁されてゐるのは夫が逃走して逮捕されないからである。」

押佃所の拘禁費用即ち押費は小作人の自辨である。小作人は自分の金で捕まつて自分の金で拘禁されるのだ。そのうへ看守はその食物を拘禁した小作人に市價の三倍の値段で賣りつけるといふ。小作人に金がなければ肉體的の苦痛を受ける。廣東省の海豐では、地主が小作料を拂はぬ小作人をとらへて「猴子吊」といふ苦刑を課すといはれてゐる。これはどんな刑罰かよくわからないが、文字だけの意味からいへば、おそらく猿をしぼるやうに手足をくくつて天井に吊すことで

あらう。

小作農は小作料が拂へない場合こんな苦痛が待つてゐるから何とでもして金を工面しようとする。しかしこんな困つた農民に銀行が金を貸すはずはない。そこで農民が金を借りようとすれば唯高利貸にすがる以外にない。

費孝通博士は高利貸がなかつたら農村はもつと悪い状態になるだらうといつてゐる。だが高利貸があるといふことは農村の疲弊に一層加速度を加へるだけで、決して農民を救ふものではない。一九三三年の統計によると、全国に於ける負債農家の数は全農家の六二パーセントに達するさうだ。その貸借の利率一割から三割までのもの四五・六パーセント、三割から五割までのもの四一・五パーセント、五割以上のもの一二・九パーセントである。單純な高利貸の外に入質がある。どこの縣城に行つても街の中で白壁に大きく「營」と書いた質屋が目立つ。ここでは持つて行つた品物の實價よりも遙かに低い金額を借りるのに平均二割から三、四割、ひどいのは十割の利息を拂はなければならぬ。

中央農業實驗所の調査によると、農民に金を貸してゐる先は次のやうな種類と割合になる。

銀行	二・四	合作社	二・六
錢莊	八・八	錢莊	五・五

商店	一三・一	地主	二四・二
富農	一八・四	商人	二五・〇

何幹之は「支那の經濟機構」の中で、この表についてかういつてゐる。

「銀行と合作社とは農村に於ける新式金融機關であり、それには對して質屋・錢莊・商店・地主・富農・商人はいづれも舊式の金融制度である。これによつてもあらゆる封建的關係が農村の金融機構の中で依然として重要な地位を占めてゐることを知り得るであらう。要するに一人の地主が一方に於ては小作料を收取し、同時に他方においては高利的貸付によつて自己の小作人を債務者に變じ、それによつて又土地の兼併を行つてゐるのである。何故ならば借金供穀によつて首の廻らなくなつた農民はその土地を賣るより外に方法はなく、その土地を得た新しい地主はまた高利の貸付によつて農民の收取を計るのである」。このやうに、農村の疲弊は高利貸を必然的ならしめ又高利貸はより深刻な農村の疲弊を必然的ならしめるといふ「惡循環」が繰り返されて農民はねぢでしめられるやうに益々窮地に陥つて行く。

農民はいよいよ困つて來ると金を借りるのに手段を選ばない。日本では「女房を質に置いて」といふ言葉はあるが、その實はない。ところが金に困つた農民が實際女房を質に置くことがある。これを中國語では「租妻」とか「曲妻」とかいつてゐる。以前にはかなりの廣汎に行はれた

が、さすがに今では少いらしい。田中忠夫氏の「支那經濟の崩壊過程と方法論」には一九三四年に行はれた實例として西豐地方で賃入價格三十五元、期間三年、無利息の契約で女房を入質した事實をあげてゐる。三年後に借金が拂へなければ女房は永久に貸主の手に歸し、また貸主は第三者に質入れしても夫は異議をさしはさむことは出来ない。もつともこの期間夫は一ヶ月に三晩その妻と同きんしてもよいことになつてゐるといふ。

女房を質に置くことの出来る農夫はまだよい方で、浙江省の或る地方では小作料が滞納して相當の額に達すると、小作農は自分の妻子を地主に提供しなければならない習慣がある。廣東省でも小作料のをさめられない小作人は屢々地主からその子女を拉致されると報ぜられてゐる。いよいよ取られるものもなくなると自分の身を賣り、契約奴隸となつて鑛山や漁場に働きに出る。廣東省では彼等を「猪仔」といひ、商品のやうに轉賣され、買主たる主人に隸屬する。

社會  
農民はかういふ經濟關係からの搾取ばかりではなく、警察署・民團・駐防軍隊から直接色々な名目で搾取を受ける。地租は元來地主が負擔するのであるが、それは色々な形で小作人に轉嫁される。租稅徵收者もその方法もまちまちである。特に弊害の多い制度は廣東省によく行はれてゐる租稅の請負制度がある。請負人は官憲に對しこれだけの地方からこれだけの租稅をあげるといふ約束の下に、その地方の租稅徵收權を買ふ。實際があつた租稅が請負金額より多ければ自

分の得、少ければ自分の損になるから請負人は自分勝手な名目をつけて課金を徴収する。廣東省普寧縣の請負人方氏は自分の子供を北京に遊學させる遊學費として酒捐、老婆捐といふ新税を勝手につくつて徴収したと報ぜられてゐる。さすがにこの制度の弊害は認められ、海岸地方の閉けた省では殆ど行はれてゐない。

中國では地税は案外廉いのだが、それに色々な名目の附加税がついて莫大なものとなる。附加税の種類は各省各地方によつて異なり複雑を極めてゐる。たとへば廣東省中山縣に行はれてゐるものは、廣東大學費・軍費・北伐費・遊擊隊費・聯團費・自治費・保安隊費・民團費・保衛團費・自衛總局費・自衛分局費・捕費・附看費・更夫費・沙捐費・沙骨費・沙夫費・果木費・鴨埠費・瘋人口糧費……と、こんな名前をいくらあげてもきりが無い。第一書いてゐる私自身意味の判らないものが出てくる。ともかく複雑怪奇なもので、恐らくこれでは取られる方でも何がなんだか判らないであらう。孫曉村氏の推定によると中國農民の負ふ小作料の負擔額は毎年約十億に達し、これに對し租稅負擔額も略十億に達するといふ。

私はその頃林語堂の編輯してゐた「論語」月刊に東三省を入れた中國全圖を描いてその上に大きく「中國萬稅」ワンホウマンサイと書いてあるのを見た。これはもちろん「中國萬歲」ワンホウマンサイをもちつたものだ。失地回復が成功しても國の中がこんな有様ぢやしかなかたがないといふ意味だと思ふ。抗日運動と中國革



命の關係をこんなに皮肉に、こんなに意味深く且端的に表現した漫畫は少い。

租税や小作料に困る農民は當然農産物を賣り急ぐ。ここに商業資本が馳けめぐる廣い戰場が開かれる。青田のうちに農民が收穫物を賣り拂ふ。青田賣買に適正賣價のありよう筈はない。又金がないから農村で必要な工業製品は掛賣で買ふ。掛賣に適正買價のありよう筈はない。即ち商業資本は賣買の兩面に於て商業利潤以上の高利をかせぐ機會にめぐまれる。だから農民の生活はいつも工業製品及び農業生産物の「鉄」狀價格差にはさまれてゐる。中國銀行の調査を見れば、一九三一年は白米一九石で綿絲一俵と交換出來たのが、一九三二年には二十三石出さなければ交換出來なくなつたことが判る。紅茶の値下りはもつとひどく、三一年には八十三斤でよかつたが、三二年には百五十三斤必要になつた。かういふやうに、工業製品を農村に賣る商人はこの間同じ品物で約二倍の農産物が獲得出來るのだ。

社會  
い、  
少し土地を持つてゐる農民は出來るだけ手離すまいと争ふが、このやうに官僚・地主・商人・高利貸に攻めたてられては結局土地を手離さざるを得なくなる。そこで土地の所有權はだんだん後者の手の中に集中してくる。その結果が最初にあげた費孝通博士の表のやうな結果になるわけだ。あの表にある數字は決して太湖の南岸に限られたものではない。中國全體としても似たりよつたりの數字が出てくる。比較的信用の出來る武漢政府土地問題委員會の統計によると、中國全

農村人口の五割五分が全然土地を持たない。又残りの四割五分の土地所有者について見れば、農村人口の一割三分に過ぎない富農及び地主が全耕地の八割一分を占有してゐる。土地集中の傾向は甚だしく、土地は田園よりも縣城の中に集中する傾向が目立つてゐる。大地主は必ずしも田舎で田園生活を行つてゐるものではなく、縣城の城壁に守られ警察に守られて商業・工業・高利貸を兼ねてゐるものも少くない。中國の地主は商工業高利貸と三位一體なのである。

中國では既に述べたやうに、地主の經濟的權力は同時に政治的權力を意味する。誰でも地券を買つて地主となることが出來、地主はその土地の耕作人が誰であるか知らなくても小作料は縣の役所で正確に取りたててくれる。支拂はなければ公序良俗に反するものとして警察が引つばつてくれる。かうして地主の手許に集まつた金の中から相當の部分が控除されて「國家の費用」にあてられる。それが縣長以上及び以下の政治權力の基礎となつてゐる。縣の支配層の官僚地主、商工業者、金融業者は相互の對立はありながらも對農民關係に於ては共同利益者である。そして全體として農村にのしかかり、そこからあがる土地收入に依存してゐることは、民國革命後も革命前も大きな違ひはない。彼等が城市の中で政治的に道義的にしつかり結合してゐるのはこの經濟關係を基礎としてゐるからである。

彼等は現在の經濟關係を變へることは喜ばない。農村からの昔ながらの安易な收入の道をとぎ

されて彼等に何の生きる道があらうか。中國の民族工業が非常に發展すれば或はこの舊い收入の道をそれに乗りかへる方法があつたかも知れない。がしかし生産設備が後れてゐる上に關稅自主權を奪はれてゐる中國の民族工業がどうして世界工業と競争出來ようか。その上日本の廉い無稅の商品が壘を切つた洪水のやうに流れ込んで來るのである。この方面への生きる道は先づ絶望に近い。とすると彼等は結局舊い收入の道にすがりつく以外に方法はないことになる。この舊い經濟制度が彼等の最後の據り所と思へば思ふ程、この制度を變へようとする思想に對しては頭から反感を持たざるを得ない。田舎の支配層のこの態度が會て辛亥革命をわき道にそらした大きな力だつたとともに今これが中國の共產主義をおさへてゐる大きな力なのである。

上海の若い救國運動者が鄉村に入つて行つたとき、彼等の工作を阻害したのもやはりこの大きな保守勢力だつた。救國運動の中には共產主義が入つてゐるといふ宣傳はそれ程大きな効力はなかつたにせよ、彼等は本能的にこの運動の「その後に來るもの」を恐れてゐる。たとへそれが今共產主義と關聯がなくとも、すべての新しいもの、學生達や、若いもののやることは舊いものを押し倒す結果になるだらうといふ漠然としたしかし經驗から見て非常に確信のもてる考へが、彼等を支配してゐた。私はその頃上海から鄉村に入つた救國運動の青年達がどここの縣で捕まつたとか、警察になぐられたとかいふ噂を人傳に聞いたとき、なぜ中國では愛國運動が彈壓される

のかと思つてゐた。やがて田舎から上海に舞ひ戻つた青年の話を聞いて、上海の向ふに擴がつてゐる曠野には上海と全く違つた陰鬱な空氣のあることを知つた。

時代作家茅盾は「手的故事」の中でこの頃田舎に入り込んで「救國工作」をやつた青年夫婦の話を書いてゐる。

張不忍とその妻潘雲仙が天津から或る小さな縣城に入つて、進歩的な青年を集めて救國工作を組織し、手始めに日貨の密輸出國を摘發しようとした。ところが密輸をやつてゐるものは二老板と呼ばれる縣城一の大金持で、結局彼等夫婦は二老板に買収された縣長に漢奸嫌疑で拘留されて了ふのだ。

私はこれを讀んだとき上海で別れた「丘九」も恐らくこの張不忍のやうな運命に陥つたのではないかと思つた。彼も亦あの時以來上海を去つた多くの青年と同じやうに全く消息を絶つて了つたのだ。

## 一〇 國 共 合 作

春は上海だけを訪れたのではない。西北の曠野に争つてゐた二つの軍隊の間にも平和の春が来た。今や内戦は全く停止され、國共合作は着々と進行してゐる。しかしお互に永い間必死の闘争を續けてきた間柄である。國共合作といつても水とアルコールが混合したやうな工合ではなく、油と水が一つの器にあつてお互に領分を犯さないといふ程度に過ぎないのはやむを得ない。

國 共 合 作

國共合作に對して國民黨の中にはかういふ考へをもつものがあつた。國民黨が抗日戦争の決意をしたのは、その経過から見て中共の主張に一步一步譲歩して行つたことである。國民黨がこの情勢に押されて事態をそのまま推移させてゆけば、やがては國民黨のヘゲモニーが危くなる。何か今のうちに對策が講じられなければならぬ。いはば國民黨は既に中共に「肉」を切らしたのであるから次に「骨」を切るものは國民黨でなければならぬ。そこで彼等は一つの理論に考へついた。國民黨は中共のいふ通り「抗日」を決意した。だから中共もこの際進んで國民黨に参加し、

舉國一致の體制で強敵に當るべきではないか、中共が別に一派を立てて國內に二つの政府があるやうな状態では、國民黨は内憂なく外患に當るわけにはいかないといふのである。これは確かに中共の痛いところを衝いてゐる。

もともと中共は國民黨をブルジョアジーの黨として決して心から信用してはゐない。國民黨は民族解放戦争を最後まで指導する任務に耐へ得ないと思つてゐる。毛澤東は「新民主主義論」の中でこの點をはつきりと言明した。彼はいふ。――

「一面では革命性をもち他面では妥協性をもつこと、これが中國ブルジョアジーのもつ「一人二役」的な二面性だ。かかる二面性は歐米の歴史に於てもブルジョアジーが同様に具備してゐる。大敵を目前にひかへた時、彼等は労働者農民と提携して敵に反対するが、労働者農民の自覚が高まれば彼等はまたもや敵と提携して労働者農民に反対する。これが全世界各國のブルジョアジーの示す一般的法則だ。だが中國のブルジョアジーは上述の特徴をより多くもつてゐる。

中國に於ける事態は非常に明白だ。人民大眾を指導して帝國主義と封建勢力を顛覆しうるものこそ人民の信頼を取得し得る者である。といふのは人民の死敵は帝國主義と封建主義特に帝國主義であるからだ。今日では人民大眾を指導して日本帝國主義を驅逐し、かつ民主政治を實施するものこそ人民の救主である。

中國のブルジョアジーがもしこの責任を果し得るならば誰でもかれに敬服せざるを得ないのであらう。だが若し果すことが出来ないならばこの責任は主としてプロレタリアートの肩の上にかからざるを得ない。故にどんなことがあらうとも中國のプロレタリアート・農民・インテリゲンチヤ及びその他の

小ブルジョアツは國家の運命を決定する基本勢力である。これらの階級は既に目覺めてゐるか、又は現在目覺めつつある。彼等は必然に中華民主共和國の國家構成と政權構成のもつとも基本的部分となるであらう。……

この言葉からも判るやうに中共は抗日戦争になつたからといつてその主要な擔當者たる勞働者農民の黨を自ら解散する意志はない。否、益々それを強大化しなければならぬと考へてゐる。だが中共のこの論理は自覺した大衆にはともかく抗戰を前にしていきりたつてゐた國民の「里耳」に入り難い。又國共合作を前にして階級性を強調することは政策の進行を滑らかにする所以ではない。これに反して國民黨の主張は端的である。そこには誰の目にも見える論理がある。日本は舉國一致で中國にせまつてゐる。それに對して中國が二つの政府に分れてゐるとは何事だ。この國民の一致した氣持ちをそのまま利用して、あらゆる政黨は國民黨の中に解消し、抗戰の主體を統一せよと叫ぶのである。これは國民の誰にも判る「大道理」である。否、國民ばかりではな

い。中共の内部にさへ有力な共鳴者が居た。ソヴェート政府副首席張國壽は以前からこれと全く同じ考へをもつてゐたといふ。彼はこの問題のために一九三八年四月延安を飛び出して次のやうな聲明を發表した。

國 共 合 作

憶ふに民國二十四年の夏毛澤東の領導する一方面軍と、自分の領導する四方面軍とが四川の西で會合した時兩者の間にはすでに意見の衝突があつた。毛澤東は「長征」は勝利であるといひ、陝西に進出し

川陝甘の根據地にソヴェート共和國を再建しなければならぬと主張した。私は「長征」は失敗であり、我々は四川の西部西康の地域に居つて中央軍に休戦を求め舉國一致で抗日方針を實現しなければならぬと主張した。此の意見の衝突のために中共は分裂の形勢となつた。此の年の十二月第三インターに於て抗日民族統一戦線の方針が決定したので此の種の争論は漸次減少し、終に一、二、四方面軍は陝西に於て會合することになつた。……

然るに抗戰の發動後毛澤東の保持してゐる中共の獨立自主、即ち中共が別に門戸を立てて國家民族を以て重しとなさざる精神は自分と彼との意見をして益々離間させた。それ故私は斷然延安を離れて武漢に來たわけである。

中共創立以來の指導者張國壽でさへかういふ見解をもつてゐたくらゐであるから、一般國民の考へ方がより多く國民黨に傾いたことは敢て不思議ではない。

國民黨はこの情勢をかりて中共に次の四つの要求を提出した。これは二月十五日に始まつた國民黨三中全會で決議され赤禍根絶決議案と呼ばれたものである。

(一) 國家の軍隊には編成並びに命令の統一が必要である、故に紅軍は完全に解消すべきである。

(二) 國家の統一は政權の統一を條件とする。故にソヴェート政府を解消し且又一切の黨組織を解散すべきである。

(三) 共產主義は三民主義と絶対に相容れない。故に赤化宣傳を根本的に停止すべきである。



る。

(四) 全階級の利益のために階級闘争を絶対に停止すべきである。

以上四つの要求は國民黨の意圖を明瞭に表現してゐる。國民黨は中共の抗戦の主張には譲歩したが、それと同時に戦争遂行のヘゲモニーを握らなければならぬと考へたのだ。この思索の線に沿うて國民黨は各方面に積極的活動を開始し、それぞれ必要な手を打つた。

先づ救國運動——これは元來人民の間に盛り上つた運動であるから、この方面に於ける政府の把握力は皆無といつてよい。そこで政府は上海の黑幕杜月笙<sup>トワイエラシエン</sup>に意をふくめて急に官製の救國統一聯合會をつくらせた。今までの救國會も勿論その中に包摂される。その意圖ははつきりしてゐる。政府が率先して救國運動を展開するといふ形式に於て救國運動を政府の引いた線以外に逸脱させず、その内部の中共活動を封鎖しようとするのである。だから「政治犯人釋放」の要求によつて章乃器、沈鈞儒等は釋放されたが、最早救國會が以前のやうな活潑な運動をすることは出来なかつた。

作 合 共

次に政治の民主化と重大な關係をもつてゐる憲政實施についても同じやうなことが行はれた。

三中全會では一九三七年十一月から國民大會を開いて憲政を實施すると約束した。中共側は國民黨が眞剣に政治の民主化を計るならば民主的選舉と國民大會の自由を保證するために招集方法を

改め、一黨一階級の非民主的制限を放棄しなければならぬと主張した。中國のやうな貧困者と無學者の多い國でほんとの民主政治をやれば、それは直ちに中共の乗するところとなるといふので、國民黨の方ではたとへ國民大會を開くとしてもその議員の絶對多數は國民黨の指名するものに限りたいと考へてゐた。だから國民黨の憲政實施の約束は政治民主化の要求を豫め政府のつくつたこの滞の中に押しこめようとする意圖をもつたものである。

國共合作後の政府組織については中共側は各黨各派が平等の資格で聯合する「聯合政府」を考へてゐた。だが國民黨は明瞭に自黨のみによる統一政府を強調した。國民黨はそのスローガンとして「一つの政府、一人の領袖、一つの主義」を掲げ、かかる「統一は一切より高し」として他黨の要求を頭から押さへようとした。

國民黨が「國共合作」を前にして計畫してゐた企圖はこの外まだいくらもある。いづれをとつて見てもみな中共を「國共合作」の過程に於て解消して了はうといふ底意が見えてゐた。だから中共の中にも國共合作は甚だ危険であるといふ考へがかなりあつた。國民黨の底意はわかつてゐる。中共はそれを知りながら尙誠意を以て國共合作を願ふべきであるが、國共合作に對するこのやうな反感が中共内部に潜在してゐたことは推測するに難くない。

例へば抗戰開始後國民黨CC團が暴略した「中國共產黨策略路線」といふのがそれだ。これは

國共合作は共產黨が心から願ふものではなく、いはば暫時的便宜手段に過ぎないので主張する。國共合作の裏面を知るに便利であるからここに全文を掲げよう。

中國共產黨は現在の抗戰段階に於て國民黨と妥協合作するのは決して投降ではない。又無産階級の利益を賣るものでもない。その意味は、

一 既に行路難となつた革命路線を放棄し別に行路難少くプロレタリアート獨裁に導く路線を求めるのである。

二 公開的な活動を通じて秘密工作の發展を掩護し廣大な大衆の力量を爭取し以て資産階級の政權を覆さうとするのである。

三 それは革命に休養の時間を與へその間に勢力を積聚して新しい進出條件を準備するのである。

四 暫時の間明瞭な進攻策略を棄てて退守策略とし又直ぐに急廻轉して進攻策略をとるのである。

五 鬭争に疲勞した時は必ず休養して革命力量を備存しなければならぬ。それ故暫時革命制度を放棄し、表面的名目を棄ててその實質を保存し以て將來一層偉大なる勝利を求めるのである。

六 紅軍が國民革命軍と改名したのは單に番號を改めたに過ぎない。又改編を意味してゐない。紅軍の獨立性は依然として保存され、且擴大強化される。ソヴェートは特區政府と改まつたがその實質は改變しない。特に無産階級政權の力量は弱化するしない。否、一層大なる大衆の革命力量を發展せしめようとする。

七 現在の妥協は目前の黨禁を解除し、政治犯を釋放し言論・結社・集會の自由を獲得し人民生活を改良するためである。これ等は皆無産階級革命に向つてプロレタリアート獨裁の實現を準備するものである。

八 現在の妥協は要するに國民黨を孤立させ民主共和國を建立し一黨專制の國民政府を覆滅し、以てプロレタリアート獨裁の實現を期するものである。

この文書は抗日大學で張浩が行つた講義の筆記だといはれてゐる。この文書が重慶側で發表されたとき周恩来は特に公開狀を發表してこれは國共合作を攪亂しようとする日本特務機關の工作だと駁論した。しかしその中で彼は、會つて中共の中にかういふ議論を唱へるものがあつたが、今ではその傾向は自己批判されたと告白してゐる。抗戰の開始されたばかりの時に、即ち國共合作が最も緊密であつたと信ぜられてゐる時に中共の中にこのやうな意見があつたのであるから、抗日戰爭の始まる前にはかかる偏向は如何に強かつたかが想像されよう。

ともかく中共の内部には張國壽のやうな右翼的傾向と張浩の「策略路線」のやうな左翼的傾向が共に相當力をもつてゐたのは事實である。だが結局その中から毛澤東・周恩來の中央路線が勝利をさめたのはやはり全國民の國共合作に對する輿望の壓力と毛澤東の黨内に於ける不動の地位に據るものであらう。だが上記二つの偏向は必ずしも完全に克服されたものではなく、中共の奥深く潜んでゐて國民黨の態度の如何によつて或る時は強化し、或る時は表面化し、屢々毛澤東、周恩來の路線を惱ました形跡がある。

西北の一角に於てこんな鬭争が行はれてゐることはその頃まだ上海には傳はつてこなかつた。しかし、上海の舊救國會の若い人々などは、國民黨の統一救國會が出来てから華々しい活動が出来なくなつたので、國共合作をうらめしく思つてゐたものもあつた。なかには國民黨が陽に和して陰に叛くやうな政策をとつてゐるとき中共だけが國共合作に熱心なのは何事かといきまぐ連中もあつた。不平のあるのは中共や救國運動の人々だけではなかつた。國民黨の人々の中にも中共が結局國民黨を日本の矢面に立たせ、自分は背後に勢力を擴張しようとしてゐるのに國共合作とは何事ぞといきまぐ連中もあつた。蔣介石が、實質上國共合作を提議したに等しい決議をことさら「赤禍根絶決議案」と名付けたのは黨内にかういふ空氣があつたからだと考へられる。

國共合作はその内部にかやうな矛盾を孕みながらも確實な足取りで進展して行つた。上海市民のそれに對する反應はまちまちだつた。特に上海の資本家についていへば彼等は概してそれを喜ばなかつたといへよう。彼等は國共合作は蔣介石の「容共政策」であるなどとは少しも考へない。この點については蔣介石の性格とその政治的手腕を信用しきつてゐる。だが國共合作の結果がどうなるか。それを考へると身震ひせざるを得ない。戦争が起れば上海があぶない。それは「一・二八」の經驗でよくわかつてゐる。自分自身は租界に逃げこむことが出来るが、租界外にある工場や倉庫はどうなるだらう。彼等の工場倉庫の多くは寧ろ危險地帯たる楊樹浦に集中してゐるのだ。だから彼等は概して國共合作に言葉に表せない反感と不安をもつてゐた。かう考へるのは私の獨斷だらうか。否、矛盾もこのやうな上海の資本家の姿を「我是一箇眞正的中國人」の中に書いてゐる。

私はよく中國の現實を知るために中國の小説を読む。エドガー・スノーが中國に初めて來た頃、中國の現代作家のものをよく譯して「生きた中國 Living China」といふ本を出した。私は生きた中國を知るには、確かにこれはよい方法だと思ふ。特にその中でも矛盾のものがいい。いといつてもうまいとか、まづいとかいふのではない。生きた中國を知るに都合がよいといふ意味である。彼は深刻とはいへないまでも、實に廣く社會各方面の問題と取組んで全體としての時

代の流れを描かうとしてゐる。左翼側では、彼は大時代の外形を描寫するだけであり、その時代の核心に食ひ入つてそこから錯綜した外形を批評してゐない。唯主觀的にこの時代の外形を批評するだけだといつてゐる。或はさういふ點があるかも知れない。だが彼の豪壯な、時代を全體として描きださうとする、誰やらがいつた「桁はづれた大陸的な脊力」には何人も三嘆せざるを得ないのである。彼の作品をすつと讀んでゐると中國の現代史を讀んでゐるやうな氣がするのは敢へて私ばかりではないであらう。

茅盾がこの頃書いた「我是一箇眞正的中國人」<sup>クニノコトニシテマシクシテ</sup>では先づ上海の比較的モダンな資本家の一人をとらへてその生活を描寫してゐる。この資本家はいつも朝七時にミルクを飲む習慣がある。太太が必ずその時角砂糖を二つ半入れてベッドのわきにもつて行く。金泥で繪を書いた福建塗のお盆に今日の新聞が置いてある。いつものやうに太太はベッドの頭の方に立つて夫がゆつくりミルクを飲むのを微笑みながら見守つてゐる。夫は忙しさに今日の新聞に目を通す。いつものやうに先きに廣告を見、あとから街のニュース、最後に國內外の重要記事に目を移す。この頃までにミルクのコップも空になる。夫は新聞を置いて太太に笑ひかける。(これもやはりいつもの笑ひだ)それから腰を伸ばすか兩手の食指を兩方のこめかみに當てもみ下すかする。そして顔をあほむけに後ろへ倒れ頭を羽根枕の中に埋めて眼を閉ぢる。これはその日にやるべきことを一通り考へ

るのだ。この時太太は直ぐ立つてベルを鳴らす。するとずつと向ふで待つてゐた女中が影のやうに音もなく入つて来てミルクのコップ、お盆、新聞をもつて行く。太太も女中と一緒に出て行つて軽くドアを閉める。

これがこの資本家の二年來やつてきた合理的生活のあり方だ。主人公がまだ「社會奉仕」を始めたばかりの頃には朝の生活はこんなに規則正しいものではなかつた。ミルクを飲むには飲んだが必ずしもベッドの前で飲むとは限らなかつたし、又太太が自分で砂糖を入れ自分で持つても來なかつた。勿論太太がベッドの頭の方で飲み終るまで看とどける必要はなかつた。その當時はいつも主人公が先きに起きて自分で窓を開けて外氣を通し、それから女中が氣を使ひながらドアを開けて入つて来て、軽い足取りで室の中を一まはりする。その時分太太は顔を横にして枕によつたまま眼を半分開けてゐた。

だが主人公の專業が發展しそのモットーが「社會奉仕」から「民族奉仕」に變つて來ると、主人公はだんだん民族のために自分を大事にしなければならぬと感じてきた。先づ個人生活を「合理化」した。事務が忙しくなるにつれて益々事務を疎略にせずにつくり時間をかけてやる。それから太太を「寢所に歸」した。――

主人公は自分の家で昼飯を食べる機會は一年に二、三度しかない。家で晩飯を食べるのも三、



四十回に過ぎない。しかし朝食は一年中家でやる。だから太太は唯朝食のミルクだけに如何に主人公の言葉を奉獻して「臺所に歸つた」かを表現することが出来るのだ。それだけに毎朝早く自分で角砂糖を入れ、自分でもつてくるのがこの家の重要な儀禮の一つになつて了つた。

この日もこれまではいつもの通りのことがいつもの通りに進行した。が、ここからは主人公の舉動がいつもと少し違つて來た。彼は新聞をあわてて開いて先づ國內記事を見たのである。傍らに坐つてゐた太太はこの時心に色々なことを考へてゐた。太太は習慣的にここにこしながら夫の顔を見てゐるが、夫の顔の表情には注意してゐなかつた。夫の手にした新聞紙がばさつと音を立てた時彼女は初めて夢から醒めたやうにはつとした。――

茅盾はこれまで何気なく、しかし十分の皮肉をもつて民族資本家の生活を描寫して來たのであるが、ここで主人公がいつもと違つて新聞の廣告欄を見ず先づ國內記事に目を通したことに讀者の注意を向ける。彼が「この日」といつたのは恐らく國共合作について政府の重要な聲明でもあつた日であらうか。資本家はそれを見て急に機嫌が悪くなる。太太は心配する。

「何を惱んでいらつしやるの。國の事など――」

太太は急に笑つて下の半句を引つこめてしまつた。彼女はあぶなく夫の神經纖維が残りず民族に貢獻されてゐることを忘れるところだつた。

幸にも主人公の顔には何の表情もなかつた。相變らず眼はかがやいてゐて見るから惱みの深刻にして且高遠なことが表現されてゐる。

「いや實は昨晚の詭言こいつが當つたんだ。」主人公は獨り言をいつた。「何が和平解決だ、他媽的おれ！」急に言葉を切つた。彼はこの言葉が、太太を驚かしはしないかとちらりとその方を見た。この「國粹的」な棄て言葉は工場では時々やつたが、太太の前では今まで一度も口にすることがない。彼は手で顔をなでながら太太に大聲で話す。

「お前は判らないだらうが、社會の秩序といふものは大切なもんだよ。戰爭をやつて何萬何千死なうがそれが何だ！ それなのにやつぱり和平解決を主張してゐる奴があるんだ。錢かねさんのやうな大銀行家まで和平解決を主張してゐるんだ。これちやおこらずにいられないぢやないか」

「えー、えー」太太は應へながらベッドのわきに行つた。彼女は夫がよくものを食べてから腹を立てるのは養生の道ではないといつてゐることを想ひ出した。その上に夫は「民族の爲に」身體に氣をつけなければいけないのだと思ひ込んでゐる。そこで彼女は枕許に靜かに坐つて、

「貴方のお話は何もつともですが、外の人が和平解決をしようといふのに、何も貴方がお怒りになつても仕方がないぢやないですか。うちの工場は毛絲工場ですから戰爭が始まつたら毛絲を使はなくなるでせう。軍需屋さんでもないのになぜそんな大騒ぎなさるの。一・二八の時貴方は毎

日停戦和平を待つてたちやありませんか……」

「おいー」主人公の怒り聲は太太の話を中断してしまふ。

太太はおどおどしながら又主人公の額をさすつてあげようと手を伸した。しかし主人公は手でそれをさへぎつた。

「熱はちつともないよ、赤兒みたいにしなさるな。お前は年をとればとる程わけがわからなくなるねえ。譬へばだ。お隣り同士の間柄は勿論和平がいいのさ、だけど自分のうちの壺所の女中がでたらめをやるとしたら放つておくかい。……その上人間は速く感りなければ必ず近き愛ありつていつてね、隣國が和平を唱へて我々と一緒に防共を共にしようといつてゐるのだ。我々は國賊共を出来るだけ早く肅正し、出来るだけ早く自分の手で檢舉しなければ間に合はないのに彼奴等を放つて置いて討伐しないばかりか今度はそれと和平しようなどといつてゐるのだ。外國がこの隙に幾師團も軍隊を送つて來たり、幾萬臺も飛行機がやつて來たらどうする積りだい。持ちこたへられる積りかね。それともほんとに外國と戦争する積りかね。ええ、太太、その時はうちの工場が灰になつて了つて私とお前がこんな暢氣なこといつてゐられなくなるぢやないかい」

#### 國 共 合 作

太太は眼をまるくして無條件降服を認めた。しかし主人公は太太が敗北を承認しても決して嬉しくはならなかつた。彼自身却つて自分の議論ですつかり恐怖と悲哀を引き起して了ひ、頭をか

かへて羽根枕の中に益々深く埋もれてぐつたり眼を閉じた。

この小説はそれから主人公が憤慨のあまり「眞の中國人」といふペンネームで新聞に意見を發表しようとするところで終つてゐる。これが話のあらすじだ。

だが現實はそれで終つてゐない。この資本家は間もなく羽根枕から頭をもち上げて國共合作の背後で色々な破壊工作をやるのである。だが國共合作は彼等の意向にかかはらずぐんぐん進んで行つた。そして「外國がこの隙に幾師團も軍隊を送つて來たり、幾萬臺も飛行機がやつて來たりしたらどうするつもりだい」といつた彼の言葉は正しかつた。

「その時はうちの工場が灰になつて了つて私とお前がこんな暢氣なことはいつてゐられなくなるぢやないか」といふ言葉が事實となつたのはそれから間もなくである。

## 一 蘆溝橋事件

蘆溝橋事件

中國の知識階級は日本の侵略には周波の法則があると考へてゐる。先づ或る地域を占據する。そしてしばらく武力行使をやめて靜觀し、それが一つの既成事實として認められるまで時期を待つ。世界各国が一應それを見とめ中國が泣きね入りになるのを待つて今度は潛行活動が開始される。先きに占據した地域に近接する新たな地域が改めて特殊地域として指定される。中國側がそれを承認しようとしまいとそんなことはかまはない。中國に對しては日本の宣告、唯それだけで十分である。それから徐々にその地域で擾亂工作を起し、民衆のモラルを破壊して行き、次ぎの侵略準備を進めて行く。準備が完成した頃には休息を終つた軍隊が乗り出して行つて忽ちその特殊區域を占領する。占領が國際關係で問題になりさうなら、名目などはなんでもよい。ともかく實質的に日本の領土と變りがないやうになればよい。この循環法則が無限に繰返へされて行く。この侵略の周期、積極的活動——休息——潛行活動のコースを世界征服に適用しようとした

ものが彼の田中メモランダムだといはれてゐる。さういへば田中メモランダムの初めの方には確かにかういふ一句があつた。

「中國を征服するために先づ滿洲と蒙古を征服しなければならぬ。世界を征服するためには先づ中國を征服しなければならぬ。若しも中國を征服することが出来るならば、アジア諸國及び南洋諸島はみな我々を恐れ、我々の前にひれ伏すであらう。さうなれば世界は東亞が我々に屬することを知るであらう……中國の全資源が我々の自由になれば我々はインドの征服に進むであらう。……そしてやがてはアメリカ合衆國と戦はなければならなくなるであらう。我々が若し中國を支配しようとするれば合衆國を粉碎しなければならぬ……」

私は田中メモランダムの眞疑はしらないが、唯このメモランダムが中國で、否、世界中で有名になつたのは、恐らくここに見るやうに中國人の考へてゐた日本の侵略法則を最も簡明に表現してゐるからだと思つてゐる。田中前首相の考へがどうあらうともその後日本のとつた政策即ち「滿洲」から熱河、熱河から華北へ延びたコースは確かにこのメモランダムの思想を裏書してゐるかに見える。これを日本侵略主義の戰略とすれば、この戰略とそれぞれの時期に於て實現して行く戰術がなければならぬ。日本はかかる戰術として挑發、内部擾亂、秘密侵略行爲、公然たる武力侵略、「自治政權」確立政策を交互に適用したといはれてゐる。

このやうな見方が正しいとすれば七月七日蘆溝橋に起つた事件は戦略的にいへば日本が潜行活動期から積極活動に移る段階であり、戰術的に見れば秘密侵略行爲から公然たる武力侵略に變る過程であらう。ともかくこの事件は次のやうな過程をたどつてゐる。

一九三一年に東三省が占領されてそれから一時休息の時期があつた。三三年には再び活動が始まり、熱河がとられ山海關が占領された。山海關は華北を制する交通の要衝である。この要衝を基點として一九三五年までに天津・山海關間鐵道沿線の各所に兵營がつくられ、スパイ網が出来上つた。このやうな潜行的侵略線がやがて天津北京間の鐵道沿線にのび、又綏遠鐵道に沿うて展開した。一九三三年熱河の陥落以來、綏遠の潜行侵略は公然たる武力侵略に變つて來たが、その方面は一九三六年中國側の痛烈な反撃に會つて一頓挫を來たした。その結果、潜行侵略の努力は専ら天津北京間の鐵道沿線に集中された。一九三六年日本は北京——天津、北京——漢口兩線の交叉點であり且又通州線の終點たる豐臺に兵營を持ち、又北京附近の各重要都市には大抵特務機關を設置してゐた。既にこの時公然たる武力侵略に移る段階に到達してゐたやうである。

蘆溝橋事件は丁度この時に起つたのだ。正確にいへば一九三七年七月七日午後十時。「滿洲事變」も九月十八日の午後十時だつた。歴史はやはり夜作られるものらしい。

この日、日本軍は實弾をもつて暗夜の演習を開始した。その時一人の兵士が見えなくなつた。

日本軍はその兵士を捜索するためと稱して中國軍の守備してゐる宛平城に入ることを強要した。そして小銃の打ち合ひが始まつた。日本軍が先に打ち出したか、中國軍が先に打ち出したか、それは大きな問題ではない。ともかくあのやうな緊張した空氣の中に於て、夜の十時に戦時武装をした日本軍が中國軍の守備區域に入らうとしたのである。寧ろ問題の起るのは當然な成り行きであらう。だがこのやうな「當然」は日本側では全く問題にされなかつた。問題は唯中國軍がいつものやうに泣き癡入りにならず、不遜にも日本の謝罪要求に應じないことにあつた。中國軍の背後には全國の一致した輿論があり、中央政府の鞏固な支持がある。だから華北當局の態度もいつになく強い。一時は双方の軍隊が戦争行爲を停止し、原駐地まで撤退する取決めが出来たが、日本軍は中國軍の謝罪ばかりでなく、宛平・蘆溝橋區域の明渡しを要求し、更にその上に又中國の中央政府がこの事件に介入することを許さないといつた。一國の中央政府がその國內の或る地域の事件に介入することが出来ないといふことは、その地域の主權を外國に委譲したに等しい。いやしくも獨立國たる中國には出来ない相談だ。しかし日本はその限界をしらず執拗にそれを要求した。七月十八日日本大使が中國の外交部長に提出した要求にはかういつてゐる。「日本政府は平和交渉の希望を棄てず事件の地方的解決のために執拗に努力してきたが、中國政府は常に挑發的態度に出づるばかりでなく、各種の手段をもつて解決條件の翼察政權による遂行を阻害せんと



してゐる。日本政府は華北の安定に對するかかる脅威を深く遺憾とするものである。事態がかくの如く進行するならばやがて重大な不測の結果を來たす恐れがあらう」と。

かうして一方では事件の地方的解決を要求しながら、華北の日本軍は刻々増強されて行つた。中國人もこれでは激昂せざる得ない。抗戦請願書は國の隅々から蔣介石の手許に集まつた。國共の合作は既に出来上つてゐる。國を擧げて起つべき秋は今だといふ聲が國內に沸騰した。だが蔣介石は容易に動かなかつた。蒸氣は壓力を加へれば加へる程押し返す力が強くなる。中國は日本の挑戦を受けて起つにはまだ時期が早い。出来るだけ平和の時をかせいで國內建設を完成しなければならぬ。國家の獨立を代價としない限り、平和を持續する努力を放棄してはならない。かう考へてゐた蔣介石だつた。だがその蔣介石も遂に立ち上る時が來た。七月十九日廬山に集まつた全國の指導者を前にして彼はこの歴史の分岐點に立つ中華民族の採る可き態度についてかう教へた。

我々は弱い民族として我々自身の力を正確に知らなければならぬ。この數年來我々は國家再建のために平和を維持しようとしてどのくらゐ努力を盡したかわからない。それ故に余は昨年ここでかう述べた。少しでも平和の希望が残つてゐる限り、我々はそれを棄ててはならない。隱忍自重の限界に達しない限り我々は輕々しく犠牲を説いてはならない。しかしな

がら如何に我々が弱國民であらうとも不幸にして「最後の關頭」に達したならば我々のなすべきことは唯一つ、我が血潮の最後の一滴まで國家の獨立のために捧げることである。さうなつた場合には如何なる場合も如何なる時期に於ても我々は中途で和を講ずるわけにはいかない。戦争が一度始められた後に和を講ずるならばその條件は我が民族の屈從と全滅の危険を含むであらう。

東北四省は六年前我々から奪はれた。それに續いて塘沽協定が出来た。そして今やまた戦火は北平の城門に迫つてゐる。若しも我々が北京を見棄てるならば我が國五百年の故都華北に於ける政治・文化・戰略の中心はここに失はれる。今日の北平は第二の瀋陽である。そして河北及び冀察の諸省は東北四省と同じ運命に陥るであらう。若しも北平が第二の瀋陽となるならば南京が第二の北平になることをどうして防げるであらうか。北平の確保こそ民族全體の生存に關する問題なのである。……それ故我々は全力を舉げて祖先の土地を守らう。これこそ我々が全力を擧げて果すべき義務なのである。若しも領土の一片だに失はれるならば我々は我が民族に對し許されたい罪を犯すものである。今や我が民族のすべてを擧げ最後の勝利に努力することこそ我々に殘された唯一の道なのだ！

蔣介石は言葉を轉じて蘆溝橋事件に對する中國最後の要求を率直に提出してゐる。この條件は

今まで獨立國が呈示した最も謙遜な要求の一つであつたと謂へるであらう。

一 如何なる協定を結ぶとしてもそれは我が民族の領土と主權の保全を犯すものであつてはならない。

二 冀察政府の現状は中央政府によつて決定するものであつて如何なる不當の變改をも許さない。

三 中央政府によつて任命された地方官吏、例へば冀察政務會議の議長を外からの壓力によつて移動させるといふことは許さる可きではない。

四 現在二十九軍（中國の華北守備部隊）のとなつてゐる地位に如何なる制限を加へることも許さる可きではない。

これは凡そ獨立國が耐へられる最低の限界を具體的に示したものである。日本がこの限界をこえることを中國が許すとすれば中國は最早獨立國とはいはれない。そこで蒋介石は結論としてかう結んでゐる。

我々は平和を求める。だが我々は平和を求めるために如何なる代價を忍んでもよいといふのではない。我々は戦争を望んでゐない。だが、我が國の自由を守るためには我々も亦立ち止らざるを得ない。

蔣介石のこの宣言は中國全國民の正にいはんとするものをいつてゐる。國民は一人残らず彼の聲明に共鳴した。人々は廣東から、綏遠から、山東から、東三省から、續々南京に集まつてきた。そして或る者は力を、或る者は金を、各々その持てるものを、抗日戦争のために捧げることゝ申し出た。今や政見の相違は問題ではない。個人的憎惡も消し飛んで了つた、蔣介石に反抗して日本に亡命してゐた政客も歸國して抗戦を誓つた。十年間蔣介石のために牢獄に入れられた思想家も喜んで蔣の下に働きたいといつた。蔣介石に對抗して三度反蔣政府の外交部長となつた政治家も公然と蔣介石への支持を聲明した。南洋からマニラからサンフランシスコから華僑達の血汗で獲得した金が續々南京に送られた。「民族意識」とか「中國の近代化」とかそんな言葉の片鱗だにしない揚子江の船夫、山東の苦力、四川の水汲み男、上海の黄包車夫、寧夏の山賊達、東三省の馬賊達も一錢二錢と零細な金を政府に獻金した。全中國が電氣に打たれたやうに一齊に蔣の宣言に呼應したのである。

この時日本が蔣介石の聲明の中に含まれた深刻な決意を正確に讀みとり、且それによつて捨て起された中國全土の風潮を冷靜に觀察することが出来たならば或は戦争は避け得られたかも知れない。なぜならば、その時日本は、まだ中國との全面的戦争を決意せず、又その準備もなかつたからだ。だが日本は全中國が初めて完全に一致したこの歴史的瞬間に目を閉ぢてゐた。日本は今

までの中國には全く見られなかつた全民族の團結を見落して了つたのだ。

そしてこの時も亦今まで中國に對して使ひ古した手段——恫喝——がまだ役に立つと考へてゐた。華北政權の責任者が謝罪したにも拘らず、この和平解決の好機を逸したばかりでなく日本は再び次のやうな恫喝の聲明を發表した。

「日本は宋哲元の單なる謝罪では満足しない。中國の謝罪は單なる見せかけで中國の官吏が困つたときにいつも用ひる手段に過ぎない。……中國政府がその態度を即刻變へない限り日本政府は決定的手段に訴へる外はない」

これは最早外交交渉ではない、理由もなければ體裁もない一種の命令である。この聲明に續いて中國軍隊の北京・天津からの撤退が要求された。その要求は更に飛行機と砲彈によつて壓力が加はつた。中國は日本の要求は入れなかつたが武力の前にどうにもならなかつた。間もなく北京からも天津からも中國の軍隊は撤退した。日本軍がそれに代つてこの兩都市に進駐した。天津では直ちに南海大學に火がかけられた。「中國の教育機關はすべて抗日的だ」といふのがこの歴史ある文化施設を焼き拂つた唯一の理由だつた。

だがこの當時日本の國民はこんなことを知つてゐたらうか。少くとも日本の新聞雜誌に表現された蘆溝橋事件の經過がここに述べたものと全く違つてゐたことは我々の記憶にまだ生々しく殘

つてゐる。日本は終始一貫この事件の平和的現地解決に努力したが、中國側が常に誠意を示さなかつたと主張してゐた。しかしここにいふ現地解決といふことは中國の中央政府を介在させずに華北政府だけで日本と領土主權に關する重大な協定を結べといふことなのである。さういふ具體的な事情は日本國民の耳目から注意深くさへぎられてゐた。今立場を代へて見ればこの要求の矛盾ははつきりする。唯大阪府だけが東京政府を介在させずに外國とそんな國際協定を結んだらどういふことになるだらうか。日本は中國にそのやうな要求を眞正面から提出し、しかもそれに對して應じないからといつて中國を誠意がないと非難したのである。否、そればかりではない。中國に誠意がないから日本は最早外交交渉はしない。唯武力解決のみが残された唯一の手段だと恫喝したのだ。これはイソップの狼と小羊の話を想ひ出させる。狼が小羊を食べる理由はいつも十分備はつてゐるのだ。八月十日に發表された杉山陸相の談話にはこの「狼」の理論が次のやうな言葉で語られてゐる。

「事態の悪化を防ぐため日本當局は今まで全力をつくしてきた。だが中國が誠意を示さない限りこのまま事態が進行すれば日支間の全局的衝突はまぬがれない。日本の忍耐には限りがある。今問題解決の捷路は中國に對する徹底的武力膺懲あるのみだ。中國はいつも不誠意で約束を破る。この問題ばかりでなく過去に於ても嘘ばかりいつてゐる。かくの如き國家と交渉することは不可

能に近い。日本全國民は完全に一致して居り、陸海軍の態度は既に決定してゐる。日本の忍耐が限界に達しつつある今こそ日本が決定的に行動する時である」

これもやはり日本の大言壯語の一つであらう。日本はかういひながらも中國が全面的抗戦に入るとは考へてゐなかつた。否、少くともそれを欲してゐなかつた。日本の軍部は中國が結局は「滿洲事件」以來の傳統に従つて日本のつくる既成事實を認めるに違ひないと考へてゐた。中國には今までいつも抗日の世論があり、學生運動があり、地方軍隊の小規模な抗戦があつたが、いつも政府は結局日本の要求を認めただけではないか、若しもかうした信念が知らず知らずのうちに日本の上層部を導いてかういふ言動をなさしめたとすれば、この信念の誤謬は徹底的に追及されなければならぬ。

國民政府の腰が今までのやうにきまらなかつたとすれば蔣介石は西安事變後の情勢をあのやうに處理はしなかつた筈である。又今まで日本との問題について一度も自己の決定的態度を國民の前に示したことのなかつた蔣介石があれ程具體的な聲明をする筈もない。換言すれば蔣介石が今まで抗日戦争に對し公開的聲明をしなかつたといふことは、表面はともあれ政府の内部が、國民黨の大勢が、即ち中國の支配層の態度がまだ何とも決定しなかつたことなのだ。然るに今蔣自身先頭にたつてこの問題に對する彼の態度を具體的に表示したといふことは、政府の内部が、國民

黨の大勢が、即ち中國の支配層の態度が既に決定したことを意味するのだ。

なぜさういへるか。この問題を掘り下げて行けば當然蔣介石政權の本質によれて来る。或る種類の人々は蔣介石を簡単に獨裁者として規定する。が、その獨裁の具體的特質については誰も進んで説明しようとしなない。それ故蔣介石の場合にもヒットラーやムッソリーニと同じやうな獨裁者を聯想するだけである。ドイツの場合でもイタリーの場合でもこれ等の獨裁者は高度に發展した金融資本をバックにした鞏固な大衆組織をもつてゐた。だが蔣介石の場合も果してさうであらうか。中國の經濟段階を論ずるのは、他の場所に譲つて、ここではただ、その政黨組織だけを比較して見よう。先づ國民黨が大衆組織であるかどうか疑問があるが、少くとも國民黨の組織が、ドイツのナチスの様な鞏固な大衆組織でないことだけは確かであらう。國民黨は決して「鐵の組織」をほこることが出来ない。「散沙の如し」といふ形容詞が肯かれるほどルーズな組織をもつた中國支配層の政黨なのである。同じ國民黨の中にも色々の分派があり、民族國家の基本問題についても彼等の意見は必ずしも統一してゐない。宋子文・孫科・張群はそれぞれ異なる傾向を持つたまま是認されて國民黨内にそれぞれの翼をつくてゐる。蔣介石はヒットラーのやうに自分の主義主張の壓力で、黨内の他の傾向を地ならししてしまふといふ型ではない。そのすべてを包容し各自の傾向を相剋させ、その勢力均衡の上に超然と自己の地位を築いてゐるのだ。蔣介石の



この包容力は西安事變の後に來た南京政府の人事移動にも現はれてゐる。あの時外部からは親英米派と云はれる人々が南京政府のあらゆる要職を占領し、反共派と呼ばれるグループの總退陣になるかとさへあやぶまれてゐた。だが蔣介石には反共派を棄て去るやうな意向はすこしも見えなかつた。親英米派と反共派のバランスが一時に左に傾いたり、右に傾いたりするやうな急激な變化は注意深く避けられ、時代の表面に立ち得ないグループは表面に立つてゐるグループのカウンターバランスとして鄭重に保持された。これが蔣介石に人氣の集まる一つの原因なのである。どの派もどの派も蔣介石を自分のものだと思つてゐる。黃埔系は蔣は自分等の校長だといふ。宋子文派は蔣は自分等の家長だといふ。政學系は蔣は自分等の長官だといふ。CC團は蔣は自分等の團長だといふ。藍衣社は蔣は自分等の親分だといふ。各自がそれぞれお互に勢力争ひをしながら蔣を自分のものとしようとする。そして恰もバスケットボールの球を争ひながら多くの手がそれを上へ上へと突き上げるやうに蔣を「最高領袖」に突き上げて了ふのである。蔣介石はこの政權獲得の秘密をよく知つてゐた。黨内の諸勢力を均衡させ、その中心點に自己の地位を安定させる手腕は彼の政治的天才なのである。ヘンダーソンの「使命の失敗」にはヒットラーについてかういふことが書かれてゐる。

嫉視の中に取圍まれつつ黨首脳部間の訌争の唯一の審判者に納つてゐることは、ヒットラーに

とつてまつたく誂へ向である。なぜなら彼としては黨首腦部の個人間もしくは朋黨間の訂争を常に利用することによつてすべてを巧く支配してゆくことが出来るからである。

かういふ觀方から類推したがる人は蒋介石の包容力を蒋介石の「分 離 統 治」政策だと解するかも知れない。蒋介石がまだ國民黨内の諸先輩の間に壓されてゐた頃、特に胡漢民と汪精衛の間にはさまつてゐた廣東時代彼のこの兩先輩に對する政策はこれを「分 離 統 治」政策と見ることが出来るかも知れない。だが今日の彼の黨内に於ける地位から見れば寧ろこれを彼の「包容力」といつた方が適當だと思ふ。ともかく彼にこの「包容力」があるが故に彼は國民黨各派から一様に「我等の領袖」と慕はれてゐるのだ。それだけに彼としては滅多な發言は出来ない。或る重大問題が起ると各派それぞれの利害關係から先づ黨内に是非の輿論が起る。そしてその相剋の結果大勢がきまり一つの勢力均衡が出来上る。この大勢を見て彼が徐々に發言する。彼の發言で黨内に動いてゐた少數派の輿論がびたりとをさまり黨内の團結が出来上るのだ。だから彼が發言するのは既に黨内の意見がその問題について大體一致してゐることを意味するのだ。

ヒットラーの場合はナチス黨の團結と組織が鞏固であり、彼の統制力が下部組織まで及んでゐるから彼の決定は直ちに黨の末梢にまで傳達され實行される。それ故彼は昨日まで敵とした國を今日友邦と宣言しても、その決定が直ちに黨全體を統制し國の隅々まで彼の意志が通るのであ

る。だから黨内の反對派が相當強くとも、それを押しきつて自己の決定に黨全體を服従させることが出来る。蔣と國民黨との關係ではこのやうな離れ業は不可能である。ヒットラーが對蘇聯關係に於て發揮したやうなああいふ離れわざは蔣介石のよくするところではない。蔣介石はヒットラーのやうな意味に於ては決して獨裁者ではない。彼の黨はナチス黨のやうに團結が鞏固ではなく、彼の決定が直ちに黨の末梢に及ぶ程の組織力をもつてゐない。彼の権力は黨の組織が散漫であり、各派がいづれも決定力を持たず、彼のみが決定者であるといふことから生じてゐる。だから黨内に相當強力な反對者が残つてゐる場合、彼が無理な決定をすれば黨が分裂する危険が十分ある（和平交渉に於ける汪精衛派のやうに）。だから彼はいつも黨内の大勢がきまり略とこれ以外に道なしといふ境地に到達したとき初めて彼の態度を決定する。彼はいつも最後の發言者であるが、彼が一度發言したときは中國の方針がびたりときまる時なのだ。それ故又彼が一度決定すれば自分の決定を容易に翻へさない。これも彼の特徴の一つとされてゐる。人々はよく彼のこの點をとらへて頑固者だといふが、彼の頑固性はこのやうな政治的根據をもつてゐる。従つて彼が盧山で一度盧溝橋事件に對する決定的意見を發表したときは全中國の態度が既に決定し、最早蔣介石自身さへも後戻りの出来ない情勢になつたことを意味したのだ。中國は最早他に如何なる道を行くことも出来ない。唯蔣介石の持した道のみが唯一の出路だつたのだ。だから、たとへ日本の

恫喝が單なる恫喝に終らず事實危険をはらんでゐても蔣介石は最早後へは退けなかつた。しかし不幸にして日本は蔣介石のこの悲壯な立場を少しも理解しようとはしなかつた。戦雲はかうして一刻と華北から中央へと迫つてきた。上海は急に戦争のにほひが濃厚になつてきたのだ。

その頃私はすつかりくさつてゐた。中國の友人の大半は居なくなり、街の中は妙にざわついてゐて、そのくせ何となく淋しい。街ですれちがつた中國人が、後の方で「あれは東洋人ぢやないか」などといふのを聞くとその相手の腹の中にある憎惡が直ぐに胸にひびいてくる。中國の學生食堂に行くのも氣が進まなかつた。それでも知り合ひの中國人は既に華北で戦争が始まつてゐるにも拘らずなにくれとなく親切にしてくれた。私はその人達の忠告で、南市に近い私の下宿からフアミニョービツヤ 霞 飛 路に近いロシア人住宅地のポーランド人の下宿に移ることにした。家具付きの北向きの一間、阿媽を使つて室料は一ヶ月二十五圓でよかつた。食事は環龍路ホウロンにある希臘人の經營するロシア料理店に通つた。「家常便飯」で大たい茶汁ウオウレチと何か外に一品、羊の腦のフライとか牛肉を細かく切つて甘いソースで煮込んだ「ペフストロゲノフ」とかが出る。それにパンとお茶がついて一食二十五錢くらゐであつた。しかし私の經濟力からいつても量からいつても一日三度は到底いけない。せいぜい一度か二度で後は何かで腹をごまかして置く。ここに集まる人は主にシベリ

アから逃げて来た白系ロシア人でどうしたわけかカザックが多かつた。英語も多少は話すがお互  
 同士は皆ロシア語を使つてゐる。長い間頭脳の片隅に置き忘れられてゐた私のロシア語もどうや  
 ら食事の注文ぐらゐの役にはたつ。民族的偏見の少いロシア人達は、私を少しも異人種扱ひして  
 ゐない。人間の心は鏡のやうなもので、對手の氣持は直ぐ此方の心にも映る。私はなれない外國  
 語を話すう、つたう、しさから余り話はしなかつたが、彼等の私に對する好意はよく判つた。時によ  
 ると私を中國人だと思つてか、「蔣介石、ナムバル・ワン、ナムバル・ワン！」と子音の強  
 いロシア語なまりの英語で拇指を高くあげて見せ、「蔣介石はえらい、日本をすぐやつつける、  
 大丈夫だ」と保證してくれた。そんな時の私の地位ぐらゐみじめなものはない。私はこの好意を  
 受け入れて相手に氣まづい思ひをさせまいか、それとも私が後で日本人と判つて相手に氣まづい  
 思ひをさせるよりか、今思ひきつていつて了はうかなどと思ひまどひながら結局氣の弱さから小  
 さな聲で「私は日本人ですよ」とつぶやく。恐らくこの時の私の顔はひどく氣むづかしかつたに  
 違ひない。相手は一寸たじろいでしばらく私の顔をぼんやり見つめてゐたが、直ぐ又笑ひ顔を取  
 り戻して「日本人は強い、上海にも直ぐ戦争がありますか」とぬけぬけといふ。私にはそのあつ  
 かましさをとがめる氣は少しもなかつた。相手は初めから私がどちらであつてもよいのだ。唯私  
 個人に好意を持つてゐることを表示しようとしただけにすぎないことを私はよく知つてゐる。

この人達は日本が勝たうが、中國が勝たうがそんなことは問題ぢやないが、しかし、戦争には大きな關心をもつてゐた。上海に戦争が近づけば近づく程、各國の駐屯兵が増えて来る。駐屯兵が増えればパーヤキャパレーがいやでも繁昌する。彼等の女房や娘の多くは駐屯兵を相手にしてホールからベッドに抜ける怪しげなステップを踏んでゐるものが多い。今晚盛り場で兵隊の落した金は翌朝すぐこの人達のペンに變るのだ。その上、戦争は彼等にとつて新しい冒險の機會、再び金持ちになる夢、自分の女房を百パーセント占有する可能性などを興へてくれる。だから戦争は彼等にとつて萬更ではない。彼等は、どちらか勝つても、その時の勝利者の側につく心の用意がちやんと出来てゐる。

この人達が集まつて話すことはきまりきつてゐた。金儲けの話、女の話、街のスキヤングル、それにもう一つ自分達の祖國の悪口。もつとも彼等はソ聯は祖國とは思つてゐない。自分達を愛する祖國から追ひ拂つた敵國だと思つてゐる。だがもう自分の祖國を取り戻さうなどといふ氣持もない。ただ、今は悪口だけで十分満足してゐる。それだけになかなかうがつたこともいふ。

ソ聯は共產主義になつてから物資がなくなつた。職工達は給金を貰つたが服が買へない。そこでコミサールのところに行つて愚痴をこぼしたらコミサールはいつた。

「不平をいふな、ソ聯に物が少いとはいへ、アビシニアよりましだ。アビシニアでは人民は裸で

歩いてゐるぢやないか。」

そこで職工達はいつた。

「タワリシテ・コミサール、それではきつとアピシニアといふ國はずつと以前から共産主義をやつてゐたんでせう。」

一人がかういつた類の悪口をやるとその場に居合せたお客はみな我が意を得たやうにとつと笑ふ。食堂の空気は先づかういつたところだ。

街の中國人に白い眼でにらまれ通して、日本人たることにいささかくさくさする私もここに来て初めてはつとすることが出来た。ここではともかくさういふ目には會はないですむ。そればかりか、時には自分が日本人だといふことを強く感謝する氣持さへ起つて来る。彼等をだまつて觀察してゐると、自分に祖國があるといふことがしみじみ有難く思はれる。國を失つたこの人達の關心は唯自分の個人生活の物質的幸福だけにとどまつてゐて、自分の生活をそのために犠牲にしてよいといふやうな氣高い生活の目標がない。その日その日の生活が惰性で動いてゐるやうな感じだ。この彼等の生活を中國人の生活と比較するとよく判る。中國人は生活程度は彼等よりも遙かに低いのだが、その生活には、何かどつしりした據り所があるやうに見える。この人達はおいしい食べ物とか、美しい異性ととか、快適な家とか、それだけが人生のすべてのやうに語る。中國

人はそれだけではない。もつと價値の高いものを、生活の目標として語つてゐる。自分より高いものに自分を捧げきつてゐる人の姿は唯自分のためにあくせくしてゐる人よりも氣高く見える。少くとも私にはさう見えた。そして祕かに日本といふ祖國をもつて得意になつてゐる自分を見出した。上海では日本人と言へば嫌はれてはゐたが又恐れられてもゐた。私は嫌はれてゐてもよい。ともかく大きく存在を認められてゐる祖國を自分をもつことは決して悪い氣持ちやないことを知つた。黃埔灘を散歩したときふと黃埔江上に繫がれた軍艦のマストにだらりと下つた日章旗を見上げて子供らしい得意を感じる自分を不思議に思つても、やはりこの感情にはうそはないと思つた。

私は「滿洲事變」以來日本の軍部が中國でやつてきたことを知り抜いてゐるし、それに何一つ好意をもつてゐない。だがしかし今まで日本の存在を大きく世界に感じさせてゐるもの、つまり私達にこつそり心の片隅で得意を感じさせてゐるものはこの武力でふくれあがつた祖國なのである。私は自分の憎んでゐるものが、自分の祕かに得意としてゐるものと不可分に結びついてゐることを知つてすつかりまごついて了つた。中國人からよく日本は強盗だといはれる。彼らのかういふ氣持はよくわかる。その意味もよくわかる。そんな場合に私はどうしても彼等と一緒になつて私の生れた國をのしる氣持にはなれなかつたのである。



日露戦争當時の日本人は英米は勿論世界の隅々から偉大な國民として崇拜され、アジアの人々からは解放者として迎へられたと聞いてゐるが、私も若しそのやうな時に上海に居合せたらどんなに幸福だつたらうと思ふ。今は皮肉にも日本がツァール・ロシヤの位置を占め、中國がその時の日本の役割を果さうとしてゐるのだ。私は自分の愛國心にいささかも矛盾を感じないで済む中國人を心から羨しく思つた。

或る日私は僅かに残つた中國の友人達に私の祖國に對するこのやうな氣持を率直に打ち明けたら、友人の一人から「君はまだ祖國の亡靈にとりつかれてゐるのか」ときめつけられた。しかし私は、私の氣持を理性では十分否定することが出来ても感情ではちつとも否認してゐない自分にとりかから氣が付いてゐたのだ。

## 二 戦争は上海へ

蘆溝橋事件が上海に傳はつたとき人々はいよいよ來たる可きものが來たのだといふ感じをもつた。上海の市民は戰場が遠く離れてゐるせゐか、それとも中國人特有の「沒有法子」<sup>ノアツツ</sup>といふ諦觀からか案外冷靜にこのニュースを迎へた。お尻に火がついたやうに騒ぎたてたのはどうしても日本人の方である。もつともこの頃は、「國威をけがされた」とか「皇軍に對する侮辱」とかいふ言葉が氣の弱い日本人を不思議にヒステリー女のやうにする作用をもつてゐた時代だつた。上海の日本居留民は「虹口」<sup>ハインク</sup>に彼等だけの小さな植民地社會<sup>コロニヤ</sup>をつくつてゐる。その中心街は海寧路<sup>ハイニンル</sup>、乍浦路<sup>チャプル</sup>、文路<sup>ブンル</sup>、吳淞路<sup>ウソンル</sup>等でそこには軒並みに日本の商店が並び、日本人向きの料理屋、カフェー、ダンスホールが何もかも揃つてゐる。外國人はこの邊を「リトル・トウキョウ」と呼んでゐた。ここは日本から吹き飛ばされた人々が外國の壁にぶつかりそのまま穴に落ちこんだやうに二萬六七千から三萬近くの日本人が集團的に住んでゐる。この人達はいつも外國の壁に向きあつてゐ

るだけに日本の軍部に依頼する氣持が大きい、また經濟的にもこの街全體がキヤンブ・フォロアの性格をもつてゐる。だから戦争に關心をもつ理由は十分ある。蘆溝橋事件のニュースが入つたとき虹口の全市民は今度は上海に何か起る頃だと期待し始めた。丁度その頃である。正確にいへば七月二十四日の夜九時半、虹口の北邊にある北四川路を三人の陸戦隊員が歩いてゐると一人の日本人に呼びとめられた。その日本人は、今狄思威路デイクスウィッローで日本の水兵と中國人が殴り合ひの喧嘩をやつてゐるのを見たが、やがて水兵がどこかへ拉致されてしまつたと報告した。彼は現場で拾つたといふその水兵の帽子を三人の陸戦隊員に渡した。三人の陸戦隊員はその男と一緒に陸戦隊本部まで来てくれと要求した。その男は自分の母が急病で家に歸るところだからと斷つて彼の住所氏名を吳淞路八四番地岡崎良雄と告げて行つた。陸戦隊本部は以上の報告に基づいて直ちに活動に入つた。忽ち全武装に身をかためた約一千名の巡邏隊がくり出され、虹口の各街路が警備された。装甲自動車が出動した。機關銃が街の角々に据ゑつけられた。その夜一晚中上海陸戦隊は自動車をとめたり、黄包車から客を下したり、通行人を誰何したり、家々を軒並みに探検したりした。水兵一人の失踪に全く實戦さながらの騒ぎである。

この騒ぎは日本側としてはこの機會に一寸非常警備の演習をしてやれといふ單純な意圖からだつたかも知れない。だがそれが中國側に與へたパニックは大きかつた。装甲自動車の活動、街の

角々の機關銃、陸戰隊員を満載したトラックの右往左往、それ等は皆な「一・二八」の記憶を呼び戻すに十分だつた。中國人特に蘇州河から北に住んでゐる中國人の中には忽ちパニックが擴がつた。人々はあわてふためいて家財をとりまとめ、虹口から逃げ出した。水兵失踪の報告があつたときから十二時間以内にこの地區から兩租界に「搬家」した中國人は一萬人以上に達したといはれる。それ以來流言蜚語はそれからそれへと飛び、戰爭の起るまで一ヶ月間毎日「搬家」の群は洪水のやうに蘇州河を南に渡つた。

蘇州河以北の地域は開北をのぞいても共同租界の全面積二二・五九平方杆のうち一二・九七平方杆を占めてゐる。だからこれは家の引越しではなく都市そのものの引越しといふべきだ。自動車、黃包車、小車あらゆる乗り物が荷物を満載し、その周圍にもてるだけの家財を背負つた人の群がまづはりついて毎日潮のやうに英佛兩租界に押し流れて來た。大都會の半分が空になつて、もう一方の半分に入り込んだのだからその混雑の程度も判らう。租界の家といふ家は忽ちこの避難者でいつぱいになつた。家賃や間代はこの一ヶ月間に暴騰して平時の五、六倍になつた。金のない人々は家財を圍んで一寸した空地や道路の兩脇にかがんで日を暮した。街は終日さういふ人達でこつた返してゐた。

茅盾はその小品「搬家」の中でこのパニックを心にくく描寫してゐる。主人公は平常政治のこ

など何も知らない會社員の妻、黃太太だ。彼女は三ヶ月程まへにやつと虹口に家を見つけて住みついたばかりだつた。やつとの事主人公の會社歸りを待つ一とき、向隣りのオルガンの音に耳をかたむける餘裕が出来た。その頃この引越し騒ぎがやつてきたのだ。周圍の人々は引越し始めたが、彼女はつひ新居に未練が出て思ひきりがつかない。まはりの家が段々空屋になつて來たが結局向隣りのオルガンの主が引越しするまでは大丈夫だらうといふことに心をきめて自分を安心させてゐた。そして心の中でこのオルガンの音を時局のパロメーターとして、それを聞いて初めてその日を安心して暮すことが出来た。或る日朝寢をしてうつかりオルガンに耳をすますことを忘れて了つた。そして女中からオルガンの主が昨夜中に引越して了つたと聞かされた。それからあわてかた――

「ああどうしよう、どうしよう、うちの人は會社だし」

黃太太は窓口から身體を引つこめ、すぐ衣裳ダンスを開いたり、衣裳箱をあけたりしながらステリーのやうに口はぶつぶついひながら、手は夢中で何かをいぢつてゐる。

しばらくそんなことをしてゐたが、やつぱり會社から黃先生を呼んで來た方がよいと考へた。しかしまたこの家も氣懸りになる。裏口の向ひの奥さんと相談しようかとも思つたが、奥さんは確か外出してしまつたはずだ。ああしょうかうしようかと考へたが、どれ一つこれはよいといふ

考へが浮ばない、唯一つやや體當な考へは黄先生の會社から歸つて来るまでべんべんと待つては  
ゐられないといふことだつた。

たうとう彼女は電話を米屋で借りてかけることにした。彼女は夫の働いてゐる處の電話番号を  
全く知らない。大きな天龍洋行といへばどうにかわかると考へてゐたのだ。

同じ天龍洋行と呼ぶものの電話番号が五つも六つもあつた。米屋の番頭は黄太太にどれにかけ  
るのかと聞いた。

「そんなら先づ一番最初のを廻して下さい」

黄太太はべそをかきながら答へた。最初の番頭は「黄といふ人は居ない」といふ答へだつた。

一番目の番頭はかからない。第三第四は違つてゐた。米屋の番頭の顔色が險惡になつて来る。黄  
太太はいらいらして來た。外は暗くなつてきて六時にもう聞がない。

黄太太は電話をかける勇氣がなくなつた。弄堂の入口まで歸つて來ると、折よく隣りの又隣り  
の小姐が黄包車から下りるのを見かけた。

「あら、戦争は始まりますか、やつぱり始まりますか」

黄太太は趙小姐を捉まへるとすぐかう聞いた。彼女は趙小姐が「始まらない」とか、少くと  
も「今日は始まらない」とか答へて欲しかつたのだ。

「始まらないつてことがありますか」

趙小姐は車賃を拂ひながら答へた。

「今度始まつたら蘇州も杭州も戦争になつちやうでせうよ」

「えーつ、そんならフランス租界は？」黄太太は息もつけずにかう質問した。

「駄目です。駄目ですとも」趙小姐は確信をもつてかういふとそのまま弄堂弄堂に入つてしまつた。

黄太太は驚いてすぐ後を追ひかけて大聲で叫んだ。

「趙小姐、趙小姐、ちよつと待つて下さい。どこなら安心出来ますか、どこ？」

「四川がいいでせう、四川」趙小姐はふりむいて答へた。

「四川？ どうして四川路がいいんですか、この前の戦争の時——」

「ハハハ」趙小姐は足をとめて黄太太の無知を憐むやうな大きな聲でいつた。

「四川路ぢやありませんよ、四川省ですよ。あの白木耳まぐわの出る、すつと遠い、知つてらつしや

る？」

「あのー蘇州からどのくらゐ離れて居るんですか」

「ああ、貴女にはわからない」趙小姐はかういひながら行つてしまつた。

六時過ぎにやつと黄先生が大あわてで歸つて來た。夫婦がわれ先きにお互の情報を交換しあ

よ。黄先生のは、あの陸戦隊本部の前に土音が積まれたといふのだ。黄太太のは隣家のオルガンの主が昨夜一晩かかつて引越してしまつたといふことから趙小姐の話に及んだ。外は雨降りだ。黄先生と黄太太は黄包車を雇つて大きな包と衣裳箱をもつて晩飯も食べずにその弄堂を離れた。かういふ悲喜劇が蘇州河の北側ではいたるところに展開されてゐたのだ。これは笑ひ事ではない。これだけの騒ぎを起すきつかけになつた水兵失踪事件の方はどうなつたらう。

中國側の官憲は失踪した水兵の捜索に協力してくれた。蘆溝橋では失踪した兵士が宛平城に入つたかも知れないのだから、上海の水兵は或は南京に忍びこむかも知れない。そしてその捜索のために陸戦隊が装甲自動車で南京城内に入つて來るかも知れない。だから中國側はそんなことゝ起らないやうに眞剣に捜索に協力した。その結果中國側は失踪した水兵をさがし出す前に二十四日の夜三人の陸戦隊を呼び止めて宮崎——水兵の名は宮崎定雄と發表された——の失踪を報告した。吳淞路八四號の岡崎良雄といふ人物が出鱈目だといふことを發見した。吳淞路のどこにも、否上海のどこにもそんな名前の人物はゐなかつた。陸戦隊であれだけ大きな騒ぎを起したのはこの岡崎良雄といふ人物の報告から始まつてゐる。ところがこの重大な報告者が全く架空の人物だつたといふのだ。三人の陸戦隊員の話によると「短袖のポロシャツを着た、ツツクのズボンに、白ベルト、白靴、ニス帽といふなりをした男」だつたといふ。どうもこれがあやしいと見られた。



外人記者連はすぐにこの事件全體が日本の陰謀ではないかといふ考へを持ち始めた。「小さな黄色い紳士 Little Yellow Gentleman」の著者ヘンリー・ジョン・メイ氏などはこの時、日本領事館のスポークス・マンにこんな質問をしてゐる。

「上海がぶつさうなので陸戦隊ちや夜の外出には許可があることになつてましたね」

「さうです」

「それちや、誰があの日に出出したか記録がありますね」

「あります」

「宮崎定雄は昨晚外出したんですか」

「勿論さうです」

「陸戦隊ちや、現在隊員が外出する時には三人一組でなければ許さないことになつて居ますね」

「さうです」

「そんなら昨晚宮崎定雄と一緒に行つた二人は誰ですか」

この質問には日本のスポークス・マンもすつかり弱つた。

「私は知りません」

「だけどそれは重大なことですよ。一千の日本陸戦隊が一人の、名もでたらめ、住所もでたらめ

な日本人の報告に基づいて、戦闘武裝で開北や虹口に出動し、數千人の民衆を訊問したり、通行を停止したりしてパニックを起したのです。その前にもつとよく調査すべきだつたとは思ひませんか」

「我々は目下調査中です」

「貴方は夜の外出者の姓名には記録があるといひましたね」

「ありますよ」

「そんならその記録を調査して、宮崎と一緒に行つた二人は誰だかすぐ判るぢやないですか」

「我々は目下調査中です」

「日本人は愛國者ですね」

「さうです」

「こんな戦時状態の時には喜んで當局を援助しますね」

「その通りです」

「そんならなぜ岡崎良雄に出頭してくれるやうに放送しないのですか」

「どうも私には何とも御答へ出来ません」

日本當局がこんなたよりない受け答へなので中國人及び外國人から益々この事件の性格を疑は

れるやうになつた。

事件の翌朝日本の岡本總領事は俞鴻欽市長に面會した。一九二七年上海に特別市制が施かれて以來、黃郛・張定璠・張群・吳鏡城・俞鴻欽と市長が續いたが、俞鴻欽氏が軍服を着ない初めて市長である。年も四十二歳の働き盛りだ。岡本總領事は陸戰隊が既に開北から撤回し、本日中に虹口からも撤回すると述べた。これに對し俞氏はかういつた。

「陸戰隊がいはゆる水兵の失踪事件について十分な調査もしないうちに戦闘武装で中國の領土内を自由に活動することは非常に遺憾とするところです。不幸の結果が避けられたのは全く中國の警察が事態をうまく取扱つたからであります。私は日本の陸戰隊がこの町の平和と秩序の破壊を二度と繰り返さないやう御注意下さることを切望いたします。私は虹口と開北の騒ぎを聞きますとすぐ租界警察と一緒にこの事件を調査するために調査員を出しました。その結果二三のあやしい點が発見されました。例へばこの事件を知らせた男の名前も住所もでたらめです。又その男の外に目撃者がないといふ事實もさうです。この事件がこの町の最も人通りの多い場所の一つで行はれたといふのに外に目撃者がなかつたといふのは驚くべきことです」

日本側は實際岡崎といふ報告者が居ないのだから何といはれてもしかたがない。岡本總領事は恐らく、論理整然たる俞市長の言葉の前に陸戰隊のでたらめの行動をどうにも辯護出来なかつた

だらうと思ふ。この頃から日本の現地當局は陸・海・官の三當局がそれぞれ独自の立場で行動し、特に陸・海兩當局が自分勝手な行動を起して外務省がいつもその尻ぬぐひをするといふ傾向が現はれてゐた。日本人はそれを三權分立と呼んでゐた。やはり林語堂の「論語」月刊誌上にあつた漫遊だと思ふ。日本の軍人が野糞をしてゐると、日本の外交官が鼻をつまみながら塵取りと符をさげてわきにひかへてゐる圖があつた。この日の岡本總領事の立場はまさにこの漫遊の通りだつた。

中國側の新聞も面白がつて、上海人はこれから黄包車に乗る時には腰掛の板をめくつて、その中に岡崎某がゐるかどうかしらべてからお乗りなさいと揶揄してゐた。

この事件は間もなく意外な、日本にとつてはなはだづの悪い結末が來た。この事件の發起人たる宮崎一等水兵がひよつこ、揚子江の中から顔を出したからである。七月二十七日鎮江の船夫が揚子江で泳いでゐる一人の男を救助した。どうも日本人らしいといふのですぐに縣廳に引渡された。調査の結果、この男が上海の半分を空屋にした有名な宮崎水兵だと判つたので、直ちに彼を南京の外交部に引渡した。南京では先づ口述書を彼に作らせ、日本側に通知し双方立會の上彼を南京の日本總領事に引渡した。これで全上海を鳴動した宮崎事件の本體が明瞭になつた。結局それは氣の弱い水兵が處罰を恐れて脱走したといふだけの事件である。あまりの馬鹿らしさに上

海人は笑ふに笑へなかつた。ここに南京の外交部で発表した岡崎一水の手記がある。

「私は日本陸戦隊本部で指定されてゐない、いまい、屋に行つたところを友人の水兵に見られました。私は恐しくなつたので部隊に歸らず上海墓地の方へ逃げました。七月二十四日二十五日は上海に泊り、それから七月二十六日の八時英國の汽船に乗りました。逃げるといふ外に何も考へはなかつたのです。七月二十六日午後十一時頃私は鎮江の警察署のそばで江に飛び込みました。鎮江に着いてから山の中でその晩は過しました。二十七日の午前十時頃私は揚子江に飛び込み鎮江から向ふ岸に泳ぎ渡らうとして船夫に救はれ鎮江の警察署に送られたのです……」ただこれだけの話である。陸戦隊もこの時ばかりは流石に全上海に對して面はゆく思つたのか、司令官大河内中將は八月一日中國の官憲の協力に感謝し、かかる騒ぎを引起したることについて遺憾の意を表する聲明書を發表した。蓋しこれは「滿洲事變」以來日本の軍司令官が中國官憲に謝まつた初めての例だといはれてゐる。だがこの事件の發起人岡崎良雄といふ人物は結局現はれなかつた。岡崎が二本の足でたつてゐる人なのか、または蘆溝橋事件に負けない事件を上海に起さうとする陰謀家の頭の中に生まれた人だつたのか未だにはつきりしない。また問題の核心もそんなところにあるのではない。兩國の空氣が緊張してゐる際にこのやうな些事をもととして外國の領土内に武裝した兵を動かすといふこと自體が「戦争挑發」といふ言葉で表現されてもさしつかへないことな

のだ。相手がこれを出てくれば戦争になる、出てこなければ示威運動をただけ得だ、といふ中國を見くびりきつた日本の態度からすべてが生れてゐるのだ。

無 それから間もなく起つた大山事件も結局問題はどちらから先に打ち出したかが問題ではなく、唯戦争挑発的態度の如何が問題になるべきものだらう。

上 大河内司令官の謝罪的聲明で一時はうはついた隙をまた下しかけた上海市民は八月九日黃浦江を溯上してきた九隻の日本軍艦に少からず驚かされた。それだけではない。この軍艦と因果があるかのやうにその日の晩、午後五時三十分虬橋飛行場で二人の日本兵が射殺されたのだ。この一人が大山中尉である。虬橋飛行場は佛蘭西租界の西のはづれからもとの同文書院大學の前を通つて虬橋路——モニュメント路を西へ西へと微哩行つたところにある。この飛行場は一・二八の破壊以來中國側によつて再建され、最近特に嚴重に警戒されてゐたところである。戦時に於て軍事要地に武器をもつた外國人が入つて來たのだから誰何されて返辭がなければ殺されても仕方がないといふのが先づ常識である。ところがこの常識は日本對中國の場合には適用しないといふのもまた日本人の常識である。宮崎事件で少し頭の下りかかつた陸戦隊司令官はこの常識にもとづいて再びそり返る機會を與へられた。彼はその翌日大山事件として知られたこの事件につき聲明書を発表した。その要旨はかうである。

「大山中尉が昨夜齋藤一等水兵の運轉する自動車で上海共同租界の越界道路たるモニュメント路を走つてゐると突然自動車は保安隊にとりかこまれ、機關銃と小銃をもつて射撃された。大山中尉は多数の銃丸を身に受けて即死した。立會人は彼の頭部と横腹に銃丸が貫通してゐるのを見た。自動車の風除けは粉碎されて居り、自動車は多くの弾痕を受けてゐる。すべての情景は保安隊の極度の殘虐を語るものである。」

この報告書についてまづをかしいと思ふことは走つてゐる自動車が保安隊に取りかこまれ突然機關銃と小銃で射撃されたといふことを目撃者のない日本側が二十四時間もたないうちにどうして知つたかといふことである。大山中尉も齋藤一等水兵もその場で殺された。では誰が一體この目で見るやうな場面を報告したのだらうか。又ここでも岡崎のやうな幽霊が現はれたのか「講師見て来たやうなうそをいひ」といふがこの報告書もややそれに似たところがある。この事件についての中國側のいひ分が正しいといふ證據もないから、事實その現状はこの聲明の通りであつたかも知れない。だが事實がこの通りであつたかどうかを確かめるには相當の調査が必要なのである。戦争の危険さへ含むこの重大な殺人事件の場面を唯想像で、つち上げ、全世界の前にさも確定的事實であるかの如く報告した日本の態度は十分問題にされてよいと思ふ。

中國側ではこの事件が起ると同時に餘市長は岡本總領事と連絡してこの事件を共同調査に附し

てあくまで外交的に處理しようとして申し出た。中國側のこの事件に對する説明はかうである。八月九日二人の日本兵を乗せた自動車きたので守衛が停車させようとしたが自動車は停車しなかつた。守衛が停車させようとした時、日本兵が發砲したが誰にもあたらなかつた。中國側は少數の日本人が唯騒動を起しに來ただけなら決して發砲してはいけないといふ嚴重な指令があつたので發砲しなかつた。銃聲を聞いた保安隊が現場にかけつけると日本兵が發砲してその一人を殺した。保安隊は應戰の結果その日本兵を殺したのだ。

中國側のこのいひ分がどこまで正しいかは問題だが、しかし日本兵が兩方とも殺され誰も目撃者がないのだから、中國側のいひ分を頭から否定も出來ない。ともかく共同調査を進め、その結果を待つて外交談判を始めるといふことはこの際一番賢明な策だつたのだ。

いや確かに外交談判も始められたのである。だがその調子は初めから喧嘩腰である。誰かが日本外交を——この頃のである——「はつたり」外交と稱した。「はつたり」とは相手を手で殴らす言葉で殴つて目的物をとる強奪の一種である。ここに「はつたり」外交の見本がある。八月十一日外務省當局の聲明書の中に、「日本は華北の事件の華中にひるがることを防止するに常に慎重なる意をはらつてゐる」と述べた後で「今やすべては中國側の態度の如何にかかつてゐる。もしも中國が事態を悪化させるつもりならば日本はそれに答へるであらう」といつてゐる。



中國側が共同調査を申し込んでゐるのに「事態を悪化させるつもりならば」といふのは明らかに威嚇である。それに加へて「日本はそれに答へるであらう」といふのは威嚇を一層露骨にしてゐる。更に共同調査が既に進行しつつあるとき、日本大使館附海軍武官本多中將もまた聲明を發表した。その中で彼はやはり日本が華北の事件の地方處理に努力してゐるにも拘らず「中國側はこの事件の遷延に努めてゐる」ことを述べ、その後で「この暴行の犠牲者の生命を無駄に犠牲にしないやうに海軍當局はこの事件を十分に監視することを堅く決心した」と述べてゐる。中國側が共同調査を進めてゐるのに「事件の遷延に努めてゐる」とは明らかに事態の捏造であるし、また「生命を無駄に犠牲にしない」といふ言葉には血腥い臭ひを漂はしてゐる。

一方でかういふ「はつたり」外交が続けられてゐる間にそれを應援するかのやうに日本の軍艦は續々黃埔江を溯つてきた。既にその時上海には二十七隻の日本軍艦があつた。八月十二日には陸戦隊は戰時體制をとつて虹口の要所要所に陣地を敷いた。中國側も同様な處置をとつた。もうかうなつてはしかたがない。旅市長と岡本總領事の間には相手の發砲しないうちはお互に發砲しないといふ取極めを各國代表の前で調印したが、それは潮の押しよせてくるのを紙一枚でせきとめようとするに等しい努力だつた。もう矢は既に弦を離れてゐるのだ。

八月十二日私はこつそり様子を見に虹口に出かけた。虹口地區から逃げ出さうとする中國人が

家財をまとめ、子供をかかへてどんだんガーデン・ブリッチを渡つてくる。この悲惨な人々の群を映畫で見れば恐らく同情の涙を流したことであらう。が、その時は何とも感じなかつた。それは私が自分の安全について全身の注意を集中してゐたためだらうか、戦争といふ背景がかういふ風景を當然の事と心では認してゐたためだらうか、恐らくその両方に幾分づつ關係があつたらうと思ふ。流石に虹口の街路は無氣味に沈黙してゐた。人通りはやはりかなり多い。だが誰も彼も道のはしを歩いてゐる。道の真中には何時弾が飛んでくるかも知れないといふ顧慮からかも知れない。北四川路と老靶子路の交叉點に土塼を二、三個積んでちよこんと機關銃が据ゑてあつた。二、三人の陸戦隊がその後をむしろをしいて腹ばひになつてゐる。銃口は南北を向いてゐた。この邊はさすがに人通りが少かつた。私はあの陸戦隊員も戦争が始まれば間もなく地上から消えてゆく人達だらうと思つた。さう思ひながらも私にはやはり何の同情心も起らなかつた。ただかうしてゐる間もいつ向ふから銃丸が飛んでくるかそんなことばかり期待してゐた。その場に中國兵が押しよせて來てあの陸戦隊と突き合ひが始まつたら私は恐らくその場は去らず見てゐたかも知れない。私はこの日、他人の苦痛を見るのが自分の苦痛ではなくなつてゐた。戦争の空氣が何か特殊な毒ガスのやうに人々の正常な神経をねむらせ、あくどい刺戟だけを感じたがる神経だけを興奮させてゐたのだらう。私は血腥いことを期待しながらただ街の中をこけのやうに

歩きまはつてゐた。

歩きながらふとこの戦争でどちらが勝つことを自分は期待してゐるのかと思つた。私は確かに中国には同情してゐる。それならば日本が敗けて了ひ日本人といふ日本人が中国から追ひ出されて了ふことを期待してゐるのかといふと、さうだとはいひ兼ねる氣持がある。

「日本軍部のみが敵であつて日本人は敵ではない」

中国側のかういふ意味はよく判つてゐる。だが、その時にはその時の勢ひといふものがあるのだ、中国の識者がどんな氣持をもつてくなくても、時の勢がこの二つを區別することは期待出来ない。私はさうした甘い期待をもつ程若くもなかつた。そして今までなんのかんのといつてゐてもこんな問題にさへ「自分」が頭をつつこんでゐるのを發見してうんざりして了つた。

## 一三 巷の戦争

戦争はその翌日から始まつた。この日は八月十三日だから中國人はこれを「八・一三」と呼んでゐる。どちらが先きに撃ち出したか、それは「神のみぞ知る」である。しかし、たとへ神を證人に引つぱり出しても、もうその時は初め撃ち合つた人達は、恐らく神に召されてしまつた後だらう。この戦争はそれ程多くの人命を一瞬にして奪ひ去つた。戦争の開始から二十四時間以内に上海市民から二萬の犠牲者を出し、五十萬の人々が家を失つたのだ。私はこの日、フランス租界の下宿にすくんでゐた。大砲は流石にまばらだ。だが、機關銃や小銃はしきりなしに鳴つてゐた。煙が南北の方面に濛々と上つてゐる。しかしこの日の戦闘は兩方共相手方が撃ち出さなければ應戦しないと約束した手前からか、かなりの遠慮勝ちにやつてゐるやうに見えた。その翌日の戦闘から見ればマースの宴會のオブドールといふところだらう。

その夜は一晩中大砲や機關銃の音に惱まされ、一晩中避難民の流れがそとをがやがや通つてゐる。

た。床に入つてもなかなか寝つかれない。曉方一寸うとうとした。目をさました時はもう七時頃だつたらう。亞熱帯の太陽が床の端まで射し込んでゐた。窓の外から雑音に混つて妙に抑揚のある呼び聲が聞える。耳をすましてみると女の聲で「要不要小孩子！」と呼んでゐる。ヴェランダのところに出来越しに見ると、舗道と車道の間溝のところに三十五、六の田舎女が四つ位の男の子を前に坐らせ通行人に子供を買つてくれと叫んでゐるのだ。上海の租界に逃げ込めば安全だと聞かされて来たものの、来てみれば知り合ひもなく食べ物を買ふ金もないのでせつぱつまつて子供を賣らうとしてゐるものだらう。可愛い男の子で別に悲しさうな顔もせず、よこなんと母親の前に坐つてゐた。「誰要不要小孩子——」といひながら母親の語尾は涙に消えて了つた。

時々泣き聲だけになる。この聲が耳についてゐるせぬか私は起きたてから妙におぢつかなくつた。昨日の戦鬪の結果がどうなつたらうか、虹口はもう陥ちてしまつたらうか。それも心配になる。ボーイが持つて来てくれた中國の新聞では日本軍の旗色が悪く各所で撃退されたことになつてゐる。或る新聞などは吳淞路に便衣隊が出没してゐるやうに書いてある。新聞を讀んでゐるうちにをかした話だが居ても立つても居られない不安にかられてきた。ともかく自分の目で現場を見てこようと思つた。中國人に毆られたり殺されたりする危険は私に限つてあるまいといふ妙な自信があつた。私の下宿は滬石路フレンヂのフレンヂ、クラブの裏手にあたるところにあつた。上海に來

てから四度目に移つた下宿である。蒲石路カマシロウヂから裏を抜けて愛多亞路アワツユニイ・エトリイ・セケンに出て見るとあの廣い通りの兩側は家財を取囲んで野宿する人々でいつばいだ。道路の中央を自動車が見えながら徐行するとやつと通して貰ふだけの空間が出来るが、それも自動車を通つて了ふとすぐ又通行人でありづまつて了ふ。殆んど肩と肩とすれ合ふやうにしてその間を歩いて行く。人々の中には私が日本人だと気付いたものもあつたらう。だが私もやはり銃聲や大砲に脅かされてるもの一人だと思つたのか、それとも大砲が餘り近いので自分の專の外には何も考へる餘裕を失つたのか、誰一人私に危害を加へようとはしなかつた。愛多亞路アワツユニイから同半路トウハンロを通つて靜安寺路セイアンジロに出た。この通りは愛多亞路よりすつとおちついてゐた。まだバスが通つてゐる。私は丁度折よく前に止まつたバスの二階にかけ上つた。バスの二階といふと妙に聞えるかも知れないが、上海のバスには二階のあるがある。バスは人ごみを分けて靜かに南京路の方に進んで行つた。流石に今日はバンド行きのバスは空いてゐる。その代りバンドから来るバスはどれもこれも人が鈴なりだつた。私はこの八月十四日にバスの廻轉をやめなかつたバス會社の幹部や従業員を今でも尊敬してゐる。二階から下を見ると街の混亂がよくわかる。一臺の黄包車の上に老人を乗せ、その上に高々と荷物を積み、かつ兩側にぶらさげたのを一家揃つて押して行くのがあるかと思ふと、腹の大きい女房を小車ヒヤコチマにのせ、脊には山ほど家財を負つた亭主が押して行くのもある。車もなく男手もなく、家財

を負つたまま道にへたばつてゐる女連がゐる。誰も彼もが一刻も早く戦場から遠ざからうとあせつてゐるかのやうに見えた。バスが進んで行くと、鯉が泳いで目高の群が左右に散るやうに間をあける。丁度大新公司ダイシンカンパニーの前にかかつた頃、空に爆音が響いて來た。人々は、今度はどんな危険が迫つたかと、みな空を見上げた。氣の早いのはもう店頭に身を避けてゐる。飛行機フライングーと思ふ間もなく六、七機の編隊がフランスバンドの方から黃埔江の上空をかすめて虹口の方に飛び去つた。その瞬間、ドゥーン、ドゥーンと續けざまに私の座席に震動が傳はつた。バスの窓ガラスがびりびりいふ。中國の飛行編隊が虹口バンドに碇泊してゐた日本艦隊に爆撃を加へたらしい。乗客は我勝ちにバスを飛び出した。氣がつくと車の中は私だけだ。虹口バンドの空に黒煙が上る。高射砲が續けざまに鳴る。空にはパッパッと白い小さな綿雲のやうな煙のかたまりが上る。どのくらゐの時間そのままか判らない。やがてわあーつと聲がしてバンドの方向から恐ろしい人の波が押しよせてくるのを見た。誰も彼も西に向つて血まなこで走つて來る。今度は自動車が來ても目高のやうに左右には散らない。反對にバンドに向ふすべての交通を押し返して了ふ。西へ行く人の数は刻々増してくる。南京路は東から西へ流れる眞黒な人の流れに變つて了つた。その人々をせきたてるやうに高射砲が又一しきり激しく鳴つた。

私は今バスから下りても、とても虹口には行かれさうもないからしばらくそのまま居ようと思

つた。もうバスの運轉手は逃げて了つたらしい。私はすつかり落付いてしまつた。廣いきれいな  
應接間の窓から外をながめるやうな氣持で、よく晴れたバンドの空にパッパッと現はれる綿雲の  
かたまりを見上げてゐる。ものの二、三十分もさうしてゐたらうか、やがて下を流れる人間の潮  
流の速度が幾分ゆるくなつた頃、私は長い時間訪問してゐた友人の家から出るやうな足取りでバ  
スを下りた。まだ、切符を買つてゐなかつたことに氣がついた。バスのただ乗りをしたのはこれ  
が初めてだ。ふとかうしたときにさへ十仙得をしたと思ふ自分の下司根性がだまらなく嫌になつ  
た。

バンドの方に行かうとしたが、とても大變なことが判つたのでそのままと來た道を引き返し  
た。なるべく人通りの少いところと思つて靜安寺路から返爾西廻路の方に直角に抜けようとした  
ら、それが却つていけなかつた。

私の後の方で「東洋人だ！」といふ聲がした。その聲にひよつと振り返つたらもう二、三人人  
相の悪いのがついてくる。こんなときに下手に逃げ出したらもう駄目だ。群集といふものは動物  
の群のやうに、弱いものを追ひかけるときには非常に大膽になるのを知つてゐる。私は何の表情  
も示さず、後もふりかへらず、ただ少し足を早めて歩きつづけた。うしろはもう五、六人ついて  
來て何とか口々にわめいてゐる。そんなことは耳に入らない。最初にかかつて來た奴、その一人



だけには痛い目をさせてやらうとポケットに忍ばせた「肥後守」をひそかに握りしめてゐた。いかにも頼りない武器である。最初にかかつてくる者が血を見れば、後はしばらくかかるまいといふのが私の胸算用だつた。しかし一方にはそんな手前勝手な考へをあてにしてはいけないといふ理智も働いてゐたらしい。だから私は唯蒼い顔をして——たぶんさうだつたらうと思ふ——すうつすうつと歩いて行くだけで、私が東洋人だとはつきり判つてゐるわけではなかつたらしい。辯英は次第に数少くなつた。私はそれと知つて、初めて後をふり返り駈けるやうに急ぎ足で下宿に歸つた。ドアをしめてもまだ動悸が止まらなかつた。

下宿には二人の客が朝から私を待つてゐた。一人は山東人の鄧テイといふ中國人だ。彼はごく最近知り合ひになつたばかりだが、山東人特有な鷹揚で人の良い顔をした、氣立てもその「看板」の通りの男だつた。この騒ぎで彼の同居先に大勢避難民が移つてきたので居たたまれなくなつたから暫く私の室にとめてくれといふのだ。もう一人は日本人、三村重道君だ。三村君は二月ほど前に私を頼つて上海に渡つてきたばかりだ。彼は内地の維持法で懲役三年の判決を受けてゐた。時代がいかに悪かつた。こんな時の三年は一生涯になるかも知れないと思つて私をかかりにしてこの國に逃げて來たのだ。彼を世話したことがわかればもちろん私も別荘行きの資格は十分ある。私自身執行猶豫中の身だつたから合はせて五、六年にはなるだらう。これもまた一生涯になるか

も知れない。彼は上海に來た當座一週間ほど私と一緒に暮したが、それから間もなく僕の張さんの甥にあたる學生と一緒に暮すことになった。ところへこの騒ぎだ。中國人と一緒に居ると自分とはともかく相手の人を危険にするといふので私の部屋にころげこんできのであるた。

この二人の食客が來てくれたおかげで私はすっかり氣丈夫になつた。老鄧は私が外に出てはあぶないといつて早速意飯に山東料理の腕をふるつてくれた。午後からは大砲や爆音や高射砲が益益はげしくなつてきた。道路をへだてて直ぐ前のフレンチ・クラブの水泳場に高射砲のそれ弾が落ちたときなどは思はずドアの外にかけ出してしまつた。午後の四時を少し廻つた頃だ。ヴェランダから空を見てみると丁度中國の飛行機が虹口を爆撃して租界の上空に歸つて來た。その後を追うやうに高射砲が白い雲のかたまりをパッパッと空に投げつける。なかなかあたらぬ。やがて中國機が一臺爆弾を投下するやうに降下したかと思ふ間もなく、私はドンと空氣の衝動を強く身體に感じてよろめいた。家のドアや窓ガラスが一度に非常な勢ひで開かれた。何かガラガラ落ちてきた。よほど近くそれも明らかに租界の中に落ちたらしい。中國機が租界を攻撃する。そんなことがありえようか。私にはどうしても説明がつかなかつた。老鄧や三村君とも話したが結局結論が出ない。老鄧は街の情報を聞いて來ようと外に出て行つた。三村君は以前の下宿から荷物を運んでくるといつてこれも外に出て行つた。

午後七時頃歸つて來た老鄧や三村君の報告によつてその日の朝の爆撃はやはり中國の飛行隊が虹口バンドに碇泊してゐた旗艦「出雲」を爆撃したものだとなつた。中國側はその前から日本の軍艦が租界内に碇泊しながら中國軍に攻撃を加へてゐる事實を指摘し租界當局に抗議を申込んでゐた。租界當局が日本の軍艦に租界の軍事的使用を許して置くならば、それからどんな損害が起らうと中國側は責任をとらないと聲明した。中國側の理窟は通つてゐる。家の中から銃砲を打つやつがある。それに應戦して打ち返した彈丸が家にあたつて瑕をつけても知つたことぢやないといふのだ。しかし誰一人この聲明の最後にある「どんな損害がおこらうと中國側は責任をとらぬ」といふ言葉に大きな意味があるとは思はなかつた。否、かうはいつても、中國側がよもや租界に損害を加へる勇氣はあるまいと高をくくつてゐた。この中國を見くびつた考へが如何に間違つてゐたかをはつきり示したのがこの日の爆撃だつたのだ。

この爆撃はしかし的を逸した。爆弾の一つが虹口バンドの碼頭を破壊しただけで「出雲」は依然として碇泊の位置を變へなかつた。爆撃で驚いた人々は狂氣のやうになつて虹口から逃げ出さうとした。その人々の流れがガーデンブリッジを押し渡らうとした。橋を守つてゐる陸戦隊員がその流れをせきとめようとした。恐らく彼等はいふ命令でも受けてゐたのだらう。だが人間の力でこのやうな勢がとまるものではない。陸戦隊員はどうしたはずみか前の方に押し出された

中國婦人を二、三人銃剣で突き殺してしまつた。これからが悲劇の連続である。

午後四時頃來襲した中國機は再び「出雲」を攻撃しようとした。だが爆撃の標準は大きく狂つて爆弾の一つは群集の雑踏してゐる南京路カセイホテル前に落ちた。約百五十人の人間が即死し、四百人が負傷した。その時來襲したもう一つの中國機はどうした間違ひか爆弾を租界の眞中で落してしまつた。落ちた場所は租界の眞中も眞中英佛兩租界の中間、私のよく遊びに行つた愛

多亞路の「大世界」の前なのだ。避難民がこつた返してゐたその中に百キロの爆弾が落ちたのだから死傷者の數やその悲惨な狀況は想像に餘りがある。この一つの爆弾で約六百人が即死し、一千人が負傷した。丁度この時この爆発の現場に居合はせた英國人記者ヘンリー・ジョン・メイ氏はその有様をかう書いてゐる。

私はこの角——大世界の——から五十ヤード程離れたところから飛行機を見上げてゐた。高射砲弾が飛行機の周圍に爆發して白い煙がたつてゐる。飛行機が急に針路を變へ軍艦からの攻撃をはつて大世界の上を飛んで來た。何か一寸ゆらいでかしくやうにしたがやがてもとの地位に戻つた。私は街の前方を見た。一人の薄背い服を着た中國人の娘が男と話してゐた。彼女は二十歳以上には見えなかつた。するとその時私は見た。彼女の顔が恐しい外科手術でもされたやうに、突然頭部から切りとられた。切り口がぱつくり開いてゐる。それから彼女の胸體は空懷のやうにぱたりと地上に倒れた。彼女のそばに居た男は見えなくなつてしまつた。恐らくこなごなに吹きとばされてしまつたのだらう。

私の目は多くの頭や足や手が空中に飛び上つたのを見た。それから眞赤な火、眞黒な煙でつまれた

自動車。私の耳は爆發の鈍重な音響を聞いた。それから百萬人の喉から出たうめき聲。私は兩手で眼を蔽つて壁に向つて半ば倒れるやうによりかかつた。

この現場はその日のうちにすぐに清掃された。トラックが何臺も用意され、受傷者は手早く病院といふ病院に手分けして運ばれた。廣慈病院などは入りきれずに門の前の敷石の上になかせてあつた。死者はマグロを積み重ねるやうにトラックに乗せてどこかに持ち運ばれた。この血腥い事件が中國人をどのくらゐ刺戟したかわからない。流石ふだんあれほどおとなしい中國人が日本人の血を見ようと急にたけり立つた。

租界では日本人と見れば殴り殺された。朝鮮人で虹口に行くことをこはがつて租界に止まつてゐた人々なども見つかり次第群集に殴り殺された。中國人でも日本人に似たものは災難だつた。

フィリッピン人もよく日本人と間違はれた。フィリッピンの拳闘家マヨはそのために群集にノック・アウトされ廣慈病院にかつぎこまれた。流石に殴られることが商賣だつたのですぐ意識を恢復して病院を出た。そのとたんに又間違はれてノック・アウトされた。街々には恐ろしい流言蜚語が飛んだ。多數の漢奸が日本の特殊使命を帯びて租界に侵入してゐるといふのである。彼等は井戸に毒をなげ、家に放火するといはれた。金神父路オキシヤブで夫が病氣のために醫者から薬をもらつて歸らうとする婦人が群集から止められた。群衆の一人が持つてゐる藥瓶が毒藥ぢやないかといつ

た。群集の後ろの方では「毒藥ぢやないか」がいつの間にか「毒藥だ」になつてしまつた。そのうちに誰か一人が「漢奸だ」とどなつた。これで「完了」である。婦人は忽ち地上に殴り倒された。後でやつと事情がわかつたときは婦人はもう冷たくなつてゐた。一人の廣東人がある街を歩いてゐた。街の名前は今記憶にない。手に日本の雑誌か何かを持つてゐた。これが不幸の原因だつた。「漢奸だ」といふ聲がした。群集につかまつて尋問された。廣東人だからあまり上海語はうまくない。忽ち漢奸にされてしまつた。その結果は——彼がやつと意識をとりもどしたのは病院のベッドの上だつた。

私が老鄧からかういふ街のニュースを聞いてゐる時ドアが急にノックされた。群集がいよいよ私を見つけたのではないかとどきどきとした。すぐ老鄧が立つてドアを開けると、以前救國會の關係で一寸知つてゐた巽といふ女の子だつた。明日重要な話があるからフランス公園の正門前のK職業學校まで来てくれといふことだつた。私はかならず行くといつて先づ巽を返した。無神経な私も流石に少し薄氣味が悪くなつた。彼等がなぜ私を呼び出すのかと思ひまどつた。といふのは老鄧から私が虹口にも逃げないで租界の中にうろついてゐるのはをかしいといふ噂があると教へてくれたからだ。私は或ひは明日あたり街の中で殺されるかも知れないと考へた。さう考へても案外自分がおちついてゐるのを心強く思つた。私は人前では大膽らしく見せてゐるがその實、氣

が小さく自分が臆病なことをよく知つてゐた。どうしたらそれが治るかと思ふ工夫して來たがい  
 さといふ場合にはすぐきぢが現はれてしまふ。生れつきだからやむを得ないと思ひながらもいつ  
 もそれを残念に思つてゐた。それがこの日の経験ですつかり自信をつけた。その場にゆかなけれ  
 ばわからないが、先づこれならば人並みに死ぬると思つた。でもその後からすぐこんなことをく  
 よくよ前から考へるのはやはり弱氣の證據ぢやないかと思つたりした。

その夜も一晚中軍神の舞踏會が續いてゐた。

## 一四 人われをスパイと呼ぶ

八月十五日、老鄧が豚肉とニラを辛く煮てくれたもので簡単に朝飯をすませ、そのままお茶も飲まずに裏口から表に出ようとした。老鄧は今日の會合には行つてはいけないとしつこく止めたが私は頑固にふりきつた。銃聲や機關銃の音は遠いが大砲はすぐそばで響つてゐるやうに聞えてくる。その度にチリチリと空気が震動するのが見えるやうだ。蒲石路は相變らず避難民でごつた返してゐる。弄堂ロシヤの入口を出て左へ廻らうとしたとき、あぶなく襦袢に包んで棄ててある赤兒につまづきさうになつた。よく見るともう死んでゐる。顔色が透き通るやうに白く別にやせてもゐない。親がもう養へないと見てここに棄てたものか、死んでから弾るところもないのでここに棄てたものか、いづれかであらう。その可愛い死顔を見てゐるうちにフト妙なセンチメンタリズムが私を捉へた。若し戦争が一昨日起らなかつたら恐らくこの子はまだこの世にあつて無邪氣な顔で笑つてゐたことだらう。たとへこの子が病氣で死んだにせよ、この子をここに殺したものはこ



の戦争なのだ。私はこの戦争を起した無限の因果律をこの子の死顔の中に見た。その因果律の中で一番手前に連なつてゐる数々の因果關係、その中に躍つてゐる人々、蘆溝橋事件を起した出先の日本の軍人連、國內で戦争記事を書き煽つた新聞記者達、軍事豫算を満場一致で可決した議員達、國家のためと思つて現在一生懸命に虹口で闘つてゐる陸戦隊長、これらのすべてを後からあやつつてゐる侵略主義の軍首腦者達、又それと共同謀議をしてきた官僚政治家などが一時に頭に浮んだ。彼等は皆この子の死についてそれぞれ責任があるのだが、今、日本人の中に誰が一體この赤兒の死について自分の責任を考へてゐるだらうか。この赤兒は確かに戦争で殺されたのだが誰一人この子を殺したことを考へて見ることもないといふ事實、戦争の眞に廣汎な殘酷さはここにあるのだと思つた。昨日まであれ程血腥い事件にぶつかりながら私の感情は小波一つ立てなかつたが、今この子の可愛い死顔を見てそれが大風にあつたやうに動搖してゐるのを知つた。私は今までただ「知る」ことは意味がない、頭の中でどんな細かい繪畫を畫くことが出来ても、それだけでは人間は動くものではない、その繪畫に血が通つてそのまま人間を動かすやうな實感のこともつた繪畫を畫き得る識り方ではなければならぬとよく聞かされてゐた。そのやうな識り方はただ知識を機械的に積みかさねても達するものではなく、與へられた何かの「機」にそれを悟らなければほんものではないといはれてゐた。この赤兒は私にとつて恐らくさういふ「機縁」だつたの

だらう。私は戦争の残酷さを初めてこのやうにして識つたのだ。それと同時にこの赤児を殺した因果律の中に自分も一枚加はつてゐることを深く反省させられた。といふわけは——あつさりいへば私自身、當時日本の軍事機構の中に入つてゐたからだ。

これは書きたくない事だが、たうとう書かなければならぬ破目になつたから書く。私はこれから説明するやうな理由で——そしてそれには読者も恐らくあきれ返るだらうと思ふが——僅かながら軍から妙な金を毎月もらつてゐたのだ。かういへば私が今まで中國に同情した口ぶりだつたり、軍部の中國侵略に全く反對のやうに書いてゐることがみんな嘘に聞えるかも知れないが、しかし私のさういふ感情は決してうそではなかつた。そりやなほ悪い、悪を知らずして荷擔したならばまだ許されるが、知りつつやつたのだから、どんな墮落したインテリさへお前には顔まけたといふ人もあらう。私はさういはれても仕方がない立場にあつた。少くとも表面の事情から見れば私には何等辯解の言葉がない。辯解したくもないがただ私がなぜさうなつたか、それについては簡単に説明する必要がある。それは今迄書いたこと、これから書くことに大きな関係があることだ。これから多少私のつまらない履イッナル・ヒストリ歴にふれることを許して貰ひたい。

私は巴金の「家」チヤを讀んだ時に日本も中國も私達の世代はよくまあかうも似かよつた生活經驗をして來たものだと感心させられた。

この「家」の主人公覺慧の父は知縣をつとめてゐた地方の名望家だつた。元來この大きな紳士の家には——と巴金はかう書いてゐる——下男、僮夫などが數十人居た。これ等の人々は各地から集まつて来て同じやうな運命の下にここに固まつてゐた。彼等はそれまでお互に知りもしなかつたのだが、今僅かばかりの勞銀のために同じ主人に仕へ、同じところに生活し、一つの大きな家族のやうに仲よく暮してゐた。彼等の間には利害の衝突がなかつた。誰も彼もが主人の怒にふれるとその翌日からどうして暮してゆくかわからない身の上だつたからだ。彼等のこのやうな状態は覺慧の同情をひいた。彼はかういふ環境の中に少年時代の一部を送つた。彼は下僕達から敬愛されてゐた。彼はよく馬屋の中にある僮夫の寢臺の傍らに坐つて、やせた僮夫が阿片を吸ひながら彼の若い時の事を話すのを聞いた。彼はよく馬屋の中で下僕達とたき火を圍んで彼等の語る劍聖、俠客の話に耳を傾けた。その時彼は將來大きくなつたら金持の金をとつて貧乏人にめぐむ劍俠になり、家といふものをもたず一身を一劍に托して全國を漫遊しようと思つてゐた。彼はこんな自由な生活は又とあるまいと考へた。後、彼が中學に入つた時家人からもう大きくなつたのだから主人らしくして下男と一緒に遊んぢやいけないといはれた。それから彼の世界は又すつかり變つて來た。本を読み、また教師から話を聞いて、彼はいつの間にか熱烈な愛國主義に感染してしまつた。彼は梁任公の煽動性を帯びた文章の愛讀者となつた。この時彼の愛読書は「中國魂」

と「飲氷室叢者」だつた。彼は梁任公が「國民淺訓」の中で主張してゐた徴兵制に賛成し、筆を投じて戦に赴く氣持にさへなつた。しかし、その時五四運動が突然におしよせて、彼に一つの新しい世界を與へた。梁任公の主張はめちやめちやに粉碎されてしまつた。彼は非常な熱心でこの新しい且一層急進的な學說を受け入れようとした。彼はいつのまにか長兄から「人道主義者」と呼ばれるやうになつた。そして人々は彼の「人道主義者」を嘲笑した。長兄が彼をかう呼んだ第一の理由は彼が驕に乗ることを肯んじなかつたからだ。その當時彼は「人生の意義」と「人生問題の發端」等の文章を読み、人生の意義について思索し始めてゐた。最初彼は理解出來たのはごくぼんやりした概念に過ぎなかつたが、生活の經驗、特に最近の監禁生活の間に於ける内心の鬭争と書物の研究は彼の視界を廣くし、だんだん人生とは如何なるものか、人生は一體どうすればよいか彼にはつきりしてきた。そして彼は今までの様な青春の浪費に過ぎない生活を憎んだ。彼がこのやうな生活を憎めば憎むほど彼の周圍には彼をかこむ無形の柵があつて彼をこの生活から脱出させないやうにしてゐるのがわかつた――

ここに書かれてあることは中國のインテリの大部分が經驗してきたところぢやないかと思ふ。同時に、日本でも我々の世代は大ていこれと似たりよつたりの生活經驗を経てゐるのぢやないかと思ふ。今試みに「私」の場合を「覺慧」のそれ式に書いてみよう。ここでは便宜上第三人稱

で書くことにする。

彼は徳川時代の末期から續いた江戸の彫刻師の家に生れた。家には三、四人の弟子を使つてゐた。彼はランプの下で弟子達がコツコツ働いてゐる仕事場でよく遊んだ。そして彼等の話す講談や浪花節の人物の話に耳を傾けた。彼は將來大きくなつたら金持の金をとつて貧乏人にめぐむ劍俠になりたいとは思はなかつたが、塙圍右衛門や後藤又兵衛のやうに強くなり——少くともいつも彼をいちめる隣りの男の子より強くなり——全國を漫遊したいと夢みてゐた。もつとも彼はその當時、塙とか後藤といふ人物が水滸傳の晁蓋、青面獸楊志、黒旋風李逵、さては三國志の趙子龍、張翼徳をこね合せて造つた人物だとは知らなかつた。小學に入つてからいつのまにか世界が變つて來た。彼は熱烈な愛國主義に感染し、押川春浪の侵略主義的煽動性を帯びた文章の愛讀者となつた。この頃の彼の愛讀者は「怪人鐵塔」「新日本島」「武俠艦隊」だつた。彼は人種戰爭に賛成し、又學校のかばんを投げ出していつでも戦ひに赴く氣持さへあつた。もつともこの方がすつと面白いと思つてゐた。中學に進むやうになつてから彼の愛國主義は一層具體的になり日本民族の發展は南洋に行つてゴム園を經營するにありと考へ、十六、七の時眞面目に單身渡航の計畫を立ててゐた。これはもつともその頃父に死なれ、家が貧乏になつたので早く金持になつて母を安心させてやりたいといふ氣持ちも手傳つてゐた。しかし歐洲戰爭が終了し、日本に民主主義の

潮流が突然におしよせて來た時、彼の前に又一つの新らしい世界が開かれた。押川春浪の夢——これはずつと前に消え失せてゐたが——や海外發展計畫はたちまち粉碎され、彼は非常に熱心にこの新しい且一層急進的な思想を受入れようとした。最初は彼も「人道主義者」になりわざわざ日向の新しい村に行つて武者小路さんに會つたり、その頃大塚で「呻吟者の職工を十五、六人築めて器具工場をやつてゐた榮善社で働いたりした。また人生問題の煩悶もあつて「人生とは何ぞや」などとわざと深刻さうな顔をして上野の山を歩きまはつたりしてゐたが、これはやがて戀愛問題が起ると雲散霧消してしまつたところから見ると事實は決して深刻ではなかつたらしい。大學を卒業してから米國人經營の鋼鐵會社に入社した。先づ職工見習を一年やれと工場に入れられた。ここでサッシュェやドアをカンガンたたきながらやうやく半人前の鐵工になりかかつた頃には思想の方は既に人道主義を乗りこえてマルクス主義に一步入りかけてゐた——

かう書いて見ると私達の世代の人達ならああお前かと頷く人が多いと思ふ。人間は自分で人生を切り開いてゐるつもりのだが、その實、時代のもつと大きな力に動かされてゐるのだ。その力を「神」と考へるか「生産力」と考へるかが問題で、私はそのころ多くの青年が歩んだ足跡を通じて「生産力」だと考へるやうになつてしまつた。しかしマルクスズムに興味をもつことは世俗的な願望と兩立しないことを知つてゐたのであるべく政治面には深入りせず、唯研究だけに止め

たいと思つてゐた。がさういふことは結局不可能だつた。時代の大きい力の前に個人がどんなに  
 もがいても行くところまでは押し出されてしまふらしい。私は研究のために會社をやめて或る私  
 立高商の教授に奉職したが、その學校經營があまりインテキなので私が先に立つて教員の互助會  
 をつくつた。これがいけないといふので學校を追ひ出された。今考へると随分亂暴な校長もあつ  
 たもので私を「赤」だと文部省に報告した。それ以來私は教育界からシャット・アウトを食つて  
 二度と勤めることを断念しなければならなくなつた。仕方がないから古本屋を開いた。こんなく  
 だらなことをくどくど書いてゐても仕方がない。これからは要點だけにしよう。そこに來る容  
 の中に左翼の政黨に關係してゐる人が居た。或る時自分達の會合があるから私のうちの二階を使  
 はしてくれと否應なしに頼みこまれてしまつた。その會合が共產黨の中央委員會だつたのだ。そ  
 の日集まつたのは今考へ合はせると風間丈吉・岩田義道・紺野興次郎、それにMといふ男だつた  
 と思ふ。一番年長者が岩田君で當時三十五六歳だつたらう。まだ若いのもう頭の毛が少し薄く  
 なつてゐた。どこか田舎の中學教師のやうな感じだつた。

實をいふと私は自分自身左翼の思想をもつてはゐたが、それまでに會つた左翼の人々にはどう  
 もあまり感心出來なかつた。結局彼等は左翼思想を持つてゐる人も普通の人間なのだといふこと  
 を識つてゐないのだ。さういふ思想を持つてゐるからといつて特にえらいわけでもなく特に悪い

わけでもないのだが、彼等は人間としてのえらさが思想の新らしいとか舊いとかいふものとは別問題だといふことを少しも考へてゐない。ブルジョアはすべて悪く、左翼はすべてよいといふ思ひ上つた信念をもつてゐたのだ。この點ドストエフスキーにしるトゥルゲネーフにしるロシヤの革命家についてそれぞれ鋭い觀察をしてゐるが、私は特にトルストイが「復活」の中でネフリュードフに觀察させてゐる言葉は面白いと思ふ。トルストイはかう書いてゐる。

彼等と親しくなるにつれて、ネフリュードフには彼等が多くの人の考へてゐるやうに醜人ばかりでもなく、さりとて彼等の一部でその仲間の者を考へてゐるやうに英雄ばかりでもなく、みんな普通の人間では現在行はれてゐる罪惡と闘ふのが自分の義務であると眞面目に考へては革命家になつたものもあるが、中にはまた利己的な功名心とその動機となつてゐる者もあつた。併し大部分はネフリュードフが戦時の經驗でわかつてゐるやうに、危険や冒險的なことを望んだり、生命を弄んだりとかく血氣盛りの青年時代に特有な感情によつて革命にひきつけられてゐるのであつた。彼等が一般の人と異なつたよい點は、彼等の間の道德的要求が普通一般の社會で考へられてゐるよりも遙かに高い点にあるので、彼等の間では節制、租衣、租食、眞實、濟廉などが必ず守るべき信條とされてゐるばかりでなく、社會公共のためにはすべてを犠牲にし、或は自己の生命をも棄てるのが當然の義務と考へられてゐた。だから彼等のうちの中くらゐ以上の者はネフリュードフより遙かに優れた人物であつたが中位以下の者になると彼に劣ること數等でそれらの多くは不正直で、偽善で、その上に自徳が強く高慢であつた。従つてネフリュードフは新らしく知合ひになつた或る者には極端に無關心であつたけれどもまた或る者には心から



の尊敬を捧げた。

私はネフリードフではないけれども、新らしく知合になつた左翼の人々には人格的にあまり感心はしなかつたが、岩田義道にだけは心から尊敬を捧げた。彼から要求されるままに住宅の世話などしてやつたので一層親しくなつた。彼はかくれてゐるうちに英語を習つて置きたいといふので私は知り合ひのリリコと呼ぶ米國の青年に紹介してやつた。リリコは極東研究のために殆んど無一文で日本にやつて來た新聞記者でよく日本の事情を本國に通信してゐた。先日このリリコが米國でも有數な極東通になつてゐることを新聞で知つた。

岩田の英語は京大を出たといふのに下手くそで會話などは殆んど中學生の學力もなかつた。それにも拘らず私は彼の人格にぐんぐん惹かれて行つた。私はそれまで、政治運動に關係することを随分思ひなやんでゐたのだが、結局この岩田の人間にひかされてルビコンを渡つてしまつたのだ。私にはもうその時には二人の子供があり、年もとつて居り、生活もどうか安定してゐた。それに主義のために生活の一切を犠牲にするほどの信念もなかつた。だからこの岩田がゐなかつたら私は恐らく政黨と關係を持つことがなかつたらうと思ふ。私は仕事だけはよくやつたので入黨すると間もなく資金局のB班といふのに配置された。B班は黨のために大口資金を獲得する部門でもと九大助教の杉之原舜一君と河上肇博士の義弟の大塚有章君私の三人で出來てゐた。黨

からB班に要求してくる金額は月を重ねる毎に増して来て私はたうとう毎月三千圓の責任額をもたされた。これだけは如何なることをしても集めてこいといふ命令なのだ。當時の三千圓は一財産だつた。だから結局無理なことをしなければならぬ。このやうな事情の下に於ては大塚有章君が後に大森のギャンブル事件の「おちさん」になつたのもあの人の生真面目な性格から當然のなり行きだと思ふ。私は普通に寄附金を集めてゐるだけでは追いつかなくなつたのでその頃洲崎にあつた或る私立の飛行學校の經營に割り込んだ。或るシンパサイザーから金を出させて經營困難になつてゐたこの學校に投資させ、その半額を黨に寄附させるもくろみだつた。私はそのシンパもこれからこの學校の収入で生活が立つから双方共によい計畫だと思つてゐた。だが世間には私達より遙かにスマートな人達がゐた。その學校の校長は私達からとれるだけ金をとり、もう出ないと思ふところに私達を密告してしまつた。實にたあひなく第一卷の終りである。これだけのことを政府は飛行機で宮城を爆撃する企てがあつたかのやうに新聞に書かせたのだから、随分罪が深い。市ヶ谷でつくづく考へた。自分は英雄でもなんでもなく、自分の家庭を養ふ責任を世間一通りの義理人情とわきまへてゐる俗人であることかよくわかつた。それにもう一つはつきりわかつたことは私にはてんで階級意識といふものがないことだ。警察で特高刑事に對してさへ私は階級的憎惡を感じる事が出来なかつた。彼等の生活を見ると全くみじめで、食ふや食はずの月給で

自由をしばらくされてゐることがわかつた。左翼思想に對しても心から反感を持つてゐるものはずなく、大部分は上からの命令でただわけもわからず動いてゐるに過ぎない。我々に對するあの尊大な態度も役所生活でふだん上役からいぢめられてゐる鬱憤の反動のやうに思へた。實際の話、私は彼等を憎むといふ氣持より寧ろ彼等があはれにさへなつてきた。私はこんな自分を見つめながら自分は到底階級闘争などをやる柄ではないとあきらめてしまつた。だから法廷では階級闘争は悪いとは思つてゐないが私は自分の生活が可愛いから二度と黨組織に入りませんとあつさり轉向してしまつた。今私の手許に當時裁判所に出した保釋上申書の寫しがある。お恥かしい限りだが、ここにそのまま載せて見よう。

私儀本日別紙保釋願ひを提出致しましたがそれにつき家庭の事情及び其の後自分に起つた心境の變化等此處に上申致します。

(一) 自分の家に殘されてゐます妻は長男及び長女を抱へて醫藥面を續行して居りますが、妻子共に多病、その上稼ぎ人の私が居ないこととて収入も少く荻窪にありました家作等も最近賢却し家計に當てて居り、家事整理の必要は切實になつて居ります。

(二) 家庭に對して自分は運動中も常に顧慮して居りましたが、其の當時はかかる顧慮は眞理追求の前の懊惱と考へ、一時は妻子と別れようと考へて居りましたが、結局それは自分の感情の上で不可能だつたので私は情理のデレンマに陥り成る可く此の問は考へまい考へまいとして居りました。拘禁後も自分が常に煩悶して居りましたのは此の問題で、最初のうちは此の弱い感情と戦ふことに

努めて居りましたが、どう考へ直しても思ひ切ることは出来なくなりました。

(三) 最近特に長男が重病にかかつたことを聞き又それについて妻子、親子の情愛にふれ、自分の心の動搖をなぐるにつけ、自分は家庭を棄てて運動を續行することは到底不可能なことが判りました。これは一時の感情かも知れないと反省して見ましたが、英雄か聖人ならともかく自分としては何と言はれても再び運動をする気にはなれさうもありません。そればかりか今までの経過から見ても自分は不可能なものを韋念的に強いて可能として考へてゐたのではないかと考へるやうになりました。特にブチブルとしての生活を營んで來た自分がかかる運動に参加したことは、その志はともかく、其の實際に於ていささかドンキホーテ的なものではなかつたかと切に感じ、最近豫審判事から保釋について「大抵大丈夫だ」と聞かされたのが妻から子供に傳はり「お父さんは來るか來るか」とせがまれて居るといふ家信を得て最早意地もなく外聞もなく、自分には自分の生活が運動より一層切實なもののあることを知りました。

今後運動は断念します。何卒事情御變察の上保釋の件御許可の程御願ひいたします。

昭和八年六月二十一日

人々は私の意氣地なしを大いに笑つたが、私は割合に平氣だつた。人々にあせい、がいいといはれたために皮膚のただれるやうな熱湯にはいる江戸つ子を私はすこしもえらいとは思つて居ない。私はどんな生活でもよい、自分にうそのない生活を送つて行けばよいと思つた。

しかし一度社會に出て見ると又社會には社會の風が吹いてゐた。時勢は益々反動的になつてきてゐる。軍部の中國侵略計畫は益々露骨になつてゐる。世界戦争の危険は目前にひかへてゐる。

私がどんなに靜かに暮さうとしても戦争ともなればそれは私を家庭からひきちぎつて行くことはわかりきつてゐる。私がどう逃げようとしてもかういふ情勢が私の目から耳から入つてきて私を刺戟するのを防ぐすべはなかつた。私は英雄ではないが人間である以上この情勢にただ手を拱いてゐてはならない。何かしなければいけない。この情勢について日本人に警告しなければいけないといふ氣持が起るのは極めて自然だつた。しかし私は二度と黨組織に入らうなどは考へてゐなかつた。又監獄に入るのも嫌だつた。私ははつきり自分が階級意識のない、従つて共產主義者でないことを知つてゐたし、又一度捕へられたものがそんなことをするのは目印をつけられた魚が魚群のあり場を教へるやうな役目しかしないことをよく知つてゐたからである。私はこの情勢の下に於て私の出来る仕事について考へた。そして考へつたのが日本の人々にこの情勢についての注意をうながすための合法的雑誌の發行だつた。

それからの経過は「序にかへて」に書いた通りなのであるが、ただそれだけではない。そこにもう一つその裏面の経過がある。それが即ち私と軍部との關係にふれてくる。

私の雑誌は前に述べたやうに實によく監視廳から彈壓された。殆んど出る度に發禁である。監視廳はもろん經濟的につぶしてしまふ積りらしかつた。だがこちらも眞險だつたので色々な對策を考へた。當時の新聞紙法によると發行禁止處分に付しても紙型の押収は出来ないことになつ

てゐる。私はその規定を逆に利用した。先づ雑誌が發賣禁止になることを豫想して極く僅かしか印刷しない。發行すると同時に特高から押収に來る。そこにあるだけを残らず渡してやる。直ぐその足で内務省に行き、どこが悪くて發禁にしたかとその個所を聞いてくる。先方はやむを得ずそれを致へる。再び大急ぎで印刷所に行きその個所をけづりつつ、改訂版として今度は本式に出版する。この方法で行けば如何に發禁を食つても經濟的に損害はない。特高の方は私がどうして發行を繼續するのか不思議に思つたらしい。結局發禁といふ方法ではだめだとわかつたので私を無理やりに治安維持法にひつかけることを考へてゐた。

私の雑誌によく執筆してくれてゐた人々の一人に神川茂夫君があつた。神川君を思ふといつても私はトルストイの「復活」の中に出てくるノウォドウウオーロフといふ人物を思ひ出す。トルストイは彼をあまり好いてゐないと見えて彼についてかういつてゐる。

同じ革命家仲間から猛烈に尊敬されてゐたし、また非常に學問があり、素晴らしい智者を以て自他共に任じてゐた……この男の智力——その分子——は相當なものだつたが、併し、自己に對する彼の評價——即ちその分母は計り知られぬほど大であつて、それはもうとうの昔に、彼の智力を凌駕してゐた。

……同志の諸君は大膽で果敢な點で彼に尊敬を拂つたけれど、かれを愛してはゐなかつた。彼もまた何人をも愛する事なく、傑出せる凡ての人々には、競争者に對する如き態度で接し、出來る事なら、老獪な豺狼が仔狼共をあしらふやうな、あの傳で行きたいと思つてゐた。彼はまた自己の才能の發現を阻害

されたくない一心から、他の人々の保有する一切の才智才能を根こそぎにたく思つたに違ひない。要するに、彼が温かい態度を以て接するのは、自分の前に跪坐禮拜する人達に對してだけだつた。

神川君はここに述べられてある限りに於て、又他の個所で述べられてある悪い面を取りのぞいて確かにこのノウォドウウォーロフに似たところがある。彼の自信はすばらしく強く、彼の智力も——私が感じた限りに於ては——それに匹敵するほどすばらしかつた。しかし當時彼をすばらしい理論家として認めてゐるものは極く少數の人々の間だけだつた。私はその當時からその少數の一人だつた。だが私は彼に理論的には服することが出来ても、それ以上にどうするといふ感情は持てなかつた。私達は距離は近かつたが、いつも一定の間隔を置いて話してゐた。

ところが或る日私のところに毎週一回づつ顔を出してゐた憲兵軍曹が、私が近くこの人の事件に連座して警視廳に引つぱられるといふ暗示を與へてくれた。私は既に書いたやうに自分に階級の憎悪といふものがないので彼等も私にはあまり悪感もたなかつたらしい。特にこの憲兵は私に非常な好意をもつてゐるやうに見えたし、又彼と警視廳との間には職務上の軋轢があることも知つてゐたので私はこの暗示を眞面目に考へる價值があると思つてゐた。そして萬一の場合に於いての手順をすつかり考へてゐた。それから一週間ばかりたつた或る日案のじやう私は神川君の逮捕と同時に拘禁されて、しかもその日の夕刊には私が神川君のつくる共産黨のアジプロ部長だ

つたと寫眞入りで載つてゐる始末である。實にあぶないところだつた。係りは矢野といふ警部だつた。相手がかういふやうにでたらめな事件をでつち上げて罪もないものを罪におとす氣なら、こちらもと私はかねて用意してゐた或る證據を提出して警視廳の謀略を證明しようとした。しかし先方はそんなものでは納得しさうもない。私は結局その證據を私にくれた憲兵軍曹の名前を出して了つた。その憲兵には迷惑をかけてすまないとは思つたが、萬やむを得ない仕儀だつた。それから警察と憲兵との喧嘩になつた。その憲兵も始末に困つてしまつたので私とその憲兵軍曹のスパイであるといつて私を引き取つてくれた。これで警視廳のつくり上げようとした事件もおじやんになつてしまつた。神川君もその事件に關する限り何の<sup>と</sup>がも受けなかつた。私は今でもこの事件についてはその憲兵の處置に感謝してゐる。さてそれからだ、その憲兵は私を内地において又かかり合ひになることをあぶなく思つたらしい。それにその憲兵としてみれば上司に私をスパイとして使つてゐると報告してしまつた以上何か私に仕事をさせなければ自分の面子がなくなる。しかし私はスパイをする意志はなかつたし、又組織の外に居るのだからスパイをしたくも出来るはずはない。そこで私に何か國際情勢に關する論文を書いてくれといふ。それなら私にも出来るから早速書いてやつた。それから話が意外に發達してきた。私の書いた國際情勢の分析が參謀本部のロシア班の人々の興味を惹いたと見え——恐らくその憲兵が私をその道の大家として



賣り込んでくれたのだらう——私が若し上海に行き、さうしたものを續けて書いてくれるなら生活費くらいは出さうといふことになつた。私は内地に居ても何一つ良心的な仕事も出来ない状態なら一つ外國にでも行つてやれといふ氣になつてゐたから二つ返事でそれを承諾した。

なぜ上海を選んだか、これには一定の目算があつた。私は自分はまだもう運動はしたくないし、又左翼思想の人々に人間的に感心する人物は少かつたが、それにも拘らずほんとに黨を再建しようとする眞面目な革命家を何とかして助けてやりたいといふ氣持だけは残つてゐた。この人々が、當時一番困つてゐることは國外との連絡が切れてゐたことだ。その頃岩田義道の妻富安君や神川君がしきりに國外との連絡をつけたがつてゐた。私は私のルートを利用してその連絡者を上海まで安全に送りとどけてやらうと考へてゐた。それで私は過去に對する私の義理の一つを果すつもりだつた。既に述べた三村重道君は神川君からかうしたいいきさつで私のところに送りこまれた人だつたのだ。

かういふわけで私は自分としては良心にもとることは何一つしないつもりだが、外部から見れば明かに軍の機密費をもらつてゐる一人だつたのである。そして今日八月十五日の朝この軍のスパイたる私は中國側の戦線の内部で催される抗日學生の會合に出席しようとな家を出るとたんにあぶなく死んだ赤んぼを踏みつけさうにしたわけである。

## 一五 上海に止まる心

私が軍から妙な金を貰ひながらなぜ中國人の間に多くの友人をもち得たかを疑問に思ふ人もあらう。一人の人間に虚偽を包んで對することさへ容易なことではないのに多くの人々に對して長期にわたつて虚偽を包んで對するといふことは殆んど困難に近いことだ。それがともかく出來た理由は恐らく私自身が人を騙ましてゐると思はなかつたからだらうと思ふ。随分人を食つた話だといふかも知れない。だが私はそれまで國際情勢に関する報告に於て中國に不利な報告を意識的にしたことはない。いつも日本は中國と戰爭してはいけないといふことを色々な面から軍に勸告して來たつもりだ。それは私が戰爭中に「申報」に發表した諸論文の傾向を見ればすぐわかることだと思ふ。中國の國內情勢については一般的にはふれたが、具體的な、個別的な、いひかへればスパイ的な情報は何一つ出さなかつた。私は自分の良心にやましいことをすれば、何をすることにしても自信がもてないことを知つてゐたし、自信のもてない、自分自身さへ信用出來ない人間

が人を信用させることなど出来るはずはないと思つてゐた。

八月十五日虹口では盛んに撃ち合ひが始まつて居り、街では日本人が見つかり次第殺されてゐるこの日、私は抗日學生行動隊の會合に出席しながら氣持ちの案外安らかだつたのも恐らく私がそれまで中國に對して不利なことはしなかつたといふ自信が強かつたためだらうと思ふ。私は彼等の間に於て少くとも日本人の間——その中には大抵特高警察や彼等への密告者が交つてゐる——に於るよりも遙かに氣安かつた。その日の會合には若い學生が多く、女學生も四、五人交つてゐた。便衣隊を編制して虹口に潜入し、情報工作と破壊工作をやらうといふのが主題だつた。討論は熱烈に交はされたが、具體的なことは何一つも纏らず、議論は枝葉から枝葉にわたり、結局何の結論も見出せなかつた。この會合がかういふ結果になつたのは理由のないことではない。當時上海の救國運動は國民黨の統一救國會の下に統一されてゐたが實際は人民戦線派の救國會がそれに對立してゐたので具體的な工作は何一つ進まない状態だつた。戦争になるまで救國運動の指導権は上海のブチブルジョアが握つてゐたのだが、戦争が始まると同時に金融ブルジョアはそれを完全に奪ひ取つてしまつた。彼等はこの運動が民衆の武装蜂起になることを極力警戒してゐた。だから學生が行動隊を組織しようとしても上からは一人の指導者もやつてこなかつたのだ。結局この日の會合は猫の首に鈴をつけることを決議したが、さて誰がそれを實行するかと

いふ問題になるとみんな散つてしまつたといふ鼠の會合に似てゐた。私はその場の空氣を察したので會の解散を待たず先に歸ることにした。恐らく私と同じやうな氣持を持つたのだらう、何といふ年長者が私一人では途中があぶないだらうからと送つて来てくれた。二人で環龍路ワングンを金神父路のところまで歩いて來たとき、何さんは私にいつた。

「貴方もしほんとに中國のために働いてくれる氣だつたらああいふ行動隊の中に貴方の役割を見出さうとするのは間違つてゐる。人間は自分が一番適すると思ふ仕事でなければやつてはいけない。貴方の場合には日本人に對して、この戦争の間違ひを知らせる工作を見つけることが自分のためにも中國のためにも一番よいことだと思ふ。貴方もしその氣になれば、私は南京の放送局によい工作シゴトを見つけて上げよう」

私はその場はいいかげんな返事をしたが、歸宅後彼の言葉について妙に考へこんでしまつた。三村君が中國に渡つて來た以上何も私が上海に止まつてゐる必要はない。いつその事の際南京に行くのも面白い。それは非常に意味のあることだ。自分の氣持はだんだんその考へに動いて行つた。しかし、一方上海の都會的魅力をすてて南京に行くことを考へると、いささか憂鬱になつた。上海に居ればともかく日本との連絡があり、日本の情勢が日本に居るときよりもはつきり判つて來る。否、日本ばかりではない、世界各国それぞれの動きが、その國の人々の口を通じて手

にとるやうにわかる。この「世界の窓」を棄てて南京といふ田舎町に入り込むことはどう考へても氣がふさぐ。結局今直ぐ決定を要する問題でもないから、もつと自分の氣持のおちつくさきを見定めてからきめようとその日はそれでねてしまつた。

その晩も高射砲の花火とサーチライトが上海の空を美しくかざり、大砲や機關銃や爆音が夜つびて「天國と地獄」を奏してゐた。しかし熟睡の出來ない晩が續いたので私は割合よく寢たらしい。目をさましたのは翌朝の十時近くだつたらうか、窓の外でワーンといふ群集の恐ろしい聲にあわててとび起きた。三村君も老鄧ももう起きてゐてガラス越しに外をのぞいてゐる。目の前のフレンチ・クラブの空地に何千何百といふ群集が集つてゐる。彼等は何者かを捕へようとしてひしめてゐる。何者かがフレンチ・クラブの裏門の中に逃げこんだらしい。群集は激昂してその裏門に亂入した。そばにフランスの守備兵や巡捕も居たが、今日の群集はいつもと違つて何者をも恐れない。やがて中から足をもたれて二人の人間が廣場の眞中に引きずり出された。群集はそれに向つて殺到する。「殺一殺一」といふ叫びが窓越しに此方まで聞えてくる。片がつくのにもその一分もかからなかつた。群集は急にかかり合ひになるのを恐れるやうに四散した。後にはガランとした廣場の眞中に二人の日本人らしい死體が横たはつてゐた。すつと後でわかつたことだがこの二人は想像通りやはり日本人だつた。彼等はその頃霞飛路のカセイ・シャターの前にあつ

た日佛藥房の雇人でパンを買ひに外に出たところを捕へられてこんな目にあつたのだ。

私は目の前で二人の同輩がなぐられたり、殺されたりするのを見るとやはり気持ちの動搖する自分を見つめてゐた。それまで自分は「日本人」といふワクから離れてものを考へることが出来ると思つてゐたが、それは現實の自分とは大分距離があるらしいことがわかつた。私はやはり中國の民衆のやうに日本の敗戦を希望してもゐないし、虹口の日本人が皆殺しになることも望んでゐない。さうかといつて日本の民衆のやうに日本が勝つて中國の侵略を完成することは希望してゐない。ごくにえきらない心理状態といふのが私にとつて一番うその少いところなのだ。この考へをどちらかにつきぬけなければ私の行きづまりであることはよくわかつてゐる。日本が勝つことを希望するか——この考へは理性では否定してゐながら感情では肯定してゐる。日本の敗北を希望するか——この考へは理性では肯定してゐながら感情では否定してゐる。かうはつきり規定出来ぬにしても、大體かういふことがいへるのではないかと思ふ。これは實にあぶない心の平衡状態だつた。非常に敏感な天秤のやうに一寸した機會がどちらかにつくと天秤は忽ちどちらかにはね上つてしまひ、行動がどちらかに決定する。鹿地亘といふ人はやはりこの頃日本を思ひ切つてしまつたらしいが、若し彼がこのやうな心の平衡状態に惱まなかつたとすればよほどの偉人かそれともよほどの馬鹿だと思ふ。人はどうであらうとも又人に何といはれようとも私にはさう

たやすく日本は思ひ切れなかつた。

あまり人聞きのいいことをいふな、お前は毎月僅かばかり貰つてゐるあの金のつるが断ち切れないのだ、それがいかにけちな金でもお前の上海に於ける生活を保證してゐる限り、丁度ぬるま湯に入つた男がなかなか出られないやうに、それから抜け出る勇氣を失つてゐるのぢやないか。或ひはかういふ人もあるかも知れない。私も自分自身それを意識しなくとも或ひは意識の背後にそれがこつそり働いてゐるのではないかと考へてみた。しかしさうでもないらしい。私は元來生活の安定には執着は持つてゐたが、それと同時に生活の變化を求めてやまない生來の冒險心は決して弱い方ではなかつた。

私の意識にのぼつてゐる限りに於ては日本の徹底的敗北にもならず、中國の侵略にも失敗するといふ解決を願望する氣持ちが私の決断をにおらす一番大きな要素だつたと思ふ。私には日本をさういふやうに導くことが方法によつては必ずしも不可能ではないと思はれた。私がなぜさういふ考へに導かれたかといふと、當時日本の支配層の中にも中國の支配層の中にもこの戦争の擴大を回避しようとするグループが相當強かつたからだ。

中國の支配層についてはすでに述べたから、ここでは日本の支配層の場合について考へてみよう。誰でも知つてゐるやうに日本の金融資本は最初軍部の冒險政策が世界戦争を惹き起し、資本

主義を根柢から破壊する危険があると思つてゐた。特に老練な高橋是清はこの金融資本の考へを代表してあらゆる機會に軍部の馬鹿げた計畫をおさへようとした。尋常の手段では駄目だと考へた軍部がどういふ手段で金融資本を屈服させたかは今更いふまでもない。一聯のテロ政策に引きずられて日本の金融資本は、罅が釣られて行くやうに頭をふりふり軍部の手許にひかれて行つたのだ。だから、日本の金融資本が心から軍部の計畫に賛成したと考へる理由は少しもない。戦争がかなりに進行したときでも彼等の態度には、"half-minded"のところが見えた。

軍部自身も中國侵略戦争の擴大は日本の一般的な國防計畫に重大な影響があつたので必ずしも全體がそれに賛成ではなかつた。特に參謀本部ロシヤ班を中心とするグループは中國侵略戦争の擴大が直接對ロシヤ戰略に與へる影響を重大視してゐたので、かなり危惧の念を持つて情勢の進展をながめてゐた。

又日本の政治家外交官の有力なグループも中日事變が英米ひいては世界と日本との對立を激化することを憂へてゐた。木戸幸一の軍事裁判宣誓供述書を読むと近衛公は最初から中日事變の成行きを苦慮してゐたことがわかる。木戸はかう書いてゐる。「日支間の敵對行爲の開始を痛く苦慮されてゐた近衛公は局地化、不擴大の方針を遂行すべく全力を盡されました。私としても同公の方針貫徹に對して出来る限り助言を致しました」



日本の支配層ばかりでなく日本の國民の間にも日華事變は案外人氣がなかつた。軍部の「暴支膺懲」といふスローガンは如何にも白々しく思はれ國民は腹の中に何か割り切れないものをもつてゐた。國民の間に「中國侵略」に對する反對の聲は起り得なかつたにしても、軍部の宣傳にもかかはらず中國人に對する民族的憎惡の感情がどこにも見られなかつたことは事實である。

私はこのやうな情勢から、我々の努力によつてはこの反對勢力の力を結集し少くともこの際中國侵略の手を押へることが出来るのではないかといふ期待をもつた。そして案外早く事變がさまり日本の國際的地位にも大きなきずがつかず、中國の領土もそのままですめば、やがて中國の民族主義と日本の民族主義が或る調和に到達する段階がやつてくる時期もあらうかといふやうにその先を考へてゆくと、可能性は薄くなつてくるのだが、私はそこまで考へようとせず、ともかくこの際軍部の中國侵略の手をとめれば、それを機會にして日本國內の軍部に對する批判的な勢力が擡頭する可能性もあり、又新しい情勢も展開されるだらうといふ蟲のいい考へを持つた。今かう書いてみると随分甘い考へだと笑ふ人があるだらう。それは結局私が上海に止まらうといふ願望に沿うて自分の理性をねかせつけようとする自己僞善であつたかも知れない。しかし私自身は少くともその時は眞面目にさう考へてゐたのだ。

眼の前で二人の同胞がなぐり殺されたのを見たその日はさすがにもう外に出る氣にならなかつ

た。部屋に居ながらも、いつここに民衆が亂入してくるかもわからない。フレンチ・クラブの中にさへ亂入したのだから、こんな下宿屋の二階などは、何とも思はないだらう、と流石に内心ビクビクものだつた。外にすることもないので三村君と二人でこれからの方針について色々と研究することにした。三村君はここにゐてもしかたがないから、虹口に行つて商賣でもしようと思つた。このどさくさまぎれだから警察の方も注意しないだらう。それもよからうといふことにきまつたが、唯私としては非常に困つた問題が残つてゐる。萬が一彼が檢舉された場合、私も當然檢舉される。私は執行猶豫中だつたのでごまかしはきかない。誰がとりなさうとも法律の條文はどうすることも出来ない。それに三村君を捕へさせれば私自身草の金を受けてゐるだけに彼の同志から何といはれても申開きが立たない。私は警察がたとへ三村君を捕へようとしてもそれが出ないやうにおかなければ安心がつかない。私はこの問題の解決を或る人に依頼するためにその翌日もう一度虹口に行かうと決心した。

八月十六日の朝、少し暗いうちに家を出る。直ぐ高い金を出して黄包車を雇ふことにした。この方が途中の危険が少いと思つたからだ。斐多亞路を大世界の前までくると僅か二、三日のうちに様子がつかり變つてゐるのにびつくりした。コンクリート道路の上に前日の爆撃の跡が十尺四方位の大きな穴になつてゐた。死體はもうすつかり片づいてゐたが道路に面する窓はのこらず

吹き飛ばされてゐる。「大世界」の向ひ側の三階建の屋根の上に建てつけられた「紅錫包吞煙」ホンシヤクホウタンエンの大きな廣告板は地上から三丈も高いところにありながら爆風でボロボロに焼けてこけてゐる。その下を避難民や通行人が前日の惨劇を忘れたやうにいつもの通り活潑に動いてゐる。やはり上海だと思つた。黄包車をバンドで下りてガーデン・ブリッチまで歩いてゆく。さすが通行人は少い。黄浦江の上に今出たばかりの太陽が朱塗りの盆のやうにかかつてゐる。近頃朝早く起きたことがないので、それが何だか怪奇なものに見えた。時々滄東側ソウトウの家の中を直ぐうしろあたりから大砲がひびく。それに返事でもするやうにダダダッ<sup>ッ</sup>と虹口側の大砲が白煙をはく。こちらは軍艦から撃つてゐるものらしい。ガーデン・ブリッチを渡らうとすると陸軍隊にとがめられた。「日本人です」といふと簡単に通してくれた。ブロード・ウェイ・マンジンの前を通り電車道に沿うて行くくと左側の軒下に若い陸戦隊員がうつぶせに倒れて死んでゐた。後から便衣隊に<sup>も</sup>狙撃されたらしい。血は一ヶ所に固まつてゐてもう蠅が黒くとつついてゐる。吳淞路に入ると流石に人通りはない。いつ弾がとんでくるかも知れないので軒下を用心深く進んで行く。文路の日本人俱樂部の前には四、五人の日本人が心配さうな顔をしてうろついてゐる。戦況は非常に日本側に不利で楊樹浦の方からタンクをもつた中國軍が虹口クリークの直ぐ向ふまで来てしまつたといふ話だ。私の驚ねる人は俱樂部の前の或る店屋に陣取つてゐた。私に參謀本部の金をとりついでくれ

てゐた人で塚本誠といふ憲兵大尉だつた。この人は初對面の時偶然にも私と同じ中學校の一年先輩であることがわかり、それ以來私に特別な好意をもつてくれたらしい。こはいほど勤のいい人で時々私の思想の底にまで釣糸をたれるやうな質問をした。一度などは「貴方は何のために上海に居るんですか」と眞正面から質問されて我ながらしどろもどろの返事をした。私は彼に三村君のことをでために話し、私の使つてゐる手足だから虹口の警察にはつかまへさせないやうにしてくれと依頼した。彼は私のあげた理由などを信ずる様子はなかつたが、案外簡單にひき受けてくれた。恐らく情勢が情勢だつたので、彼にはそんな小さなことは問題ではなかつたのかも知れない。

間もなく私は心の重荷を下した氣安さでガーデン・ブリッジを南に向つて歩いてゐた。バンドの左側にある英國大使館の大門にはすさまじい戦争の空氣にそぐはない綺麗びやかな服装の番兵が化石のやうに立つてゐる。それを珍らしいものに見ながら軽い足取りでバンドを進んだ。正金銀行のところをさしかかつたときふと私は誰かに尾行されてゐるやうな感じがした。後をふりかへつて見たい衝動をおさへてそのまま五、六歩前に進み右側の壁にはられてある工部局の布告のところまで行き立ちどまりながら布告を見るふりをしてちらつとわきを見た。一目で相手がわかつた。二人居る。一定の間隔を置いて私をつけてゐる。私がつまつたので先方も急に步調を緩め

た。この動作が一樣なのが何よりの證據だ。私はここで二人をまいてしまはなければ家に歸れないと思つた。だが普通の手段でまくことの出来る相手ぢやないこともわかつてゐる。いづれ抗日除奸團とか何々行動隊とかいふ人達でガーデン・ブリッジを渡つてくる日本人を計画的につけてゐるのだらう。バンドからすこし奥に入つて中國人の多い場所に行つたとき私の後からただ一言「東洋人―」と叫べばピストルも要らなければあひくちもいるまい。それは昨日フレンチ・クラブの廣場でよく見せて貰つた通りだ。しかし虹口にとつて返すことは私の自尊心が許さない。人間といふものはこんな場合にまでくだらない自尊心がついてまはるものだと、まだこんなことを考へる心の餘裕はあつた。私はふと面白い事を思ひついてそのまま知らん顔で先に歩いて行つた。そしてカセイ・ホテルの裏までくると急に右にまがつた。このホテルの裏通りは人通りが殆んどない。角をまがるとすぐに私は歩みをとめてその入口で彼等のやつてくるのを待ち伏せした。どうする氣もない、相手が私をつけて來たのでなければそのまま行き過ぎようし、つけてきたのならばにげ出すだらうと思つた。相手は私が一定の間隔をもつて先に歩いて行くものと思つてゐたのだから、私とその角に待つてゐるなどは夢にも考へなかつた。相手が入口に安心して姿をあらはすとたんに私と真正面に向き合つた。自分に殺意のあるものは相手にも殺意を豫想してゐる。自分が武器を持つてゐるものは相手にもあると思つてゐる。それが人間の弱點なのだ。彼等は私

ここで待ち伏せされたと思つたらしい。ともかくあまりにとつさだつたので考へるひまもなかつたといふのがほんとのところだらう。はつと顔色を變へるとそのまま二人ともバンドの方に逃げ出した。私はやつと虎口を脱したのを感じた。心にいささか安心が出来ると急に今の立場がおそろしくなつた。大急ぎで黄包車を見つけフランス租界に逃げ出した。黄包車に乗つてから黄包車<sup>上</sup>がたまらなくのろく感じられて家に入るまで安心出来なかつた。

下宿では三村君も老鄧も私を心配しながら待つてゐた。三村君はいつも私がどう見ても日本人にしか見えないからといつて私が外に出ることをしきりにあぶながつてゐる。今日も私のその日の行動が輕率だといつた。しかし彼に何といはれても私はその日虹口に行つたことについてひとこともほんとのことはいはなかつた。

一六 中國の失ふもの

戦争はまたたく間に蘇州河以北の地域を廢墟と化してしまつた。楊樹浦の通りには船員相手の  
 歡樂場 (Hot Place) が軒を並べてゐたが、そこが焼かれた時、或る米國人記者は「今や楊樹浦  
 は文字通り hot place になつた」と書いて至上海を笑はせた。しかし上海人の笑ひ顔は恐らく  
 ゆがんでゐたらうと思ふ。蘇州河以北の地域には上海の大規模工業の六割と小規模工業の七割が  
 ある。また上海市民の日常生活に重大な關係のある上海電力公司や上海水道公司などもここにあ  
 る。共同租界の黃埔江岸は全長九千七百十六メートルだが、その九割までは蘇州河以北だ。それ  
 は全く使用出来ないものとなつてしまつた。共同租界に残された碼頭は、唯ガーデン・ブリッジ  
 からフランス租界の境界まで一千メートルに足らぬ工部局碼頭だけになつた。もつともフランス  
 租界の黃埔江岸が一千百五十八メートルあるが、この残された二つの碼頭はいづれも平常乗客の  
 乗り下りだけに使つてゐたもので大きな荷物の陸上げ設備といふものがない。だから上海の海港

としての經濟機能は全く一時停止してしまつたと謂へる。

十月二十六日には大場鎮が陥落した。その時「一・二八」以來着々復興しつつあつた閩北がえんえんと燃え上るのを見た。閩北はこの七月復興五周年記念日を盛大にお祝ひしたばかりだつた。十一月十二日には南市が日本軍に占領された。これは上海がまだ滬といつた時分からの小さな村落から發展した歴史的な城市なのである。これらの地域はいづれも上海特別市の主要な行政區劃である。これらの地域は租界の周邊を圍んでゐて、中國が租界の繁榮をそこに奪ひ返へさうとする大上海都市計畫に基づいてその中に各種の建設が進められてゐたのだ。その建設の中心となるものは北平の宮殿に模して建設されたといふ上海市政府だつた。その周圍を周つて市立運動場・市立第一公園・市立病院・市立實驗小學・市立博物館・市立圖書館等が次ぎ次ぎと建設されてゐた。

これらの建設の一つ一つは上海を中國人の手で世界貿易港としようとする孫文の理想を現實化するものだつた。孫文は一九二一年に「上海を東方大陸となす案」を起草してゐる。この計畫は次のやうな雄大な構想をもつてゐる。

一 港灣設備として市中心區五權路の東、虬江クリークの黃埔江合流地帯一帶に虬江碼頭を建設する。

二 滬蘇間クリークと蘇州河との間に運河を開鑿する。



- 三 蘇州から鐵路をひいて吳淞及び虬江碼頭と連絡し、又江灣に上海總車站をつくる。
- 四 これに附隨して道路網を配す。
- 五 その上に大上海市を建設する。

これらの計畫は、戦争の二年前から現はれた一般的經濟回復に恵まれて、着々と實現していつた。この七月には、この十年間の建設を祝つて大上海市政府十周年記念式が行はれたばかりだつた。この十年の成果が僅か三ヶ月の間に全く粉碎されてしまつたのだ。

中國の失つたものはそればかりではない。中國の重要な文化建設はこの戦争の前年あたりから急速に發展しつゝあつた。例へば中國の文盲撲滅運動がそれだ。中國の文盲者は男子では人口の七割女子では九割五分（何れも十歳以上）と推定されてゐる。一九二九年の政府發表によれば適齡兒童の就學率は僅か全體の一割一分弱に過ぎない。政府はこの文盲を絶滅するためにあらゆる努力を拂つてきた。教育部は適齡兒童の八割に對して免費教育を施す五ヶ年計畫を建ててゐた。

一九三六年には一擧に就學者五百萬人を増加することが出来た。この年には成人教育（識字運動）も政府の手でとり上げられ一千二百萬の成人者が全くの文盲から解放された。この識字運動のためには特別に編纂された約四百萬冊の教科書が配布された。又大量の教師を教育するために全國各地に大學や師範學校が續々建設された。中國文化の前途には大きな希望が現はれてゐた。だが



しないといふことを理解しなければいけない。もちろんかやうな改革は、農民を救ふためには缺く可からざる一手段として緊急且必要なものではある。それは農民に休息の場所を與へ、同時に『農民暴動』の原因を除き、あらゆる勢力を結集して工業回復に道を見出さしめる。しかし農民問題の最終的解決は農民の支出を減少することよりも彼等の収入を増加することにある。それ故私は工業の回復が問題解決に根本的であるといふことを再びここに繰り返へすものである」と。

恐らく費博士の示した道は國民黨の手で出来る農村問題解決策としては最も賢明な道の一つであらう。だがこの戦争は中國の工業を直接に破壊したばかりでなくその將來に於ける發展の可能性さへくつがへしてしまつたのだ。特に一九三七年といふ年が最近の十年間に於て中國の經濟回復にとつていかに希望の多い年であつたかを想起すれば國民黨としてはくやんでもくやみきれない想ひがあらう。

この十年來の物價・貿易・生産の變動を次の表によつて見ればここに述べた意味が一層はつきりする。

年 度	物價指數	貿易實額	生産指數
一九二六年	一〇〇・〇	三〇・九八	
一九二七年	一〇二・七	三〇・〇九	
一九二八年	一〇二・二	三四・〇八	

一九二九年	一〇四・一	三五・五五	
一九三〇年	一〇五・三	三四・三五	
一九三一年	一一三・五	三六・五〇	
一九三二年	一〇八・五	二四・〇二	九九・五
一九三三年	九七・〇	一九・五七	九七・二
一九三四年	八八・六	一五・六五	一〇〇・七
一九三五年	八九・〇	一四・九五	一〇一・一
一九三六年	九九・二	一六・四七	九五・四
一九三七年	一二四・一	一七・九一	一二一・八

(中央銀行發表)

今この表に於て一九二七年より三一年まで毎年僅かづつではあるか上騰の一途をたどつてゐた物價指數は、三二年以後急速に低落してゐる。しかしそれは三四年を十年來の最低として三五年より再び上騰し始め三七年には急速な上騰氣勢を示してゐる。

貿易實額の上から見ればやはり一九二六年から三一年まで大體堅實な足取りをもつて上騰してゐたが、これも三二年より急速に低落し始め三五年まで落勢が続いてゐる。しかし一九三六年から再び上騰が始まり、三七年は引続き上騰してゐる。

ただ生産指數は一九三一年前がないので傾向はそれ程顯著に現はれてゐないが、一九三二年か

ら三五、六年までは大體大きな動きはなく一九三七年に到つて急速に上騰してゐることが判る。

周知の如く世界經濟恐慌は一九二九年末から始まつたのであるが、この年は中國の景氣を表示する數字の上には何の低落も起らず却つて一般的な上昇をさへ示してゐるのだ。ここに半殖民地中國の經濟の特色がある。世界經濟恐慌によつて世界各國の購買力が減少し、商品の捌け口がなくなつた時、列國は各々關稅壁を高くして自國の商品を守ることが出来た。だが關稅自主權のない中國は關稅壁を設けることは出来ず世界各國の商品が怒濤のやうにこの國におし寄せてもたゞ傍觀する外はなかつたのだ。一九三〇及び三一年に現はれた中國の貿易額と物價指數の上昇は、この商品の怒濤によつてまき起された假裝的繁榮を表現してゐるに過ぎない。もつとも貿易實額に於て輸入の増加はこれで説明出来るが輸出増加については別にこの間に於ける銀の暴落について説明が加へられなければならない。銀本位國たる中國では、銀の價格が廉ければ輸出は増加する。金本位國の貨幣の一單位がより多くの銀と換へることが出来れば銀本位國の商品はより廉く買へるからだ。この間世界の銀價は非常に下落し、従つて中國輸出品の價格は低落し、輸出總額は従つて増加した。そればかりではない。世界の銀は世界に於ける唯一の銀使用國たる中國に流入して来た。その結果一九三二年には中國は約一千餘萬元の銀入超を見ることになつた。「支那の經濟機微」の著者何幹之はこの銀入超についてかう述べてゐる。

「銀の投機者は安價な銀を中國に持ち込んで工場を開設し、金儲けを行つた。中國に於てはこの貨幣變動の機運に乗じて或る種の輕工業は發達し得る。綿布・卷煙草・小麥粉・燐寸等の生産に活氣を見たのはこのためである。同様に需要の増加によつて物價は一九二九年から三一年までは繼續的に上昇してゐる」と。

しかしこのやうな傾向は長くは續かなかつた。この國に輸入される商品も、やがて飽和點に達し、一九三三年からは世界恐慌の本格的な影響がこの國にも現はれた。それは中國に於てこの年以來一九三五年まで引續いてゐる。然るに一九三六年になると明かに中國の經濟には回復の徴候が現はれてきた。これは一九三二年末から徐々に現はれた世界恐慌回復の影響が稍々後れて現はれたものと見られる。今回の世界景氣は各國の軍備擴張によつてもたらされたものである。従つて中國の土産品中ウォルフラム・アンチモニー・鐵・マンガン・亜鉛等に對する世界の需要は急速に高まつてきた。この年中國の輸出は増加し、それと同時に中國市場に於ける輸入品の壓迫は著しく減少した。だから一九三七年、もし日本の侵略さへなければ中國の工業は全體として大きな躍進を約束されてゐたのだ。

その上にもう一つ特記しなければならぬことがある。一九三七年までには從來中國工業の發展をおさへてゐたこの國の貨幣不安を完全に一掃する幣制改革が完成してゐたことである。いふま

でもなく中國の工業を近代化するためには外國の投資は絶対に必要である。外國の投資をまねくにはこの貨幣が先づ安定しなければならぬ。貨幣が安定すれば原料、機械の購入、商品の輸出に於て貨幣價値の變動による不慮の損害はなくなる。一九三五年十一月に行はれた幣制改革はかかる角度から高く評價さるべきであつた。その意味はしかしそれにとどまらない。この幣制改革はそれ自體英米が中國への投資について協定したことを意味するものである。今その成立の經過をたどつてその意味を一層明らかにしよう。

一九三四年六月アメリカでは銀買上法が公布された。米國は貨幣準備の四分の一を銀をもつて保有するために、その量に達するまでは國內又は外國に於て銀を買ひ上げるといふのが趣旨である。この法令がいかなる意圖をもつかはともかく、それによつて最も苦しんだ國家は世界唯一の銀本位國たる中國だつたのだ。米國が世界市場で銀を買ひ上げれば、銀の價格は當然上騰する。その結果一九三四年十一月平均價格一オンス五二仙に過ぎなかつた銀は翌年四月には七七仙まで吊上げられた。中國の銀はそれにつれて續々海を渡つて米國に入つた。銀貨本位國たる中國は銀が暴騰すれば輸出は減少し、輸入が増大するから貿易關係は著しく不利になる。それ故中國政府は八月駐米大使をして米國の注意を喚起し、「中國の銀を吸引して過大の流出を誘致せしめるが如き行動をとらず中國政府と協調して倫敦銀協定の主旨に基づき銀貨の安定を維持し、無暗に暴

「満足せぬやうに」といふ申し入れをさせた。米國の回答はしかし決して中國を満足させるものではなかつた。

このままで事態が進行すれば世界の銀價は米國によつて決定され、従つて中國の貨幣價値も米國によつて決定されることになる。中國は銀の移動制限や銀輸入獎勵辦法をもつてこれに對抗しようとしたが到底銀の流出を防げるものではない。中國は一九三四年八月以來深刻な銀恐慌に悩まされ物價は下落し、輸出は停頓し、政府の収入は激減してしまつた。特に上海の金融恐慌は深刻で錢莊その他倒産が續出した。

英國は中國のこの情勢を見て自國の投資を保護する上からも事態をこのままに放擲出來ないと考へた。英國は米國の經濟攻勢に對するため初め日本との合作を考へてゐた。それ故英國の金融界の權威リース・ロスはわざわざカナダまで行つたにかかわらず米國に廻らずそのまま東京に來るといふ大きなヂェスチャーを示しつつ日本との交渉を開いた。日本はリース・ロスの幣制改革がもし中國で成功すれば華北を中央から切り放す工作は難しくなると考へて彼の申出をにべなく拒絶した。リース・ロスは三五年九月淋しく東京を離れて上海にやつてきた。しかし中國は上下こそつて彼に熱狂的な歡迎を與へたのである。その時上海の金融恐慌は益々深刻化し、中國・中央・交通の三銀行を初めとして各銀行に預金引出と紙幣交換を請求する取付騒ぎが到るところに



起つてゐた。それはやがて全國に波及し、南京には戒嚴令さへ施行された。その間中國政府はリス・ロスと交渉を重ねてゐたが、その結果、この年の十一月三日次のやうな幣制緊急令を發表することになつた。

(一) 銀貨の使用を禁止し、中國・中央・交通の三銀行紙幣を法幣とする。(一九三六年一月中國は民銀行券も加へられる)

(二) 現銀は政府に賣渡し、紙幣準備金に充てる。萬一故意に現銀を隠匿し流出を企圖するものあるときは法律により嚴罰に處す。

(三) 法幣相場を安定させるために政府所定の相場により中國・中央・交通三銀行は無制限に爲替を買應ずる。

これは中國幣制の本質的變革といふべきもので中國はこれにより銀本位制からいはゆる管理通貨制に變つてしまつたのだ。そして法幣の對外爲替相場は次のやうに決定された。

對英爲替相場

二・五〇〇

對米爲替相場

二九・七五

對日爲替相場

一〇三・〇〇

これを過去五ヶ年間の平均爲替相場と比較すれば英國のポンドがいかに有利な立場に立つたかがはつきりする。

對英 二・四七〇磅

對米 二六・六九弗

對日 七九・五四圓

(五ヶ年平均爲替相場)

邊 割がた引上げられてゐる。

即ち新たにきまつた對米爲替率は五ヶ年間の平均率と比較して一割引上げられ對日爲替率は二

無 英國はこの爲替相場をあくまで維持する決意を示し、十一月四日銀支拂禁止令 The Silver-  
上 Payments Prohibition Regulation を公布して中國に駐在する英國人に銀貨の使用を嚴重に禁  
止した。外國商人の經濟的・政治的勢力を統制する力のない中國が獨力で幣制を維持することは殆  
んど不可能に近い。それ故英國のこの處置は中國をして益々英國の好意に感激させた。

しかし法幣が英國のポンドとリンクして中國が英國の懷に入ること米國が默視するはずはない。米國はその對策としてかういふことを考へた。中國の法幣の對外價値が安定するためには中國は豊富な爲替基金をもたなければならぬ。英國が中國に借款を與へない限り、中國はロンドン市場で現銀を賣つてこの爲替基金を充當して行かなければならぬ。米國がもしロンドン市場で銀の購入をやめるとすればロンドン市場の銀價は下落する。銀を使用しない英國がそれを買ひあふつて價格を維持するはずはあり得ない。その場合中國は結局ロンドン市場で銀を賣つてポンドを買ふことが出来なくなり、従つて爲替基金は缺乏し、法幣の安定は困難になる。かういふ見透しから米國はその年の十二月九日ロンドン市場に於ける銀購入を停止してしまつた。これは英國に妥協を迫まつたのだ。この英米の暗闘で一番困るのは勿論中國である。それ故早くもこの情

勢を察した中國が金融界の權威陳光甫<sup>チェンクワンフ</sup>を米國に派遣して米國との協定を計つたのは蓋し極めて時宜を得た處置である。既にそれあるを待つてゐたアメリカの政府は喜んで陳光甫を迎へた。陳光甫とモルゲンソーとの間には直ぐに銀について協定が出来上つた。それによつて米國は中國政府の手持銀五千萬オンスを、一オンス約六十五仙で購入することになつた。中國政府はその代金をニューヨークにとどめて三千二百五十萬弗の爲替基金を造つた。この協定によつて事實上中國の貨幣はポンドとリンクすると同時に米弗ともリンクすることになつた。それは英國と米國が中國投助に關する共同の責任をもつことを意味し、又中國から見れば「元」を「弗」と「磅」によつて二重に保證したことになる。日本は華北の現銀輸送を拒否して幣制改革の邪魔をしようとしたがたうてい英米二國による幣制安定をさまたげることは出来なかつた。法幣は一九三六年三七年を通じて全く安定した。宋子文はこの一年間に於ける對外爲替相場の安定程度は我國の過去に於て曾て見ない現象だといつてゐる。やがて全国各地にある特別の通貨は次第に法幣の下に統一されてきた。一九三六年政府は英國の投助によつて廣東廣西兩省の幣制を統一した。この戦争さへ起らなかつたならば、恐らく二、三年の間に中國は法幣によつて多年望んでゐた完全な幣制統一を完成したであらうと思ふ。

幣制改革は單に經濟の面ばかりではなく廣く政治面にも重大な形響を及ぼしてゐる。先づ政府

と民衆との關係がこの通貨の統一によつて全く一變した。民衆はそれによつて政府に彼等の金を  
残らず投資したことになる。だからこの政府の強化には直接の利害關係をもつことになつた。又  
銀の買上げによつて中央政府の財力は全く充實した。それは國家統一を促進させる重要な要素に  
なつた。最後にこの幣制改革が英米資本の中國流入の橋梁となり、中國工業躍進の大きなステッ  
プブレードになることは今更いふまでもあるまい。

一九三六、七年に於ける以上のやうな情勢を見れば蔣介石が「少しでも平和の希望が残つてあ  
る限り我々はそれを棄ててはならない。隱忍自重の限界に達しない限り我々は輕々しく犠牲を説  
いてはならない」と説いた理由がよくわかる。蔣介石は決して性格として遲疑逡巡する質たちの人で  
はない。彼が機を見るに敏でしかも機到ると見るや直ちに行動に移る敏速さは敵味方とも等しく  
認めるところである。その蔣介石が開戦を叫んでやまない民衆の前に最後の瞬間まで平和を説い  
てやまなかつたといふ事實は十分検討せらるべきである。

蔣介石は中國農村問題の解決が中共に對する唯一の防禦手段であることを六次にわたる剿共戰  
争の苦い經驗によつて知りつくしてゐる。中共は單に武力のみでは掃討出来なかつた。武力に配  
するに農村改善工作の成功によつて初めて彼等を江西から追拂ふことが出来たのである。エドガ  
ー・スノーは紅軍をして歴史的「長征」を完成させた推進力は農民の飢餓と地主及び課稅徵收人

に對する憎惡だといつてゐる。農村が飢餓に惱んでゐる限り、いかなる武器をもつても中共の勢力増大をおさへることは不可能だ。費孝通博士は農民の飢餓が射殺をおそれなくなれば、農民暴動は當然の結果だといつてゐる。國民黨が中共に勝つか否かは國民黨に農村問題解決の對策ありや否やによつて決定するといつても過言ではない。もし中國の工業化が農村問題解決の重要な鍵だといふ費孝通博士の言葉が正しいものとすれば國民黨は一九三七年正にこの鍵を手にする大きな希望を與へられたのだ。しかし中國にやうやく開かれた工業化の希望は、この年日本によつて無慘に踏みにじられてしまつたのである。然らば、それと同時に蔣介石が中共に對して徹底的に勝利を收むべき希望も機會もこの戰爭と共に永久に失はれてしまつたとは謂はれないであらうか。

私は當時日本にも中國にも當然大きな破壊が起るが、その破壊の中からほんとの建設が起るのだといふ思想にはどうしても同意出來なくなつてゐた。ともかく早く戰爭をやめさせなければいけない、日本にも大きなきずがつかず中國も少くとも一九三七年の現狀に於て平和がくるとしたならば、それから後の事態はヨーロッパからの順風を待てばよい。ヨーロッパには今正に大風雲が起らうとしてゐる。ヨーロッパに戰爭が起り、東洋に平和が残れば、この間東洋に經濟的躍進

が起ることはこの前の大戦の経験でよくわかつてゐるし、又大戦が終れば世界に民主主義の大波の寄せることも十分考へられることだと思ふ。世界資本主義に於ける地位では付庸國でしかない日本、そこで軍部がいかにあがるとも、さうなつた暁は民主主義の大波に抗することが出来るものか。そのとき日本の民主主義的傾向は當然躍進し、軍部の中國侵略の手は當然ひつこめられる。だから餘り遠いことを考へないで、なんでもいいから出来るだけ早く中日兩國の和平を結ばせることが大事だ、それが日本にとつても中國にとつても一番よいことになる——

私はその頃おもてに出ることが出来なかつたので、毎日下宿の窓から日本の飛行機の南市爆撃を見ながら漠然とこんなことを考へてゐた。

開北から租界の空を通して南市を砲撃する砲弾が時々屋根の上を飛びこして行く。見えはしないがその度毎に空気がヒューッとと悪魔の口笛のやうな音を立てて震動する。さういふ音響になれてしまつたので一發の大砲も爆音も聞えない靜かな時間などは却つて何となく淋しく感じた。三村君はあれから二、三日後に虹口に移つてしまつた。老郵オウユウも間もなく去つて行つた。私は唯一人の環境の中で、これから先どういふ風に私の考へを具體化して行かうかと考へてゐた。

一九三七年は硝煙の中にあわただしく暮れようとしてゐる。

## 一七 孤島 上海

上海の租界は一九三七年十一月十一日周國をことごとく日本軍に占領されてしまつた。中國人はそれ以來この町を「孤島上海」と呼ぶやうになつた。この名稱には多分に詠嘆的な調子がかもつてゐる。が、實はこの名稱ほど上海の實質にそぐはぬものはない。上海は決して中國の戰場から孤立してもゐなかつたし、又世界から切り離されてもゐなかつた。近代戦争が武器の戦争よりもより多く經濟戦争や思想戦争であるならば中國が抗戰の初期に日本と戦つた戰場は奥地よりも寧ろこの町の中だつたのである。先づ經濟戰の分野を見よう。抗戰の初め國民政府があつた莫大な軍需品を調達出來たのは全く上海租界のあつたおかげだといつても差支へない。抗戰の初期に於て上海を通ずる輸出入は何の障害も受けなかつた。だから中國全體の輸出入のバランスは戦前よりも寧ろ健全な状態を示して居り、入超は却つて減少を示してゐる。試みに一九三六年から三八年までの全國貿易額を比較して見よう。

戰前及び抗戰初期の全中國貿易額（單位千元）

年 度	輸 出	輸 入	入 超
一九三六年	七〇五、七四一	九四一、五四五	二三五、八〇四
一九三七年	八三八、二五六	九五三、三八六	一一五、一三〇
一九三八年	七六二、六四一	八八六、一九五	一二三、五五八

  

年 度	對英最高		對英最低		對米最高		對米最低	
	(ポンス)	(ドル)	(ポンス)	(ドル)	(ポンス)	(ドル)	(ポンス)	(ドル)
一九三六年	一四・四六七五	一四・二五〇	一四・二五〇	三〇・〇〇〇	二九・二五〇	二九・二五〇	二九・二五〇	二九・二五〇
一九三七年	一四・三七五	一四・二五〇	一四・二五〇	二九・三七五	二九・三七五	二九・三七五	二九・三七五	二九・三七五
一九三八年	一四・二五〇	七・八七五	七・八七五	二九・二五〇	二九・二五〇	二九・二五〇	一七・一二五	一七・一二五
一九三九年	八・〇〇〇	三・二五〇	三・二五〇	一五・六二五	一五・六二五	一五・六二五	五・五〇〇	五・五〇〇

國民政府の戰時經濟政策もこの基盤の上に立てられた。中國のやうな重工業のない國家では軍需品は外國からの輸入に待つ外はない。外國からの輸入を順調にするためには、法幣の對外價値を安定して置かなければならない。政府はそこで國內の特産品たる桐油・豚毛・タングステン・錫・アンチモニー・茶等の輸出を強化し海外の法幣基金を充實すると共に無制限に外國爲替を賣り出した。戰争開始後一ヶ月間に政府の賣つた外國爲替は八百萬磅と概算されてゐる。そのため三八年三月まではともかく次表に見るやうに法幣の對外價値は全く安定してゐる。



三八年三月日本が華北聯合銀行の所謂「聯銀券」を發行し、それを以て法幣を吸収し、軍需品の購入にあつたので、國民政府は自衛上急速に外國爲替の割當制を實施せざるを得なくなつた。その結果法幣には暗相場が出来、従つて三八年度の對英最低價は七・八七五ペンスまで落ちてゐる。しかし開戦以來八ヶ月法幣の對外價値が微動だにしなければならぬことは中國としては驚くべき事實だつた。法幣價値の安定で最も多くの利益を受けたものは上海の民族資本と外國資本でなければならぬ。國民政府の戦時經濟政策が彼等の利益にひきずられてゐたとすれば、それは抗戰の指導權に上海の參加してゐる比重が如何に大きかつたかを示すものである。

中國の思想宣傳戰も主要の戦場はやはり上海租界の中にあつた。上海は中國の上海ではなく世界の上海である。ここで展開された宣傳戰ほどこの戦争が世界戦争の一環であることを明瞭に表したものはない。それは中國と民主國群との堅固な聯合戦線であつた。

先づ新聞界では抗戰の初め大公報・申報・新聞報・神州日報・時事新報・立報（小型）が一流紙として筆陣を張つてゐた。上海陥落と同時にその多くは日本の新聞檢閲を嫌つて自然的に發行を停止してつた。しかしこの凋落の期間は決して長くはなかつた。以前から外國籍の華字紙として存在してゐた大美晚報・大美報・華美晚報はそれが外國籍であるがために日本の新聞檢閲をまぬがれてゐた。従つてその記事は活潑となり、租界の中國人は争つてそれを讀んだ。このやう

な事實が敏感な上海の新聞人に見逃がされるはずはない。忽ち名目だけを外國籍にした華字新聞が華報・文匯報・國際報・譯報と續々發行された。間もなく申報、新聞報の一流紙までが米國籍となつて再出發するやうになつた。それらは日本の檢閲ばかりではなく國民政府からも以前のやうな掣肘を加へられなかつたので、記事は未だ曾て見ない活潑さを呈してゐた。

放送界にも上海の孤島化は中國側に何の影響も與へてゐない。國民政府はここに直接の放送局をもたなかつたが英米放送局の中國語放送は中國政府のためによい代辯者になつてくれた。特に華美電臺X M H Aのカロル・アルコットのニュース放送は租界中國人の人氣をさらつた。その他米國系の大美晚報電臺X M H Cや、英國系の民主電臺X C D N、英米合作の福音電臺X M H D、佛系の佛國文化電臺X F F Zがそれぞれ中國語放送の時間をもち、電波の對日共同戦線を展開してゐた。

日本軍は初め上海を包圍することによつて上海を中國から切り離すと同時に英米からも切り離せるものと考へてゐたやうだが、事態は全く反對の結果になつてしまつた。上海が陸地の連絡を絶たれば海上から連絡する外はない。上海はいやでも應でも船舶をもつてゐる英米に頼らざるを得なくなつた。この關係を最も具體的に示したものは上海人の食糧問題である。

當時、上海租界にはその四周から戰禍を免れて逃げこんだ人口三百萬、以前の住民百五十

萬、合せて約四百五十萬の人口が集まつてゐた。しかも租界の面積は、蘇州河以北の地域をもがれ、越界路地域を失つて以前の半ば以下になつてゐる。そこには當然食糧問題が起らざるを得ない。從來上海四百五十萬の人口が消費する米穀は毎月二萬四千噸と計算されてゐた。平時その米穀の大部分は揚子江筋から移入され、外國から輸入されるものは極く一少部分だつた。戦争以來その割合は次第に變化し、二、三年後には全く顛倒してしまつた。即ち一九三六年には内國米の上海移入高二百二十一萬石、外國米輸入高九萬二千石だつたが、一九四〇年度には内國米移入高七萬八千石に對し外國米の輸入高は三百九十二萬石に達してゐる。従つて米價はあがることにはあがつたが最初上海人がみな恐れてゐたやうな暴騰は避けられてゐる。この米穀輸入について上海人は等しく英米の船舶に感謝してゐる。

以上の諸關係を他の面から觀察すればみな上海ブームを惹き起す諸要素でもある。戰時貿易の異常の發展、軍需品の賣買、中國・日本その他世界各國がばらまく宣傳工作費、各國駐屯兵の落す金、米穀の輸入、かういふものはみな上海の民族資本にすばらしい繁榮の機會を與へてゐる。

上海の上に各地から戦争を避けて上海に流入した資本は、巨大な遊資となつて、外國爲替・外國貨幣・匯割・標金・公債・株式・米・棉花・金物・西洋藥品・雜貨を買ひ漁り、次ぎ次ぎに投資對象を求めて市場を移動してゐた。この戦争ブームにつれて一時停滞してゐた民族工業も忽ち復活

してきた。上海電力会社の工業動力販賣高は事變前一ヶ月平均六千百萬キロワットだったが、一九三九年一月から四月までの一ヶ月平均は既に五千三百萬キロワットに回復した。

しかし上海競争ブームの特徴が最もよく現はれたのはやはり上海が本來そのために知られてゐる享樂の世界だつた。或る中國人はこの頃の上海を皮肉つて正に「五館の天下」といつてゐる。

五館とは彼によれば賭館・煙館・飯館・舞館・殯儀館のいひである。中國には、昔から「吃喝賭」の語があるが賭館は即ち賭錢の場所である。滬西には軍の後援によつていち早く賭館が林立した。共同租界の競馬場やフランス租界のドック・レース、ハイプライの賽質はやはり賭博であるが、滬西の賭博所は中國各地のあらゆる種類の賭博法を集め、さながら賭博チバートの觀があつた。その賭場臺で取引される金は毎夜數百萬元に達するといはれてゐる。

滬西の賭館と並んで繁榮をほこつたのは南市の煙館である。これは「戒煙所」とか「談話室」とかいふ人聞きのいい名前はつけてゐるが、内容は全くの阿片吸飲所である。中に入れば妙齡の女招待が阿片吸飲の一切の世話をやいてくれる。日本は熱河から黒土を運んで公然とここで賣らせてゐた。滬西の賭館、南市の煙館は、この時代の双壁といはれてゐる。

飯館は飯店、つまり酒店の大きなもので旅館を兼ね、又妓館も兼ね、また麻雀賭博の場所ともなる。つまり「飲む、打つ、買う」を一ヶ所で出来る設備である。

舞館は大小のキャバレーだ、以前からあつたバラマウント・マヂェスティック・アンバサダー等々の外に、ブームの要求に應じて大、中、小のキャバレーが到るところの盛り場に新設された。フレンチバンドの近くにある朱葆三路は前から Bloody Street の別名があるが、この邊は各國から集まつた駐屯兵がダンサーの奪ひ合ひから毎夜のやうに血の雨をふらせてゐた。

殯館又は殯儀館は上海の孤島化以來雨後の筈のやうに増した。中國人は誰でも死んだら故郷の土になりたいと願はぬものはない。少し面子のある遺族は高い金を拂つても死者の亡骸をその故郷まで送りどける。上海が封鎖されてゐる今日いくら金を出してもそれは出来ない。その死體の預り料をとつて運搬の出来る日まで預らうといふのがこの殯儀館の商賈である。ともかく五百萬の人口がこつた返してゐる筈だ。死人にとつてもひどい住宅難だつた。だから殯儀館の部屋代は驚くべき額に競り上つてしまつた。

要するにこの時代、すべて館と名付けるもの盡く「生意好來西」だとはある上海人のいふことである。すかすか、でも圖書館だけは閑古鳥が鳴いてゐるぞといつたら、その男は「館の上の一鳥字だけが有效なのだ、だから書館（寄席）は満員ぢやないか」と答へた。

孤島 このやうな繁榮は他の方面から見れば物價の異常な昂騰によつて特徴づけられる。米穀は大幅の値上りこそなかつたがしかし堅實な足取りで騰つて行く。肉類や野菜は運搬の困難のために値

上りの幅は大きかつた。工業製品も多数の工場の焼失や生産停止のために非常に上騰してゐる。ただ上騰しないものは工人の賃銀だけだつた。楊樹浦の焼失や、原料輸入難のための操業停止などから戦場を失つた工人は荷にみちて居り、その上に戦亂を避けて租界に逃れた農民や小市民はそのまま巨大な産業豫備軍として租界にとどまつてゐる。工賃が高くならうはずはない。彼等の生活は上海の表面の繁榮にも拘らず悲惨なものであつた。その苦しさは次の工人生活費指数を見ればよくわかる。

上海工人生活費指数（一九三六年平均＝一〇〇）

年	名目所得	生活費指数	實質賃銀
一九三六年	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇
一九三七年	八四・八三	一一八・一五	七一・八〇
一九三八年	九二・三八	一五二・九〇	六〇・四二
一九三九年	一一九・〇八	二〇三・二五	五八・五九
一九四〇年	二四二・四七	四三八・二二	五五・三三

一九三七年には生活費指数が一八・一五まで上つてゐるのに名目所得指数に於て八四・八三に下げられ、三八年には生活費指数が一五二・九〇まで上つてゐるのに名目所得指数に於ては九二・三八に下つてゐる。これだけ生活が壓迫されてゐながら三八年の罷業件数は恐ろしく少く總

計僅かに二八件、参加工人數七、〇〇九人にしか過ぎないのである。以て労働條件がいかに困難であつたかがわかるであらう。

この表に現はれた工人の實質賃銀の低落は工人の家計を分析することによつてその意味が一層はつきりする。滙江大學のハーバート・デイ・ラムソン教授は一九一八年から一九三〇年までの中國の都市工業労働者の生計を分析して次のやうな數字を出してゐる。

今生活費總額を一〇〇とすれば

食料費	五四・三
衣服費	六・八
住居費	一〇・八
燃料及び光熱費	九・五
雜費	一八・六

海 上 島 現  
一九三八年のやうに實質賃銀が六〇・四二にまで低落したといふことは、ただ今までの生活費の中の食料費と衣服費だけを辛うじて補へるだけなのである。もちろんこの二費目だけの費出で生活が出来るものではないから、實際には彼等は自分の食料費をけづつて他の費目に當てざるを得ないのだ。當時抗戦のためにあらゆるものを犠牲にせよといはれてゐたが、最も大きな犠牲を強ひられたのはこれらの階級だつた。抗戦の經濟的影響は上と下でこのやうに不公平ではあつた

が、誰もこの事實を大聲疾呼するものはゐなかつた。

虹口の日本人社會も租界の繁榮をよそに見てはゐなかつた。日本の兵士は前線から虹口に來ると明日を知らない生命のために今日を享樂しようとする衝を漁り歩いた。商人は上海を知らないこれ等兵士達を相手に勇ましく狡猾な商賣をはじめた。彼等はパンを、菓子、石鹼を、エロ寫眞を生命がけて租界から仕入れてくると直ぐ三、四倍の値段で兵士達に賣りつけた。兵士達の故國から持つて來た金は忽ち商人の手に渡つてしまつた。兵士達の中には中國人に對して多年養はれた輕侮感から中國人のものを略奪して恥としないものも出た。中にはどうして持つてきたのか血だらけの法幣をどつそりもつてくる兵士さへあつた。しかしこれらの略奪物も虹口の商人の悪らつなものにかかつて忽ち二京三文の價値に評價され、價値の百分の一にも足らぬ商品と交換されてしまつた。又日本人の中には虹口の家屋から中國人が逃げ出したのをよいことにして、その空家を無斷で占據してしまつたものが多かつた。彼等は後からほんとの持主が出て來ても家を明け渡さず、高い金をとつて他に轉賣してしまつたり、持主に返すにしても莫大な修繕料を取つたりした。中國人の物資移動の許可書をとつたり、隱匿物資の摘發をやつたりすることも日本人のよい金儲けの一つだつた。日本軍占領地域に置いたまを取りに行けない中國人の物資を租界まで移動する許可書を取つてやればそれだけで巨萬の謝禮が懐に飛び込む時代だつた。かうした惡徳の金を



積んだ「にはか成金」が毎夜のやうに歡樂に落す金は忽ち虹口にも租界にまけないブームタウンを造り上げた。虹口でも大砲の代りにキャバレーのサキソホンが高く響き、サーチライトに代つて料亭から明るい灯がもれ始めた。

この頃の上海を表面だけ見て通れば繁榮をほこる近代都市の外には何も見られなかつたらう。租界では何一つ毀されて居らず、街を行く人々も平和な顔をしてゐたからだ。避難民の困窮した姿、そんなものは上海にはいつだつて絶えたことがないと旅行者はさう考へることも出来る。野上彌生子氏は一九三八年の秋歐洲旅行の途中で上海を訪れたが、その旅行記ではかう述べてゐる。

……その時パーク・ホテルの窓から眺めた上海は、赤褐色の屋根と、白い壁のぎつちり密集した、さうして所所に近代的な高層建築をもつて果しく縋いた、美くしい、さも平和らしい都市でありました。ホテルの眞下にひろがつた緑の芝生の競馬場も繪のやうで、向の窓からは昆山が眺められる、と先に立つて教へるボトイの蒼白い板つ片のやうな顔を見ても、下に包む心は知らず、日支事變なんて聞いた事もないと云つた様子でありました。

上海  
これは事變の始まつた日から約一年餘りたつた時の有様だが、上海は周邊から砲聲が遠ざかるにつれて忽ちいつもの笑顔をとり戻したのだ。しかし野上氏は賢明にも「下に包む心は知らず」といつてゐる。この上海の笑顔の下にはどんな悲哀を、どんな感懐を、つつんでゐるかは行きずりの旅人にはわかるはずはない。

巴金はこの笑ひ顔の下につつまれた悲哀と愛國心を「摩娜里莎」の中で書いてゐる。戦争が始まつてまだ間もない頃だらう。上海はその頃同北や大場鎮で盛んに撃ち合ひをやりながらも租界の中はいつもと同じ明るい面をもつてゐた。霞飛路にはロシア人經營のレストランが並び格安で豊富なロシア料理を食べさせてゐる。巴金の「モナ・リザ」はこのやうな料理店の一室に於ける友人との會話に始まる。

「どうだいあの外國の女性は美麗ぢやないか」

林といふ友人は菜汁を飲みをはつて急に隣りのテーブルの方を向き、目でそこに坐つてゐる女客をさしながら私に問うた。

私は何もいはなかつたが、心の中で「こいつ、どうしてこんな暢氣なことが考へられるんだらう」と想つた。この友人は今しがた日本の飛行機で爆撃されてゐる地方から上海に逃げてきて二時間ほど前、人で黒山になつてゐる南站(南市ステーション)から出て來たばかりなのだ。その上彼の絹の上衣は人につきやぶられて大きな穴をあけてゐる。それなのに今ここで安閑と女の品さだめをやつてゐるのだ。

「大したもんぢやないさ」もう一人の友人があつさりいつてのける。

「さうぢやないんだ。私はあの女がどこかモナ・リザに似てるところがあるといふのさ」

林は感心したやうにかういつた。彼は何か靈感でも受けたやうな感じだつた。何かもつといひたかつたらしい。だがその時高射砲が急に鳴り出したのでこのレストランにも人の動きがあわただしかつた。三人の客が急いで勘定を拂つて出て行つた。林もモナ・リザを忘れたやうに唯うつむいてパンを食べ始めた。

その女客は靜かに坐つてゐる。傍らには四歳くらゐの肉付きのよい子供を坐らせてゐる。彼女はフォークをうまく使つてトマトを一切れ子供の口に入れてやつた。顔は微笑してゐる。しかしその微笑には確かに何となく淋しさがこもつてゐた。

これは上海の笑ひ顔だ、戦争中どこでも見る上海のありふれた情景である。かういふレストランはみな一ヶ月幾らの定めで下宿住ひの外國人は毎日きまつて同じ店にやつてくる。巴金もやはりかういふ店に通つてゐたものと見える。巴金の「私」はそれから急にこの婦人に興味をもつてくる。彼女は口数が少く、言葉を聞いてもどこの國の女ひとだかよくわからない。やつと或る時その店のボーイと彼女との會話を通譯しなければならぬことになり巴金の「私」は彼女と口をきく機會をつかんだ。彼女はフランス人で夫は中國の飛行將校だつた。しかし彼女の夫はもう二、三週間前から消息が絶え、明日はその安否を知るべく杭州に行くところだといふ。彼女は夫がいつも

「今度の戦争には必ず「一・二八」の仇を報いる」といつてゐるので恐らく戦死したのぢやない

かと心配してゐたのだ。

彼女の話はかう續いてゐる。

「たうとう今度その機會が來ました。夫は他の人々と同じやうに職責をはたしたことでせう。夫はいつも自分の血で過去の國辱を洗ひ清めて見せるといつてゐましたもの。私は杭州に行つても恐らく夫に會へさうもないと思ひます。夫は杭州にもう居ないかも知れません。昨日中國の飛行機が一機落され、敵の後に降りた飛行士は俘虜とならうとせず敵を二、三人殺して自殺したと聞きました。その人の名は知りませんが、もしかしたら夫ぢやなからうかと思ひます。貴方それをききましたか？」

「新聞で見ましたが勇敢な人ですね」

私はただかき答へただけだつた。私の心は同情と尊敬で一ぱいになつた。それと同時に私の心に重くのしかかるものを感じた。

「私はきつと夫だつたと思ひます。あの人はほんとに勇敢でしたもの」彼女は急に眼をはつて興奮しながらいつた。

「必ずしも貴女の御主人とは限りません、御主人はきつと大丈夫でせう。杭州でお會ひ出來ますとも」

私は自分の感情をおさへておだやかに彼女をなくさめた。

彼女は頭をふりながら微笑した。これは悲憤の微笑である。これは苦痛の微笑である。

「私は自分だけの幸福を考へてはゐません。私達フランス人は中國人と同じです。自由を愛し正義を愛してゐます。私達は強い権力の前に頭を下げたことはありません」

それから又彼女はいひ直した。

「いいえ、私は今は中國人です。中國の女の人に出來ることは私にも出來ます。私も夫が同胞の幸福のために犠牲になることを欲してゐます。中國は今こそ血に血を以て報いる時だと叫んでゐます。もしも私の夫がほんとに國のために犠牲になれたら、それこそ彼の幸福なのです。私はこの子供をよく教育させよう。この子もやはり將來父親のやつた通りにするでせう。この抗戦は中國の人民が解放されるその日まで續くものだと思ひます」

彼女はかういひながらだんだん興奮してきた。顔色が赤くなり眼が火になつて私の顔を灼くやうに感じられた。彼女は雄辯な煽動家のやうに私の感情をとらへてしまつた。彼女は私の熱情に點火した。私の全身にははげしい身ぶるひが起つた。私は自分ではづかしくなり、それからまた彼女に對する尊敬の感情が身内に湧いてくるのを感じた。——

これが巴金の「モナ・リザ」のあらすぢである。上海はこのやうな悲劇や、愛國心を内につつ

みながらもやはり表面は浮氣娘のやうににぎやかに笑つてゐるのだ。上海の表面だけ見て「中國人といふものは」と簡単に結論してはいけぬ。上海の笑ひはやはり「モナ・リザ」の笑ひなのである。

上海が孤島化してから私の生活は一段と悪い方に傾いた。私の國際情勢や中國に關する一般的報告などは軍に必要がなくなつたのか、又は報告を受取る人が變つたせゐるか見向きもされなくなつた。私のやつてゐるやうな一般的報告は當面の必要ではないから、中國の軍隊の移動とか、租界に入りこんだテロ團の本據とか具體的なものを調査してこいといはれた。さうした仕事は私の自尊心が許さないし、第一中國の友人達に對する良心にもとると思つた。それまでは自分の報告が軍の中國に對する考へを變へるために、少しは役立つと思ふところに私の良心の安定點があつたのだ。だから私はかなり勉強もしたし、仕事にも念を入れてきた。上海にころついてゐたおかげで英・獨・露、中國語なら新聞ぐらゐは樂に讀めるやうになつてゐたので随分廣く材料も漁つた。私は、中國については先づ次の點を強調すれば軍人のわかりもいいし、彼等の考へを多少はこちらに向けることも出来るのではないかと思つてゐた。

一つは、蔣介石政權は決して容共的ではないといふ事。しかし日本がこの政權に壓迫を加へれ

ば——つまり日本が中國の侵略を進めて行けば——蔣介石政権はいや應なしに中共と台體してしまふ。

二つは、日本がもしほんとに防共協定を結びたいならば中國を侵略してはならないといふ事。

中國侵略を進めれば蔣介石政権の力は弱り、中共の力が擴大する。それは日本の隣國にソ聯の勢力をひき入れることになつてしまふといふ點。

三つは、戦争の過程に於て中國の西北、華北に中共の勢力が安定すれば、滿洲はソ聯と中共の間にはさまれ、その軍事的地位の弱化はまぬがれないといふ事。

四つは、日本が蔣政権を英米から離すために壓迫するとすれば、これ程馬鹿な事はない。中國は日本からおされればおされるほど、英米にたより、英米は參戰しないまでも、益々中國を援助するやうになる。英米が中國市場を見かぎることがあり得ないし、日本の中國市場獨占計畫と妥協することもあり得ない。又列強が中國の勢力範圍を分割するには中國はあまりに強固な統一であり、その民族意識はあまりに熾烈であるといふ事。

## 海上

要するに、これらの點から見てこの戦争がいかに不得策であるかといふことを、私はあらゆる報告を通じて軍に勸告してきたつもりだ。私のこの見解はずつと後で私が申報に發表した論文集

を見ればわかると思ふ。

しかし私の企ては全然失敗に終つた。軍人には第一に蔣介石が容共的であるといふ強い先入観念があつた。そして抗日即ち共產主義といふ考へ方からどうしても抜けきれないといふことがわかつた。これは自分で國民にさう宣傳してゐるうちに知らず識らず自分がその宣傳の魔術にかかつてしまつたらしい。私が色々な實例をあげて蔣介石政權はその本質から容共的であり得ないから、日本が中國から手を離さへすれば國共は分離するものだといふことを説明しても結局無駄に終つた。

こんなことで自分の仕事に意味のないことがわかつてくると私は急に働くことが嫌になつてきた。といつて私には軍との關係をあつさり切ることが出来ない事情にある。生活の問題は何とか解決出来るがただ困るのは私の身柄だ。私自身懲役二年で執行猶豫中を逃げて來てしまつたばかりでなく、治安維持法の犯人をかくまつてゐるからまさかの場合にはすぐ引上げられる身體だ。

その上今は私の身體で三村君の安全を保證してゐる關係がある。だから嫌でも軍との關係はつけて置かなければならぬ。さうかといつて軍人の氣に入るやうな無責任の情報を出して、いはゆる「情報屋」になり下がることにも自餘心が許さなかつた。結局私はその頃出たばかりのエドガー・スノーの「西行漫記」を少しづつ譯しては出し、これは重要な資料だといつてお茶をこして置く



程度に止めて置いた。

仕事には興味がなくなる。友人には離れる。そして一人でぼつねんと周囲みな敵につつまれた戦線の背後に生活してゐるのだからいいかげんくさつて来る。私は何時の間にか夜になると盛んに歩くやうになつた。酒や煙草をたしなまない私の墮ちて行く道はきまりきつてゐる。これは私の長い禁慾生活の反動であつたかも知れない。しかし随分危険な道樂だつた。或る晩私は裏町のその種の家で人間が太古よしましから誰でもやつてきたことを誰でもやるやうにやつてゐると、それまで私の腕の中で目をつむつてゐた妓せんばが急に「來キョウ了ライ了ライ」と叫び出した。私はあらゆる國に於てかういふ場合の表現が共通なのを知らないわけでもなかつたが、何分にも心に恐怖感があつた。とつさに巡捕か何かが來たのかと思つた。私は「誰スエキ來ライ呢」といふが早いかはね起きた。誰か來て私が日本人だとわかつたら大變だと思つてあわててそのまま逃げ出してしまつた。あとからすぐ自分が大變な時に大變な意味をとり違へたものだと思つたがもう後の祭りだつた。

上 島 得るためにだんだん手段を選ばなくなつて來た。虹口の商人でフランス租界まで商品を仕入れに來られない人々の仕入れの手傳ひまでやつた。これで私は自分の生活だけでなく僅かに残つた友人の楊さんの家計を見て上げることが出來た。楊さんは張さんの友人で、張さんが北に行く前に

經濟的に困つた時はこの人の世話になれと紹介してくれた人である。ところが戦争が始まると經濟的に困つて來たのは寧ろ楊さんの方だつた。私は楊さんのうちでサンドイッチなどを大量にこしらへさせ虹口の商人に世話して上げた。しかしそんな僅かな儲けでは追ひつかなくなつた。丁度その翌年の正月、或る中國人から上海の郊外周家渡の先にある八字橋ハツチヤシといふ村に豚の毛が三十捆かくしてあるが、それを租界にもち出す許可書を取つてくれれば二萬元ださうといふ話があつた。二萬元といふ金を握つて今までのけちな生活から抜け出ることが出來たらどんなによからうと考へた時には、私は知らず識らず虹口の浪人達のやつてゐる物資搬出にうごめく一人になつてゐた。ともかく現場に行つてその現物があるかどうかを見ることだけは許された。或る小春日和の午後、慾に目のくらんだ私は蘇州河の上流をひとりとはぼ歩いてゐた。堤の上の道路は中國軍のトーチカで穴だらけになつてゐる。さすがに道路の上の死體は片づけられてゐたが一寸脇道に入ると直ぐもう眞黒くなつた中國兵の骸骨がヘルメットをかぶつたまま空をにらんでゐる姿におつかる。道にはところどころメ繩が張つてあつて、「この下に地雷あり」といふ札が下げてある。附近の農民達も逃げて行つてしまつたらしく行人はごくまれだ。二時間ばかり歩くと蘇州河がだんだん狭くなつて來た。來る時に中國人の依頼者から地圖で示して貰つた豚の毛をかくしてある竹籤といふのが遙か前方に見えて來た。かなり道路から離れてゐる。道路から小道に入つて

そこに行かうとする途中の橋の上で初めて日本の歩哨に誰何された。歩哨は五十近いおやぢさんだつたが、私が日本人だと知つたので戦争は櫻はなの咲くまでに終るといつてゐるがほんたうだらうかと聞いてゐた。私は今の様子ぢやそんなに早く終りさうもないといつたら淋しさに黙つてしまつた。前方の竹藪に危険はないかといつたら、あの邊まではいいがあの邊から先に行くともまだ敗残兵が居るから注意しろ、ここらあたりは杭州灣から上陸した日本軍と蘇州河北岸から渡つて來た日本軍とに挟撃されて中國軍が全滅したところだと教へてくれた。小道を進んで行くと時々中國兵が軍服を着たまふ胸に手榴彈をつけてミイラのやうに黒くなつてゐる。初めはそつと頭の方を廻つて行つたが、しまひにはそのまま跨いで進んで行つた。たうとう目ざす竹藪のところ來た。かなり大きな竹藪だつた。驚いたことには機關銃の掃射のためでもあらう、巨大なかみそりであたられたやうに竹の上の方はきれいに刈り取られてゐる。私は足もとに注意しながらその中に通ずる小道を進んだ。五、六歩行くと私が先づ見たのは——何といふ死人の數であらうか、中國兵の軍服を着た例の骸骨やミイラが折重なつて倒れてゐる。手に銃を握つたまふのや手榴彈を胸にさしたままのものも多かつた。豚の毛が入つてゐるらしい箱も多少は残つて居た。だがそれは土囊の代りにでも使はれたのであらう、その上に銃を置いて最後まで戦つたらしい勇敢な中國兵がうつぶせに倒れてゐる。首だけがどうした調子か頤とヘルメットにささへられてちよこんとその

邊 無 海 上

上にすわつたまま空ろな眼窩で前方をにらんでゐる。竹林のすき間から落陽がかすかにさしこんでいくすちか白い光の線を後光のやうにつくつてゐた。

私はつつ立つたままそれをちつと見つめてゐたがやがて大急ぎでその場を逃げ出した。氣味が悪くなつたのぢやない、ただ恥かしかつたのだ。この愛國者達が最後まで守つた陣地を二萬円で租界に賣らうとしてゐる自分あまりにも恥かしくなつたのだ。

間もなく私は租界に向つて、蘇州河の堤の上をひたむきに歩いてゐた。冬の日はもう大分かたむいて私の黒い影を大きく長く河面に落してゐる。私にはその自分の影がひどくみにくく、あさましいものに感じられた。

— 終り —

## 和平の轆

一九四二年もう終りに近い十二月の五日か六日だったと思ふ。朱泰耀が楊健威を通じて急に私に會ひたいといつて來た。この二人とは上海に來て以來、ここ四、五年づうつとつきあつてゐる。時代が時代だったし、お互の立場が立場だったので、頻繁な往き來こそしなかつたが、色々な事件で行動を共にして來たのですつかり氣心は知れてゐる。お互の立場といふのは朱がCC團員、私が軍の無給囑託、それに楊が双方の連絡者だったのだ。

朱泰耀の屬してゐるCC團は——といつても中國の政治にふれたことのない人にはびんと來ないと思ふ。中國に陳チェンといふ姓はざらにあるが、これを二つ集めると或る特定の陳しか指さないことになつてゐる。兩陳リョウチェンといへば陳果夫、陳立夫兄弟のこと、この二人の Chen の頭文字から名をとつたCCは一口に「蔣家天下陳家黨」といはれる位で、國民黨の事實上の推進力なのだ。「アジアの内幕」のジョン・ガンサーは、CCを國民黨のタマニー・ホールだといつてゐる。

る。民主黨のタマニー・ホールがニューヨークの市政を支配してゐたやうに國民黨のCCが上海の市政を牛耳つてゐる點をみればさういへないこともないが、この比喩では兩方の政治的比重が全く無視されてゐる。タマニー・ホールの政治家達が民主黨の中にどれほど大きな力を持つてゐたか知らないが、アメリカの支配階級の陣營には民主黨の外に共和黨といふ大政黨がある。しかし中國には一體國民黨の外に何があらうか。中共のことはしばらく措く。なるほど國家社會黨もある、社會民主黨もある、青年黨もある。これらの群小政黨は曾てどこかの少しあわてた評論家達が寄つてたかつて「第三勢力」だときめてかかつたものだが、中國ではそれが國民黨と中共を向ふに廻らす第三勢力を構成してゐるなどと考へてゐるものは殆んどあるまい。それはたかだか國民黨自身が面と向つていひ出せないことをわきからいさせるためか、または、國民黨の獨裁ではないといふ言譯のためかにとつて置かれたもので、廣い意味で國民黨の外郭團體と見られてゐる。だから國民黨を内から支配するCCは、ある意味で中國を支配してゐるともいへるのだ。

朱泰琛はオックスフォード大學を卒へると上海に歸つて、すぐにCCに入つた、と初對面の時に私に語つた。しかし私が英語で話し出したらしどろもどろだつたから彼の英國留學説は大分怪しい。彼がどうしてこの結社に参加したか自分では話さなかつたが、私の觀るところ——上海で人間らしい生活するには金が要るが、金を造るには何かの形で政治に關係しなければならぬ。

こんな中國の悲しい現實におされてこの道を往つたものであらう。かういふいひ方をしても、私は決して彼の愛國心を疑ふものではない。愛國心は場合によつては、生命を犠牲にすることもある。が、生命は誰にも一つしかないから、さういつも犠牲にばかりしてはゐられない。だから平常は愛國心で飯を食ふこともあり得る。彼は恐らくこの愛國心と生活慾の協定に従つて私に近づき、日本の軍の金を使ひながら、同時に中國の抗戰目的を達成しようとしてゐたのだと思ふ。

彼にとつて大へん都合のよいことには、國民黨の戰爭目的は唯中國の實力を以て、日本に侵略の困難を思ひ知らせ中國侵略から手をひかせることであつた。だから中國がもし最低限度の獨立・自主性を維持しつゝ日本と平和關係に入ることが出来れば、中國の抗戰目的は一應達成したといへるのだ。かういふと少し獨斷めいてゐるやうだが、廬山會議の後で行はれた蔣介石の演説を讀めば、この氣持はよく現はれてゐると思ふ。

「少しでも平和の希望が残つてゐる限り、我々はそれを棄ててはいけない。我々が耐へ得る最後の關頭に達するまで、輕々しく犠牲を説いてはならない」

この言葉は中國がいかに平和を望んでゐるかを何といふ率直さで語つてゐることであらうか。和とはいへ蔣介石の望んだ平和は、決して奴隸の平和ではない。彼は民族の獨立と自主性を犠牲にしてまでも、平和關係の持續を望んだのではない。彼は一九三七年の華北に於ける中日關係を規

定して、中國の忍び得る獨立の限界をはつきりと提示した。そして、日本がこの限界さへ超えなければ中日兩國の間に戦争はないと宣言してゐるのだ。この言葉の裏返しは、日本が若し中國に最低限度の獨立と自主性を認めようとするならば、中國もまた日本との平和關係を選ぶであらうといふことなのである。當時日本がもしもこの切實な中國の立場を理解したならば、國民黨は喜んで日本と妥協したであらう。なぜならば、國民黨は日本よりもつと執<sup>よく</sup>な階級敵が、もつと身近かに自分をねらつてゐると考へてゐたからだ。抗戰が全國的となつても、この事情はあまり變つてゐない。「だから日本が眞劍に國民黨の立場を考へてくれるならば、中國の和平の門はいつでも開かれてゐるのだ」と朱泰耀は口ぐせのやうに私にいつてゐた。

私は朱のこの言葉を、國民黨の意志といふよりもCCの意志と考へる限り、無條件に信用してよいと思つた。しかし、いくら中國の「和平の門」が開かれたままであるにせよ、日本がその門より大きな荷物を抱へてゐたのでは、入らうにも入られるものではない。荷物とはいふまでもない軍の膨れ上つた野心のことだ。あの當時軍の身の程を知らぬ野心を掣肘し得る可能性が日本どこにあつたか、といふ人もあらう。だが私は、この點では決して悲觀はしなかつた。次のやうな色々の可能性を計算に入れると、必ずしも不可能ではないやうに思へたからである。

第一に、日本の金融資本といふものは決して全面的に軍部の戦争政策を支持してゐたわけでは



ない。最初はその中にも強硬に反対するものがあつて、軍が五・一五から二・二六までのテロ政策で、無理やりに彼等をひきずつて來たことは誰でも知つてゐる。後になつて掠奪結婚で從はせられた妻のやうな工合になつたが、兩者の關係は中國侵略がスムーズに進行してゐる間はともかく、うまく行かなくなると必ず問題が起るとみられてゐた。

第二にひとくちに軍部といつても決して統一した全體ではない。中には中國侵略の停滞が日本の全般的國防計畫に支障をきたすのを知つて、大ていの條件なら早く和平してしまへと主張するグループもあつた。參謀本部のロシヤ班などは、中日戦争が擴大すれば、日本の對ソ戦争計畫を全般的に變へなければならぬので、日本がそれに深入りすることを好まなかつた。

第三に、國內のインテリゲンチヤは大體この戦争の本質を初めから知つてゐる。インテリで腹から軍部の侵略戦争を支持してゐたものは案外少いのではないかと思ふ。誰でも知つてゐるやうに戦争前から日本には形の變つた「宗教裁判」<sup>インテリゼリオン</sup>があつた。表面に戦争反對の行爲が現はれなくとも、頭腦の片隅にさうした臭ひをとどめてゐることがわかれば忽ち自由を奪はれる。だからさういふ臭ひをもつた人々は、勢ひその臭ひを消すために、殊更反對のもつと強い臭ひをつける必要があつた。この必要は日本の言論界をいかにも芝居がかつた反動色一式に塗りつぶしてしまつた

が、この表面だけを見て、日本のインテリは結局駄目だと簡単にいひ切つてしまふ人は、さうし

たインテリの苦惱を體驗しない幸福な人達なのである。

第四に、民衆は九・一八以來軍の宣傳に何か空虚のものがあるのに氣づいてゐた。中日戦争が  
無 始まつて「暴支膺懲」といふスローガンが出たが、こちらは中國に出張つて盛んに暴れても、中  
海 國側からこちらに來て暴られた經驗のない日本人には一向びんと來なかつたし、江西省で盛ん  
上 に剿共をやつてゐたはずの蔣政權がいつの間にか「容共政權」になつてしまつたのも妙だし、要  
するに、中國に日本が出兵しなければならぬ切實な理由といふものは、民衆にはどうも納得出  
來なかつた。

このやうな諸事情は戦争が順調に進んでゐるうちは何でもないが、一たんうまく行かなくなる  
と急速に結合して大きな反對勢力になる可能性がある。現に戦争が一年、二年と續いて行くうち  
に、和平を望む空氣は日本の各方面にはつきり現はれてきた。私はそれを見て、適當な人物を動  
かしてこの情勢を組織して行けば、軍の野心を矯めて中國側の「和平の門」を通るだけの荷物に  
丸めることも不可能ではないと考へるやうになつた。

私はこの戦争の收局者が軍であらうなどは考へなかつたが、現地では軍の手を経なければ何  
一つ出来ないことはわかつてゐた。軍の中にも日本の當面してゐる危険な情勢のわからぬ人ばか  
りではない。一九三八年の夏、參謀本部のロシヤ班から上海に派遣されて來た小野寺信——後に

終戦のとき瑞典のストックホルムで終戦運動をやつたといはれるアタッシュエの小野寺信——などは、永くラトビアに居たので、早晩ヨーロッパに起るであらう大戦争こそ日本の運命の最終の決定者になるだらう、と考へてゐた。そして彼は、その時に際して日本が行動の自由を束縛されるやうな中日戦争からは一日も早く手を引かなければならぬといふ意見だつた。私はこの人の知遇を受けて軍の「無給囑託」となり、日本が「蔣政権を相手にしなく」なつて以來國禁となつてゐた「直接交渉」をこつそり始めることが出来たのである。

かういふと、いかにも私が純真な愛國者のやうに聞えてくすぐつたいから、この外に多少の動機があつたことをつけ加へて置く。あつさりいへば私は上海で生活する金も欲しかつたし、それにこの肩書は戦争の初期に於て比較的「赤紙」を避ける効果があつたからだ。無給囑託といふのは月給を支給されず何か仕事をたのまれるとその工作費で賄はれる臨時雇ひのことである。だが私は、自分の生活に必要なだけはいいかげんな名目で工作費の中から遠慮なく引抜いた。そしてその一部をさいて、戦争前からの友人で戦争インフレで困り抜いてゐた楊健威君の生活を見てやつた。楊君は慶應出の日本留學生で心のどこかでは「延安」に行くことを願つてゐたらしかつたが、足は綺麗な奥さんのゐる上海の家庭から一步も離れられない人だつた。彼がどうして朱泰溜を知るやうになつたか知らないが、私はともかく彼の紹介で朱泰溜を知つたのだ。

「直接交渉」といへば何か秘密のルートで直接蔣介石とつそり和平條件を協議することのやうに思はれてゐる。中國は蔣介石の獨裁であるから和戰を決定するものは唯彼のみだといふ考へが日本人の頭にこびりついてゐるらしい。この考への中では蔣介石の獨裁はヒットラーのそれと無條件に對比されてゐる。しかしこの二つの獨裁はその據つて立つ地盤を全然異にしてゐるのだ。

ナチズ・ドイツでは金融資本が完全にヘゲモニーを握つてゐたが、中國では地主階級や高利貸資本の力がまだ相當強く、ある點では金融資本と結合してゐるが、ある點では鋭く對立してゐる。

國民黨はこの複雑な階級關係を反映して、内部にはいろいろな色彩の黨派が對立し黨の政策はそれぞれ利害關係の均衡によつて決定する。蔣介石自身は訂争する黨内諸勢力のいづれにも屬しまたいづれにも完全には屬せず、その訂争から超然として、いつもその審判者とならうとしてゐる。國民黨内の各派がお互に争ひながら、それぞれ蔣介石を自分の側に取らうとすれば、水球を争ふ多くの手がそれを上につき上げてしまふやうに、彼の地位を高くつき上げて了ふからだ。ここに彼の獨裁者といはれる地位が生れる。従つて、彼が黨政策を決定するといつてもその前に國民黨の意向は大體決定してゐるわけである。彼が決定するのは黨内各派の輿論が既にある均衡におちつかうといふ時だともいへる。だからヒットラーのやうに昨日まで友好條約を結んでゐたソ聯に今日宣戰布告するといふやうな離業は彼には到底出來さうもない。蔣介石の決定は黨政策

の最終の決定だから、彼はどんな場合にもなかなか最初の發言者にはならない。党内輿論の大體の歸趨がわかりそれならばといふところまで來なければ發言しないのが今までの例である。まして和平交渉のやうな重大問題に對しては、日本が何をいはうと責任のある彼が輕率に意志表示をするとは思はれない。それ故私は「蔣を射んと欲せば先づ馬を射よ」で蔣を和平交渉までもつてくるには先づ國民黨の輿論を和平に傾けること、そのためには日本が中國の獨立自主を實際に尊重すること、同時に日本のその誠實性を中國側で受けとつて國民黨内の輿論を纏めてくれるグループと連絡をとることが先づ先決條件だと思つた。

この工作の對象は勿論CCである。朱泰耀はよく私の考へを受け入れて動いてくれた。この五年間、私達は随分色々なことをやり又色々な目に遭つてきた。上海市黨部主任委員姜豪ヤンパオとも連絡をつけた。私が姜豪と一緒に香港に行き、日本のある首相級の政治家とCCの某要人と會見させる手筈をきめて歸つて來たら、このいきさつが汪精衛派の工作者にもれて、小野寺信は上海から追放された。その下で働いてゐた「直接交渉派」は北四川路の憲兵隊に捕まつたり退去命令を受けたりした。發頭人の私は命が危ないといふ情報を受けて、暫くマカオにつぐんでゐた。しかし、軍もやがて汪精衛ではうまく行かないとわかつてきたのか、また私に直接交渉を開けと頼んで來た。もうそんな時期ではないとは思つたが、ともかく今井派遺軍參謀次長や鈴木武官を香港で姜

邊 豪と會はせ、和平の初歩交渉を開かせたりした。だが結果はすべてが失敗だつた。中國が和平の門をどんなに大きく開かうが、軍を當事者とする限りその手足を切り落してもしなければ日本はその門を入りきれぬものではない。遅まきながらさう氣付いたときには、もう太平洋戦争が始まつてゐた。それ以來一年間、私達は思ひきりよく交渉を絶つてきた。今その朱泰燾から急に呼び出しがかかつてきたのだ。

指定された霞飛路アイニエニシヨウのレストランに行くともう二人とも待つてゐる。うちとけた中だつたので私は挨拶の代りに「君たちの方は近頃大分元氣ぢやないか」といつた。當時、ヨーロッパの東部戦線ではソ聯軍が盛り返へして來て、中國側の輿論が大分活氣づいてゐたのだ。朱は一寸頭を振つて、ソ聯に今勝たれてしまふと少し困ることがあるといつた。わからない話だと思つたが、よく聞くとなるほどと思ふ理由もある。彼等はアメリカが参戦した以上中日戦争の勝利についてはいささかの疑ひももつてゐない。日本が結局負けることは、彼にいはせれば「鐵一般的事實」である。彼等が今心配してゐるのは勝利の後に於ける國內問題だ。そして國內問題といふのは外ならぬ中共問題なのである。ところでソ聯が今勝てば、連合軍の攻撃準備の出來ない今日、ドイツはことごとくソ聯の勢力下に入るに違ひない。その時のソ聯の威權アイニエニシヨウは大へんものになる。ア

シア側にも當然それが響いて来よう。それで一番影響を受けるのは國民黨で、その時には中共をどうすることも出来なくなるだらう。だから彼等は何とかして今のうちにアジアの時局を自分達の手で収めたいと思つてゐる。今となつては中國と日本だけで話をつけるわけにはいかないが、日本でもう少し話のわかる、世界情勢に通じた政治家が軍部内閣に替りさへすれば、中國は米國と日本との間に立つことが出来る。日本が徹底的に敗けてしまはないうち、また中國の軍隊や經濟力がこれ以上傷つかないうちに兩國間の話し合ひがつけば、中國と日本にはまだ十分發言權が残るから、米英側にいくら難點があつても、少しは押すことも出来よう。アジアの戰爭をヨーロッパより一足先に収めることは米國の希望でもあるから、この問題に克服し難い難點はあるまい。中國がかうしてアジアの外交の主動權イニシアチブを握つてこの戰爭を終ることが出来れば、國內では國民黨の威權プレステイジによつて中共をおさへることが出来るといふのだ。そして最後に朱はかうつけ加へた。

「これは實は僕だけの考へではない。僕の方のある要人が一度君に會つてゆつくり和平の問題を討論し、君にも少し賛成して貰へたら、ある提案をもつてゐるのだ。會見の場所は上海ではまづい。ぜひ僕の方の軍隊のあるところまで来て貰ひたいのだ。途中は僕が案内する」

私は朱のこの言葉の全部をのみこんだわけではなかつた。戦後、中共が非常に擴大するであら

うことはわかりきつてゐる。中國の農村問題が解決されない限り中共をおさへることは難しい。

中國の農村問題に、多少ともあれ光明を與へるものは中國の民族工業の發展なのだ。中國の工業に希望のほほえみかけた一九三五、六年は、政治面では中共が國民黨から追いつめられたときなのだ。中國の民族工業がすつかり日本に破壊されてしまひ、國民黨の農村問題を解決する希望が遠く去つてしまつた今日、國民黨が戦後どんな威フレスタイゼ権をもつたところで中共の擴大をおさへる見透しは少くとも經濟面では見出せないのである。

それはともかくとして、日本が中國の手引で、この戦争をきり上げることが出来るといふことは、私にとつてかなり魅力のある話だつた。私はこの戦争が日本の勝利に終つて、あの氣狂ひじみた軍部獨裁にもう一つ輪をかけたやうなものが出来たらとんでもないことだと思つてゐた。だが同時に、日本が敗けて軍部さへ逐ひ拂へば、日本人が幸福になれるとは考へられなかつた。少くとも敗戦主義の宣傳は、民族の獨立といふことを考へると、實感の上で少しうそがあると思つてゐた。私の頭には民族の獨立といふものは國際法の條文が決定するのではなく、民族の實力を國際法が確認するものだといふかんがへがこびりついてゐたからである。それ故、日本が惨めな敗け方をして、中國が惨めな勝ち方をしたら、一體このアジアにどれだけの民族獨立國が残るかと思ふと、いささか心細かつた。だからこの戦争をさうまでしないうちに終らせたいといふ私



の氣持には眞剣なものがあつた。私はそのために必要なら日本は悪隣とでも妥協しろと思つてゐた。そこへ今、重慶で一番眞剣に終戦を希望してゐるCCから手をさしのべてきたのである。人は、CCと和平した日本には、當然反動が残るといふかも知れない。だが、私達が第一次大戦で経験したやうに、この戦後に起るであらう世界を覆ふ民主主義の潮流の前には、そんなものは一も二もなく崩れ去つてしまふであらう。いな、たとへ多少の誤算があつても、それは又その時として、日本にとつては先づ終戦が先決問題だ。そのためにCCの要人がわざわざ私に會ふといふ以上、ともかくお會ひしよう。もちろん若干の不安はある。だが萬一何かあつたところで——毎日、何千何百といふ若い人達が屠殺所の豚のやうに、自分にとつて何の意義もない死に方をしてゐる時、自分の信ずる道に於て死ぬるだけでも幸福ぢやないか。私の考へはかうきまつた。行く先は致へられなかつたが、上海から四日行程のところ、十二月十日北停車場にすれば何もかもわかるといふことだつた。

平 の 和  
その日は朝からよく晴れて、十二月だといふのに春のやうな暖かさだつた。中國の田舎の旅は寒いと聞いてゐたから、減多にしたことのない毛の腹巻までしてきたので暑くてたまらない。その上に、上海に來た當時買った一番汚ない長衫を着て、北方人のよくやる毛皮の帽子を冠つてき

た。北<sup>ハイフアン</sup>站は相變らずの雜沓である。やうやく乗りこんだ私達の客車は、まともに足もたてられな  
ない、人と人との間にもまれて上半身が水草のやうにゆれる始末だつた。中國人と「同甘共苦<sup>トウカンキョク</sup>」す  
るはずの日本人は何かの名目で軍用車に乗つてゐるが、そこは客もまばらで紫煙が昏かにのぼつ  
てゐる。そこから中國人の死にも狂ひの雜沓をながめてゐる氣持は——さういふ私自身も屢々  
經驗したが——凡そ人道主義とは縁遠いものである。中國人の間にもまれてゐるとそれがよく判  
つた。

蘇州を過ぎると急に車中が空いてきて私と朱は向ひ合つた席につくことが出來た。朱は上海で  
いはなかつたこの旅行のコースを初めて教へてくれた。流石にかういふ工作で鍛へあげられた男  
だけに用心のいいことである。それによると、私達は先づ常州<sup>チヤンヂョウ</sup>で汽車を下り、城内から和橋<sup>ワキョウ</sup>と  
いふところまで華中鐵道の公共汽車に乗る、和橋から舟で鼎山<sup>テイサン</sup>鎮に出る。鼎山は日本軍の最前線  
でそれを越えて八、九町ばかり先きに行つた湖沿には中國の挺身隊の前哨線が出てゐる。それか  
ら一日行程で張渚<sup>チヤンジュ</sup>、張浩<sup>チヤンホ</sup>から更に山の中を一日行つた山<sup>サン</sup>了橋<sup>リョウキョウ</sup>に私の會ふ人が待つてゐるといふ。  
だがまだそれが誰なのかは教へてくれない。

常州で汽車を下りる。城門に入るところで薄ぎたない綿服の警察官に私達の市民證を檢べられ  
た。私達のはもちろん本物ではない。上海で買へないものは毛澤東の首ぐらゐなものだらう。そ

れから型の如く荷物を檢べられたら、中に入れたはずの英國製のナイフが型の如くなくなつてゐた。中國人ならさしづめ「不翼而飛フイデルフレイ」といふところだ。

常州の城内はひどく壞されてゐたが、殘壁には修理が加へられ、ともかく人家が並んでゐる。和橋鎮行きのバスは出發までにまだ二時間まがあるといふので、街の茶館に入つて待つことにした。川蝦の生きのいいのを油でいためたものと、家鴨の鹽漬で晝飯をすませ、お茶をのんでゐると、様子を見せにやつた伙家カキが歸つて來てバスが直ぐ出ると知らせしてくれた。大急ぎで汽車カキに行つたときには、もう十五、六人も先客が待つてゐる。しかしすぐ出發するはずのバスが出たのはそれから一時間も後だつた。そして出たと思ふと十分も行かないうちに檢問所で止められた。そこで乗客はみんな車から下され二本の丸太でつくられたてすりテスリの間を通つて一人づつ日本兵の前に出る。武器でも匿してゐないかと服の上から身體をさぐられる。それを通過すると今度は汪政府の警察官が荷物を檢べる。これはもつとも自分たちが抜き出すのが主な目的だ。その間に空いた車が檢べられてやつと檢査が終りになる。かういふ檢問所を二ヶ所通過する。それから二時間ほど、バスは夕暗をついてひたばしりに走つた。和橋鎮に着いたときはもう日はとつぷり暮れて星が降るやうな晩になつてゐた。

和橋鎮は川沿ひの細長い一寸した町である。軒ならびの店には灯があかあかと燃えて、品物が

豊富だつた。この町は「淪陥區」と「自由區」との中間にあつて密貿易の中心になつてゐる。

「淪陥區」といふのは日本側が「和平區」といつてゐる地域で「占領された區域」といふ意味で無ある。人の國を武力で犯してそれに反対するものを殺してしまへば、一應後は静かになるが、この邊はたとへその意味でも和平區と呼ぶのはふさはしくなかつた。和橋鎮から五里と離れないところにはもう忠義救國軍の本據がある。また新四軍は絶えずこの周圍を流動してゐる。この町

には双方の密輸商人兼スパイが入りこんでゐて、それぞれ自分の部隊に必要な物資を調達したり自分の地盤から出る物産を賣捌いたりしてゐる。さうした關係からこの町には上海からきたマツチ・煙草・綿製品・藥品や、奥地から出てくる桐油・豚毛・雞卵などがどの店にも豊富なのだ。

私達三人は町に入つたものの宿屋には行かず、再びアラビヤの迷路にも似たわかりにくい小路を通つて、郊外にある朱の同志の家を訪れた。主人はあいにく留守だつた。私達が訪ねてきたらお通して置けといひつけられたとか、病身さうな若い細君が私達を一番奥まつた居間に案内してくれた。主人を店の者が呼びに行つてゐる間、私達は龍井を飲みながら雑談してゐた。「實は——」と、その時朱泰耀は少し改まつた口調で私に話しかけた。「實は君をこの町におつれするまで名前をいつてはいけないといはれてゐるので今まで黙つてゐたが、君に會ひたいといふ人は吳

紹澗さんなんだよ」

吳紹澍——私はこの人ならこれだけ行きとどいた要心もするはずだと思つた。吳紹澍は、當時

三民主義青年團上海支部長兼江蘇省監察使といふ肩書だったが、事實は上海地下市政府のかくれもない市長である。彼は中國の抗戦が勝利した日、初めて生れた全上海市——今までの租界を含めた——の最初の副市長に任命されたが、そのときもまだ四十歳になつたばかりの若さだつた。

名目は副市長だが、正市長が任命されなかつたから、彼は事實上、最初の上海市長だつたのである。これだけでも彼がどんな人間だかがわかる。戦争中、彼については色々な話が傳へられてゐる。上海は中國の抗戦にとつて重要な都市だつたので、中國は軍隊が退いてから後も地下政府の

特務工作によつてこの大都市を治めてゐた。この地下政府の責任者は蔣伯誠・吳開先・吳紹澍の

三人だが、そのうちで一番若くて一番やり手が吳紹澍だといふ評判だつた。彼は奇智と決斷と勇氣を兼ねそなへてゐる秘密工作者としてよく知られてゐる。一度などは滬甯警兵隊の管理しゐる杜月笙トワイゼンの家起居してゐた。憲兵隊ではまさかそんなところに彼がかかれてゐようとは夢にも考へてゐなかつた。密告でそれと知つた憲兵隊が半信半疑でその家を取かこんだとき、彼はとつさに門番にばけて憲兵隊のためにその門を明けてやつた。そして彼等がどやどやと中に入つてくる

和 平 の 橋

すきに入れちがひにそこから逃げ出してしまつた。蔣伯誠や吳開先が捕まつたのちも彼は上海中にはりめぐらされた密偵網の中を平氣で出没し、幾度となく危い目に遭ひながら遂に上海を見察

てなかつた。彼が上海に来てゐるといふうはさが傳はると、上海の特務活動は急に活潑となつた。だがそんな時には彼は上海には居らずどこか田舎のかくれ家で「紅樓夢」でも読んでゐるのだといはれてゐた。彼は中國人の間では、藍衣社の戴笠や、中共の鄧發と共に一種神祕的な存在に考へられてゐる。今その彼がそのかくれ家で私と會ひたいといふのだ。私はいささか興奮した。

朱泰耀は續けていふ。

「いくら吳紹濤さんでも日本人を戦争中に自分の司令部に招待することは彼個人ちや出来ないんだよ。中國の政界ちやお互にあらを見つけあつて居るから、そんなことを彼の一ぞんでやるとすればすぐ問題になる。今度のことは、すつと高いところの了解を受けてゐるのだ。だから僕達が正規軍の居るところまで來れば、後は君の安全は保證出来る、ただこの二日、三日が一寸心配なんだ」

この時、若いやせぎすの好い男がひよつこり入つて來た。様子がどうもこの主人らしい。しかし私達への挨拶もそこそこに朱と何かとそこそ話し合つて、またおちつかぬ様子で外に出て行つた。すると朱は心配さうに私達の方を向いて、

「少し工合の悪いことが起つてしまつた。四日ほど前に、この町で新四軍の密偵が二人あげられて町に大掃除があつたんだ。そのそば杖を食つて「山」の人間も三人あげられてしまつたんだ」

彼が「山」といふのは山<sup>ヤマ</sup>橋<sup>ハシ</sup>の吳紹澍の本據のことである。吳紹澍はもともと私達のために特別の案内者をこの町に出して置いてくれた。この人はこの地方に特別な顔をもつてゐて、この人について行けばこれから先き安全に旅行出来るはずであつた。ところがこの町でこんな騒ぎが起つたため、一昨日この人は一先づ山<sup>ヤマ</sup>に歸つてしまつた。この家の主人も要心のためそれ以來家を留守にしてゐる始末だといふ。流石の朱もこれから先の旅行をどうして續けて行かうか思案に餘つてゐる様子だつた。私はここで考へてゐても仕方がないからともかく宿をさがさうとおもてに出ることにした。

外はいつの間にか風が強くなり、空に星が凍てついたり光つてゐる。切り石を敷いた狭い道を三、四町歩いて、やつと致へられた宿屋に着いた。一流だと聞いてゐたが、はか、普請の板の隙間から星が見え、寒い風がびゅうびゅう吹き通る惨めさだつた。それでも鱈魚の煮付や、温い蛋花湯で晩飯を終へたときは身うちがすつかり温まつてきた。朱はまたこれから先どうしようかと切り出した。彼は吳紹澍のことだからきつと何か手を打つてくれてゐるだらう、ともかく鼎山まで行かうといひ出した。楊<sup>ヤウ</sup>はひとまづ上海に引きかへして、もう一度吳からの連絡を待つて再出發すべきだといつた。話はなかなか決まらない。私はねむくなつてきたので、人間は朝になると背の思案は變るものだからといつて二人を残したまま自分の部屋に引きとつてしまつた。待ち

かまへてゐたやうに宿屋の伏察が十七、八のあどけない顔をした妓をしつこく勧める。私はひどくねむかつたので、つ、けんどんにそれをつつばねてねてしまつた。

邊 無 海 上

ものの二、三時間もねた頃だらうか、私は突然やり起されたらしい。気がついて見ると楊が不安さうな顔をして私の前につつたつてゐる。「朱が和平軍の憲兵に引つばられるから、すぐ来てくれ」といふ。とび起きて朱の部屋に行つて見ると、朱が四、五人の制服にかこまれてしきりに訊問されてゐた。この男は例の強氣から——そして内心にみなぎる漢奸への輕侮感から——つひ不遜な應對をしたと見える。私はその場を一目見て兩方がかう感情的になつてゐては、下手に金を出すのは却つて事を面倒にするだけだと思つた。とつさに日本語で「僕は日本の軍人である町に祕密調査の目的で入つてきたものだ。この男は僕の部下だから何か不審の點があつたら僕が責任をとる」と高びしやに出た。この場合、日本語が相手にわかるかわからないかは問題ではない。恐らく日本語はわからないだらう、だが私が日本人であること、日本人でありながら中國人の服装でこんな町に入りこんでゐる奴は、憲兵隊とか、密偵とか、何か曰くのあるものにきまつてゐること、少くともこれだけのことは相手の頭をかすめたに違ひない。すかさず私は古ぼけた「無給囑託」の證明書を見せてやつた。相手にそれが何を意味するかはわからないにしても、その中にはともかく「日本軍」といふ字の入つた大きな印が捺してある。これで萬事解決した。今



度は中國語で同じことをくりかへしたら、彼等は萬やむを得ずといつた顔つきで「好了、好了、明白了」といひながら引き上げて行つた。行きがけにその一人は尙あきらめかねたやうに、證明書の文句を手帳に寫しとつてゐた。明日あたり日本の憲兵隊にでも照會するらしい。しかし憲兵が不審に思つてこの宿屋にやつて來る時分には、私達が手のとどかないところに行つてしまつた後の祭りだらう。

翌朝目を覺したときには、もう七時を大分廻つてゐた。昨夜のことがあるので朝飯もたべずに、そそくさと宿を飛び出した。どうしても先に行かなければならないことになつてきた。夜來の風もすつかりをさまつてよく晴れたおだやかな朝である。霜が解けてきたとみえて道の敷石が打ち水をしたやうにぬれてゐる。片側の家並みの間から川幅三、四間の川が見える。川の面にはほのかに水蒸氣が立ちのぼつてゐて、それが道路まで流れてきてゐる。道路の兩側には、折から朝の市場がたつてゐて、羊頭を掲げて羊肉を賣る攤、豚頭を掲げて豚肉を賣る攤、田舎からねぎや大根を賣りにきた女達、壺の中で大餅をやく餅屋、桶をならべて川魚を賣る魚屋、かういつた人達が所せまく攤をはつてゐる。街の人達は出來るだけ僅かな金で出來るだけ豊富な食物を仕入れようと喧ましく朝の「討價反價」をやつてゐる。私達はその間を通り抜けて町外れに近い小さな飯

屋に入つた。豆腐のスープと豚饅頭を一蒸籠註文したら伏家がこちらからいひもしないのに「酒は何斤もつてまゐりませうか」といつた。朱はこの町の人は大酒のみでよく朝酒のみに來るのだと註釋してくれた。伏家に鼎山に行く船は何時に出るかと聞いたところ四、五日途中があぶないので止つてゐるといふ。船以外に陸路もあるが近頃は新四軍が出るからやめた方がよいといふことだつた。もう四、五日もとまつてゐるのなら今日くらゐ出るかも知れない、ともかく船付場まで行つて見ようと、途中で儲備券を法幣に換へたりしながらぶらぶらもときた道を引きかへした。行きついたら案の定、船は今朝出た、しかもたつた今出たばかり、その曲り角まで出れば見えるはずだといふ。私達は大あわてに川沿ひの道を馳け出した。なるほど曲り角まで出たら船が小さく黒く見えてゐる。曳船だから追ひつけないことはないと思つたが、道は川に沿つてばかりはゐない、しかし、どうやら二十分くらゐ走つたら船頭がそれと氣付いて船をとめてくれた。

この船はにたりくらゐの大きさで、帆柱の先に長い綱をつけ二人の間が岸づたひに曳いて行く。船があまり岸に近づくると船頭が竿で一と押しする。船の中は十疊数ぐらゐの廣さで町に背物を賣つて歸る百姓女、田舎に物を賣りに行く商人、それに私達のやうにえたいの知れないのが十五、六人混然とつまつてゐる。川にも検問所があつて、船が二度目の検問所を通過した頃から客同士お互に口をきくやうになつた。検問所で大分しぼられたさし向ひの商人が隣の人に何か「ツ

エジュン、ツエジュン」といひながら盛んに罵つてゐる。朱に「ツエジュン」とは何のことかど聞いたら、この邊では汪政權の和平軍のことをかけては賊軍といつてゐると吐き出すやうにいつた。そして新四軍は錢はとらないが人を殺すから「要命不要錢」だが、和平軍は人民を新四軍だといひがかりをつけて金をゆすつたり新四軍を捉へても金さへ出せば命はとらないから、彼等は「要錢不要命」だといふ。そんなら日本軍はどうだねと尋ねたら、朱は一寸考へて昔は「要命不要錢」だつたかも知れないが、今はだんだん「要錢不要命」になりかかつてゐると答へた。

スノーの「西行漫記」を讀むと北の方では紅軍に對して農民が非常に好意をもつてゐるやうに書いてゐるがこの邊の老百姓は新四軍にもあまり好意をもつてゐない。新四軍は農民から「救國公糧」を徴收する。ところが色々なちみもりやうが新四軍の名前で「救國公糧」を取る。ので農民は「救國公糧」にはほとほと困り抜いてゐる。だから「和平軍搶得吃、新四軍騙得吃、老百姓沒得吃」といふ言葉がある。意味は「和平軍は奪ひ食ひ、新四軍は騙し食ひ、そこで百姓食ふに食はれず」といふことになる。以前、地主の徵税人をやつてゐたやうな奴は百姓の懐工合をよく知つてゐるので各方面から重寶がられてゐる。彼等は左の袋には新四軍の税、右の袋には和平軍の税といふやうに百姓から税の取り分けをやる兩棲動物——時としては三棲動物？——として農村に寄生してゐる。いちめられるのは百姓でただ軍隊を養ふために働いてゐるやうなもの

だ。「中國は今こそほんとに共和國になつた」といふ言葉ほどこの現實をうまく表現した皮肉はない。つまり中國は今まさに「共」産軍、「和」平軍、「國」民黨軍の三國時代に入つてゐるのだ。

船はいつの間にか川幅の廣いところに出てゐた。もう曳船ではなく船頭が櫓を押してゐる。暮れやすい冬の陽が大分西に傾いて、黄色い光線が際限なく展がつた大地を照らしてゐる。白く光る帯のやうなクリークが收穫を終つたばかりの稻田の間をまがりくねつて流れ、その兩側に水車小屋の茅屋根が頭の丸い釘でも打つたやうにぼつんぼつん散在してゐる。疏らに散らばつた農家からは、かすかに白い煙が立上つてゐる。もうそろそろ夕飯を炊く時間らしい。兩岸は深い枯葦の茂りで、一寸大利根の水郷を往く感じだ。時々水鳥がぼさぼさと枯葦の間から飛び出して空に散らばると、だんだん小さな黒い點になつてやがて空の色に溶けてしまふ。何だかこんなところから兩岸の葦をかきわけて阮小七でもとび出し「人生一世草生一秋」とみえをきりさうな氣がする。阮小七は宋の新四軍だが、ほんとの新四軍が出たらどうしよう。この船の中から身柄をもつて行かれさうなのはさしづめ私達三人だらうと思ふと何となく心細くなつてあたりをそつと見渡した。何しろ四日程前に鼎山行きの船が襲はれたばかりなので、外の客も同じやうな心配をもつてゐるらしい。でも心配なものは何も出ずに、六時頃船は平凡に鼎山についた。

この町には日本軍は居ない。町の裏にある鼎山といふ山の上に要塞があつて、そこからは滅多に町に下りて来ない。町は和平軍だけで守られてゐる。荷の中を長衫オウシヤンを着た便衣の和平軍が銃を肩にかついでゐるのを見ると、今偵察行から歸つたばかりといふ恰好で、いかにも前線フロンの町らしい。これから十町と離れてゐない湖没フツといふ村には中國の挺身隊テイシンタイが居てゐて、上からの命令があると思ひ出したやうに小銃の聲が合ひをやるが、普段は兩方で姿を見ても黙つてゐるといふ。この町もやはり密輸ルートに當つてゐるので町の平和をこはすことはお互に不便だからだ。

その日の宿で夜食を食べ過ぎたせゐか夜中に目を覺した。馬桶ウソトに腰をかけて大便をしながら窓を明けて外を見ると、月が圓く、皎く、寒く、明日越えるといふ山の上に懸つてゐる。明日あの山を越えればいよいよ「敵地」だと思つた。何かの間違が起つてこのまゝになつてしまつたら自分のかうしたことを誰が知つてくれるかと思ふと妙に悲壯な想ひがした。しかしそれはなか中學生のヘロイズムと、女學生のセンチメンタリズムをこね合せたやうな甘さのともなつた感情だと氣がついて、少し恥かしくなつた。

## 和 平 の 橋

翌朝眼が覺めたときは陽はもう大分高くあがつてゐた。朱泰輝は連絡者をさがしに出かけて居なかつた。正午までには歸つてくると誓き置きがしてゐる。こんな悲暗い宿屋にひるまで待つて

はゐられないと、楊をつれて時間つぶしに街に出た。街といつても家並みがまばらに三四町續いてゐるだけで、それを過ぎると陶器を焼く高いかまどが彼方此方に散在してゐるくらゐなもの。

この町は料理に使ふ「砂鍋」といふ素焼の名産地で、今でも上海に船で積み出してゐる。船付き場に往つて見ると陶器が山のやうに積まれてゐる。その中に五つ六つ大きな金魚鉢のやうな黄色いかめが伏せてある、色が風雅なので、そこにゐた年寄りにこれは金魚でも飼ふかめかと聞いたら、坊さんまんが死んだときに収めるかめだといつた。そして北の方ではこんなのは使はないのかと反問された。私が毛皮の帽子を冠つてゐるので、北方人とも思つたらしい。引返へして途中で買った芝蔴餅ツマビシを嚼りながら日本軍の要塞があるといふ山の方に行つて見た。道で日本兵が五、六人軍用電話線を架けてゐるのに出會つた。三、四人は仕事をして、二人は付け剣で見張つてゐる。近づいて行くと大きな聲で「あの中國人ちゆうごくじん日本人みたいな顔をしてやがる」といふのが耳に入つた。私はこれはまづいと思つたのでわざと聞えぬふりをして横にそれてしまつた。

せつかく散歩しようと思つたがこんなことで時間のつぶしやうもなく又しんきくさい宿屋に戻つてきた。時間のたつのが遅いので少しいらいらしてゐると、十一時近くやうやく朱泰耀が若い商人風の男をつれて歸つてきた。その男も山の關係者だが私達のことをあまりよく聞いてはゐないらしい。湖没こぼつまでは自分が案内するが湖没の挺身隊には知つた人がゐないからそこだけは何と

か誤魔化して通つて貰ひたい、この道は商人が往來してゐるから検査はあまりやかましくないといつてゐた。この男も私を中國人だと思つてゐる。私達はこの男の後について鼎山の町を出た。

畑の中を人が踏み歩いて自然に出來た小路をつつ切つて行く。道はたにつくり替油屋の大きな白壁が見えるが、その上には「抗戰到底」と「和平建國」が大きな字で並んで書かれてゐる。この邊は敵味方がはげしく取合つた處と見えて相手のスローガンを消すいとまがなかつたらしい。ものの六、七町行くともう向ふの森かげに人家が見えてきた。あれが湖没だフツと案内の男が教へてくれた。

村の入口の橋のたもとに藍色の汚れた綿服を着た二十二、三の若い兵士が立つてゐる。こちらをちらつと見たが別に警戒する様子はない。朱は黙つてそこを通るのもへんだと思つたのか、「村役場はどこだね」と聞いてゐた。兵士は黙つて村の中の大きな屋根を指さすと、そのまま前を向いて私達にまるで無關心な様子だつた。私達は黙つてそこを通過した。これが敵と向ひ合つてゐる前哨線かと思つたら何だか張合が抜けてしまつた。だが實はそんなことではすまなかつたのだ。

### 和 平 の 橋

そのまま村の街道をぶらりぶらり一町程歩いて行つたら突然大きな葦屋のかけから三、四人モーター銃をもつた便衣の男が出てきて私達を取りかこんだ。「どこに行くのですか」と言葉だけ

はでいねいにその中の隊長らしいのが詰問する。朱は「山」に用があつて行くものだとおちついて答へた。山といふ略號がこの邊でも通つてゐると見えて急に彼の態度がおだやかになつた。まあ休んでゐらつしやいとその藥屋の中に案内してくれる。お茶を出してくれたり上海の様子を聞いたりしてゐたが、隊長の態度には私にだけ何かしら打ちとけないものがあつた。そして、しきりに私にだけ話しかけようとする。私は日本人だと看破されたのぢやないかと不安でたまらなくなつてきた。朱もそれと察してか、私にもをいはせまいと、私が南洋の華僑で上海のCCの活動に多額の金を寄付した人だとか、何やかやとでたらめをいひながらひとりでしやべつてゐる。しかしそんなことで誤魔化せさうな相手には見えない。何か部下に命じて軍用電話でうち合せをさせてゐたやうである。が、やがて返事がきたと見えて急に愛そよく「貴方のことはよくわかりました」と自分からさきに立つて私達を村はづれまで案内してくれた。私達はその男から離れて初めてほつとした。その男には妙な殺氣があつて、目を見合はせるたびにぞつとさせられた。後で聞いたことだが彼は藍衣社のしたたか者で、かつて上海特別市長傳笹庵の家に伏家として住み込み、市長を暗殺した有名な男なのだ。上海では日本の憲兵隊や密偵が血眼になつてさがしてゐる男と一緒にお茶を飲んだと思ふと一寸面白くなつた。

村を出ると間もなく草の深い草原だ。もとは田畑だつたに違ひないが、最近戰場となつたばかり



りなので放棄されてゐるのであらう。道はだんだん勾配が上つてきて、向ふの山の麓に續いてゐる。その原の半ほどまで来ると山の麓の方から人の群がだんだん近づいて来るのが見えた。朱は「山から出迎へのものかも知れない」といつたが、果してさうだつた。轎が四蓋それに武装した護衛が三人ついてゐる。先頭の轎に乗つてゐる人がしきりに手を振つてゐる。どこかで見覚えのある顔だ。三十米ばかりに近づいたとき初めてその人が姜夢麟君であることがわかつた。この人がどうしてこんな處に来てゐるのか、私はなつかしさに思はず少しかけ出した。

姜夢麟は吳紹澗の右腕である。彼は上海で吳紹澗の住所を知つてゐた殆ど唯一の人間だつた。吳紹澗が上海を留守にしてゐるとき、彼は吳紹澗の指令を着實に實行し、敵側には吳紹澗が恰も上海にゐるかのやうに思はせてゐた。何分にも吳紹澗の身代りとなつてゐたので、日本の憲兵隊や汪政府の監衣社といふべき七十六號——本部が極司非路七十六號にあつた——の追跡ははげしかつた。そして遂に七十六號の密偵に逮捕されてしまつたのだ。七十六號の拷問といへばその道の人は聞くだけで唇をふるはせる。その拷問を彼はよく耐へ抜いて遂に吳紹澗の住所を守り通したのだ。その代り彼はあばら骨を三本折られたまま病監につながれる身となつた。胸の打撲傷からやがて肺病を思ひ、三年目にはいよいよあぶないといふところまで行つた。私は前から朱と楊に彼の救出方を頼まれてその機會を待つてゐた。丁度一年ほど前に軍が直接交渉の新しい路線を

開きたがつてゐることを知つたので、この男を牢から出してくれれば新生面が開かれるといつて彼の身柄を軍から貰ひ下げることに成功した。それ以來私は彼の身許引請人として彼の行動に責任をもたされることになつたのだ。だが彼を出したときから彼の自由を拘束することなどは到底出来ないと思つた。彼は病院から退院すると同時に姿をかくした。風のたよりに彼が重慶で働いてゐると聞いた時、私は彼のためにも私のためにもほつと一とまづ安心した。彼が上海の近くで活動してまた捕まつたら、今度は私の責任も追及されると思つてゐたからだ。その彼が今私の目の前に突然あらはれたのである。

彼は轎からもどかしさうに飛び下りて、私の手をにぎり、何度もそれを振つた。まづ挨拶もしないうちに、私に黙つて上海から逃げ出し大へん迷惑をかけたといつて詫びた。だが彼は續いてかういつた。

「私は形の上では貴方を出し抜きましたが、氣持の上では貴方に何の負債もありません。私はあれからここにきて貴方と上海で話し合つてゐた仕事を續けてやつてゐます。重慶でもだんだん私達の言葉を聴くやうになつてきました」

この言葉で、私は今度のこと何もかもわかつた氣がした。吳紹澍がなぜ急に私と會ひたいと云ひ出したか、なぜ私が日本人でありながら國資のやうに待遇されて、中國の前線の奥深く入る

ことが出来たか、それは決して「急に」でもなくまた「突然に」でもない。みんなかういふ國境を超えた同志の努力の結果だつたのだ。私はただ黙つて彼の手を握りかへした。下手にものをいふと頗に熱いものがかかりさうだつたからだ。

私達はそこで彼が用意してきた轎に乗つた。私にはこれが轎にのる初めての旅である。前の轎夫が水溜りなどをまたぐとき後の相棒に「當心オシゴト」と聲をかけてやる人情が嬉しかった。その聲が「御用心オシヤク」と長くのびて、昔の駕籠屋の「えーいはい」といふ掛け聲に似てをかしかった。私達は間もなく山麓に達した。そこから轎を下りて、かなり急な坂路をよち登る。

山はさう高くはない、三十分くらゐで峠に達した。鼎山の方を見ると、昨日通つた和橋からの水路は黒い大地を這ひまはる蛇のやうにうねつてゐる。太湖も見える。どこまでが太湖でどこまでも、やだかわからない。ただ手前の方には帆かけ舟が二艘あるので、その邊だけは湖であることがわかる。この景色も長くは見てゐられない。鼎山の要塞からこの峠を越えるものをねらひうちすることがあるといふことだ。

### 和 平 の 橋

峠を下りると再び荒涼たる草原が續く。それからの山沿ひの道、川沿ひの道、私は轎の上でうつらうつらしてゐた。峠を下りてから何時間たつたか時計も見なかつたが、もう四圍あまごりはすっかり暗くなつてゐる。どこかで虎づくみに似た鳥の鳴聲を聞いたやうに思ふ。

轎夫の「到了」といふ聲で目をあけて見ると前にちらほら張落の町の灯が見えてゐた。

この町は願祝同の前線司令部の所在地だけあつて町に入ると兵隊の多いのが眼につく。藍色のだぶだぶした綿服を着た少年兵が無邪気に追ひかけつこをしてゐたり、老兵が小川で食器を洗つてゐたりする様を見ると、この人達が日本兵と殺しあつてゐる人達なのかと思議な氣がした。荷の店屋ではアセチリン燈や石油燈を使つてゐるので今までに通過したどの町よりも明るく活氣づいて見えた。

その夜の宿で、私は早く床についたが、隣室の話聲が高いのでなかなか寝つかれない。隣室の人々は中國の將校らしく、話を聞いてゐると、誰々は衡陽で戦死したとか、誰々はどこどこで負傷してそのあけくに細君に逃げられたとか、あまり陽氣な話題ではなかつた。この町もやはり、中國のどこの町でもさうであるやうに、貧困と悲劇を、無關心と長閑のオブラートでふんわりくるんであるに過ぎないのだ。

翌朝未明に起きて張落を立つた。

村雜已報、晨、曉月漸無、色

行人馬上去

殘燈照、空、調



劉雲のこの詩は私達のこの日の出發を歌つたやうに思はれる。くらやみの中で、村の雞は鳴き出して晨を告げてゐる。曉の月は空の色の明るくなるにつれてだんだん薄くなつて行く。私は今轡に乗つてこの町を去つて行くが、二度とここを過ぎることはあるまい。街を通つて行くと早起の店の灯が、處々凍りついた街路をあかあかと照らしてゐる。

町を出ると間もなく山路にかかる。山といつても大きな山ではない。丘のやうな小さい山が出たり入つたりしてゐる間を羊腸の坂道が続いてゐる。私達はこの日一日その坂道を上つたり下りたりした。轡の上に坐つてゐても汗ばむやうな暖かな日だつた。轡夫の太い頸にどすくろい汗の流れ、巴金の「家」の主人公がツルゲーネフを讀むやうになつてから、轡に乗らなくなつたことをよと想ひ出した。

暮れ方に近くやうやくその山峽を出ることが出来た。道の兩側にある人家がだんだんよふえてくる。山了橋の村界に入つたらしい。しかし私達は村の方へは行かず、道を東にそれて爪さき上りの小徑に入つた。徑が栗の木の生えた小山にかかる。かたはらの藁を結んだ肥料小屋のやうなものの中からひよいとモーゼル銃をもつた中山服の青年が現はれた。私達をちつと見てゐたが、やがて姜夢麟を認めてあいさつする。かういふ小屋を二つ通過して茅葺きの屋根のある門のところに着いた。いよいよ目的地に達したのだ。私達がそこで轡を下りかけてゐると、門の奥の爪さ

邊 上 無 有 上  
き上りの道から中山服の二人の男が下りて來た。私は吳紹澍がどんな人柄か、何の豫備知識もなかつたが、そのどちらが彼であるかはすぐわかつた。どこかに大きいところがある。彼は色の黒い小肥りに肥つた男で、背はあまり高くないが、大きな特徴のある口をしてゐる。少し出つ齒だ。顔や身體つきだけ見ると、かなり粗野で、一寸土建屋の親方のやうな感じたが、聲はよく澄んで知性の高さを示してゐる。

「やあ、お待ちしてゐました。途中で使ひに出したものが手違ひで御會ひ出來ず、お出でになれるかどうか今まで心配してゐました」と直ぐ握手する。

その様子には少しもぶつたところがない。日本の官吏は初對面のときよく自分をえらく見せようと、何か普段と違つたポーズをとるものだが、この人にはさうしたえらぶりは見られない。

丘の上の家は茅葺きの日本の農家に似た大きな家だ。中が三つに分れてゐて真中が辨公室ていしつ、向つて右側が吳紹澍の居間、左側が副官の控室になつてゐる。疊敷に直すといづれも十五、六疊の廣さだ。私達は先づ辨公室に通された。お茶が出て一通りあいさつが終る。吳紹澍はともかく旅塵を流してはと、私を早速用意してあつたらしい風呂に案内してくれた。

風呂場は母屋を一寸離れてゐる。裏が高い崖になつてゐて、そこから笕かけで澄みきつた清水がこんこんと風呂場に流れこんでゐる。外はすつかりたそがれて空氣がしめつぱく重くなつてきた。

かまどの下でパチパチそだの燃える音が時々静かな空気を破るだけである。どこか遠くで山鳩がしきりに鳴いてゐる。

風呂から上るともう食卓が用意してあつた。酒はないが菜は八品ほどある。吳紹澗は、

「ここは上海と違つてご馳走はありません。普段はみんな一汁一菜なのですが、今日は貴方の福にあやかつて私達も口果報させて貰ひます」といつた。

私が彼のいひまはしの巧さに感心してゐると、彼は自分の箸でそのうちの一皿から肉をとつて私の小皿に置いた。これは特に自分がつくつたものだから何の肉かあてて見るといふ。食べて見たがよくわからない。豚でもなし雞でもなし、まさか犬でもあるまい、あつさりわかりませんといふと、吳は、

「これは野兎ですよ。三日ほど前に山から出てきて庭先で遊んでゐたんです。あんまり可愛いからどうしようかと思つたんですが、あいにく手もとに拳銃があつたので打つたらころつといつちまつたんです」と笑ひながらいつた。

この人は嚴めしい顔に似合はず、笑ふと片笑くぼができてとても愛嬌がある。そしてその笑ひにはすこしもつくりがない。

食事が終つてからみんな吳紹澗の居間に引きとつた。私達の話はだんだん本すちにふれてく

る。その夜彼の語つた話はやや抽象的だつたが、ふくみのあるものだつた。そのおらすちはかうだ。

一 日本はいま新政策とかいつて中國の獨立自主性を認めるとしきりに聲明してゐるが、その前に日本は民族の獨立自主とは何のことか少し知つて貰ひたい。民族が自分の好む政治形態を選び自分の信頼する元首を立てる自由をもつことがまづ初歩的な民族の獨立自主なのだ。

然るに、日本の軍部は中國人全體の意志に反して、汪精衛を中國の元首としてこの民族におしつけようとしてゐる。かりにいま、外國が日本の國民に天皇を廢棄して東條を元首として迎へよと迫つたら、日本の國民はそれに服するだらうか。東條はそれと同じやうなことを中國に迫りつつ、しかも中國の獨立自主を尊重するといふのだ。

二 日本がこのやうな矛盾した「頭」をいただいてゐる限り、正氣の世界と衝突することはわかりきつてゐる。日本が世界を敵として戦はなければならなくなつた主な原因はここにあるのだ。また日本の軍部やナチスがこの戦争で勝利を得れば、世界文明の終焉だといはれる理由もここにあるのだ。日本の國民がもし正氣の國際社會に住むつもりならば、まづこの「狂氣の頭」を直す必要がある。中國は日本の國民がさうしたい氣持があるならば、いつでも革新派をかけから援助し、かつまた「狂氣の頭」から解放された日本と和平しようと願つてゐる。



るのだ。

三 日本現在の國策が誤りであることは、實はすでに日本の軍部にもわかりかけてゐる。しかし軍部はたとへ汪精衛政策が絶対に中國に強行し得ないものと知つても、自らこの政策を撤回することはしない。それがたとへ日本を滅亡させるものであつても、軍部は自分の命と行つてしまふだらう。従つて日本の刻下の急務は、世界情勢のもつとよくわかる日本の政治家が、日本にのこつてゐる正氣の力を結集して、軍を抑制するだけの権力をつくることである。日本の民衆は政治的經驗を缺いてゐるので、日本の現在の情勢では軍の政策を下からは正する可能性はない。それ故、日本ではもつと世界情勢のわかる既成政治家の結集が一番實現の可能性ある和平への近道だと思ふ。

和 平 の 綱

四 中國は感情としては日本の惨敗を欲してゐるが、理性としては日本の實力が全く破壊されてしまはないうちに日本の頭の切り換へが行はれることを切望してゐる。日本の實力は中國のそれと共に何といつてもアジアの安定力である。日本の實力が全く破壊され、中國だけが残るとすれば、今後の世界政治に於けるアジアの發言權は著しく失はれる。それは中國の前途にも重大な關係がある。それ故、狂氣の「頭」を是正しようとする日本の運動は、我々と

しても決して傍観してゐない積りだ。我々は日本にさういふ運動が起るとすればいつでもそれと連絡をとり、中日の和平を促進する運動を國內に起す用意をもつてゐる。

そして彼はこの話の最後にかうつけ加へた。

「貴方は戦争中賓客として國內に招待された唯一の日本人です。どうか私達の意向を日本のものわかる政治家に傳へて日本が最後の破滅にいたらない前に、日本自ら現在の狂氣の頭を是正し、世界と融和し得る條件をつくり出すやうに努力して下さい。日本は何といつてもアジアの安定力でした。それが今アジアの大きな破壊力となつてゐるのです。日本は過去に於てはアジアの地位を高めました。それが今は將來に向つてアジアの地位を低めようとしてゐるのです」

彼の言葉は對句の妙と修辭の美しさをそなへた中國の政治家特有のものである。彼は「確かに」といふとき、普通、「不成問題ブツケンシツタイ」とか「沒有問題ブイユウシツタイ」とかいふところを「毫無問題ヘムウシツタイ」と難しい言葉を使ふ。それがいかにも彼のいかつい顔にふさはしく威嚴をもつてゐた。彼が「世界情勢を知つた政治家」といふとき日本の誰々を指していふのか、私は彼にききたいと思つたが、色々話してゐるうちに、彼が日本の政界についてあまり具體的知識をもつてゐないことを知つたので、やめにした。彼はそれを私に求めてゐたらしい。しかし、私は長いこと日本を留守にしてゐたので、日本の政界については、何もといつてよいほど知らなかつた。私は正直にそれを話した。

貴方のお話のすちはよくわかる。だが私は日本の政界と何のつながりももつてゐない。しかし今、貴方が私にこんな大きな使命を與へてくれたといふことは、私が日本の政界につながりをもつ大へんよい助けになる。それ故、この次に御會ひするまでに必ず貴方の御話を、否、中國國民黨の氣持を「ものわかる政治家」に傳へ日本に貴方のいはゆる「狂氣の頭」を是正する運動を起さう。ただ日本の政治家は貴方がたのやうな革命家ではなく他人が既につくつた平らかな道を歩いてきた人達ばかりだから、「狂氣の頭」を倒さなければいけないと知つてゐがならも、それを「革命」する術を知らない。彼等には自分から事をやり出す力がないと思ふ。だから、大切なことは貴方の國の動きで、貴方の方で、彼等が「革命」すればかういふ條件で和平するといふはつきりした意志表示を與へて、彼等、いなわれわれを刺戟して貰ひたい。その意味で双方の運動の連絡線をもつと強固にして置く必要があると思ふ。

和 平 の 綱  
私がさう話すとは彼は即座に同意して、いつでも必要なときには、朱を通じて直接彼と連絡出来るかと答へた。私はこの答から彼がこの事についてもつとすつと高い權威から全權を托されてゐることを知つた。話して行くうちに、それがどういふ人であるかも、略々想像がついた。私は、自分の前に置かれた仕事の大きさにいささかたじろかざるを得なかつた。

もう夜は大分更けてゐる。柱時計が二時を打つた。しかし誰も引きとらうとはしない。私達は

それから、この司令部が襲はれた場合いつでも三十分間で安全な場所に移れるやうになつてゐるとか、日本軍が昨年すぐ近くまで攻めてきたが、ここは街道を外れてゐるので發見されなかつたとか、上海の杜月笙の家で捕まりかけて危く逃げたいきさつとか、さうした彼の雑談を興味深く聞いた。ふと時計を見上げるともう三時に間がなかつた。私は今日の旅があるので、いよいよ話をきり上げなければならぬ時がきたと思つた。

その頃はすべてが日本の思ふやうに進行しない時代だつた。何やかやと障害が起つて、私が日本に歸つて吳紹澥のいはゆる「ものゝわかつた政治家」の間を説き廻つたのはそれから一年も後のことである。なかで一番乗り氣だつたのは宇垣さんと近衛さんだつたと思ふ。誰もが憂へてゐたのは、軍部の勝利の宣傳で情勢を誤信してゐる國民をどう説得するかといふ問題だつた。魯迅の言葉に「暴君治下の人民は、多く暴君より更に暴である」。「執政官はキリストを釋放しようとしたのに、人々は彼を十字架に上るべく要求した」といふのがある。今ここで和平を口にすれば國民が激昂してどうにもならない混乱になるのではないかと思はれた。そしてそれともかくもおさへることの出來ものは、國民の間に「神格化」されてゐる天皇の外にないと思つた。カリフの神聖戰爭をとめることの出來るのはカリフだけなのだ。私は天皇の「神格性」を利用するた

めにその「人間性」を利用することがこの際一番手つとり早い方法ではなからうかと考へた。私の知る限り近衛さんも同じやうな考へだつたと思ふ。

近衛さんの最後の腹がきまり、その意志表示をもつて中國に再び飛ぶやうになつたのは終戦の年の五月だつた。そのときには名目は和平交渉だが、實質は中國を通じて日本が聯合國に降服することだつたのだ。それにしても時機が少し遅すぎると思つた。私は成果はともかく、ただ國民の一人としてやれることだけはやつて置かうといふ氣持だつた。しかし、博多についた翌日雁の巢の飛行場が操縦られてしまつた。やつと大村から飛ぶ海軍機にたのみこんで乗せて貰つたら、今度は濟州島に不時着してしまつた。その時も吳紹澍や姜夢麟は、錢唐江の上流瓊口鎮ヂョウコウチンで私の來るのを待つてゐてくれたはずである。今更こんなことをくどくど書きたても仕方がない。山ノ橋が彼が憂いてゐた最悪の場合は既に起つてしまつたのだ。アジアの諸民族は、ばらばらとなり世界政治への實際の發言權は、今や中國にもなく、印度にもなく、もちろん日本にもない。私は他のことでは日本の敗戦を喜んでゐるが、このことだけは今でも十分悲しむ價値があると思つてゐる。だがまた、この悲しみは決して孤獨ではない、中國にもある、印度にもある、もちろん日本にもあると信じてゐる。

## あとがき

「上海無邊」は一九三八年の初めてひとまつ終つてゐる。このあととは續編として書かれるか、別の題になるか、それともこのまま終つてしまふかまだわからない。

もともとこの「一つの中國現代史」はある意味で私の Personal History でもある。私は一九四六年日本に引揚げるまでの上海生活を通じて、自分の知つた中國のありのままをここに書きたいと願つてゐた。だが、いざ日本に歸つて見ると思ひがけない障害が待つてゐた。第一、私が上海から用意してきた多少の財産は悪らつなまぎにかかつてすつかりとられてしまつた。交渉するにも相手は姿をかくしてゐる。訴へてもらちがあかない。それやこれやでこの書も決しておちついた雰圍氣の中で書かれたものではない。筍生活の工夫や、しつけない借金や、たまにはやみ屋の手傳ひみたいな事もありながら筆をとつたものである。だから讀むべき参考書も多くは讀まず、集まつた材料も不十分をまぬかれなかつた。こんな生活の心配をしながらの仕事だからこれから先の分がいつ書き上るか今のところ私にも見當はつかない。これは決して不勉強の言ひ譯ではない、まつたくの話である。「上海無邊」を讀まれて一九三八年後の私の中國現代史に多少の興味をもたれた讀者の方々には誠にすまないことだと思つてゐる。最後に讀者がそれからのことを知られるよすがにもと、中央公論八月號に書いた「和平の機」を、取敢へず掲げておいた。これはやがていつかは日の目

を見るであらう「上海無邊」の誤謬にもつと適當な形で取り扱はれる筈である。

昭和二十三年五月九日

日他の日に記す

鶴沼にて 吉田 京祐

昭和二十四年三月二十五日印刷  
昭和二十四年三月三十日發行

上海無邊

定價二百圓

著者

吉田 東祐

發行者

栗本 和夫

印刷者

山村 榮

東京都千代田區丸ビル・五九二區

東京千代田區神田錦保町一ノ三三

發行所

中央公論社

電話丸ノ内五三五番  
總發行所東京三四番

